

流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書 1

— 流山市思井堀ノ内遺跡(中世編) —

平成18年3月

千葉県企業庁
財団法人 千葉県教育振興財団

流山運動公園周辺地区 埋蔵文化財調査報告書 1

ながれやま おもいほりのうち
— 流山市思井堀ノ内遺跡（中世編） —





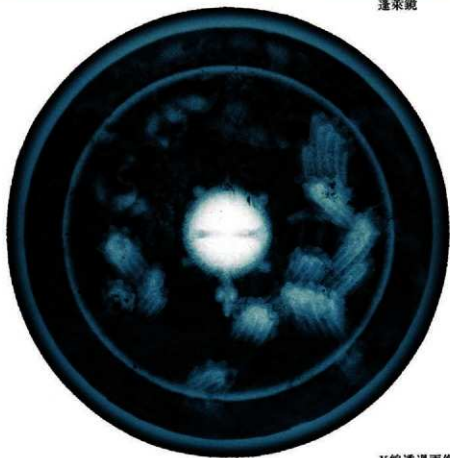
青磁 碗



青磁 皿



蓬萊鏡



X線透過圖像



円形木製品



X線透過画像



菊花形皿



白磁皿



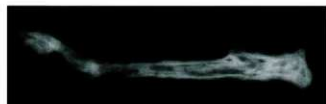
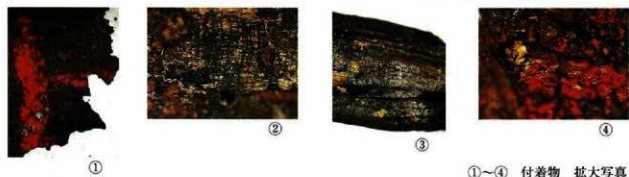
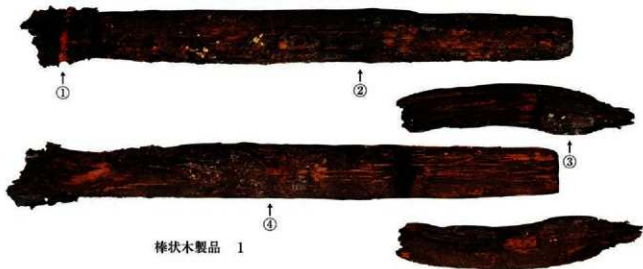
木槨

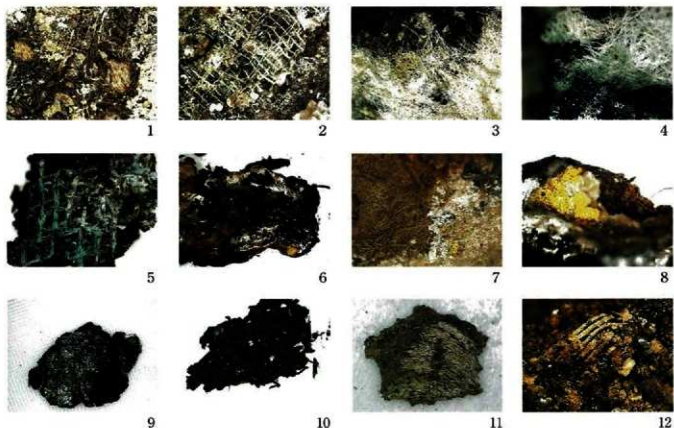


木槨 拡大写真



人骨 歯





円形木製品・蓬菜鏡・白磁皿 周辺出土資料（和紙・織物・籠状繊維製品・料紙断片・編籠断片・繊維断片等）
拡大写真（1～12）



貿易陶磁（破片）（13～32）

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、財団法人千葉県教育振興財団調査報告第549集として、流山市思井堀ノ内遺跡（中世編）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。これは常磐新線建設に関わる流山運動公園周辺地区における、千葉県企業庁の土地区画整理事業に伴って実施したものです。

この調査では、中世、矢木郷の居館跡の一部のほか、全国的にも希少な区画墓とそれに伴う中国龍泉窯産の青磁碗、白磁皿、和鏡等が発見され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が多く得られています。この報告書が学術資料として、また、郷土研究の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長 佐藤 健太郎

凡 例

- 1 本書は、常磐新線建設に関わる流山運動公園周辺地区における、千葉県企業庁の土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県流山市思井字堀ノ内523-1ほかに所在する思井堀ノ内遺跡（遺跡コード220-040）である。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、財団法人千葉県文化財センター（平成17年9月1日付で財団法人千葉県教育振興財団と名称変更）が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、第1章 第1節 1項を加藤修司が、それ以外を上席研究員 天野 努が担当した。
また、執筆に当って、陶磁器・土器類については国立歴史民俗博物館助教授 小野正敏氏、愛知学院大学教授 藤澤良祐氏、千葉市立加曾利貝塚博物館学芸員 築瀬裕一氏に御教示いただいた。人骨歯については京都大学大学院理学研究科 大藪山美子氏に鑑定を依頼し御教示いただいた。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸氏・諸機関から御指導、御協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）
千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県企業庁、流山市教育委員会、小野正敏、藤澤良祐、大藪山美子、川根正教、北澤滋、道澤明、築瀬裕一、笹生衛、永嶋正春、井上哲朗
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第8図 国土地理院発行 1/25,000地形図「流山」(N1-54-25-12)
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。測量は日本測地系による。

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法と調査概要	2
3	整理の方法と報告書の作成	7
第2節	遺跡の位置と環境	10
1	遺跡の地理的環境	10
2	周辺の遺跡と歴史的環境	10
第2章	検出した遺構と出土遺物	
第1節	中世の遺構と出土遺物	19
1	居館跡	19
2	方形周溝区画墓	26
3	台地整形区画・溝状遺構・井戸跡	32
4	地下式坑	44
5	土坑	48
第2節	グリッド出土の中世の遺物	57
1	C58・59・D58・59グリッド地区	57
2	C61・62グリッド地区	58
3	D60・E60グリッド地区	58
4	D61・62・E61・62グリッド地区	59
5	F59・60・61・62・G60・61・62グリッド地区	60
第3節	近世の遺構と遺物	61
1	集石遺構と出土遺物	61
2	近世の遺物	61
第3章	まとめ	
第1節	出土遺物からみた遺跡の変遷	63
1	出土遺物の種類・数量と時期	63
2	出土遺物の分布	66
3	遺構の分布とその変遷	69
第2節	遺跡の性格と歴史的背景	75
1	居館跡とその歴史的背景	75
2	方形周溝区画墓とその歴史的背景	77
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	思井堀ノ内遺跡調査区……………	3	第28図	292号方形周溝区西幕及び周溝遺物 出土状況……………	100
第2図	思井堀ノ内遺跡年度別調査区 (上層) 1 ……………	4	第29図	292号方形周溝区画墓主体部 (土坑墓) 及び遺物出土状況 ……	101
第3図	思井堀ノ内遺跡年度別調査区 (上層) 2 ……………	4	第30図	地下式坑 (1) ……………	102
第4図	思井堀ノ内遺跡年度別調査区 (上層) 3 ……………	5	第31図	地下式坑 (2) ……………	103
第5図	思井堀ノ内遺跡年度別調査区 (下層)……………	5	第32図	地下式坑 (3) ……………	104
第6図	グリッド配置図及び遺構全体図……………	6	第33図	地下式坑 (4) ……………	105
第7図	思井堀ノ内遺跡と周辺の地形……………	11	第34図	土坑 (1) ……………	106
第8図	思井堀ノ内遺跡と周辺の遺跡……………	12	第35図	土坑 (2) ……………	107
第9図	思井堀ノ内遺跡中世遺構配置図 及び地形図……………	81	第36図	土坑 (3) ……………	108
第10図	遺構分布図 (1) ……………	82	第37図	土坑 (4) ……………	109
第11図	遺構分布図 (2) ……………	83	第38図	001号溝状遺構出土遺物 ……	110
第12図	遺構分布図 (3) ……………	84	第39図	120号溝状遺構及び掘立柱建物跡 出土遺物……………	111
第13図	遺構分布図 (4) ……………	85	第40図	292号方形周溝区画墓主体部 (土坑墓) 及び周溝出土遺物 ……	112
第14図	遺構分布図 (5) ……………	86	第41図	台地整形区画及び 溝状遺構出土遺物 (1) ……	113
第15図	遺構分布図 (6) ……………	87	第42図	溝状遺構出土遺物 (2) ……	114
第16図	遺構分布図 (7) ……………	88	第43図	溝状遺構出土遺物 (3) ……	115
第17図	遺構分布図 (8) ……………	89	第44図	地下式坑出土遺物 (1) ……	116
第18図	遺構分布図 (9) ……………	90	第45図	地下式坑 (2) 及び土坑出土遺物…	117
第19図	遺構分布図 (10) ……	91	第46図	グリッド出土遺物 (1) ……	118
第20図	遺構分布図 (11) ……	92	第47図	グリッド出土遺物 (2) ……	119
第21図	001号・120号溝状遺構及び遺物 出土状況……………	93	第48図	グリッド出土遺物 (3) ……	120
第22図	1号掘立柱建物跡……………	94	第49図	グリッド出土遺物 (4) ……	121
第23図	2号掘立柱建物跡……………	95	第50図	441号集石遺構 ……	122
第24図	3号・4号・5号掘立柱建物跡……………	96	第51図	近世の遺物……………	122
第25図	6号掘立柱建物跡・1号掘列・ 1号ピット列……………	97	第52図	かわらけ出土分布図……………	140
第26図	2号ピット列……………	98	第53図	貿易陶磁器出土分布図……………	140
第27図	292号方形周溝区画墓と重複遺構関連図 ……………	99	第54図	渥美出土分布図……………	141
			第55図	常滑出土分布図……………	141
			第56図	瀬戸美濃出土分布図……………	142

表 目 次

第1表	思井堀ノ内遺跡と周辺の遺跡一覧…	15	第11表	遺構及びグリッド出土の 中近世銭貨観察表……………	137
第2表	居館地区 柱穴・ピット一覧表…………	123	第12表	441号集石遺構出土の近世銭貨観察表 ……………	137
第3表	地下式坑 一覧表……………	128	第13表	かわらけ集計表……………	138
第4表	土坑一覧表……………	128	第14表	貿易陶磁集計表……………	138
第5表	居館跡地区遺構出土の遺物観察表…	129	第15表	渾美集計表……………	138
第6表	方形周溝区西墓出土の遺物観察表…	131	第16表	常滑集計表……………	138
第7表	台地整形区画及び溝状遺構出土の 遺物観察表……………	131	第17表	瀬戸美濃集計表……………	138
第8表	地下式坑及び土坑出土の遺物観察表…	133	第18表	中世陶磁器遺跡全体組成表……………	139
第9表	グリッド出土の遺物観察表……………	134	第19表	陶磁器・かわらけ類・地区別・種類別 出土表……………	142
第10表	近世の出土遺物観察表（陶器類）…	136			

図 版 目 次

巻頭図版1	292号方形周溝区画墓出土遺物（1）	図版7	002号・003号溝状遺構全景、断面、003号完掘状況
巻頭図版2	292号方形周溝区画墓出土遺物（2）	図版8	607号台地整形区画、495号溝状遺構、441号集石遺構全景、441号断面、441号内際集中カ所、476号井戸状遺構、447・448号溝状遺構、476号～481号・483号全景、556号台地整形区画全景、C62-55～D62-53グリッド付近全景
巻頭図版3	292号方形周溝区画墓出土遺物（3）	図版9	148号溝全景、285号溝全景、425B号溝状遺構全景、503号溝状遺構断面、567号溝状遺構全景、570号～572号溝全景
巻頭図版4	292号方形周溝区画墓出土遺物（4）	図版10	地下式坑のある地点、425D号地下式坑、429号地下式坑、448号地下式坑、448号地下式坑遺物出土状況、460号地下式坑全景、460号地下式坑内土坑断面
巻頭図版5	292号方形周溝区画墓出土遺物（5） 及び遺跡内出土貿易陶磁	図版11	496号地下式坑、504号地下式坑、594号地下式坑、550号地下式坑、595号地下式坑、599号地下式坑
図版1	調査前風景、居館跡北西地区001号溝状遺構、1号掘立柱建物跡、居館跡南西地区001号溝状遺構、120号溝状遺構、ピット群		
図版2	居館跡001号・120号溝状遺構、ピット群		
図版3	居館跡南東地区2号～6号掘立柱建物跡、ピット群、居館跡北東地区238号溝状遺構、ピット群		
図版4	292号方形周溝区西墓、主体部（上坑墓）と289号周溝		
図版5	292号方形周溝区画墓主体部遺物出土状況		
図版6	292号方形周溝区画墓主体部遺物出土状況、完掘状況		

- 図版12 206号土坑, 251号土坑, 301号土坑, 320号土坑, 447号土坑, 493号土坑, 493号土坑馬の骨・歯・出土状況, 土坑群
- 図版13 491号土坑, 501号土坑, 502号土坑, 501号・502号・505号土坑全景, 568号土坑全景, 476号～481号・483号全景, C62-55グリッド～D62-53グリッド全景
- 図版14 中世遺物 (1) <かわらけ>
- 図版15 中世遺物 (2) <渥美・常滑>
- 図版16 図版中世遺物 (3) <砥石として再利用の須恵器・深美・常滑>
- 図版17 中世遺物 (4) <常滑>
- 図版18 中世遺物 (5) <常滑>
- 図版19 中世遺物 (6) <常滑>
- 図版20 中世遺物 (7) <常滑・占瀬戸>
- 図版21 中世遺物 (8) <瀬戸・美濃>
- 図版22 中世遺物 (9) <瀬戸・美濃・在地産>
- 図版23 中世遺物 (10) <内耳土器・祖母懷茶壺>
- 図版24 中世遺物 (11) <鉄製品・砥石・土鐮>
- 図版25 中世遺物 (12) <砥石>
- 図版26 中近世遺物 <銭貨>
- 図版27 近世遺物 <銭貨・陶器>

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

常磐新線建設では周辺地区の土地区画整理事業が一体化して、千葉県企業庁により実施されることになった。そのため流山運動公園周辺地区においては、事業地内の埋蔵文化財の取り扱いについて平成10年度に関係諸機関と協議が行われた。その結果、記録保存の措置を講ずることとなり、平成11年2月より財団法人千葉県文化財センター（当時）が発掘調査を実施することとなった。

発掘調査及び整理作業に係わった各年度の担当職員、作業内容等は下記のとおりである。

(1) 発掘調査

年度	期間	遺跡名	事務所	所長	担当者	対象面積 (㎡)	確認調査 (㎡)		本調査 (㎡)	
							上層	下層	上層	下層
平成10	11.2.1～ 11.3.26	思井堀ノ内 遺跡	西部 調査 事務所	鈴木定明	調査室長 部 淳一	7,713	990	-	-	-
平成11	12.2.10～ 12.2.18	思井堀ノ内 遺跡 (2)			研究員 廣瀬和之 研究員 山田貴久	396	40	-	-	-
平成12	12.5.1～ 13.3.29	思井堀ノ内 遺跡 (3)		及川淳一	調査室長 部 淳一 上席研究員 竹田良男 研究員 中道俊一	1,816	平10 実施済	104	1,816	300
	12.9.20～ 13.3.29	思井堀ノ内 遺跡 (4)			調査室長 部 淳一 上席研究員 竹田良男	575	平10 実施済	-	575	-
	13.1.9～ 13.3.29	思井堀ノ内 遺跡 (5)			調査室長 部 淳一 上席研究員 竹田良男	2,145	200	-	255	-
平成13	13.4.5～ 13.8.31	思井堀ノ内 遺跡 (3)		田坂 浩	調査室長 郷堀英司 上席研究員 立石圭一	300	平10 実施済	12	300	0
		思井堀ノ内 遺跡 (4) その1				488	平10 実施済	36	488	180
		思井堀ノ内 遺跡 (4) その2				575	平10 実施済	44	平12 実施済	360
		思井堀ノ内 遺跡 (5) その1				300	平12 実施済	15	300	0
		思井堀ノ内 遺跡 (5) その2				255	平12 実施済	8	平12 実施済	0

年度	期間	遺跡名	事務所	所長	担当者	対象面積 (㎡)		確認調査 (㎡)		本調査 (㎡)	
						上層	下層	上層	下層	上層	下層
平成13	13.4.5～13.8.31	思井堀ノ内遺跡 (5) その3	西部調査事務所	田坂 浩	調査室長 郷堀英司 上席研究員 立石圭一	441		平12 実施済	8	441	0
	13.5.1～13.8.31	思井堀ノ内遺跡 (6)				1,804	198	56	770	48	
	13.9.1～13.12.25	思井堀ノ内遺跡 (7)			調査室長 郷堀英司 上席研究員 久高将勝	2,971	222	131	2,300	0	
平成14	14.6.3～14.8.23	思井堀ノ内遺跡 (8)	西部調査事務所	田坂 浩	調査室長 郷堀英司	1,038		平10 実施済	128	1,038	0
	14.12.2～15.1.31	思井堀ノ内遺跡 (9)				709		平10 実施済	16	709	0
平成15	16.2.9～16.2.27	思井堀ノ内遺跡 (10)					292		平10 実施済	8	292

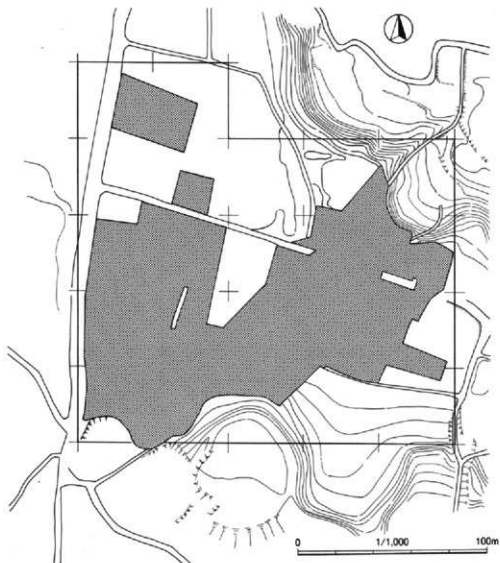
(2) 整理作業

年度	期間	遺跡名	事務所	所長	担当者	対象面積 (㎡)	内容
平成15	15.5.1～15.7.31 16.3.1～16.3.31	思井堀ノ内遺跡	西部調査事務所	田坂 浩	調査室長 郷堀英司	12,088	水洗・注記、記録整理から分類・選別の一部まで
平成17	17.6.1～18.3.31	思井堀ノ内遺跡	調査部整理課	加藤修司	上席研究員 天野 努	12,388	分類選別の一部から報告書刊行(中世編)まで

2 調査の方法と調査概要 (第6図)

調査にあたっては、国土方眼座標を基準に、開発区域の調査対象地を覆うように、40m×40mの方眼網を設定し、基準点測量を行った。これを大グリッドとし、北西に起点を置いて、東西のY軸は西から順にA, B, C・・・、南北のX軸は北から順に1, 2, 3・・・と記号を付した。このため、開発区域全域の中で、今回報告する当遺跡の調査対象地域は、大グリッドとしては、Y軸がC～G、X軸が58～62までの区域となっている。そして、さらに、この大グリッドを4m×4mの小グリッド100区画に分割し、北西隅を起点に西から東へ00, 01, 02・・・09、北から南へ00, 10, 20・・・90と番号を付け、南東隅を99とした。これを組み合わせて表すと、小グリッドの呼称は、例えばC58-58などとなる(第6図のグリッド図)。なお、Y軸のC～G、X軸の58～62の各公共座標値は第6図の遺構全体図に記した通りである。

発掘調査は上層の確認調査、本調査に続いて下層の調査へと実施したが、用地問題等の関係で相前後した場合もある。上層の確認調査は対象面積の10%を原則にトレンチを設定し、遺構、遺物の分布状況を調べ、本調査範囲を限定した。下層の確認調査は対象面積の4%を原則にグリッドを設定し、石器の分布状況を調べた。上層の本調査はバックホウによる表土除去後、全域の遺構を調査した。下層の確認調査では

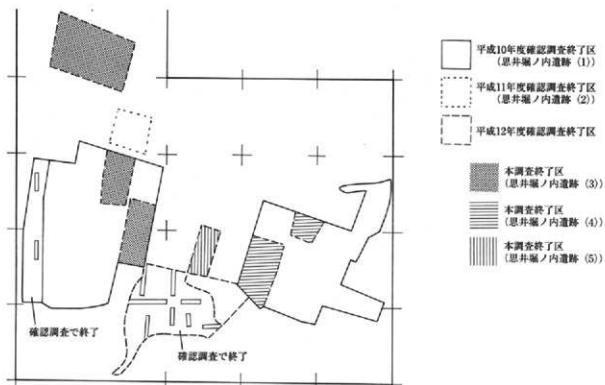


第1図 思井堀ノ内遺跡 平成10年度～平成15年度までの調査区(確認調査及び一部本調査)

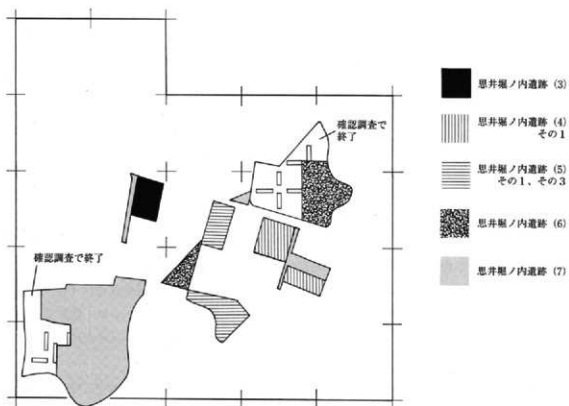
クラムシェルによる掘削を一部で用いている。遺物の取り上げについては、遺構に伴って出土したものについては遺構内の通し番号で、包含層や旧石器時代の遺物についてはグリッド内の通し番号で取り上げている。

これまでの調査で検出された遺構・遺物は旧石器時代から中近世に至るまで数多くに及んでいる。時代別の主な遺構は次の通りである。旧石器時代-石器群19地点、縄文時代-竪穴住居跡5棟・炉穴23基・陥し穴21基(早期)、奈良・平安時代-竪穴住居跡29棟・掘立柱建物跡4棟・土器焼成遺構1基・柵列2・土坑7基、中近世-館跡1ヶ所(掘立柱建物跡6棟・柵列1・ピット列2・ピット多数・堀跡2条・溝状遺構1条・土坑1基)・方形周溝区画3基・台地整形区画3地点・溝状遺構27条・井戸状遺構1基・地下式坑13基・土坑59基・集石遺構1基等。

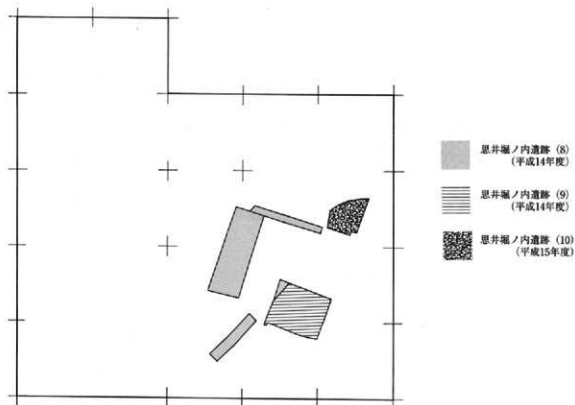
これらの検出された遺構群については、遺跡全体が調査されたわけではなく、未調査区域も多い為、各時代ともに全容が把握されているわけではないが、今回報告する中世(近世含む)遺構群の分布状況については、第6図の遺構全体図に示す通りである。この図からみられるように、中世の遺構群は縄文時代や



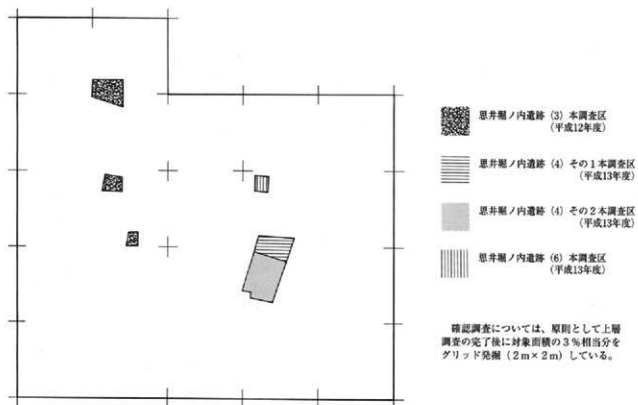
第2図 思井堀ノ内遺跡年度別調査区(上層) 1 (平成10年度～平成12年度)



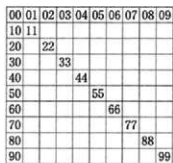
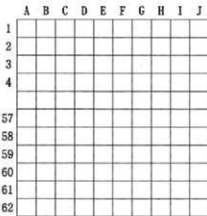
第3図 思井堀ノ内遺跡年度別調査区(上層) 2 (平成13年度)



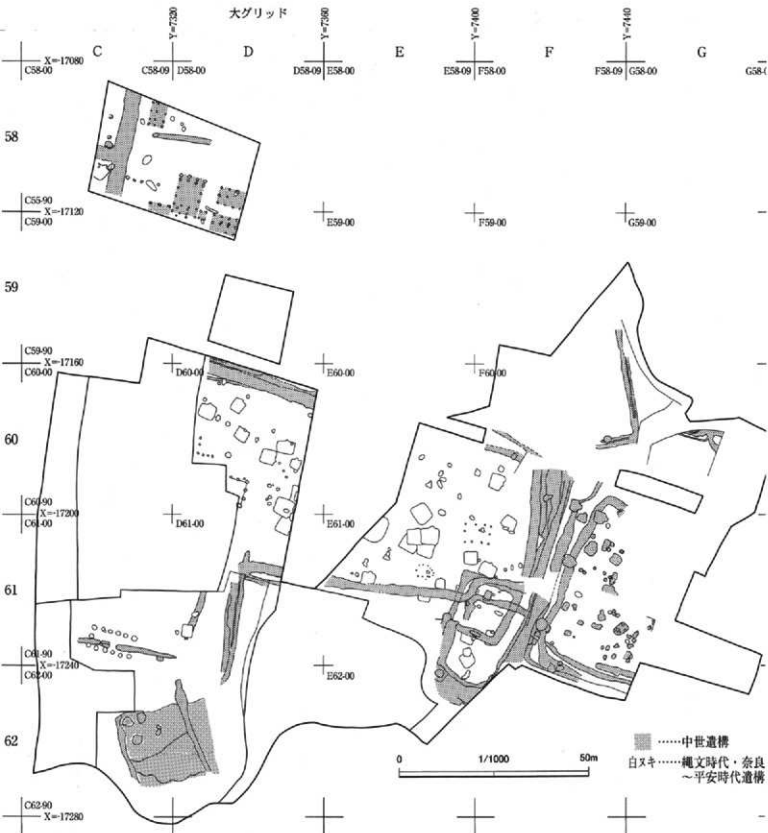
第4図 思井堀ノ内遺跡年度別調査区(上層) 3 (平成14年度～平成15年度)



第5図 思井堀ノ内遺跡年度別調査区(下層) (平成10年度～平成15年度)



小グリッド



奈良・平安時代の遺構群が多く分布する台地中央部付近にはほとんど検出されておらず、台地北西部の区域と、台地南側及び東側に分布が集中している傾向がうかがわれる。そして、検出された遺構群の分布状況からすると、館跡とした遺構群が台地北西部の区域に、方形周溝区画墓や台地整形区画、地下式坑、土坑等の遺構群は台地の南側、東側に各々占拠している点が注目される。

3 整理の方法と報告書の作成

今回の報告は、中世編であり、整理期間も短い為、整理作業においては、次のような方法をとった。

遺物については、①中世の遺構はもとより、包含層（グリッド）や近世及び奈良・平安時代の遺構から出土している中世遺物（特に陶磁器・かわらけ類等）も摘出し、調査区域から出土した中世遺物の総体を出来るだけ把握するようにした。②中世遺構から出土した遺物であっても、縄文時代、奈良・平安時代の遺物や溝状遺構等から出土した鉄製品等で器種・時期が不明なものは整理期間等の都合もあり、詳細は次回以降の報告でとりまとめることとし、出土の有無を記載するに留めた。③遺物の分析鑑定についても、同様の都合等から次回の報告でとりまとめることとした。④近世以降の遺物については、遺構の時期等把握する上で必要な範囲で取り上げることとした。⑤図示した中世遺物で、出土状況がわかるものは、出来る限り出土場所を図化するように努めた。等々である。

遺構については、調査が複数年度にわたり、更に調査区域も小間切れ的に行われているため、同一遺構が部分的に複数回にわたって調査されている場合も多く、各遺構は掘立柱建物跡の柱穴・ピット類を含め検出順に個々に遺構番号が付されて調査がなされている。この点については、特にピット群（掘立柱建物跡）や方形周溝区画墓・溝状遺構は著しく、更に遺構図面については、複数枚の図面を合わせることで一つの遺構の全容が把握出来るという状態であった。この為、遺構については、以下のように取り扱った。①遺構の名称が内容と一致しないものや遺構番号のみで取扱われているものについては、新規に名称を付したり、変更している。但し、遺構・遺物番号は調査時の番号である。②特に想定復元した掘立柱建物跡と楯列跡の各遺構については、調査時の遺構番号がない為、整理作業の際に新たに番号を付して1号掘立柱建物跡、1号楯列跡等と呼称した。なお、遺構を構成する各柱穴の遺構・遺物番号は①と同様である。③遺物番号は付してあるが、木の根や掘乱坑等と記されているものは遺構として取上げていない。但し、中世遺物が出土している場合は、遺物のみ取上げている。

以上のような遺構・遺物についての取扱いをしながら整理作業を進めたが、遺構内容の把握にあたっては、調査担当者による記載のないものは、総合的に判断してまとめている。なお、遺物の出土数量については、破片の大小にかかわらず各1点とし、接合出来たものでも出土の際1点づつ取上げられているものは各々1点としてカウントしたことから、参考のために重量も計測し、数量化の一助とした。

報告書作成にあたっては、遺構図は遺跡・遺構の全体が把握出来るようにとの意図から分布図等を作成掲載している。このため、溝状遺構や台地整形区画等については、図幅の関係もあり、あえて他の遺構よりも縮小して図示している点もある。写真図版については、発掘調査時の遺構写真が必ずしも遺構ごとに撮影されていなかったこともあり、登載していない遺構も多い。遺物写真についても種々の事情から種別ごとに一括しており、挿図に掲載したもののより少なくなっている。

編集に際しては、時間的な関係から挿図の遺構と遺物及び表などを文末に別々にまとめて一括した。このため、説明文と挿図・表等が離れ、別々となり不便をきたすこととなったことは否めない。記述に当たっ

て、中世遺構の名称等については当財団刊行の報告書類を参照している。遺物の実測については、当財団の整理システムに基づき整理補助員の手により進めたが、最終的に担当者（筆者）が日を通している。なお、292号方形周溝区画墓上体部出土の遺物整理及び実測等については、当財団整理技術員の大久保奈々氏に全面的に御協力いただくとともに、同主体部出土人骨歯については鑑定を京都大学大学院理学研究科人数由美子氏に依頼し、御教示いただいた。また、陶磁器等の分類・編年については、下記の文献等を参考としたが、次の諸氏に直接現物実見していただき御教示・御指導いただいた。

貿易陶磁 ー小野正敏氏（独立行政法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館助教授）

瀬戸・美濃製品ー藤澤良祐氏（愛知学院大学教授）

かわらけ類 ー築瀬裕一氏（千葉市立加曽利貝塚博物館学芸員）

更に、常滑・深美製品については、当財団上席研究員鳴田浩司氏、遺物整理等全般にわたっては同主席研究員 栗田則久氏・上席研究員 柴田能司氏・同 小高春雄氏の御協力を得た。

<参考文献>

貿易陶磁

横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器についてー形式分類と編年を中心としてー」

『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

森田 勉 1981 「鎌倉出土の中国陶磁器に関して」『貿易陶磁研究』NO.1 日本貿易陶磁研究会

森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と相系」『貿易陶磁研究』NO.2 日本貿易陶磁研究会

上出 秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』NO.2 日本貿易陶磁研究会

山本 信夫 2005 「貿易陶磁中世前期（11～14世紀前半）編年」『全国シンポジウム・中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

瀬戸・美濃

藤澤 良祐 1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第8号 東洋陶磁学会

藤澤 良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』V 瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤 良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱー古瀬戸後期様式の編年ー」『研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤 良祐 1995 「瀬戸古窯址群Ⅲー古瀬戸前期様式の編年ー」『研究紀要』第3輯（附）瀬戸市埋蔵文化センター

藤澤 良祐 1997 「付編 古瀬戸編年表」『研究紀要』第5輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

藤澤 良祐 1998 「中世陶器（古瀬戸）」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

藤澤 良祐 2002 「瀬戸美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

藤澤 良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム・中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

常滑・深美

中野 晴久 1994 「赤羽・中野〔生産地における編年について〕」『〔中世常滑焼をおいて〕資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

中野 晴久 1995 「常滑焼編年作業と今後の課題」『考古学ジャーナル』No.396 ニューサイエンス社

- 中野 晴久 1998 「中世陶器（常滑・渥美）」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 中野 晴久 2005 「常滑・渥美」『全国シンポジウム・中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』
全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

在地系土器

- 笹生 衛 1991 「房総の中世土器様相について」『史館』第23号 史館同人会
- 服部 敬史 1997 「中世食器の地域性 3 - 関東・甲信 - 」『国立歴史民俗博物館研究報告 第71集』
国立歴史民俗博物館
- 湯田 浩司 2000 「出土遺物について」『千葉県文化財センター研究紀要 20』財団法人千葉県文化財センター
- 河野真一郎他 2002 「かながわの中世～鎌倉から小田原へ～」神奈川県考古学会
- 石川 安司他 2002 「中世を歩く会 在地土器検討会 記録集-北武蔵のカワラケ-」中世を歩く会・埼玉県
立歴史資料館
- 浅野 晴樹 2005 「関東」『全国シンポジウム・中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境（第7図）

思井堀ノ内遺跡は、流山市思井字堀ノ内に所在している。流山市は千葉県北西部に位置し、江戸川に沿って南北に長い市域を有しており、北側で野田市、東側で柏市、南側で松戸市と接している。遺跡は、この流山市の南西部の標高23.5m程の洪積台地上に立地している。台地の西側直下には江戸川が流れ、東京湾へと注いでおり、南側は松戸市との境をなす、支流の坂川が流れている。遺跡の立地する台地は、東側の下総台地から江戸川や坂川の流れる古東京湾によって形成された広い低地へと、半島状に突出す形を呈しており、思井堀ノ内遺跡は、その先端部に位置している。このため本遺跡は立地的にみると、西側の江戸川と南側の坂川、そして台地下に広がる低地をあたかも眼下に納める位置にあると言っても過言ではない。

ここで、河川交通という視点で地理的環境をみると、流山市は近世に水運で栄えた町として知られている。遺跡地の西側地点から江戸川を下り河口までは27km程である。この江戸川は、江戸幕府による利根川東遷事業によって、寛永版に関宿～金杉間が新たに開削されて現在のような流路となったことが良く知られているが、それ以前は野田市付近を源流として流れていたらしい。この点については、近世初頭の下総国の状況を描いたと考えられる船橋市立西部図書館蔵「下総之国絵図」を解析、検討された新井浩文氏によって、寛永期以前は旧江戸川が野田市付近を源流として松戸辺りで旧利根川と合流し、市川となって内海の東京湾へと注いでいたことが指摘されている（註1）。新井氏は、この絵図を様々な観点から分析、検討された結果、この絵図には寛永期以前の情報が盛込まれているものと判断されている。近世以前の旧江戸川の流路をこのようにみると、この地域の古代・中世の河川交通を考える上で、旧江戸川は、近世以降と異なり、この地域特有の河川としての重要な位置を占めていたものと思われる。その意味では、流山市や野田市域一帯の古代・中世の景観については、今後新たな角度からの検討が必要となるだろう。

次に、遺跡の南側を流れる坂川についてみると、遺跡付近から南西へ3.5km程の地点で江戸川へと合流する小河川であるが、この坂川の流れる坂川低地は、この地域では最大規模の開析谷であり、東側に広がる北総台地へと複雑に深く入り込んでいる。このため、その谷頭は遺跡の北東側7.5km程の地にある手賀沼とそこに注ぐ小河川に接するような地点にまで延びている。ちなみに、遺跡地から東側そして北側の台地へと入り込む坂川の支谷と手賀沼の北西部へと注ぐ大堀川支谷との間は、分水嶺をなす台地の幅がわずかに300m～500m程である。この手賀沼は、利根川（古鬼怒川）、霞ヶ浦（香取海）を経て太平洋へと通じる水系にある。その意味では、この坂川は太平洋水系の手賀沼と東京湾を結ぶ水路のような位置を占めている。

思井堀ノ内遺跡は、このように河川交通という観点からその立地をみると、まさに江戸川、坂川という、この地域の主要な河川を押える要所に立地していると見ることが出来るのではないだろうか。

2 周辺の遺跡と歴史的環境（第8図・第1表）

ここでは、本報告書の内容が中世福という点から、周辺の遺跡については、弥生時代以降の遺跡を取上げ、その分布をみながら、遺跡地の歴史的環境をみてみたい。なお、対象とした地域は図幅の関係もあり、江戸川流域から坂川流域にかけて南北6km、東西3km程の範囲の遺跡を取上げている。以下、時代順に概観する。



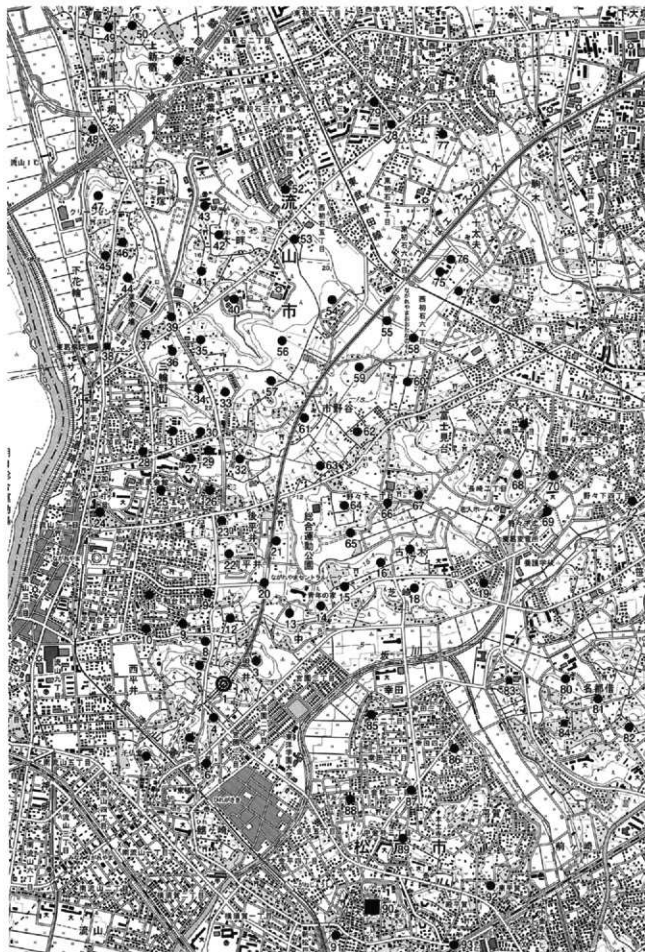
○ 思井堀ノ内遺跡

第7図 思井堀ノ内遺跡と周辺の地形

(1 : 50,000)

(明治13年測量)

(第1軍管地方迅速測図 使用)



第8図 思井堀ノ内遺跡と周辺の遺跡 (1:25,000)

まず、弥生時代についてみると、この時代は遺跡の分布が稀薄である。流山市域では江戸川流域の三輪野山第Ⅱ遺跡で中期の須和式土器が出土し、加村台遺跡(24)と下花輪菅井前(旧下花輪第Ⅱ)遺跡(44)で宮の台式期の住居跡が検出されている程度である。また、坂川流域でも対岸の松戸市内で中芝遺跡(86)、道六神遺跡(88)、原の山遺跡(89)があるだけで、本遺跡の周辺地域は全般的に弥生時代の遺跡の少ない地域として知られている。

これに対して、古墳時代に入ると遺跡数が48ヶ所と大きく増加してくる。このうち、前期から中期にかけての集落遺跡は12遺跡ほどである。特に江戸川流域では、三輪野山地区で三輪野山宮前遺跡(35)三輪野山第Ⅲ遺跡(37)、三輪野山北浦遺跡(39)等が、また、坂川流域では市野谷地域で市野谷宮尻遺跡(54)、市野谷人台遺跡(55)、市野谷向山遺跡(62)、等が各々集落群を形成している。このうち、市野谷地区は、坂川流域では北側の最も奥まった地で、手賀沼に注ぐ大堀川支谷との分水嶺に近い地域である。なかでも入野谷宮尻遺跡は3世紀中頃から始まる集落遺跡で、前期の堅穴住居あとが90棟検出され、そのうちの1棟から東日本でも最も古い墨書土器が出土している。後期の集落遺跡は更に増加し、18遺跡程が調査されている。この時期になると、三輪野山地区や市野谷地区以外にもさらに分布域が広がり、思井堀ノ内遺跡に近い江戸川流域の加地区から平和台地区にかけては、加村台遺跡、加町畑遺跡(25)、加北谷津第Ⅰ遺跡(27)、同第Ⅱ遺跡(28)、平和台遺跡(9)等が顕著な集落遺跡群を形成してくる。とりわけ、加町畑遺跡は後期の堅穴住居跡74棟のみならず、奈良・平安時代の堅穴住居跡126棟、掘立柱建物跡17棟が検出されている。拠点集落の一つである。一方、古墳の分布は顕著ではないが、三輪野山地区に前期方墳の三輪野山向原古墳(40)が、本遺跡の南500m程の地には前方後円墳の三本松古墳(6)が、そして、加地区に終末期方墳の北谷津古墳(28)が点在している。

次に奈良時代から平安時代になると、遺跡は飛躍的に増大し、72遺跡が知られている。このうち発掘調査された遺跡は本遺跡を含め30遺跡程である。これらの中で本遺跡や思井上ノ内遺跡(3)の所在する思井地区から前平井遺跡(22)や平和台遺跡、加町畑遺跡、三輪野山宮前遺跡、の所在する前平井地区、平和台地区、加地区、三輪野山地区にかけては特に、集落遺跡が集中している地域である。そして、三輪野山地区には式内社比定社の茂呂神社が、平和台地区には下総国分寺と同系瓦が出土する流山座寺(10)が位置している。このような観点から、これらの遺跡群を占東海道の荻津駅に比定する論考もあり(註2)、特に奈良・平安時代になると本遺跡周辺地域の重要性がうかがえる。

鎌倉時代以降の中世遺跡は43遺跡が知られている。このうち城跡は、江戸川流域で本遺跡北方2.3kmの地の花輪城跡、坂川対岸の南1.7kmの小金城跡、同東1.7kmと2.2kmにある名都借城跡、前ヶ崎城跡があるが、これらは中世後期の戦国時代に小金城を本拠とした高城氏関係の城跡と考えられている。発掘調査された遺跡は36遺跡あるが、鎌倉時代の遺跡は少なく、地下式坑や十坑墓、そして屋敷跡と考えられている台地整形区画等が検出されている中世後期以降の遺跡が多い。このうち、西平井根郷遺跡からは、鎌倉時代前期の和鎧と短刀、和はさみを出した十坑墓と、15~16世紀にかけての十坑墓群多数が検出されている。この遺跡は本遺跡と同一台地上で西側に隣接する遺跡であることから、同一の遺跡として広く遺構群を構成する可能性が高い。さらに、本遺跡周辺をみると、思井上ノ内遺跡、前平井遺跡、前平井堀米遺跡(20)、加町畑遺跡、西平井二階畑遺跡(8)、三輪野山宮前遺跡、三輪野山道六神遺跡(36)、三輪野山第Ⅲ遺跡等から台地整形区画、地下式坑、土坑墓等が多数検出されており、思井地区から西平井、前平井地区、加地区、三輪野山地区が奈良・平安時代に引き続きこの地域では主要な位置を占めていたことを想定

させている。

一方、中世の時代に入ると文献資料も多くなり、この地域についての記述もみられるようになる。特に本遺跡周辺では、加村、西平井の地名が『本土寺過去帳』(註3)の永享4年(1432)5月の頃に、矢木加村、矢木西平井とみえ、同文書では「矢木」は「ヤキ」、「八木」とも表記されている。この「矢木」(ヤキ)の地名は現在はいみえないが、遡ると「香取文書」(註4)の建久年間(1190~99)の「香取社遷宮用途注進状」や文永年間(1264~75)の造営記録(断简)等に「矢木郷」とみえ、本遺跡地を含む流山市域南部一帯の地を郷域とした中世の郷名と考えられている。そして、前記の文永年間の造営記録には、矢木郷の地頭として「式部大夫胤家」の名がある。この胤家は「吾書鏡」(註5)に宝治2年(1248)1月3日の塚飯で將軍供奉者の一人にその名(矢木式部大夫)があり、同一人物とみなされている。『千葉大系圖』(註6)によると、矢木胤家は、相馬六郎常家の子で、同次郎師常の孫、千葉常胤のひ孫にあたる人物である。「矢木郷」については、その後、『香取文書』康永4年(1345)3月日の「造営所役注文」に「一字 西廻廊五門 同矢木庄役所」とあり、14世紀中頃には庄圃化されている様子がうかがわれる。その後、「矢木」の地名は先の「本土寺過去帳」等のほか、「吉野文書」(註7)の天正18年(1590)2月10日付「高城氏黒印状」(胤別印判状)に「八木百姓中」、さらには天正19年(1591)及び20年(1592)の「天正検地帳」(註8)には、「下総勝鹿郡八木庄小金之内」、「下総勝鹿郡小金八木之内野々下村」とみえる。また、前述した「下総国絵図」にも「やき」の地名がみえ、「矢木」の地名が近世初頭まで続いていたことがわかる。

なお、地名という観点でさらにみえてみると、遺跡名にもとられているように本遺跡の所在地に「堀ノ内」の地名がある。この「堀ノ内」の地名は、その多くが中世の居館等の所在に関わる地名と理解されている。また、『本土寺過去帳』には、寛政7年(1466)の項に「矢木船津ニテウタレ」の記載がみえ、矢木郷内に水上交通に関わる地名と考えられる「舟津」の地名が存在していたことを示している。

註1 新井 浩文「戦国期間宿の河川と交通—船橋市西図書館蔵「下総之国図」の資料紹介を通して—」
『研究報告・第6号』千葉県立関宿城博物館 2002

註2 下津谷達男・古宮隆信「下総の古東海道」『東葛上代文化の研究』古宮・下津谷両先生還暦記念祝賀事業実行委員会編 1988

註3 「千葉県史料 中世篇 本土寺過去帳」千葉県 1982

註4 「千葉県史料 中世篇 香取文書」千葉県 1957

註5 「新訂増補国史大系吾妻鏡第三」吉川弘文館 1977

註6 「千葉大系圖」改訂房総叢書 第五輯 改訂房総書刊行会 1959

註7 「千葉県史料 中世篇 諸家文書」千葉県 1962

註8 「流山市史・通史編1」流山市教育委員会 2001

<文献一覧>

- 1 『流山市大町台・下花輪第二遺跡調査概報』下花輪第二遺跡調査団 1973
- 2 『加村台遺跡-1976年度 発掘調査報告書-』流山市教育委員会 1978
- 3 『流山市思井 鷹の見遺跡 発掘調査報告書』流山市思井鷹の見遺跡発掘調査団 1978
- 4 『千葉県流山市 西深井一ノ割遺跡・西初ノ窪遺跡』流山市教育委員会 1980
- 5 『千葉県流山市 茂侶神社脇遺跡』千葉県広域水遺企業団・茂侶神社脇遺跡発掘調査団 1980
- 6 『千葉県流山市 大原神社遺跡 調査報告』流山市大原神社遺跡調査会 1982
- 7 『千葉県流山市 三輪野山八重塚遺跡』三輪野山八重塚遺跡調査会 1982
- 8 『千葉県流山市 三輪野山八重塚遺跡B地点』流山市遺跡調査会 1985
- 9 『千葉県流山市 三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡』流山市遺跡調査会 1985
- 10 『千葉県流山市 三輪野山八重塚遺跡C地点』流山市教育委員会 1987
- 11 『松戸市文化財調査報告 第13集 昭和61年度松戸市内遺跡群発掘調査概報』松戸市教育委員会 1987
- 12 『昭和62年度-流山市市内遺跡群発掘調査報告』流山市教育委員会 1988
- 13 『千葉県流山市 三輪野山第Ⅲ遺跡』流山市教育委員会 1988
- 14 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報-昭和63年度-』千葉県教育庁文化課 1988
- 15 『千葉県流山市 三輪野山遺跡群 昭和63年度確認調査概報』流山市教育委員会 1989
- 16 『-昭和63年度-流山市市内遺跡群発掘調査報告』流山市教育委員会 1989
- 17 『昭和63年度松戸市内遺跡群発掘調査概報』松戸市教育委員会 1989
- 18 『-平成元年度-流山市市内遺跡群発掘調査報告書』流山市教育委員会 1990
- 19 『平成元年度松戸市内遺跡群発掘調査概報』松戸市教育委員会 1990
- 20 『-平成二年度-流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会 1991
- 21 『千葉県流山市 三輪野山八重塚遺跡B地点』流山市教育委員会 1991
- 22 『平成二年度松戸市内遺跡発掘調査概報』松戸市教育委員会 1991
- 23 『平成三年度松戸市内遺跡発掘調査概報』松戸市教育委員会 1992
- 24 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報-平成三年度-』千葉県教育庁生涯学習部文化課 1993
- 25 『平成四年度松戸市内遺跡発掘調査概報』松戸市教育委員会 1993
- 26 『千葉県流山市 平和台遺跡発掘調査概報』流山市教育委員会 1993
- 27 『千葉県松戸市 東平賀貝塚(8次)』松戸市遺跡調査会 1993
- 28 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報-平成四年度-』千葉県教育庁生涯学習部文化課 1994
- 29 『加地区遺跡群 Ⅲ』千葉県流山市教育委員会 1994
- 30 『千葉県松戸市 東平賀貝塚(10次)』松戸市教育委員会 1995
- 31 『平成六年度市内遺跡発掘調査報告書』松戸市教育委員会 1995
- 32 『-平成七年度-流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会 1996
- 33 『流山市若宮第Ⅱ遺跡』千葉県都市部 財団法人 千葉県文化財センター 1997
- 34 『-平成八年度-流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会 1997
- 35 『-平成九年度-流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会 1998
- 36 『-平成十年度-流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会 1998

- 37 「平成11年度 流山市市内遺跡発掘調査報告書」流山市教育委員会 2000
- 38 「加地区遺跡群 IV」千葉県流山市教育委員会 2000
- 39 「平成11年度松戸市内遺跡発掘調査報告書」松戸市教育委員会 2001
- 40 「平成12年度 流山市市内遺跡発掘調査報告書」流山市教育委員会 2002
- 41 「千葉県松戸市 小金城跡（第6地点）」松戸市遺跡調査会 2002
- 42 「平成12年度松戸市内遺跡発掘調査報告書」松戸市教育委員会 2002
- 43 「平成13年度 流山市市内遺跡発掘調査報告書」流山市教育委員会 2003
- 44 「平成13年度松戸市内遺跡発掘調査報告書」松戸市教育委員会 2003
- 45 「流山市 西深井七ノ割遺跡発掘調査報告書」流山市教育委員会 2005
- 46 「平成15年度松戸市内遺跡発掘調査報告書」松戸市教育委員会 2005
- 47 「千葉県文化財センター年報29-平成15年度」2005
- 48 「千葉県文化財センター年報30-平成16年度」2005
- 49 「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V」（財）千葉県文化財センター 1986

※ 以上の他「抄〇〇」は、千葉県教育庁生涯学習部文化財課発行の「千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報」の各年度版の略である。例「抄H12」は同上の平成12年度版を示す。

第2章 検出した遺構と出土遺物

第1節 中世の遺構と出土遺物

1 居館跡

調査地域の中では最も北西部の、C58・C59・D58・D59グリッド地区に所在している。この地域は遺跡の所在する台地の中央部にあたり、標高が最も高い地域でもある。調査区域は、この地域の南北30m、東西40m程の範囲であったが、その中で、堀跡と考えられる大規模な溝状遺構や根石の入った柱穴をもつ掘立柱建物跡、橋列跡、小ピット群等が検出された。このような遺構群は、調査地域全体の中で、この地区にしか検出されておらず、加えて出土遺物についてみると、破片ではあるが青磁・白磁類やかわらけ類の大半が、この地区に集中して出土していることから、これらの遺構群を居館跡と把握して報告するものである。

(1) 堀跡

001号及び120号溝状遺構を堀跡とした。これらは、調査地域全体の中で検出された溝状遺構の中で最大規模のものであり、その形状等から堀跡と把握した。

001号溝状遺構（第10・21回、図版1・2）

C58-27グリッドからC58-86グリッドにかけて位置している。南北方向に直線に走っており、調査区域の中で検出された長さは24.8m程である。C58-76グリッドの箇所では縄文時代早期の竈火（296号）と平安時代竈穴住居（012号）の一部を切っている。また、C58-66グリッドの箇所では、西から延びる120号溝状遺構に切られている。主軸方位はN-10°-Eである。規模は、北側から南へ6.2mまでの長さの区域は幅が検出面の上端で4.0-4.2m（下端0.45-0.7m）、深さ（検出面から）2.44-2.61mであり、中程の長さ7.8mの区域は、幅が4.2-4.5m（0.3-0.4m）、深さ1.96-2.12mである。そして、南側の10.8mの長さの区域は北側とほぼ同じく幅が4.0-4.2m（0.4-0.5m）、深さ2.42-2.61mである。この溝は、このように、調査区域の中程のC58-47グリッドからC58-56グリッドにかけての7.8mの長さが、両側の北側及び南側の深さよりも42-62cm程浅くなっている。そして幅は上端が30cm程広いが、底面は逆に最小幅で10cm、最大幅で30cm程狭くなっている。しかし、断面をみると、三者共に深さ1.5m程の所からV字状に近い形で急に狭くなっており、類似した形態をしている。これらの点からみると、この溝は、C58-47グリッドからC58-56グリッドにかけて溝の深さが両側より浅くなっている7.8m程の範囲が当初は土橋となっており、その後、掘られて現状の形となった可能性も考えられる。

なお、この溝の覆上の状況を見ると、土層断面にもみられるように、中段から上部の覆土が場所によって大きく異なっている。その状況は検出面における平面的な観察においても数mごとに違った上が入っている様子が指摘されている。この点からすると、中段近くまで埋まってきた段階で、短期間に人為的に埋め戻されている可能性が高いのではないかと考えられる。

出土遺物（第38回、第5表、巻頭図版5、図版14・15・18）

中世の遺物は、かわらけ類115点1659g（碗58点1242g、皿36点351g、器種不明21点66g）、貿易陶磁類9点（青磁8点212g、白磁1点4g）、渚美2点132g（片口鉢1点93g、壺1点39g）、常滑11点519g（高台付片口鉢4点134g、壺1点151g、甕6点234g）が出土している。その他、縄文土器、平安時代土師器・須

恵器・施釉陶器・土師質土器、近世陶磁器（16点109g）、鉄製品（4点）、鉄滓（15点）、動物の歯（9点）、炭化種子（1点）、木の葉（1点）、糠多数がある。これらは、木の葉を除き、いずれも破片であり、覆土中からの出土である。近世陶磁器類が上層から出土した他は、上層から下層まで混在した形で出土している。なお、木の葉（1点）のみは、湿潤な溝の底面から出土している。

中世遺物の出土状況は第21図に図示したが、調査区内では主に溝の北側と南側から出土しており、なかでも南側の120号溝と接続する近辺から多く出土している。

かわらけ-碗（1～27）と皿（28～38）がある。碗は底部破片や口縁部のみの破片が多いが、全体の形状は不明瞭な点がある。器形から大別すると、高台のような円盤状を呈す底部から体部が立上がる形のもの（1～20）と、平底の底部のもの（21～27）とがある。又、細分すると、前者には、底径が大きく、底部内面の見込み部分にナデの無いもの（1～7）と見込み部分にナデのあるもの（8～13）、底径が小さく円盤状底部がわずかに突出するもので、見込みにナデの無いもの（20）と、見込み部分全体をナデで消しているもの（16～19）とがある。後者の平底のものは、全体に浅めの碗で、口縁部が内湾気味のものが多く、胎土がきめ細かく、色調が渋黄褐色を呈すものがほとんどである。器高が3cm内外のもの（21～24）と2cm程度のもの（25～27）とがある。底部内面のナデについては、小破片の為、不明なものが多いが、21には横方向のナデが認められる。皿は体部有段のもの（34）を除くと、器高が2cm以下の小形のもので、内面の深さも1cmに満たない浅いものである。全体として口縁部が内湾気味に立上っており、口唇部が薄くなるものが多い。器形の特徴から大別すると、碗と同様に底部が高く円盤状を呈すものと平底のものがある。更に整形等から細分すると、前者には底部内面見込みにナデの無いもの（28・30・36）と底部がわずかに円盤状を呈すが内面見込みにナデのあるもの（32）とがある。また、平底のものも底部内面見込み部分にナデの無いもの（29～31）とナデのあるもの（33）とがある。この他、34・35は体部有段のものであり、34は底部内面をヘラナデしている。37・38は平底を呈すが口縁部破片の為、内面見込み部のナデは不明。かわらけ類の底部切り継ぎ技法をみると、判別出来るものは回転糸切りが大半である。

貿易陶磁-青磁8点はいずれも碗の破片である。比較的大きな破片が多く、5点を図示した。39・40は体部内面に劃花文がみられる。41～43は底部破片で、41は内面中央部に印文のような文様がみられる。42は二次利用を図ったものか、底部周辺を円盤状に打欠いている。43は内部底面に細かな貫人がみられる。白磁（44）は土緑1緑の小破片（現高1.95cm、幅2.3cm）である。

瀟美-片口鉢の口縁部破片（45）と砥石として再利用された壺の胴部破片（48）である。

常滑-小破片が多い。46は高台付片口鉢の底部で他に同一個体とみられる破片3点がある。47は壺の胴下半～底部の破片である。他に壺の胴部小破片が6点ある。

この他、土器再利用の砥石として、平安期の須恵器壺の小破片を利用した2点（49・50）がある。

120号溝状遺構（第10・21図、図版1・2）

C58-65グリッドから66グリッドにかけて位置している。検出された東西方向の長さは3m程であるが、幅は上端3.2～3.5m（下端0.55～0.65m）、深さは1.56m程であり、東西方向の方位はN-88°-Wである。西から延びていると考えられるこの溝は、C58-66グリッドで001号溝と直角にぶつかるようにして切っているが、第10図に示した土層断面にもみられるように、そこから北へほぼ直角に屈曲している。そして、この溝は深さが001号溝の中程の深さよりも更に45cm前後浅いが、溝の幅は、001号溝をそのまま利用し

ているかのような形状を示して北へ延びている。このような120号と001号溝との切り合い状況については、残念なことに、交差する地点から北側へ3m程の所までしか確認されていない。このため、それ以上120号溝が北へ延びていたのかどうかは明らかではないが、001号溝を利用していた可能性が高いのではないかと推定される。

覆土の状況は、3～4層に大きく別れているが、001号溝にみられるような土層の堆積状態とは違う点からみると、自然堆積による可能性が考えられる。

出土遺物（第39図、第5表、巻頭図版5、図版14～16）

中世の遺物は、かわらけ類94点833g（碗51点649g・皿23点113g・器種不明20点71g）、貿易陶磁類7点（青磁4点117g・白磁3点26g）、国産陶器類7点（瀬美2点196g・常滑5点178g）が出土している。その他、縄文土器、平安時代土師器・須恵器・施釉陶器・土師器土器、近世陶磁器（3点5g）、鉄製品（13点）、鉄滓（15点）が出土している。これらは、いずれも小破片で、覆土中からの出土である。近世陶磁器が上層から出土した他は、上層から下層まで混在した様相で出土している。

中世遺物の出土状況は第21図の通りである。001号溝に隣接・重複する区域からの出土が多い。なお、鉄製品はいずれも小破片で器種・時期ともに不明である。

かわらけ一碗と皿である。図示出来たものは碗12点（1～12）と皿5点（11～17）である。

碗のうち1・3・5は円盤状底部をもつ厚手のもので、3・5は内面見込み部を中心にナデのあるものである。1は底部中央付近に径5mm程の穿孔がある。6～9は平底のもので、7～9は内面にナデが認められる。2は平底だが底部が厚く、内面にナデが認められないことからすると、7～9とは別の形の円盤状の底部をもつ大ぶりの厚手の碗に近いものと思われる。また、4は、底部内面にナデをもつものであるが、底部外面周縁部に粘土を薄く貼り付け、わずかであるが底部を高台状に高めている。

皿は、17の口唇部が大きく外反する体部有段のもの以外は、全体として口縁部が内湾気味に立上り、口唇部が薄くなるものが多い。碗と同様に底部がわずかに円盤状を呈すもの（13・16）と平底のもの（14・15）がある。また、これらのうち16には、内底面にナデがある。

貿易陶磁—青磁4点はいずれも碗である。18は大形の破片であり、内面底部と体部の境に幅1～1.5mmの浅い凹みが条めぐる。外面ともに無文である。19は胴下半部の小破片で外面に錦蓮弁文をもち、内面は底部と体部の境に一条凹状の段差が走っている。他の2点は1縁部と体部の小破片である。白磁は皿（1点）と瓶の蓋の破片（2点）である。20は口ハゲの小皿である。21は同じ溝から出土した2点と更にグリッド包含層から出土した4点が接合した。

国産陶器のうち、瀬美2点は甕の破片（22・24）で24は砥石として再利用のものである。常滑7点は、高台付片口鉢の胴部小片1点と甕の胴部小片6点である。23は甕の砥石として再利用の甕の小片である。その他、砥石として再利用しているものに平安期の灰軸及び緑釉陶器皿の破片2点（25・26）がある。

（2）掘立柱建物跡

居館跡の主要遺構であるが、この調査区域では、300を越す大小ピットが検出された為、発掘調査は、掘立柱建物跡を含め、主にピット群としての認識のもとで調査が進められている。このため、整理段階で図面や記載された所見などをもとに、柱穴の規模、形状や出土遺物、柱穴間の距離、主軸方向等を勘案し、ある程度まとまりのつくものを取上げている。001号溝状遺構の東側区域で、北西側に1棟（1号）と南

東側に5棟(2号~6号)の計6棟を検出した。

1号掘立柱建物跡(第22図、第2表、図版1)

C58-38・39グリッドを中心に位置する。調査区の中では北西側にあり、001号溝の東3.5m程の所に所在する。桁行方位はN-11°-Eである。北側が調査範囲外へとかかっている為、桁行がさらに北側へと延びるのかは不明であり、北東の柱穴の有無も明らかではないが、現状の規模は2間×1間で、側柱構造の西側、南側に廂を持つ形の建物を想定した。桁行は5.7mで、梁間3.6mである。身舎は4.2m×2.1mである。柱間寸法は、桁行2.1m、梁間2.2mで、廂部は1.4~1.5mである。柱廻方は楕円形が多く、規模は30cm×30cm~70cm×76cmである。

出土遺物-中世の遺物は無いが、214号柱穴と235号柱穴から縄文土器小破片が各1点と、226号柱穴から縄文土器小破片1点と土師器坏小破片1点が出土している。

2号掘立柱建物跡(第23図、第2表、図版3)

D58-80・81・90・91グリッドを中心に位置している。調査区の中では南東側の一群にあり、6号掘立柱建物跡及び2号ピット列と重複する。また、東側の5号掘立柱建物跡とは柱穴間1mの近距離で隣接している。新旧関係は不明である。桁行方位はN-15°-Eである。規模は4間×3間で、北側に廂をもつ。身舎の南側の1間のみは東柱構造で、この部分の8ヶ所の柱穴のうち、6ヶ所(061号・063号・066号・082号・084号・088号)の柱穴に柱受けの大きな根石が底面に密着して置かれていた。桁行は9.6m、梁間6.3mである。身舎は8.55m×6.3mで、柱間寸法は桁行が北側一間と南側二間が2.1mに対して、北側から二間目が2.25mと15cm程長い。梁間は各2.1mである。廂部は桁行が1.06m程で梁間2.1mである。柱廻方は円形が多く、身舎の柱穴の規模は35cm×36cm~70cm×80cm、深さ048号柱穴が30.7cmと浅いが他は50.4cm~82.2cmと深く、廂部が60cm×80cm~90cm×108cm、深さ26.2cm~42.6cmである。南側の根石の残っている柱穴は、概して柱穴の規模が35cm×36cm~50cm×60cmと、北側の柱穴よりも小さい。これに対して、北側の柱穴は50cm×60cm以上の規模である。その中で、076号・329号・341号柱穴は、その底面に柱の当り痕跡とみられる固くなった箇所が存在していた。

なお、この建物の南側側柱の柱穴から1m程外側に、廂とも考えられるピットが3個検出されている。065号・067号・071号ピットであり、規模は065号が、35cm×40cm、深さ55.3cm、067号が37cm×38cm、深さ32.1cm、071号が40cm×44cm、深さ29.5cmである。南側が調査範囲外であった為、南西隅のピットは未検出であるが、ピットの並び方(柱筋及び柱穴間寸法が側柱と同じ)、規模、出土遺物などから判断すると、これらのピットは廂の柱穴となる可能性が高いのではないかと考えられる。ここではその点を指摘するとともに、南側の調査範囲外における今後の調査結果を待ちたい。

出土遺物(第39図、第2・5表、図版24・25)

10ヶ所の柱穴の覆土中から、青磁皿2点5g(066号1g、333号4g)、かわらけの碗、小皿の小破片13点23g(065号皿2点・064号皿1点碗2点・080号皿1点・088号皿1点・327号皿1点・333号皿3点・335号皿2点)、常滑の甕の小破片1点5g(082号)、鉄製品2点が出土したほか、6ヶ所の柱穴から根石が各1点づつ出土している。なお、この他に、336号柱穴を除く全ての柱穴から、縄文土器や平安時代の土師器・須恵器の小破片等がわずかづつであるが出土している。(第2表)また、廂の柱穴跡の可能性を指摘した065号・067号ピットからも、かわらけ小皿の小破片が計3点11g(065号2点・067号1点)出土している。

青磁皿は2点が接合し、同安窓のものである。かわらけ類と常滑の甕ともどもいずれも小破片で図化出来る程のものはない。図示した1の鉄製品は小破片で器種は不明である。2は完形の釘で木質が付着している。

3号掘立柱建物跡（第24図、第2表、図版3）

D58-83・84・93・94グリッドに位置している。検出されている柱穴は、014号・015号・017号・078号・305号・309号・311号・312号・314号柱穴であり、東側が調査範囲外へと延びている為、規模は不明である。検出された範囲内では3間×2間であり、桁行方位N-75°-Wである。欄柱構造であるが、西側一間に東柱と考えられる柱穴（311号）が存在している。桁行6.3m、梁間4.2mである。柱間寸法はすべて2.1mである。柱掘り方は円又は楕円形で、規模は38cm×32cm～80cm×68cmであり、深さは37.3～86.1cmである。

なお、この3号建物には欄柱の外側に建物と関連するのではないかと考えられるピットが存在している。南側の018号・024号、北側の306号（307号）・313号、西側の038号・331号の各ピットである。これらのピットは、3号建物の欄柱柱穴の規模よりはやや小さく、36cm×35cm～50cm×43cm、深さ19.1cm～79.1cmであるが、このうち、南及び北側の018号・024号・306（307号）・313号は欄柱柱穴に柱筋がほぼ対応し、欄柱柱穴との柱間寸法も欄柱の柱穴間寸法の2分の1程である1.05m前後の位置にある。また、西側の038号・331号ピットは、欄柱柱穴のほぼ中間に位置し、そのピット間距離は約3mである。両者とも欄柱の柱筋から1.05m前後の位置にあり、欄柱と方位を同じくしている。

このように、これらのピットは、その位置からみると、この建物の廂の柱穴にもみえる。3号建物は東側が調査範囲外で未検出の為、全容が判明した段階でその位置づけも明らかになると思われるが、ここでは整理の時点で気づいた点を指摘しておきたい。

出土遺物（第39図、第2・5表）

中世の遺物は、かわらけ碗の小破片が309号柱穴から1点（2g）、常滑の甕の小破片1点（64g）が314号柱穴から出土している。その他、廂の可能性の考えられる南側の欄柱柱穴の外側に位置する024号ピットから、かわらけ碗の小破片1点（10g）が出土している。なお、中世の出土遺物以外に平安時代の土師器、須恵器の小破片と小鏝が、この建物の柱穴から数点ずつであるが出土している。

4号掘立柱建物跡（第24図、第2表、図版3）

D59-02・03・04・12・13・14グリッドに位置している。検出されている柱穴は、019号・020号・021号・022号・028号・032号・062号・075号・076号・077号柱穴である。検出された範囲内でみると、桁行3間、梁間2間の東柱をもつ建物が想定されるが、南側と東側が調査範囲外となっているため明確ではない。現状では、桁行方位はN-75.5°-Wであり、桁行は6.3m、梁間4.0mで、柱間寸法は桁行2.1m、梁間2.0mである。柱掘り方は円形で、規模は40cm×40cm～65cm×68cmで、深さ25.5～60.5cmである。北側の欄柱柱穴と二列目の東柱柱穴とでは、柱穴の規模、深さが異なっており、北側の欄柱の方がやや小さいが、深さは44.4cm～60.5cmで、二列目の深さ22.2cm～34.7cmとくらべると、15～20cm程深くなっている。

出土遺物（第39図、第2・5表、図版25）

中世遺物としては、かわらけの小破片が、021号柱穴（1点2g）と028号柱穴（3点10g）、032号柱穴（3点14g）から計7点出している。077号柱穴底面からは掘り拳よりやや小さい鏝が1点（第39図004-1）出土している。かわらけ類はいずれも小破片で図示出来る程のものはない。なお、この他の遺物として、

縄文土器や土師器・須恵器の小破片と小礫片が062号・075号・077号柱穴を除く7柱穴から少量出土している。

5号掘立柱建物跡(第24図, 第2表, 図版3)

D59-01・02グリッドに位置している。039号・046号・047号・064号の柱穴で構成される1間×1間の建物である。規模は桁行1.8m, 梁間1.5mで, 桁行方位はN-14.5°-Eである。西側1mで2号掘立柱建物と, 東側2.1mで4号掘立柱建物と各々隣接している。柱掘り方は円形で, 規模は42cm×46cm~46cm×52cm, 深さは039号柱穴のみが30.2cmと浅いが, 他は61~64cmと深い。なお, この5号建物と東側に隣接する4号掘立柱建物とは, 桁行, 梁間の軸方位が同じで, かつ柱間隔が2.1mと, 4号建物の桁行の柱間寸法と同じであること。そして, 柱穴の規模, 深さも類似する点等からみると, この両者は同一の掘立柱建物を構成する可能性が考えられる。この場合, 桁行4間の建物となり, 西側に5号掘立柱建物とした柱穴が付いて廊の一部となる構造の建物が想定出来る。しかし, この点については南側の調査範囲外での検出結果を待たねば判明しないことから, ここでは可能性が考えられる点を指摘しておくたい。

出土遺物-中世の遺物の出土は無いが, 縄文土器や土師器, 須恵器の小破片・礫片が4つの柱穴から少量出土している。

6号掘立柱建物跡(第25図, 第2表, 図版3)

C58-98・99グリッド, D58-90グリッド, D58-00グリッドに位置している。検出されている柱穴は, 桁行を構成すると考えられる東西方向の086号・094号・111号・156号柱穴と梁間の南北方向の073号柱穴であり, 南側及び西側が調査範囲外である為, 全容は不明である。桁行方位はN-80°-Wであり, 南東部で確認出来る建物の中では, この建物だけが向きが西に5°程ずれている。2号掘立柱建物跡と重複するが, 新旧関係は不明である。規模は現状で, 桁行7.0m, 梁間2.1mである。柱間寸法は桁行が, 東西の間が2.1mで, 中間の一間がそれより広く2.8mである。柱掘り方は円形と楕円形で, 規模は42cm×46cm~52cm×60cmで, 深さは25~65cmである。なお, 090号柱穴は3個の柱穴が重複している為, 南側の調査範囲外での柱穴の検出次第では, 柱間寸法が違って来る可能性がある。

出土遺物-青磁碗の小破片が111号柱穴から1点(3g)出土している。その他は, 縄文土器・土師器の小破片と小礫が, 073号・094号・111号・156号柱穴から少量出土している。

(3) 1号櫓列(第25図, 第2表, 図版3)

C58-76・77グリッドに位置している。検出されている柱穴は146号・184号・210号柱穴である。方位はN-75°-Wであり, 規模は, 長さ4.2mで, 柱間寸法は2.1mである。柱掘り方は, 円又は不整楕円形で, 規模は上端で, 146号柱穴が53cm×58cm(下端18cm×20cm), 深さ55.2cm, 184号柱穴が49cm×58cm(35cm×46cm), 深さ55.9cm, 210号柱穴が75cm×90cm(18cm×22cm), 深さ57.4cmである。このうち, 146号柱穴, 184号柱穴は, 新旧関係は不明であるが, 各々小型のビットと重複している。いずれも, 掘立柱建物跡の柱穴と同様に大きく深さのある柱穴である。周辺には, これに対応するビットが無く, 軸方位を, 2号掘立柱建物跡等と同じくし, 又, 001号掘跡と直交する形をとっていることなどから, ここでは櫓列として取上げている。

出土遺物-中世遺物は146号柱穴から, かわらけの小破片が4点(11g)出土している。この他には3箇所の柱穴跡から, 縄文土器・土師器の小破片と小礫が少量出土している。

(4) ビット群 (第10・11・12図, 第2表, 図版2・3)

これまでみてきた掘立柱建物及び欄列の他に、この地区には、いわゆるビットと呼称される小穴が、調査区の南側を中心にして多数存在している。それらの個々の規模等については第2表の通りであるが、そのなかには、形状・規模・出土遺物等からみて、建物や欄列等の柱穴と考えられるものも少なくない。なかでも、穴の並びが掘立柱建物の桁方位や梁方位とほぼ同じに方位をとり、柱穴間寸法が、2.1m前後と、この地区の掘立柱建物に多い寸法と同じくするものがいくつか認められる。そのうちの主なものを取上げると次のものがある。

①1号ビット列

2号掘立柱建物跡の南西に位置する091号・105号・112号である。やや小型のビットで、深さは一定ではないが、円形で規模も類似している。軸線N-74.5°-Wの線上に並び、長さ4.1mで、柱間寸法は2.0~2.1mである。建物跡の柱穴と考えた場合、南側が調査範囲外の為、対応する柱穴の存在は不明であるが、建物あるいは欄列等の柱穴となる可能性が考えられるビット列である。

②2号ビット列

001号溝状遺構の東1.3mの地点にある189号と、そこから東側の042号・044号・051号・060号・086号・092号・104号・106号・142号・171号・177号である。これらはいずれも軸線N-73°-Wの線上に並ぶ。なかでも、東側の042号・044号・051号・060号は、深さは一定ではないが、柱掘り方の形状や規模に差はなく、長さ6.4m、柱間寸法2.1~2.2mで、掘立柱建物の柱穴に類似する。調査区の中では建物跡として対応する柱穴が見当たらないが、今回調査範囲外であった南側の調査結果によっては、建物の柱穴となる可能性もなくはない。現状では、これらのビット群が掘立柱建物跡と同じ方位で欄列的な形をとって存在する点を指摘しておきたい。

以上、例示したビット列を含め、これらのビットからは、中世のかわらけ・青磁・陶器類のみならず、縄文土器・土師器・須恵器の小破片、小礫を出土するものが少なくない。この点から、恐らくその多くが、この地区の屈館跡の時期に存在したビット群として理解しておきたい。

出土遺物 (第39図, 第2・5表, 図版14)

中世遺物は、第2表に示すように12ヶ所のビットからかわらけ16点 (051号2点23g, 093号1点42g, 115号1点1g, 168号1点8g, 175号3点4g, 197号1点2g, 281号1点3g, 310号1点1g, 326号1点2g, 328号4点61g)、転用砥石として使われた常滑甕1点114g (386号)、瀬戸美濃緑釉小皿1点5g (173号) が出土している。これらは、いずれも小破片で覆土中からの出土である。また、この他には、鉄製品が2点304号ビットから出土したほか、縄文土器、土師器、須恵器の小破片と小礫が103ヶ所のビットから出土している。

(5) 土坑

屈館跡とした調査区域内で検出された1基について報告する。

237号土坑 (第10区)

001号溝の東側約5mにあり、C58-48グリッドに位置する。238号溝跡の西端にあたる部分で同溝と重複し、本土坑が切っている。平面形は楕円形で、長軸方位は238号溝とほぼ同じN-87.5°-Wである。規模は長軸上端1.56m (下端1.48m)、短軸1.03m (0.89m)で、検出面からの深さは18cmで浅い。底面は平坦で、

全般的にやや硬い。

出土遺物は無い。時期の判定は難しいが238号溝を切っていることから中世以降と判断した。性格や居館跡との関連性については不明である。

(6) 溝跡

1条検出されている。東側が調査区域外へと続いており、居館跡との関連性については明確でない。時期決定を含め東側の今後の調査結果を待って検討する必要があると考えられるが、ここでは、取りまとめた結果を報告しておきたい。

238号溝坑（第11図、図版3）

C58-49・59、D58-40・50～55グリッドに位置している。001号溝状遺構と直交するような形で、東西方向に直線に走る溝で、方位はN-83.5°-Wである。西端で237号土坑と重複し、切られている。調査区域内で検出された長さは26.2m程で、東側は調査区域外へと延びている。幅は西端で上端1.15m（下端0.78m）、中程で1.38m（1.02m）、東端で1.3m（1.15m）であり、東側より西側がやや狭くなっている。検出面からの深さは、西端で12～14cm、中程で16～18cm、東端で24cm程であり、全般的に浅い。上層断面図にみえるように、東端と中程の地点では、地表面からの深さは、東端が67cm、中程が43cm程であり、これに検出面からの深さを考え合わせると、この溝は西側が浅く、東側がそれよりもやや深くなってきている様子がうかがえる。溝の西端が、237号土坑から西側では検出されていないことから、この溝は、丁度237号土坑の位置から東側へと延びている溝となる。断面は逆台形状を呈し、底面は狭くなっていないことが確認されている。覆土は土層断面からみると、二層に分かれており、南側から埋まったか、あるいは、一度埋まってから、北側へ再度溝が掘られたような様子を示している。

出土遺物（第39図、第5表、図版14）

中世遺物としては、かわらけの碗と皿の小破片が各2点ずつ計4点60g、覆土上部から出土している。このほかは、平安時代の土師器杯、同内黒杯、同高台付碗、同壺、須恵器壺と縄文土器が出土している。小破片がほとんどであるが、土師器高台付碗は底部の2/3～4/5程の破片が5個体分5点ある。出土量は土師器・須恵器類は総量1.6kg、縄文土器は細片で総量430gである。

図示したかわらけ皿（1）は、平底で底部内面にナダのあるものである。碗（2）は、薄手で円盤状底部の有段口縁に近い器形とも想定されるものである。底部内面にナダをもつ。

2 方形周溝区画墓

方形周溝区画墓（第16・27～29・40区、第6表、巻頭図版1～5、図版4～6）

F61-50グリッドに位置する。立地的にみると、地下式坑や土坑群の大半が検出された遺跡南東部の台地上にあり、南側の谷を望む台地縁辺に近い場所に所在している。遺跡北西部の居館跡からは、南東へ110m程の地である。

この墓は、方形に廻る周溝と、その周溝によって区画された墓域の中央部北側に配置された主体部である土坑墓とで構成されている。平成12年度の発掘調査で、主体部を含む東側を中心とする全体の3分の2程が検出され、次の13年度に西側の区域が発掘され、周溝が方形に廻ることが判明した。そして、一辺12m余（溝の内側上端）の長さで、方形に廻る溝によって区画された墓域内の中央部北側に、主体部の土

坑墓が設けられた墓であることが明らかとなった。しかし、13年度の調査時には、12年度調査区域は調査終了に伴って、すでに工事が進行していた為、発掘調査現場での全体像の把握が（実測・写真撮影等を含め）不十分となったことは否めない。周溝は南西隅が550号地下式坑の踏没やその後の台地削平によって削られているが、周溝の廻り方からみると全周していたものと考えられる。なお、この墓は平安時代（9C～10C代）の堅穴住居跡3棟（286号・287号・562号）と土坑4基（293号・321号・322号・564号）、さらには、中世以降の溝3条（148号・289号・290号）及び地下式坑1基（550号）と各々重複している（第27図）。このうち、溝及び地下式坑との新旧関係については、溝よりもこの墓が古く、溝に切られている。また、地下式坑との関係については明確でないが、この墓より後に地下式坑が作られたと考えられる。

平面形・周溝（第16・27・28図、図版4～6）

方形というより正方形に近い形で、主軸方位はN-22°-Eである。規模は中央部の周溝内側上端（同外側上端）の計測で、主軸の南北方向で約12.6m（約16.1m）、東西方向で約12.3m（約16.7m）である。東西の長さが、北側と南側では異なり、土坑墓の位置する北側の溝近くでは約12.64m（約16.64m）、南側の周溝近くでは約12.12m（約15.92m）で、南側が北側よりもやや狭くなっている。又、南北の長さは東西はほぼ同じで、東溝側で約12.6m（約16.1m）西溝側で約13.3m（約16.1m）である。周溝の幅は、北側が上端で1.5～1.6m（下端0.45～0.5m）、南側1.9～2.1m（0.4～0.8m）、東側2.0～2.2m（0.4～0.7m）、西側1.4～1.8m（0.4～0.6m）であり、東側と南側がやや幅広となっている。また、北西隅は底面幅が1m以上もあり、広がっている。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは、北側、東側、南側が65cm程で、西側が40cm程である。

主体部（第28・29図、図版5・6）

土坑墓で、平面形が隅丸長方形を呈す土坑の中央に、遺体を安置した長方体の木棺（柩）を埋納したと考えられるものである。南側が289号溝に切れ、北側は後世の攪乱により上部が破壊されている。289号溝を発掘し、この土坑墓の存在に気付かないままその南側を掘り進めており、半分近くまで掘ったところで、南側に副葬されていた青磁碗と同皿を検出し、その時点でこの土坑墓の存在が判明した。

そこで、残る北側の調査にあたって、第29図に示したように最初に中央部東西方向の土層断面と検出面での覆土の観察を行ったところ、土坑中央部の土が、幅70cm、高さ45cm程の長方形をなす形で、左右の土とはっきりとした違いがあることが認識出来た。このため、発掘はまず、左右の裏込めと考えられる上を残し、中央部の棺の存在したと考えられる断面長方形の箇所を上部から掘り下げていった。その結果、残る部分で東西0.7m、南北0.6m、検出面よりの深さ45cm程の直方体の形で、木棺の跡と考えられる墓坑が確認され、その底面から人骨（歯と頭骨）と考えられた微細骨片と副葬された和鏡、白磁、円形木製品等が検出されたことから、遺体と副葬品を長方形の木棺（柩）に納め埋葬したものと判断された。この点について、裏込めの上や木棺跡の墓坑の覆土の状況から判断すると、まず、土掘りの土坑が掘られた後、埋葬時に遺体と副葬品を納めた木棺（柩）を安置し、その後この土坑を掘り上げた土であるロームブロックを主体とする上を埋め戻し、埋葬したものと推測される。

土坑墓掘り方-規模は、南側が289号溝に切られている為、主軸方向の長さが明確でないが、下端の南側底面の立上りがわずかに残っており、合わせて遺存する部分や木棺跡の墓坑の位置などからみると、上端が推定で2.7m前後、下端の底面が2.1m程である。東西方向の幅は、中央部で、上端1.8m程、下端（底面）1.2m程である。主軸方位は遺存の明瞭な底面で見るとN-23°-Eである。

木棺-北側で確認された木棺跡の墓坑の位置や副葬品の位置からみると、掘り方の中央に埋納されたと

考えられる。墓坑の規模は南側が上部を289号溝に切れ、下部は掘り過ぎた為、長さは確認出来ないが、南側で出土した副葬品の青磁碗、皿の位置等からみると、1.6m程の長さが想定される。幅は約0.72mである。高さは検出面から底面までの深さが45cm程であるが、本来の高さは不明である。主軸方位はN-17-Eである。土坑墓掘り方の主軸方位N-23-Eと比べると、6°西側へ振れているが、これは埋葬の段階で木棺を安置した際に生じたずれではないかと思われる。

なお、この土坑墓の位置は、方形に廻る周溝によって区画された墓域の中心部から外れ、北側に片寄っている。しかし、その配置をみると、土坑墓掘り方の中軸線が、この区画墓全体の中軸線とほとんど重なり、かつその方位もほぼ同じであること。さらに、土坑墓の中心点でみると、墓域の中心軸である南北方向の長さを4分割した北側4分の1の位置にあっていることがわかる。これらの点からみると、この土坑墓が方形に廻る周溝と一体となって当初から造られたことを示しており、意識的にそこに配置された意図がうかがえるものである。そして、土坑墓の前面の広場は、祭壇が設けられ、祭祀の場所となっていた可能性も無くはないだろう。

出土遺物（第28・29・40図、第6表、巻頭図版1～5、図版5～6）

主体部出土の遺物（第29・40図、第6表、巻頭図版1～5、図版5～6）

木棺跡墓坑内出土遺物－底面北側から、人骨（歯24本と骨片）、白磁皿（1点）、和鏡（1点）、円形木製品（1点）、木脚（破片2点以上）、棒状木製品（2点）、鉄釘（1点）が、南側から青磁碗（1点）、同皿（1点）が各々出土した。また、埋没土中からは、北側下部から人骨歯5本が出土した他、上層～下層にかけて、当初から埋め土に混在し、木棺跡の墓坑内に埋没したと考えられる縄文土器、土師器、須恵器人骨・歯牙（第29図、巻頭図版5、図版5～6）

歯は検出された29本のうち、24本が北壁から40cm、西壁から25cmの所に集中していた。上下の歯列がよくわかる形で、7cm×5cm程の範囲内に、底面から2～3cm上までの間で検出されている。そして、検出された歯列の並び方からみると、遺体の頭骨は西側を向く格好であったと判断される。なお、この他、5本は覆土中から検出されているが、先の24本の歯と合わせ、一体分の歯と鑑定されている。また、頭骨と考えられる骨片はこの歯列の右斜上後方の径15～18cm程の範囲に底面から2～3cm浮く形で散在していたが、薄く微細な骨片・骨粉状となっていた為、取上げられる状態ではなかった。背椎骨やほかの骨は検出されていない。なお、歯の鑑定結果から埋葬された遺体は、壮年から熟年にかけての女性であることが判明している。この点を踏まえ、歯の南側90cm程の位置に副葬された青磁碗と皿が当初の位置をとどめる形で出土していることからみると、埋葬された人物の遺体は西を向いた横臥の姿勢で、足を少し縮めた屈葬の形で埋葬されていたのではないかと考えられる。

歯の鑑定は京都大学大学院理学研究科大数由美子氏に依頼した。その結果をまとめる次の通りである。

- 1 残存する歯は、重複するものがないことや歯冠のサイズ・形態が左右で良く似ていることから、一人分の歯がまとめて出土したと考えられること。
- 2 歯は全部で29本残っており、確認出来ないのは3本だけで、歯式は以下のようになること（巻頭図版5）。

							右上顎										左上顎		
M3	M2	M1	P2	P1	C		I1	I2				P1	P2				M2	M3	
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I2	C			P1	P2	M1	M2	M3			
							右下顎										左下顎		

- 3 残存する歯は、歯冠の一部や歯根の一部または大部分を破損しており、保存状態があまり良い状態とはいえないこと。
- 4 性別については、判定に歯冠計測を行い、増原和郎・小泉清隆両氏の判別式を用いて性別判定を行った。その結果、この歯の持ち主が女性に属する確立は99.6%であり、歯冠計測値から判断すると、性別は女性と判別出来ること。
- 5 死亡時の年齢推定は、歯冠の咬耗状態を検査し、その咬耗の程度から行ったことに加えて、竹井哲司氏等の判定基準を用いて、年齢推定を試みた。その結果は、壮年（25才～40才）後半から熟年（40才～60才）あたりでなくなった人の歯と推定されること。

以上であり、この1体分の歯は、壮年後半から熟年で亡くなった女性のものであると考えられる。

白磁皿・和鏡・円形木製品（第29・40図、巻頭図版2・3、図版5～6）

北壁から35cm、東壁から22cmの所で、これら3点が重なって出土している。人骨（歯）からは東側へ20cm程の地点である。第29図に示したように、白磁皿がふせた状態で底面に付いて一番下にあり、その上に炭化物等をはさんで和鏡が少し傾いた形で存在していた。白磁皿の中に土が入っていたが、フカフカで詰まっておらず、この土を除くと楕円の底面にあたるロームの地山が出て来た。炭化物は白磁皿と和鏡との間のみ検出されており、周囲からは出土していない。和鏡は鏡面を上に向け、背面を下の方の白磁皿に乗る形である。そして、和鏡の鏡面の上に円形木製品が重なっていたが、両者の間には和紙や織物・籠状繊維製品が存在していたらしく、円形木製品と和鏡との接触面にそれらが残って付着していた。

なお、これらを取上げる際に土や付着していたものを一括して採集しているが、それらの中から銀色を呈した（銀泥が付着か？）紙状の細片が何枚か重なった形のものが検出されている。この銀色のものは鏡と接した白磁皿の底部に銅鉛と一緒に付着していたことから、本来白磁と和鏡の間に存在していたものと判断される。また、この外にも金泥（？）や雲母（？）の付着した料紙のような微細破片も採集されている。

白磁皿＝円口の皿で、完形品である。内面体部と底部の境に、一条の沈線がめぐる。体部下端と底部外面全面回転ヘラケズリ。底部外面もヘラ削り後袖を薄くハケ塗りしている。横田・森福年の白磁皿Ⅱ類に当るものである。

和鏡＝蓬菜鏡である。円鏡で、面径11.7cm、総高1.1cm前後で、鏡面部分の厚さは3.5mm、重量400gを測る。縁は直角式中縁で、高さ1.1cm、厚さ下部で6.5～7mm、上部で4.5mmで、断面形は外側がやや内傾し、内側がやや外傾している。

鏡面は、銅線部がわずかに外反する凸面鏡である。現状では、ほとんど全面緑青に覆われているが、わずかであるが緑青がまだら状に剥がれた箇所から、白銅色の鏡面がうかがわれる。

背面は、緑青・錆がごく薄く全体を覆っている程度で、遺存状態は良い。鈕は、亀甲文の中に花文様が描かれた亀甲文亀鈕で、亀の腹部中央に孔がうがたれている。頭部から尾まで、38cm、体部の亀甲は縦2cm、横1.95cmで、全体に丸みを帯びている。高さは4.5mm程で、四肢ともに6本指である。亀甲は14区画で、その区画の中に描かれた花文様は亀甲の大半を覆っている錆が厚い為、現状では部分的にしかわからないが、菊文様に類似した文様が認められる。単円で墨線は匙面式である。内区は径8.4cm、外区は幅0.95～1cmである。内区には、下辺に波立つ蒼海が、右辺には松と楓（？）が繁る山岳（蓬菜山）が配置され、その中腹には仙人の住む宝閣を示すと思われる建物が一棟描かれている。また、左辺には、笹（竹）や菊文様等の花木の繁る岩山の山上の碧雲をおし開いて鴛鴦が2羽、対向式で飛んでいる姿が配置

されている。外区には下辺が波立つ着海、右辺から上辺に松と楓(？)、左辺から上部が花木と碧雲が各々描かれている。背面の文様は全体に厚みがあり精緻で、丁寧な作りとなっている。なお、背面左辺の岩山の部分に金箔が付着したかとも思える。金色の微粒が数ヶ所認められる。

円形木製品—容器の底板或は台座とも考えられるものである。付着土中或は付着物下に何らかの痕跡等の存在する可能性も考えられることから、今回の報告では、クリーニングせず、上や紙等付着物の付いたままの現状で報告する。長径7.5cm、短径6.8cm、総高(推定)0.7cmを測る。X線透過画像に換れば、中央に1孔(径4～5mm)あり、孔中に軸木状のものが遺存している。出土状態の大地の地の側(鏡面に接していた側、第40図2の下方の図)に削り出しが6ヶ所存在している。この面を元来「地」の側とする。と六脚となる。現状では、台部分上面は平滑でない。周縁の厚みは最大で3.5mm、最小はエッジ状となっているところまで波打つ状況を呈しており、出土後の2次的な変形によるものとも考えられる。脚の部分、幅は0.5～0.9cm、奥行0.9～1.0cm、削の深さ(高さ)3～3.5mm前後であり、側面に幅2mmのV字切込みが各1ヶ所存在している。この地とした部分には、図示したように和紙(白色)と織物と籠状繊維製品と考えられるものが付着しており、更に織物部分にはわずかに白い球状の粒子も付着していた。

木櫛(第40図、巻頭図版3)

同一の櫛の破片と考えられる小片2点と割れた歯の数本がある。和鏡と白磁皿を取上げる途中で、両者の間から検出されたものである。遺存する部分は、端部から横幅1cm程と中央部付近の幅1.5cmの2片の破片と歯の破片であるが、櫛一枚分のものと思われる。炭化しており、2片ともに反りが生じている。現状で、縦幅2.4cm(棟と歯の部分)で、峰は直線的で棟の縦幅5mm前後、厚さ5.3mm程である。歯は長さ1.9cm前後で、0.8cmの中に11本程の密度で確認され、日が細かく棟も狭いことからすると、梳櫛であろうと思われる。材質は不明。銀泥のようなものや炭化した粒が圧縮されたように層状をなして、面的に付着している(巻頭図版5)。又、もう一方の面には緑青がにじんだようなものの付着もみられる。

菊花形皿(巻頭図版3)

木櫛と同じく、和鏡と白磁皿を取上げる途中で、両者の間から検出された金属製の容器である。白磁皿とセットで一緒に置かれていたと考えられる。一箇体分と考えられる小破片7点程が確認された。内面にわずかに菊花形をなす複雑文様が認められるが、遺存状態が悪い為、接合、実測等は出来なかった。

和紙・織物・籠状繊維製品・料紙断片・編籠断片・繊維断片等(巻頭図版5)

和鏡と上部の円形木製品や下部の白磁皿との間に所在し、一括して採取し、取上げたものの中から細片が少量検出されたものである。細かい破片となっている為、肉眼では判断が難しいが、顕微鏡写真で拡大すると、巻頭図版5-1～12のように良くわかる。円形木製品に付着していた和紙や織物、籠状繊維製品のようなものの断片と、和鏡と白磁皿の間に存在した料紙断片、編籠断片、繊維断片などであり、そこに金泥、銀泥、雲母等が付着しているような様子もうかがえる。あるいは紙粘や料紙と一緒に崩壊され、その裝飾に用いられていた材質が遺存している可能性も考えられる。

今回の報告では、鑑定出来ないが、次回の調査報告では鑑定の上、結果報告する予定である。

棒状木製品(第29・40図、巻頭図版4、図版5～6)

北壁から13cmと16cmの位置に、2点が横に並ぶ形で出土した。底面からは1～2cm浮く状態であり、北壁側ものは東側の先端が上ドに真二つに割れた形状を示していた。検出時、その棒状木製品には木の皮が残ると観察されているが、取上げ中、あるいはその後には剥けたらしく、取上げた後の棒状木製品には

それは付着していなかった。代りに、彩色の施された和紙のような小断片が存在していたことからすると、この棒状木製品には木の皮ではなく、後述するように彩色された和紙が巻かれており、それがわずかに遺存していたものと考えられる。

1は、北側に出土したものである。面取りが施された棒状で、両端部が欠損している。現状で長さ21.7cm、中央部付近で径1.85cm×1.8cmである。右側先端部が長さ5cm程にわたり真二つに割れているが、破損面が平滑で表面の色調も古色である点からみると、古くから亀裂が入っていて割れていたものと思われる。なお、この割れて分離していた破片は出土後収縮して変形している為、現状のまま図化している。又、左側先端部には、薄い黒色漆膜に赤色顔料による線描のある2.6cm×2.6cm程の大きさのものが付着していたようである。発掘調査時には、その存在が確認されており、出土後剥離していたが、左側先端部の木質表面にその剥離痕跡がうかがえることから復元実測(第40図5)し、写真撮影(巻頭図版4)も行っている。この棒状木製品(1)には、表面全面に金箔、赤色顔料、緑青、胡粉(?), 黒色漆、織物等と考えられるものが付着している(巻頭図版4-1①~④)。2は、南側に出土したものである。1と同様に面取りが施された棒状で、西端部が欠損の状態を示している(第40図6、図版4-2)。現状で長さは22.1cm、中央部付近で径1.53cm×1.5cmで1よりやや細身である。右側の先端部はやや細くなっており、右側先端は加工されたものか内側へ凹みがみられる。1と同じように表面全面に金箔、赤色顔料、緑青、胡粉(?), 黒色漆(?), 墨(?), 織物のようなものがみられるが、1と比べると金箔、赤色顔料等は少ない。これら2本の棒状木製品については、ほぼ同じ大きさ、形状等で接するようにしながらも1cm前後の間隔をあけ、並列して出土していること等を含めて考えると、あるいは絆帖の可能性も想定される。しかし、付着物などの鑑定をまって、次回の報告でまとめた。

釘(第29・40図、巻頭図版4、図版5~6)

北壁から10cm程離れた北西隅から出土している。底面から5cm程浮く形で覆土中から出土し、先端が西壁にかかるような形で、横向きで水平の状態で見出されている。全長7.8cm、頭部平面は隅丸長方形形状を呈している1.0cm×0.75cm程で折り返し部分は錆のため不明瞭である。木質が遺存しており、先端部が曲がっていることから、実際に板に打たれたものと判断され、木棺に使用された釘の可能性が考えられる。

青磁碗・皿(第29・40図、巻頭図版1、図版5~6)

埋葬された遺体の両の検出場所から真直ぐ南側へ90cm程離れた所から出土している。碗と皿が伏せた状態で、接するようにして東西に並び、二個とも底面に付いていたが、碗の方は口縁部が地山のロームにくい込み様な形であった。木棺跡の南側の墓坑の状態は不明であるが、北側の壁の位置から推測すると、西側の皿が西壁から10cm程、東側の碗が南壁から10cmないし15cm程の位置に置かれていたものと推定される。恐らく、木棺内で埋葬人物の足下に置かれていた可能性が高いのではなかろうか。

青磁碗 - 鎗蓮弁文碗で完形品である。口径14.8~15cm、底径4.0cm、器高7.4cmを測る。小さめの高台から体部が内湾気味に立上って口縁に至っており、全体に丸味を帯びた感じのする器形である。深さは中央部見込み部分で6.3cm程である。高台は断面三角形形状を呈し、内径で0.5cm程の高さである。口縁部から底部にかけての体部外面に、幅1.2~1.4cm、長さ7.5cm程の蓮弁が重なるようにして30枚めぐっている。蓮弁中央は鑄状に高くなっており、器厚は体部中程の弁の稜線となる山の部分で4mm、谷の部分で3mm程である。底部の器厚6mm程で、底部内面中央の見込み部分が小さく凹んでいる。体部内面の中央部下方に横位に長さ5mm、幅1mm程の軸欠けのキズがある他は、高台端部を除き、釉が綺麗にかかっ

ている。色調は口縁部外面はやや青味が強く出ている他は、全体に灰味黄緑色を呈している。高台端部の無釉の部分の色調は褐色である。

青磁皿 - 鉢蓮弁文皿で完形品である。口径12.6~12.8cm、底径5.0~5.2cm、器高4.3cmを測る。高台は高さ8mm程で、断面、三角形状を呈し、高台底部端面はシャープな平坦面を呈している。幅広の高台から体部が内湾気味に立ち、口縁部で屈曲気味に外反する器皿である。体部に長さ3.6~3.7cm程、幅1.5~1.8cm程の蓮弁が18枚めぐっている。器厚は、口縁部が4mm程、体部は蓮弁中央部後線の山の部分で4.5mm、谷の部分で3~3.5mm程である。底部は5~6mmである。高台端部を除いて釉がまれにかかっている。色調は碗よりも青味がかった灰味黄緑色である。高台端部の無釉部分は暗褐色である。

土坑埋土（木棺の裏込め土）出土の遺物（第40図、第6表）

木棺外北側の埋込み土下部からかわかけ碗の破片1点（第40図10）が出土した他、縄文土器、土師器、須恵器、灰軸陶器の微細片、小破片が少量出土している。なお、これらの遺物は、この土坑墓周辺に存在した平安時代整穴住居跡を周溝が切っていること等から、この土坑や周溝を掘り上げた上の中に混在していたものが、再び土と一緒に埋め込め、出土したものと判断される。

かわかけ碗（第40図10）

底部破片である。底部は90%。体部は一部のみ遺存。底径5.0cm、現存高1.2cm。器厚体部下端0.5cm、底部0.9~1.15cm、外面底部の高さ0.5~0.6cm。

円盤状の底部から体部が水平に開き、そこから立上るように外反する器形が想定される。外面底部と体部の間に接合痕跡をとどめるかのように細い沈線状の凹みが認められる。13C中頃~後半。

方形周溝出土の遺物（第28・40図）

中世遺物は、かわかけ皿1点44g、青磁3点23g（碗2点21g、皿1点2g）、深美瓶子1点30g、常滑甕2点113gである。いずれも小破片で、覆土中からの出土である。他に鉄製品破片10点（刀子状製品1点、器種不明9点）、鉄滓9点、近世陶磁器1点5gの他、縄文土器、土師器、須恵器などの小破片が数多く出土している。

中世遺物は3点を図示したが、小破片のため図示出来なかった4点のうち、青磁碗は図示したものと同類の体部内面に劃花文のある小破片1点4g、青磁皿は体部小片1点2gで、ともに12C後半~13C頃のものである。常滑甕は2点とも胴部小破片である。

かわかけ皿（第40図11）- 2分の1程の破片である。口径8.9cm、底径4.6cm、器高2.3cm。底部が一段高く立上る形の皿である。体部中央から口縁部が急角度で立上っている。全体的に厚手で、器厚は口縁部4~6.5mm、体部6.5~8mm、底部1.0~1.05cmである。底部内面を広く横ナデしている。

青磁碗（第40図12）- 口縁部小破片である。体部内面に劃花文が描かれている。外面は無文。釉の色調は淡灰緑色で胎土は密。器厚は3.5mm程で薄手である。

深美瓶子（第40図13）- 肩部~胴部にかけての小破片である。磁石に再利用されたものである。

3 台地整形区画・溝状遺構・井戸跡

(1) 台地整形区画

遺跡の南東部側の台地斜面部に1ヶ所、南西部の台地斜面部に1ヶ所、北東部の台地斜面部に1ヶ所が各々検出された。

556号台地整形区画（第16図、図版8）

遺跡南東部の台地斜面部にあり、E62～F62グリッドにかけて位置している。調査で確認出来た範囲は、東西約14m、南北約10.4m程である。東側は北側から延びる425C溝によって切られている。斜面部が二段に整形されており、一段目の上段の平場は、幅5m程である。長さは内側に411号集石遺構が所在している為、不分明な点があるが13m程であろうか。二段目の平場は、部分的な検出の為、規模は不明であるが、幅2.5～5m程の範囲が確認されている。検出面からの高低差は、一段目が70～90cm、二段目が一段目から75cm前後である。確認された範囲からは、土坑等の遺構は検出されていない。

出土遺物—上段の平場から埴美の甕の胴部破片1点50gと、常滑の甕の胴部と肩部の破片が3点178g出土している。又、下段の平場からは板碑の小破片2点72gが出土している。その他、近世陶磁器小破片2点を土師器・須恵器の小破片が多量に出土している。

605号台地整形区画（第20図）

遺跡北東部の斜面上にあり、G60-43～46グリッドからG60-54～56グリッドにかけて位置している。確認出来た範囲は、東西約12m、南北約6m程の狭い範囲である。東側には606号溝が台地上から斜面下に向かって、南東から北西に走っており、その内側に二段の平場が作り出されている。この為、全容は不明であるが、上段の平場は南側に幅30～50cm、深さ22～30cm程の溝が東西に走っており、それを境として、形成されているものと把握される。規模は幅0.5～1.0mで、長さは606号溝から西側で7m程であるが、更に内側の未調査区域へと続いているものと考えられる。下段の平場は、調査区域内では幅1m以上、長さ4.5m程の範囲が検出されている。そして、西側に幅20cm程の同溝状の浅い溝が認められ、その内側には深さ1m程のピットも検出されているが、南側が調査区域外であった為、規模等は不明である。高低差は、上段が22～28cmで、下段は上段と55cm程である。

出土遺物—常滑甕の小破片が1点25gである。その他は、近世陶磁器小破片が7点と縄文土器・土師器・須恵器の小破片・礫片が少量出土している。

607号台地整形区画（第14図、図版8）

この遺構については台地整形区画としての調査は行われていない。その為、遺構番号は付されていないが、平面図やこの地区に所在した地下式坑、土坑の配置写真等からみて、台地整形区画として把握することが妥当と考えられることから、遺構番号を付して報告するものである。

遺跡南西部の斜面部にあり、C62～D62大グリッドにかけて位置している。南側へと延びる小舌状台地の斜面部を削平して彫作っており、東側を495号溝が切っている。東西25m、南北20m程の範囲が検出されたが、東側は本調査区域外であった為、東西の規模は不明である。台地削平は、北側が80～90cmの高低差で垂直に近く削平して平場を作り出している。削平した北側と西側の崖面直下に溝をめぐらせているが、西側溝は途切れている。平場は、東西24m、南北18m程の広さが検出されており、東西面はほぼ平坦なのに対して、南北面は18mで約1.3m程高低差をもっているが、中央部に東西に延びるわずかな段差が存在していることから、上段と下段に二段に平場が形成されていたものと想定される。なお、この平場の南側端は大きく削平されているため、どこまで原形をとどめているかは不明である。この平場における遺構は、北西側に地下式坑が2基（496号・498号）と土坑が2基（497号・499号）検出されている。なお、これらの遺構は、本来は、ここで報告すべきであろうが、調査経緯等から地下式坑と土坑の項で一括して報告している。

出土遺物-この区域をグリッド発掘した包含層中から、破片であるが、かわらけ小皿1点、常滑4点、瀬戸美濃7点、の陶器類や内耳土器19点等が出土している。

以上が検出された台地整形区画であるが、当遺跡においては、この他に台地整形区画としての存在が想定される箇所がある。それは、台地中央部の南側斜面部にあたる地区で、D61-34グリッドから東側及び南側に走る148号溝の南側の地区である。この地区は、556号と607号台地整形区画の間に位置し、地形図からみると、南側から入り込む小支谷の谷頭にあたる箇所である。そこは、南側の谷から3m程の高さで一段高くなり、そこから更に台地中央部に向かって八字状に入り込み、東西45m、南北40m程の平地が形成されている。この平地は、南北で3m程の高低差があるが、等高線の流れは平均し、緩やかであり、北側の台地とは岸状に3m程の段差をもっている。この地区の調査は確認調査で終了しており、詳細は不明であるが、148号溝中央部付近を南北に切った土層断面図(第15図)では、溝の南側は急な傾斜面となっている。また、南北方向に走る520号溝の東側は図には示していないが、同様に急な傾斜面となっている。そして、確認調査での出土遺物を見ると、この地区の包含層からは中世陶器類の破片が少なからず出土している。このような、地形や確認調査結果からみると、この地区が人工的に改変されている蓋然性が高いのではないと思われる。このような観点から、この地区については調査終了後造成済であるが、そこに台地整形区画が存在した可能性を指摘しておきたい。

(2) 溝状遺構

館跡の検出された北西部のC58・D58グリッド地区や中央部のD60グリッド地区、南西部のC60・61・D60・61グリッド地区、中央部南側のD60・61グリッド地区と東側のF61グリッドとその周辺地区で合計30条が検出された。これらの溝状遺構は、比較的規模の大きな溝や小規模で浅い溝、台地を縦横断する溝等その位置や形状も様々である。大半は地下式坑や上坑群の存在する遺跡の東側地域に所在している。近世遺物の出土も多く、時期の判定が難しいが一応この項で説明しておくたい。

なお、北西部のC58・D58グリッド地区で居館跡に伴う堀跡として把握した001号・120号溝状遺構と居館内で検出された238号溝状遺構については居館跡の遺構として、第1項で報告している。

◀D60グリッド地区▶

002号溝状遺構(第13図、図版7)

遺跡中央北西部に位置し、D60-02グリッドからD60-14グリッドにかけて検出された東西方向に走る溝である。003号溝と重複し、同溝を切っている。D60-02グリッドの西側は未調査区域であり、D60-14グリッド東側では、003号溝中へと入っているため、確認出来た長さは10m程である。幅は50~65cm、検出面からの深さは30~35cmで、重複する003号溝と比べると極端に浅い。断面は逆台形状で、方位はN-80°-Wである。

出土遺物-中世遺物は無い。土師器小片数点と小礫10数点が出土している。

003A号溝状遺構(第13図、図版7)

遺跡中央北西部に位置し、D60-01グリッドからD60-29グリッドにかけて検出された東西方向に走る溝である。002号溝及び003B号溝と重複し、002号溝には南側の一部を、又003B号溝には北側の上部を各々切られている。D60-01グリッド西側とD60-29グリッド東側は未調査区域であり、検出された長さは29.5m程である。幅は、溝の北側上部を003B溝に切られているため、明確ではないが、検出されたローム

上面で3.2m程である。検出面からの深さは1.3~1.4m、底面の幅は30~60cm程である。断面形は、VないしはU字形に近く、東側の底面からは、小ビットが並ぶようにして検出されている。方位はN-71.5°-Wである。覆土の堆積状況からみると、この溝は南側から埋まっていった状況がうかがえる。

出土遺物（第41図、第7表、図版16）

中世遺物は、かわらけ2点13g、常滑2点71g、である。その他、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、近世陶磁器が少量と鉄滓3点、小礫少量が出土している。陶磁器、土器類はいずれも破片であり、小破片が多い。全て覆土中からの出土である。

かわらけは2点ともに小皿であり、図示した2は1に近似のものである。1、2とも居館跡の001号・120号溝で出土したかわらけ類と異なり、小形で、口縁部が外に開く器形のものである。焼成は良く、堅くしまっている。居部外面に明瞭な稜をもつ。内面見込みのナデは不明。常滑は變の小破片で図示した3、5は砥石として再利用されている。なお、調査区東側で003B号溝側にかけて攪乱を受けている箇所から、中世遺物として青磁碗1点4gと白磁碗1点4g、常滑甕5点223g、板碑1点20g、が出土している。いずれも小破片であるが、青磁碗は13C後半~14C、白磁碗は12C後半~13C頃のものと思われる。常滑甕5点のうち1点（4）は砥石として再利用されている。板碑は小破片で文字は無い。他に近世陶磁器等が数片あるが、その中に志野丸皿の小破片2点4g（登窯1~2期）がある。

今回の調査で検出された溝状遺構で、この003A号溝とその規模や形状が類似する溝に、居館跡の堀跡と把握した001号溝がある。両者の関係は未調査区域があるため現状では明らかではないが、この003A溝を西に、001号溝を南に各々35m程延ばすと、ほぼ直交する形をとることから、両者は居館を区画する同一の溝（堀）の可能性が想定される。

003B号溝状遺構（第13図、図版7）

D59-92グリッドからD60-02グリッドにかけて位置する。003A号溝の北側にあり、003A号溝の上部を切り並列するように走る溝である。調査区域の北西端で検出され、西側と北側が未調査区域へとかかっているため、検出出来た長さは8m程である。幅は、北側の上端の一部が確認出来たのみであり、検出面で0.6~1.0m程、深さは75cmである。断面は逆台形状を呈し、底面の幅は20~40cmである。

出土遺物（第41図、第7表、図版16）

中世遺物は図示した6の常滑甕小破片1点56g（砥石転用）と瀬戸美濃諸細軸鉢の小破片1点9g（大甕製品）が出土している。いずれも覆土中からの出土である。その他、覆土中より土師器・灰釉陶器・近世陶磁器小破片若干と石礫1点・小礫20点余りが出土している。

〈C61・62グリッド及び周辺地区〉

486号溝状遺構（第14図）

遺跡南西部の白地上に位置する溝である。D61-53グリッドからD61-80グリッドにかけて、長さ14.5m程が検出された。方位はN-21°-Eで、南西-北東方向に走る南北溝である。上幅は1.46~1.75mで、検出面からの深さは中央部が21cm前後で、北側及び南側が10cm程と浅くなっており、底面は0.7~1.2m程で幅広く全体的に浅い溝である。南端部は幅65cm程と細くなり、途切れている様子を示している。南側で485号平安時代竪穴住居跡を切っている。

出土遺物-中世遺物は常滑甕小破片1点48gである。他に土師器、須恵器小破片が数点出土。

490号・494号溝状遺構（第14図）

遺跡南西の台地上に位置する溝である。同じ方位で東西方向に走る溝で、4m程の間を置いて490号溝がC61-86グリッドからD61-90グリッドにかけて、494号溝がC61-83グリッドからC61-85グリッドにかけて検出された。この為、関連する溝として取上げ、一括して報告するものである。

<490号溝状遺構>

16.2m程の長さが検出された。方位はN-80°-Wである。幅は上端0.8~1.65mで、東側に行くにつれて狭くなり、東端が30cm程である。底面の幅も50cm前後から東端が20cm程と狭くなる。深さは、25~32cm程と浅い。489号平安時代掘立柱建物跡（P7柱穴跡）と491号土坑を切っている。

出土遺物-中世遺物はかわかけ碗2点14g、常滑甕1点10gである。ともに小破片である。他に土器類の小破片が数点出土。

<494号溝状遺構>

490号溝の内側へ4.2m程の位置から6m程の長さが検出された。方位は490号と同じN-80°-Wである。西端部は現在道路との関係で未調査となった西側へ更に延びているものと推測される。幅は上端1.05~1.4m、深さ36~41cmである。底面の幅は55~65cmとやや幅広く、漸面逆台形状を呈す。489号平安時代掘立柱建物跡（P13柱穴跡）と494号溝との間に所在する493号土坑を切っている。

出土遺物（第43図、第7表、図版19・22）

中世遺物は図示した常滑片口鉢1点435g（1）と甕2点31gである。他に土師器、須恵器、灰釉陶器の小破片少量がある。2は砥石として再利用された灰釉陶器である。

以上、490号溝と494号溝について記したが、両者は同一場所で、同じ形状・方位をもつ東西溝である。その間には493号土坑が所在するが、493号土坑を490号溝が切っていることからすると、490号溝と494号溝の間の4.2m程の部分は、溝の北側と南側の空間を結ぶ上橋と把握することが可能である。そして、このような視点で、この地域の空間をみると、490号溝の東側に南北に走る486号溝が存在する。検出された490号溝の東端と486号溝の南端とは、直線で5m程の距離があるが、486号溝をそのまま延長すると、丁度この490号溝の東端辺りに至ること、そして、その溝方向の内角は101°程であることからすると、494号・490号・486号溝は、内側と外側の空間を区切っていた同じ溝と捉えることも出来る。その意味で、ここでは、中世的な景観から見れば、これらの溝は居館等を含め屋敷地の周囲を廻る堀として位置づけることも可能である点を指摘しておきたい。

495号溝状遺構（第14図）

遺跡の南西部の台地上から、605号台地整形区画を切るようにして、その平場を形成する斜面下の平坦部にかけて南北に走る溝である。D62-00グリッドからD62-41グリッドにかけて、25.6m程の長さが検出された。台地上の北端部から階段状に三段になって南側斜面下の平坦部の底面に続いている。北端の一段目は狭く、底面の長さは0.3m、幅約1mで、深さ30cm程である。二段目は底面の長さ2.7m、幅0.9~1.1mで、一段目との高低差は30cm程であるが、底面の北側と南側の差は53cm程である。三段目は斜面下の605号台地整形区画の平場にかかる部分で、底面の長さが21m程で、幅は一段目直下の部分が最も広くなり1.9m程である。そして、南端部では0.8m程と南端に行くに従い、狭くなっている。二段目との高低差は直下

で1.5m程と深くなっている。そして、そこから南端部の底面との高低差は70cm程と緩やかになっている。方位は大略N-19°-Wである。断面はU字形ないし逆台形に近い形である。605号台地整形区画の斜面部にかかる部分の上層断面図をみると、掘った上を両側に盛り上げている様相がうかがわれる。

出土遺物（第43図、第7表、図版22・23）

中世遺物は、常滑甕1点39g、瀬戸美濃摺鉢1点である。他に、内耳土器10点764g、砥石1点、近世陶磁器類1点16gである。内耳土器1点を除き、いずれも小破片である。

＜D61・E61グリッド地区＞

148（A・B）号・290号・520号溝状遺構（第15・16図）

148（A・B）号溝状遺構は、台地中央部南側に位置し、D61-34グリッドからF61-59グリッドにかけて東西に走る溝である。また、290号溝状遺構は、148号溝の東端部と接続する溝であり、520号溝状遺構は、148（A・B）号溝の西端のD61-34グリッドの南側、D61-44グリッドからD62-13グリッドにかけて南北に走る溝である。148号溝が2000年度と2002年度、290号溝が2000年度、520号溝が2001年度に各々調査された。その為か、各々別の遺構番号が付されることとなったが、三者は同一の溝と考えられることから本項で一緒に取扱うものである。

＜148（A・B）号溝状遺構＞

D61-34グリッドからD61-59グリッドにかけて東西に直線に走る溝である。西端部はD61-34グリッドで南側へと屈曲して、520号溝へと続く。東端部は、E61-59グリッドで北へ屈曲して290号溝へと接続している。なお、この溝については、調査記録類にはふれられていないが、整理作業において、ほぼ同じ場所で類似した新旧二つの溝が重複した遺構で、南側の古い溝（A号）が埋まって（あるいは埋められて）から後に、A号溝を切って、北側に新しい溝（B号）がつくられたものと考えられたことから、A号とB号溝の重複遺構として報告する。この点については①第15図の東西溝の土層断面図（A-A'）と南北溝の土層断面図（B-B'）が明らかにしているように、北側のB号溝が南側のA号溝を切っていること、②A号溝の方がB号溝より10～16cm程深く、両者の関係が、東西溝のエレベーション図（A-A'、B-B'）にも良く認められること、③平面図に図示されているA号溝の底面と、北側の壁面下端部で、B号溝の底面に該当する面の両者が部分的に硬化面をもっている状況が調査時に確認されていること。などによるものである。

（A号溝）

148号溝の南側に位置する溝で、東西溝の南側から西側南北溝の内側（東側）へと続く溝である。西端部では、南側へと円弧状にゆるやかなカーブを描いて廻り、520号溝へと延びていく。北側をB号溝に切られている。中央部東寄りのE61-56グリッドで563号平安時代整穴住居跡を切り、東端部で292号方形周溝区画墓及び289号・290号溝状遺構と重複している。重複関係は、292号を切り、289号溝には切られている。290号溝との関係は明瞭ではない。この点については①F61-59グリッドにおいて、北へ屈曲して延びる溝の底面が、屈曲部から一段高くなり、A号溝の底面よりも15～20cm程高く（浅く）なって北へ延びていることや②屈曲して北側へ延びる溝の底面レベルがB号溝の底面レベルとほぼ同じで、検出面での上端の幅も2m前後と、B号溝の幅とほぼ同じであることなどから、B号溝が北側へと屈曲して延びており、A号溝は、この屈曲部で止まっている可能性が高いものと想定される。

以上を踏まえると、A号溝の東西の長さは64m程であり、方位は約N-86°-Wである。上端の幅はB号

溝に切られている為不明である。底面はほぼ平坦で、幅は30～70cm程で一様ではない。中央部のE61-41グリッドや西端部のD61-35グリッドで底面に柱穴状の小ピットが確認されているが、この小ピットは520号溝の底面に多数認められる小ピットと類似するものである。検出面からの深さは0.9～1.15m程であり、B号溝より10～16cm程深い。断面は大略V字形と推測される。

(B号溝)

148号溝の北側に位置し、南側のA号溝を切っている溝である。西端部では東西溝の北側から西側南北溝の外側(西側)へと続き、A号と同様に520号溝へと延びている。東端部では、屈曲して北側へと5m程延びて、そこから又東側へと折れて290号溝へと接続している。東端部で292号方形周溝区西墓及び289号溝と重複し、292号を切り、289号には切られている。又、東西溝の中央部から東側で、3棟の平安時代竪穴住居跡(462号・562号・565号)を切っている。

直線に延びる東西溝は66m程の長さで、方位はA号とほぼ同じくN-86°-W前後である。東西溝での検出面からの深さは0.8～1.1m程でA号溝より10～16cm程浅い。断面図から見る限りでは、底面はほぼ平坦で幅は50～60cm程である。断面形は北側がやや緩やかに傾斜しているが、大略V字形に近い形状と推測される。

西端部では、A号と比べ、直角に屈曲しており、その為か、底面も幅広くなり、1～1.5mの幅がある。東端部の北へ屈曲する5m程の部分は、遺構の重複関係などから上部の遺存状態が悪く、検出面での上幅は不明瞭な点もあるが大略2～2.15m程で、深さは50cm程である。底面のレベルは南側のA号溝の底面より15～20cm程高く、ほぼ同じレベルで東側の290号溝へと続いている。

出土遺物(第41図、第7・11表、図版15・16・23・26)

A・B両号の溝としてではなく、148号溝1条として調査し、遺物も取上げている為、ここでは148号溝出土遺物一括として報告する。

中世遺物としては、陶磁器類20点679g、かわらけ1点37gがある。内訳は、青磁4点12g(碗2点、皿2点)、瀬美3点142g(壺1点、壺2点)、常滑13点525g(壺)である。すべて小破片で覆土中からの出土である。青磁4点のうち、1点は内面に劃花文のある12C後半～13C頃の碗であり、他に13C後半頃のもの2点がある。瀬美と常滑の壺・甕類のうち、図示した5点(2～6)は砥石に再利用された破片である。かわらけ(1)は底部が円盤状を呈す碗である。このほか、内耳上器3点(7～9)と近世陶磁器74点682g、砥石1点(11)、鉄製品3点(小破片・器種不明)、鉄滓10数点、ガラス滓5点、古銭1点(寛永通宝、第11表、図版26-1)がある。近世陶磁器には志野丸皿(登窯1～2期)や志戸呂碗(10)等もある。

<290号溝状遺構>(第16・27図)

148B号溝の東端にあたる部分の溝である。2000年度の調査で、292号方形周溝区西墓の東側3分の2程を調査した際に検出された。292号の北側同溝を切っている。N-72°-Wの方位で、東西方向に走る10m余りが調査され、遺構番号が付されたものである。上幅は東側が上幅2.2m程であるが西側は292号の周溝と重複しているため明確ではないが1.8m程とやや狭くなっている。検出面からの深さは、東側で80cm、西側で70cm程であるが、西側の148B号溝と接続する底面レベルはほぼ同じである。なお、この溝の東側先端がどのような形になるかは不明である。

出土遺物(第41図、第7表、図版14・15)

中世遺物はかわらけ3点40g、青磁碗1点3g、青白磁皿1点15g(3)、常滑甕1点85g(4)いずれも

破片で覆土中からの出土である。このうち、かわらけは碗1点5gと皿2点で、図示した1・2は円盤状の底部の痕跡がうかがえるものである。青磁碗の小片は13C後半～14C頃と想定される。この他に砥石1点(5)、銅製品1点、鉄製品3点、鉄滓6点、土師器・須恵器の小破片が出土している。

〈520号溝状遺構〉(第15図)

遺構番号は異なるが、148号溝が西端部で南へ屈曲して延びる溝である。D61-44グリッドからD62-13グリッドにかけて南北に走っている。148号溝の西端部が2000年度に調査され、その翌年度に148号溝から1m程離れた地点から、この520号溝が調査された為、別の遺構番号が付いたものである。148(A・B)号溝西端部での上層断面図B-B'には、新旧(A・B号溝)二つの溝が南へ延びる姿が認められる。この520号溝の中程のエレベーション図D-D'にも両者の重複する形が読みとれる。検出された長さは27.5m程であるが、先端部は地形に合わせて台地南側の斜面に流れている様相を示している。A・B号溝の溝の幅は不明だが、両者ともに合わせると中程で5m程である。検出面からの深さは東側の148A号溝が0.8～0.9m、西側のB号溝が1.3～1.6mである。A号溝の底面には柱穴状の小ピットが多数存在している。なお、この520号溝と合わせると、148(A・B)号溝の西側の南北溝は31.5m程となる。

出土遺物(第43図、第7・11表、図版16・23・27)

中世遺物は、かわらけ皿2点10gと瀬戸美濃平碗1点18g(後期)、板碑1点65g(6)である。板碑を除き小破片で図示し得なかった。この他、内耳土器1点44g(3)、近世陶磁器類破片20点668g、古銭3点(寛永通宝)(図版26-5～7)、土師器・須恵器破片がある。須恵器破片は2点砥石として再利用されている。(4・5)近世陶磁器類には、図示した志戸呂皿(1)や瀬戸美濃播鉢(2)等がある。これらの遺物はすべて覆土中からの出土である。

以上が290号・520号溝を含めた148号溝の全体像である。長さは総延長112.5m程となる。この溝のうち、特に148号溝については(1)の台地整形区画の項で、148号溝の南側の台地中央部南側斜面に台地整形区画の存在の可能性を指摘しておいたが、これらの溝はあたかも、その地域の外側を廻るかのような形で位置している点を付記しておきたい。

〈F61グリッド及び周辺地区〉

285A号溝状遺構(第17・19図、図版9)

台地中央部東側のF60-73グリッドからF61-33グリッドにかけて南北に走る溝で、方位はN-6°-Eである。同様に東側を南北に走る285B号溝と隣接しており、南側で平安時代と想定される竪穴住居を切っている。北側と南側が未調査区域であった為、検出された長さは28.6m程である。南側で290号方形周溝区画郭を切る290号溝(148B号溝)と近接するが、相互関係はつかめていない。幅は上幅が2.5～2.65m程で、底面の幅は30～50cm程である。検出面からの深さは1.11～1.19m程で、断面が緩やかなV字状を呈している。溝の斜面から底面にかけて小ピットが多数検出されている。

出土遺物-中世遺物は、貿易陶磁器1点10g(黄粧鉄絵洗)である。小破片の為、図示し得なかった。他に近世陶磁器1点7g(瀬戸美濃皿破片)、土師器、須恵器、小隸少量、鉄製品3点(器種不明)等である。いずれも小破片で覆土中からの出土である。

285B号溝状遺構(第17・19図、図版9)

285A号溝の東側にあり、F60-75グリッドからF61-14グリッドにかけて南北に検出された溝で、方位はN-3°-Eである。北側が未調査区域で、南側は285C号溝に切られている為、検出された溝の長さは

17.4m程である。溝中央部F60-94グリッドで460号地下式坑を、また、F61-14グリッドで平安時代整穴住居を切っている。上幅は3.75~4.0m、底部の幅3m程である。検出面からの深さは34~42cmで他の溝と比べると浅く底面の広い溝である。

出土遺物 (第41図, 第7表, 図版16・20・22)

中世遺物は、青磁碗1点5g、かわかけ皿1点3g、瀝美甕1点123g、常滑8点356g (片口鉢1点6g、甕7点350g)、瀬戸美濃4点150g (天目茶碗1点、菊社播鉢1点、播鉢1点、瓶子1点85g)である。いずれも小破片で覆土中からの出土であり、6点(1~6)を図示した。この他に、近世陶磁器(7)や縄文土器、土師器、須恵器の小破片、鉄製品(器種不明2点)、鉄滓(1点)、瓦類、小礫等が少量出している。

285C号溝状遺構 (第17・19図, 図版9)

台地東側中央部のF60-75グリッドから南西側の台地斜面に位置する556号台地整形区画の東側のF62-01グリッドにかけて走る長い溝で、方位はN-16.5°-Eである。溝の途中に未調査区域があるが、50.9m程の長さで検出されている。北側で285B号溝を、南側で289号溝を切っている。幅は溝の東側大部分が道路区域で調査出来なかった為、不明な部分が多い。北端で上幅約1.25m、底面30cm前後であるが、中程では上幅2.65m程と幅広くなり、南側では上幅、底面ともさらに広がっている。検出面からの深さは、北側で32cm前後だが、南側は68cm前後とやや深くなっている。

出土遺物 (第42図, 第7表, 図版15・16・18・19・20・22・27)

中世遺物は、かわかけ皿2点31g、青磁碗1点4g、瀝美甕2点107g、常滑27点1680g、(高台付片口鉢1点105g、片口鉢5点479g、瓦21点1096g)、瀬戸美濃8点213g、(魂反皿1点20g、播鉢2点26g、燗台1点72g、盤類3点83g、瓶子1点12g)、板碑1点56gである。この他に、内耳土器2点39g、近世陶磁器類、縄文土器、土師器、須恵器、鉄製品(器種不明)3点、砥石1点である。いずれも小破片であり、覆土中からの出土である。瀝美、常滑の壺、甕類だけでなく平安期の灰箱陶器類の破片等砥石として再利用している26点を図示した。

289号溝状遺構 (第16図)

台地南東部のE61-69グリッドからF61-63グリッドにかけて東西・南北に走る溝である。検出された長さは、東西約15m、南北約7.5mであり、東西溝の方位はN-72°-Wである。溝の上幅は1.5~2m位で、底面の幅は東西溝が30~50cm、検出面からの深さは50~60cmである。西側で南に延びる南北溝は途中で底面が高くなっている。292号方形周溝区画墓と148(A・B)号溝を切り、東側で285C号溝に切られている。

出土遺物-中世遺物は、白磁四耳壺1点2g、常滑甕2点29gである。他に、近世陶磁器類5点52gがある。いずれも小破片で覆土中からの出土である。

425B号・570号・571号溝状遺構 (第17・18図, 図版9)

425B号溝状遺構は台地東側の土坑群を囲むかのように方形に廻る溝である。また、570号及び571号溝状遺構は、425B号溝の南側の溝に関わるかのようにその内側を走る溝であることから、ここで一括して報告するものである。

<425B号溝状遺構>

北側のF60-99グリッドから南側のF61-94グリッドにかけて検出された。北側の溝はF60-99グリッドから東が未調査であるがその形状からさらに東に延びていると想定される。南側の溝は、F61-84グリッド

下の南西コーナー付近で浅くなり、そこから南東側のF61-94グリッドにかけては痕跡がたどれる程度である。検出された溝の長さは、北溝が約6.1m、西溝が約48.6m、南溝が3m程度である。上幅は1.4~2.4m、深さは38~60cmで、検出された面に高低差があるためか、幅、深さとも一律ではないが、概して浅い溝である。南北に走る西溝の方位はN-25°-Eである。北溝は西溝の北端辺りから直角に折れている。北溝で425A号土坑を、西溝で425D号・448号地下式坑と、593号・603号土坑を各々切っている。南溝での594号・595号地下式坑との関係は、溝の存在が不確かな為、不明である。

出土遺物（第42図、第7・11表、図版15・16・26）

中世遺物は、常滑9点549g（片口鉢2点106g、甕7点443g）、瀬戸美濃4点109g（緑釉小皿1点13g、平碗2点28g、瓶子1点68g）、祖母襖茶壺2点6gである。その他、近世陶磁器2点25g、土師器、須恵器、鉄製品1点（器種不明）、寛永通宝1点（第11表、図版26-2）等がある。寛永通宝を除き、いずれも小破片である。8点を図示した。

<570号溝状遺構>

571号溝の内側に沿って東西に走る溝である。571号溝の中程のF62-08グリッドからG62-00グリッドにかけて検出された。東側の未調査区域へと延びていることが想定される。方位はN-73°-Wである。検出された長さは約14.5mである。上幅は1.3~1.7m、検出面からの深さは45~54cmである。571号溝と比べるとやや深い溝である。

出土遺物（第43図、第7表、図版20）

中世遺物は常滑片口鉢の小破片1点（1）である。遺物は少なく、他に土師器、須恵器小破片と小礫少量である。

<571号溝状遺構>

425B号溝の南西コーナーの内側から東側へ延びる溝でありF61-84グリッドからG62-10グリッドにかけて検出されたが東側の未調査区域へと延びることが想定される。425B号溝の南溝は南西コーナーから東へ3m程で消えているが、その南溝に替るような形で位置している。方位はN-66°-Wである。検出された長さは25.4m程である。上幅は0.8~1.5mで、検出面からの深さは12~27cmで全体に細く浅い溝である。底面にビットが認められる。

出土遺物（第43図、第7表、図版15・16）

中世遺物は、青磁皿1点20g、常滑甕5点392g、瀬戸美濃4点98g（平碗1点、緑釉小皿2点、折縁深皿1点）である。いずれも小破片である。7点を図示した。その他には、近世陶磁器2点と、土師器小破片、小礫が数点出土している程度である。

427号・503号・572号溝状遺構（第17・19図、図版19・21・22）

東側の遺構群にあり、285C号溝と425B号溝の間を南北に走る溝である。F60-78グリッドからF62-16グリッドにかけて検出された。F60-78グリッドからF61-93グリッドまでは南北（427号・503号）に、そしてF61-93グリッドから東に曲がり、F62-16グリッド辺りまで東西（572号）に延びている。東西溝（572号）は未調査区域にかかっているため、部分のみの検出である。また、北側（427号溝）のF60-78グリッドの先は1m程で土地が一段下がっている為、不明である。2000年度に北側の8.25m程が427号溝状遺構として検出され翌年度2001~2002年度にかけて、その南側の大部分が503号溝状遺構として、さらに、572号が2002年に検出、調査された為、異なる遺構番号が付いているが、同一の溝と判断されることから、ここ

で一括して報告するものである。

<427号溝状遺構>

F60-78グリッドからF60-96グリッドにかけて検出された8.25m程の部分である。南側で西に緩やかに曲がり、503号溝へと続いている。上幅は、北側が約1m、南側が0.4m程で、南側が狭くなっている。検出面からの深さは、北側が28~31cm、南側で10cm程であり、全体的に浅い。南側の503号溝と接続する辺りの底面から江戸期の宝永の火山灰らしきものが検出されている。

出土遺物-中世遺物は、常滑甕小破片1点49gである。他に、近世陶磁器類小破片4点53gと土師器、須恵器の小破片、小礫が数点である。

<503号溝状遺構>

F60-96グリッドから南側のF62-16グリッドにかけての溝である。南西に直線に走る南北溝の長さが約44mで、南西の東西溝は確認部分が17m程である。南北溝で上幅は、1.4~2.8mと場所によって開きがある。検出面からの深さは53~63cm程である。南北溝で429号・448号・597号地式坑と、593号・603号土坑を切っている。

出土遺物（第43図、第7表、図版16・19・21・22）

中世遺物は、青磁碗1点1g、常滑16点515g（高台付片口鉢2点48g、片口鉢5点111g、甕9点356g）、瀬戸美濃15点129g（緑釉小皿1点5g、折縁深皿1点21g、深皿1点5g、播鉢1点、底卸目皿1点、平碗5点60g、祖母懐茶壺4点18g、瓶子1点20g）である。この他、近世陶磁器類40点467g、土師器、須恵器小破片、小礫数点、鉄滓1点である。陶磁器類はすべて小破片である。瀬戸美濃播鉢と底卸目皿は504号地式坑出土のもの（第44図2・3）と接合した。

<572号溝状遺構>

503号溝の南側の東西溝である。F61-93グリッドからF62-16グリッドにかけて長さ15m程が検出された。南側が未調査区域の為、F61-93グリッドでの東へと屈曲する部分と北側の一部を確認したのみであり、幅は、1.2m、深さ60cm程である。

出土遺物（第43図、第7表）

中世遺物は、常滑甕1点14g、である。遺物は少量で、他に近世陶磁器1点2g、土師器小破片、小礫数点と図示した砥石1点（1）である。

477号・483（A・B）号溝状遺構（第20図）

遺跡北東部に所在し、台地上から北側の谷に向かって斜面部を走る溝である。東西に走る477号溝をそれに直交する形の483（A・B）号溝が一部接続することが確認されていることから、ここで一緒に報告するものである。

<477号溝状遺構>

F60-58グリッドからG60-40グリッドにかけて東西に走る溝である。西端のF60-58グリッドで浅くなって消えており、東端のF60-40グリッドで北側の先端が483A号溝の上端へと接続している。長さは約8.58mで、方位はN-101°-Wである。上幅は0.9m程で、検出面からの深さは13~22cmである。476号井戸を切っている。

出土遺物-内耳上器口縁部小破片1点19gの他、黒曜石、磨石の破片が数点出土したのみである。

<483 (A・B) 号溝状遺構>

G40-00グリッドからF60-09グリッドにかけて、北側の谷に向けた斜面を走る溝であり、隣接してA号、B号2本の溝が確認されている。

(A号溝)

西側に位置する溝で477号溝と接続しており、G40-00グリッドからF60-09グリッドにかけて、長さ26.8m程が検出された。方位はN-9°-Wである。上幅は0.8~1.3m程である。

(B号溝)

東側に位置する溝で、G60-40グリッドからG59-90グリッドにかけて、長さ19m程が検出された。方位はA号とほぼ同じくN-9°-Wである。上幅はA号より狭く50~80cmである。なお、このA・B号の二条の溝は公園上の赤道と重なることが調査時に指摘されている。

出土遺物-中世遺物無し。483 (A・B) 号溝として、近世陶磁器小片3点63gが出土したのみである。

478号溝状遺構 (第20図)

477号溝の南側に隣接し、並列するようにして東西に走る溝である。F60-58グリッドからG60-50グリッドにかけて、長さ9m程が検出された。方位はN-99°-Wである。上幅は1.2~1.8m程で、西端部へ向い狭くなっている。検出面からの深さは40~65cmであり、上幅と同様に東側が深く、西側が浅い。西端部、東端部ともにその先は未確認である。

出土遺物 (第43図, 第7表)

中世遺物は、常滑甕小破片1点123gと同示した板碑小破片1点(1)である。板碑には刻字が6~7文字認められるが、右側の「火 日 □」以外は、破損のため不明である。他には、近世陶磁器小破片10点435gと瓦の小破片が出土している。

567号溝状遺構 (第19図, 図版9)

中央部北寄りに位置する溝である。F60-41グリッドからF60-53グリッドにかけて12m程の長さが確認されたが、攪乱を受けており、検出出来たのは4~5m程である。上幅1.2m程で、深さ36cm前後である。方位はN-56°-Wである。

出土遺物-中世遺物無し。土器細片少量。

569号溝状遺構 (第19図)

567号溝の南側に位置する、東西方向に走る溝である。F60-50グリッドからF60-52グリッドにかけて、長さ10.5m程が確認されたが、北側部分が道路下の為、南側部分のみしか検出出来なかった。この為、上幅は不明であるが、検出部分で1.5m程あることからみると、北側の567号溝と比べ幅広の溝と推測される。検出面からの深さは40cm程である。方位はN-72°-Wである。568号土坑を切っている。

出土遺物 (第43図, 第7表, 図版23)

中世遺物無し。他に内耳土器小破片2点53g(図示1点)と近世陶磁器小破片5点78gがある。

(3) 井戸跡

遺跡南部地区の北東側の台地上で、1基のみが検出されている。

476号井戸跡（第20図、図版8）

F60-48グリッドに位置している。477号溝によって、上部を切られている。平面形は円形で、規模は上端で2.0m×1.8mである。検出面より70cm程の深さまでは、掘鉢状に掘られているが、そこから下は、径0.95m程の円形プランでほぼ垂直に掘り下げられている。深さは検出面から3.5m以上の深さがあることが確認されている。

出土遺物－中世遺物無し。土師器、須恵器等の小破片、小礫数点出土。

4 地下式坑

13基検出されている。平面形がT字形で方形・小竪穴状の入口施設を持つもののほか、入口施設が平面・円形のものや不明確なものも認められる。所在する地域は大きく2ヶ所に別れ、遺跡南西部のC62-28グリッドの地域に2基が、南東部のF61グリッドを中心とした地域に11基が各々所在している。

＜C62グリッド地区＞

この地区は、調査区域の中では遺跡の最も南西部にあたり、南側の谷に小さく突出した舌状台地斜面に位置している。調査された範囲では台地斜面が東西約16m、南北約12mの長さで矩形に区画されており、台地整形区画の北西側を示しているものと思われる。

地下式坑は2基（496号・498号）ともに、この台地整形区画の北西隅に位置しており、この地区では、他に上坑3基（497A号・497B号・499号）・溝1条（495号）が検出されている。

496号地下式坑（第14・31図、図版11）

C62-28グリッドに位置する。平面形はT字形で、全長2.65m、主軸方位N-13.5°-Eである。上室は底面が隅丸方形で、規模は1.8m×1.8m、検出面からの深さは1.2mであり、平坦である。入口部は上端が楕円形を呈しているが、底面は隅丸長方形に近い形である。上端の広さに対して、底面の規模は、長さ0.35m、幅0.75mで狭い。主室との段差は無い。この地下式坑は、断面図からみると、上部が持ち送り状に強く張り出している。また、覆土の堆積は、入口部から奥壁側へと向かって堆積しており、入口部から土が埋まっていく過程で、天井部も徐々に崩落していったものと判断される。出土遺物無し。

498号地下式坑（第14・31図）

C62-28グリッドに位置している。平面形は入口部が崩れた形のT字形を呈している。全長2.7m(2.6m)、主軸方位はN-70°-Eである。主室は底面が長さ2.15m、幅2.0m(最大)で、奥壁側は横長方形を示すが、全体としてはやや縦長で不整形な平面プランであり、入口部近くが幅0.65~1.0mと狭くなっている。検出面からの深さは奥壁側で1.8m程、入口近くで2.15mであり、底面が入口部近くが低く、奥壁側へ15~20cm位高くなっている。入口部は、主室に向かってやや斜めに接続している。平面形は円形に近く、底面で長さ0.5m、幅0.7mであり、検出面からの深さ1.45mである。出土遺物無し。

＜F61グリッド地区＞

F61グリッドを中心とする径50m程の範囲の内に10基が所在する。この地区は、292号方形周溝区画のほか、調査で検出された土坑のほとんどが所在する地区でもある。

425D号地下式坑（第20図、図版10）

F61-08グリッドに位置している。425B号溝と重複し、主室の奥壁側の上部が幅1.0~1.2m、深さ50cm程にわたって削り取られている。平面形はT字形で、全長3.8m(3.44m)である。主軸方位はN-70°-W。

主室は横長方形で、規模は長さ1.9～2.2m、幅3.15mである。検出面からの深さは2.04m、底面は平坦である。奥壁側の両サイドは、各々1m程の範囲が中央部よりも20cm程奥行きが広がっている。入口部は、中央部に位置する。平面形は、上端は凹形に近いが底面は隅丸長方形であり、広さは底面で0.95m×0.8mである。深さは70cmで主室へは有段となっている。段差は1.35m程である。天井部底面から55cm程下の段の上部に、足場とも理解される幅10cm程の平坦面が存在している。主室の側壁や奥壁の上部が天井部へと続くように持ち送り状に張り出している。上室内の覆土の堆積状況から判断すると天井部が崩落した後、他からの土で埋められて上部の覆土が堆積し、その後425B溝が重複したものと考えられる。

出土遺物（第44図、第8表、図版15・18～21）

中世遺物は、青磁碗2点4g、常滑5点899g（高台付片鉢1点25g、片鉢4点686g、瓦2点188g）、瀬戸美濃5点162g（緑軸小皿2点95g、平碗1点63g、摺鉢1点、祖母襷茶壺1点4g）である。他に近世陶磁器1点10g、土師器、須恵器少量と鉄製品5点がある。いずれも小破片で天井部崩落後の埋没土中からの出土である。青磁碗2点は、小片の為に図示し得なかったが、接合し、12C後半～13C頃と考えられるものである。祖母襷茶壺の破片1点は、504号地下式坑出土のもの、接合しないが同一個体と考えられる。

429号地下式坑（第17・30図、図版10）

F60-96グリッドに位置している。503号溝と重複し、入口部から主室にかけて上部が幅1.0～1.3m、深さ50cm程にわたり切り取られている。平面形はT字形で、全長は3.02m、主軸方位はN-74.5°-Wである。主室は横長方形で、規模は長さ2.1m、幅3.0m、検出面からの深さは2.0mである。底面は平坦であるが、入口部は隅丸方形で、底面の広さが0.8m×0.65m、深さ75cm前後を計り、有段である。段差は1.26m程である。入口部の直下に、長方形に35cm×20cmの広さの高さ15cm程の足場が設けられている。覆土の堆積状況からみると、主室の床面から中程近くまで、天井部が崩落したとみられる土が堆積していることから、最初に天井部が崩落し、その後、上部の覆土が堆積した後、503号溝が構築されたものと判断される。

出土遺物-中世遺物無し。近世陶磁器2点35gと土師器少量が出土している。いずれも小破片で、覆土中からの出土である。

430号地下式坑（第17・30図）

F61-09グリッドに位置している。発掘調査時点では、奥壁近くの一部分が住宅外壁コンクリートにかかっていた為、未調査となっている。平面形はT字形で、長さ2.7mである。主軸方位はN-145°-Eである。主室は横長方形で、規模は長さ1.6m、幅2.5m、検出面からの深さ1.66m、底面は平坦である。入口部は中央部に位置し、底面が台形に近いプランをもつ。長さ0.7m、幅0.9～1.05m、ほぼ平坦で、深さは検出面より87cmである。主室へは有段となる。段差は約70cmである。上室左側壁の奥で底面より1.6m程の高さで、壁が持ち送り状に内湾している点からみると、天井部は、それよりも高かったことが想定される。上室の覆土の堆積状況からみると、床面から中程まで天井部が崩落したと考えられる土層が堆積していることから、最初に天井部が崩落し、その後埋没したものと判断される。

出土遺物（第44図、第8表、図版24）

中世遺物無し。天井部崩落後の覆土上部から図示した鉄製品2点（1・2）の他、土師器、須恵器の小破片が少量出土している。

448号地下式坑（第17・31図、図版10）

F61-36グリッドに位置している。入口部から主室の一部と主室奥壁側の一部を425B号溝と530号溝に

切り取られている。平面形は、T字形で、長さ3.25m、主軸方位N-65°-Eである。主室は横長方形で、長さ1.8m、幅2.47m、検出面よりの深さは2.1m、ほぼ平坦である。入口部は、掘り込み上端が半円形を呈すが、底面は長さ36cm、幅1m程の横長方形で、深さは検出面より1.13mである。この入口部は、底面までの間に堅坑の中段で三方を台状に残して作っており、足場としたものと考えられる。入口部から主室へは有段で94cmを計る。覆土の堆積状況からみると、主室から中程まで1m以上、犬井部と考えられ、ロームブロックの上層が存在しており、入口部から覆土がほとんど堆積しない内に最初に天井部が崩落したものと判断される。遺物は、主室の中央からやや左側の径60cm×65cm程の範囲に小形のハマグリを中心とした貝が厚さ10cm程で堆積していた。また、左側壁中央部の天井崩落後の覆土中より、縁軸小皿が4枚重なって出土している。また、主室中央部で同じく天井崩落後の覆土中から鍛冶炉の炉壁小片が出土している。

出土遺物（第44図、第8表、図版15・20・21・24）

中世遺物として常滑甕小破片6点265gと瀬戸美濃9点611g（瓶子破片4点280g、縁軸小皿4点331g、播鉢1点）、古銭1点（元祐通宝）、ハマグリ等の貝類少量がある。他に鉄製品2点と鍛冶炉の炉壁小片1点、近世陶磁器3点20g、土師器、須恵器小破片少量である。貝類の他は、すべて天井部崩落後の覆土中からの出土である。図示した1～4の瀬戸美濃縁軸小皿4点はともに完形品である。西側の端際に4点が重なるようにして横に並んで出土している。

460号地下式坑（第17・31図、図版10）

F60-84グリッドに位置している。285B号溝と重複し、主室の奥壁を残り、上部が285B号溝に切り取られている。平面形はT字形で、長さ2.65m、主軸方位はN-75°-Eである。上空の平面形は横長方形で、規模は長さ1.35m、幅1.9mである。検出面からの深さは、1.05mで、床面は平坦である。奥壁、側壁ともに壁が上部に向けて持ち送り状に立上っている。入口部は縦に長い長円形で、底面は平坦だが、上空に向かってやや下がっている。広さは長さ1.0m、幅0.75m、深さは検出面より70cm程で、主室との高低差は26cm程と低い有段となっている。

覆土の堆積上層断面からみると、床面から中程まで埋まった後、天井部が崩落し、さらにその後の埋没の後に285B号溝が重複していることがわかる。

出土遺物-中世遺物は無し。天井部崩落後の覆土中から土師器小片と小礫が少量出土している。

504号地下式坑（第17・32図、図版11）

F61-27グリッドに位置する。平面形はT字形で、全長3.5m、主軸方位はN-157.5°-Eである。主室は横長方形で、規模は長さ1.84m、幅2.3m、検出面からの深さは2.05mである。底面は平坦である。入口部は隅丸方形で、底面の広さが0.8m×0.9m、深さ約1mである。中程に幅20cm程の段が巡っており、堅坑は二段で形成されている。段差は1.05m程である。主室の覆土の土層断面からみると、主室がわずかに埋まりかけた段階で、天井部が崩落している様子を示している。

出土遺物（第44・45図、第8表、図版16・20～23）

遺物は他の地下式坑に比べ多いが、いずれも破片で覆土中からの出土である。中世遺物は、常滑7点126g（片口鉢1点、甕6点126g）、瀬戸美濃30点1592g（平碗3点48g、折縁深皿1点22g、底卸皿1点33g、盤類1点5g、播鉢2点589g（同一個体）、瓶子1点130g、祖母懷茶壺20点765g）である。この他に近世陶磁器9点55g、砥石1点84g、土師器、須恵器小破片少量、古銭1点（明治17年1銭銅貨）がある。これらのうち、常滑片口鉢の小破片1点が425D号地下式坑出土のもの（第44図425D-5）と接合し、祖母

懐茶壺の破片が425B号溝と503号溝の出上のものと各々接合している。

550号地下式坑（第16・32図、図版11）

E61-68グリッドに位置する。292号方形周溝区画墓の周溝南西隅と重複している。周溝を精査中に検出した為、その新旧関係は明確ではないが、292号方形周溝区画墓の後に作られたものと思われる。また、入口部は後世に南側へと地形が削平されている為、上部が切り取られている。さらに、その先端部は調査区域外の為不明である。平面形はT字形で、長さは確認面で3.3m程である。主軸方位はN-30°-E。主室は横長方形で、長さ1.8m、幅2.05m、検出面からの深さ、入口部で2.77m、奥壁左側で3.15m程で、床面は平坦である。壁面は両側面は垂直に近いが、奥壁が床面1.8m程から上部にかけて持ち送りの内に傾斜してきている。入口部は主室中央部に接続し底面が二段で細長い形に設置されている。検出面からの深さは1.4m程、長さは確認面で約1.3m、広さは人1側の上段が上端の幅1.3m、底面が長さ0.45m×幅0.7m、主室側の下段が上端の幅1.0-1.15m、底面が長さ0.7m×幅0.46m程であり、上段と下段の段差は50cm程である。主室とは有段であり段差は約1.4mである。覆土の十層断面（発掘当初は丸掘り）で、主室に粘土層が確認された為、途中から断面図を作成している。この為、上部の覆土は不明）からみると、入口から流れこんだ為、主室の下部まで埋まった後、天井部が崩落した様子がうかがえる。そしてその後に入力方向から主室に流れ込む粘土層が厚く堆積していることから、粘土を意識的に充填したものと判断される。なお、292号方形周溝区画墓の周溝の底面は、主室床面より約2.7m程の高さに位置することから、天井部は主室に充填された粘土の上面辺りの床面から2.2m程の高さに存在した可能性が高いと判断される。

今回の発掘調査で検出された地下式坑の中では検出面から最も深い地下式坑である。入口部も他にない形で、主室に接続する部分は他の地下式の入口に類似するが、そこからさらに先に細長く入口部を設けて、二段にしている。このことからすると、292号方形周溝区画墓の周溝が埋った後、この地下式坑から作られた為、堅いローム層で形成されている天井部の位置が、必然的に深くなり、全体として、深い地下式坑となった可能性も考えられる。

出土遺物—中世遺物無し。天井部崩落後の覆土中から土師器、須恵器の小破片が少量出土。

594号地下式坑（第17・32図、図版11）

F62-05グリッドに位置する。572号溝と主室の奥壁側2分の1程が重複する。新旧関係は不明。平面形は略T字形で、全長は2.24m、主軸方位N-179.5°-Eである。主室は東南隅が調査区域外の為、未調査であるが、横長方形で、規模は長さ1.3m、幅1.95m、検出面からの深さ1.5mである。底面は平坦。入口部はやや半円形に近い形であるが、壘坑部は底面が平地をとることなく、深さ86cm程までなだらかな斜面を形成している。そして、そこから主室床面までは有段で、段差は約66cmである。

出土遺物—中世遺物は、常滑甕小破片2点67gと小石1点のみである。天井部崩落後の覆土中からの出土。

595号地下式坑（第17・32図、図版11）

F62-05グリッドに位置する。平面形はT字形で、全長は長さ2.1m（2.2m）と小形である。主軸方位はN-173.5°-Eである。主室は横長方形で、規模は長さ1.26m、幅1.8m、検出面からの深さ約1.14mである。底面は平坦。入口部は主室中央からやや左側に接続している。隅丸方形を呈し、規模は、長さ0.9m（0.86m）、幅1.14m（0.96m）である。深さは検出面から30-46cmで、底面が主室に向け16cm程下っている。有段で、段差は66cm程である。

出土遺物-中世遺物は、常滑甕小破片3点126g(接合)と近世陶磁器2点30g、小礫数点である。天井部崩落後の覆土中より出土。

597号地下式坑(第17・33図)

F61-83グリッドに位置する。503号溝と重複する。新旧関係は不明。平面形はT字形と考えられるが、上室奥壁側が未調査区域外であった為、全長は不明。調査区内での長さは、2.1m(1.7m)。主軸方位はN-86°-Wである。上室は横長方形で規模は、検出部分では長さ0.74m、幅1.3m、検出面からの深さは1.0mである。底面は平坦である。入口部は主室に向かって斜めに接続している。上端は隅丸方形に近いが、底面は略円形で、規模は上端で長さ1.05m×幅1.55m、底面で長さ0.74m×幅0.93m、検出面からの深さ30cmである。底面はほぼ平坦である。有段で段差は70cmである。

出土遺物-中世遺物無し。天井部崩落後の覆土中から土師器小破片数点出土のみ。

599号地下式坑(第17・33図、図版11)

F61-68グリッドに位置している。平面形はT字形で、全長は2.53m(2.48m)、主軸方位N-177.5°-Eである。主室は横長方形で、規模は長さ1.14m、幅1.6m、検出面からの深さ1.38mであり、床面は平坦である。入口部は主室の中央よりやや左側に、やや斜めに接続している。縦長方形で、長さ1.24m(1.14m)、幅0.8~1.0m(0.43~0.56m)、検出面からの深さ20~48cmである。有段で、主室との段差は9cm。底面は上室に向かってゆるやかに下っている。

出土遺物(第45図、第8表)

中世遺物は、青磁碗の体部小破片1点5g(13C後半~14C)と石製紡錘車1点127gであり、他に、土師器小破片少量がある。石製紡錘車が底面中央から出土した他は、天井部崩落後の覆土中からの出土である。

5 土坑

遺跡北西部のC58、D58大グリッド地区に4基、南西部のC61・62大グリッド地区に5基、南東部のF61大グリッドとその周辺地区に50基の計59基が検出されている。

〈C58・D58グリッド地区〉

206号土坑(第10・34図、図版12)

C58-35グリッドに位置する。西側部分は調査範囲外へと続いており、東側3分の2程を検出したものと思われる。東側2m程の地に001溝が存在している。平面形は、東西に長い楕円形と想定される。規模は現状で南北0.9m(0.64m)、東西1.15m(0.58m)であり、この点からみると主軸方位はN-109°-Eである。深さは検出面から2.1m、表土面からは2.67mである。南北側はほぼ垂直に掘られており、平面規模に対して深さのある土坑である。

出土遺物(第45図、第8表、図版16・18)

覆土中から、かわかけ碗2点23g、常滑の鉢1点6g、同甕2点23gが出土している。いずれも小破片である。この他、覆土下層の床面より70cm程上の位置から馬の骨(頭骨・下顎骨)と歯が検出されているが、大半がもろくなっていた為、一部しか取り上げることが出来なかった。

251号土坑(第10・34図、図版12)

C58-55グリッドに位置する。120号溝と覆土上部でわずかに重複しており、調査過程における土層の

観察から、本土坑が120号溝を切っていることが判明している。平面形は上端が不整形円形で、底面は長方形であり、長軸はN-72°-Wである。規模は長軸2.0m (1.15m)、短軸1.4m (0.5m)である。検出面からの深さは2.35m、表上面からは3.0mである。底面から35cm程上の面にローム粒の混ざった暗褐色土の硬化面が検出されており、そこから底面まではローム粒やロームブロックに暗褐色土が混在した土が埋まっていた。この点については、調査者の所見として、縄文時代早期の陥し穴であった所を、中世以降になってから上坑として掘り込んだ可能性が指摘されている。なお、この上坑には、西側に南北0.75m (0.65m)、東西0.85m (0.7m)の長さで三角形を呈し、深さ18cmと浅い張り出し部がある。また、北側には、検出面より深さ0.6~1.2m程の所の壁面に、外側へと凹むような穴が穿たれている。調査所見では、足がかりのためのものではないかと考えられている。

出土遺物-中世遺物は無い。覆土中から七師器、須恵器の小破片が少量出土し、覆土下部からアカニシの芯の部分1点が出上している。

301号土坑 (第10・34図、図版12)

C58-45グリッドに位置する。251号土坑の北約0.7mの地にある。平面形は円形で、規模は東西0.95m (0.82m)、南北0.84m (0.76m)である。深さは検出面から75cmである。底面はほぼ平坦で中央部がやや硬く、黒褐色土が薄く貼りついていた。

出土遺物-縄文土器細片が数点出土のみ。

320号土坑 (第10・34図、図版12)

C58-68グリッドに位置する。001号溝の西側にあり、平安時代堅穴住居 (012号)を切っている。西側が調査範囲外にかかっている為、半分程の検出にとどまっている。このため、平面形や規模は明確でないが、円形プランが想定される。規模は確認面で、南北0.56m、東西0.25mである。深さは検出面から25cmである。

出土遺物-覆土中から常滑焼の胴部小片1点64gと土師器小片数点が出上しているのみである。

《C61・62グリッド地区》

491号土坑 (第14・35図)

C61-99グリッドに位置する。490号溝と重複しているが、新旧関係は不明である。

平面形は隅丸長方形で、長軸方位はN-95.5°-Eである。規模は長軸が1.68m (1.46m)、短軸が1.34m (1.10m)で、検出面からの深さは、約31cmである。底面は平坦だが、東西で二段となり、西側約3分の1が16cm程高くなっている。

出土遺物-覆土中から縄文土器細片・土師器小破片数点、小石数点が出上したのみである。

493号土坑 (第14・35図、図版12)

C61-85グリッドに位置している。494号溝及び平安時代の489号掘立柱建物と重複しており、土層断面の観察からみると、494号溝に切られている。平面形は、3.2m×3.2m程の不整形な浅い掘り込みの中央部に東西に長軸を持つ隅丸長方形の上坑が位置する形を呈している。この隅丸長方形の土坑の規模は、長軸約2.6m (1.83m)、短軸約1.7m (1.18m)で、長軸方位はN-95°-Eである。検出面からの深さは、南側で62cm、北側で42cmであり、南側と北側で20cm程の高低差をもつ、二つの底面をもっている。このうち、北側の底面の幅は南北0.56m、南側の幅は0.42m程で、北側の方が全体的に幅広く、その形状からみると、南北にはほぼ同じ形の上坑が重なった形を呈している。南北方向での上層観察が不明の為、この土坑が南北二つの土坑の切り合いかどうかは明らかではないが、後述する馬の骨の出土状況から判断すると、馬の骨

を出土した南側の土坑が新しく掘られた可能性が考えられる。

出土遺物-陶磁器等の出土は無く、南側の覆土中部から馬の骨が多数出土しているのみである。出土状況からみると(図版12)、解体され、バラバラになった形で投棄された状態を示している。その出土範囲は、想定される南側の土坑内に納まる形で、高低差25cm程で1.4m×0.75m程の範囲に集中している。

497A号土坑(第14・35図)

C62-29グリッドに位置する。497B号土坑に切られている。平面形は不整形で、規模は上端で、南北1.10m程(推定)、東西1.20m程である。底面は小さく、断面が円錐状を呈している。検出面からの深さは中央部で75cm、西側で64cmである。出土遺物は無い。

497B号土坑(第14・35図)

C62-29グリッドに位置している。497A号土坑を切っている。平面プランは隅丸長方形で、規模は長軸1.65m(1.38m)、短軸1.05m(0.82m)である。長軸方位はN-31°-E。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは65cm前後である。出土遺物は無い。

499号土坑(第14・35図)

C62-38グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は径2.6m(2.46m)程である。検出面からの深さは、中央部が35cm程とやや深く、壁近くは20cm程と浅くなっている。出土遺物は無い。

＜F61グリッド及び周辺地区＞

425A号土坑(第17・34図)

F60-99グリッドに位置する。東側が調査範囲外であり、北側は425B号溝に切られている。この為、全体の把握が難しいが確認された範囲では平面形が方位に近いプランと想定される。規模は425B号溝の中で確認された面で見ると、南北方向で1.94m、東西方向で現状1.2mである。しかし、土層断面や調査所見からすると、南側より浅い底面が更に北側へと続き、南北方向で2.9m程の大きさの土坑が想定されている。底面は、南側が径0.84m程の円形プランで、深さは検出面から68cm、表土面から88cmである。北側の底面は南側より5～6cm浅く、425B号溝の底面とほぼ同じレベルと想定される。西側に上端が0.6m×0.55mで、深さ30cm程のピットがある。また、底面中央部(南側底面の北側)と427B号溝の底面にも当たる北側底面の一部に焼土痕が残っており、中央部底面近くでは灰が検出されている。

出土遺物-中世遺物は常滑甕小破片1点101gのみである。他に土師器小破片数点が出土。いずれも覆土中からの出土である。

447A号土坑(第17・34図、図版12)

F61-48グリッドに位置する。447B号土坑と重複している。南側の一部は調査区域外にかかっていた為、未調査である。平面は上端が隅丸長方形に近いプランを呈すと考えられるが、底面は不整形である。規模は長軸が3.05m(2.4～2.65m)、短軸が1.80m(0.8～1.5m)と大形の土坑であり、深さは検出面から96cm、表土からは1.5mである。長軸方位はN-109°-Eである。底面はほぼ平坦であるが、東側が高く西側へ30cm程傾斜している。東壁直下と南壁直下に小さなピットが存在する。東側は70cm、西側は15cm程の深さである。447B号土坑との新旧関係は、土層断面からの観察では、447Aが447B土坑を切っていると判断される。

出土遺物は無い。

447B号土坑 (第17・34図, 図版12)

F61-49グリッドに位置する。447A号土坑と重複しており、西側を切られている。南側は調査区域外の為、未調査である。平面プランは隅丸方形と想定される。規模は南西が推定1.4m (0.8m)、南北が確認面で0.64m (0.55m)である。深さは検出面より20cm、表土からは90cmであり、底面はほぼ平坦である。出土遺物は無い。

449号土坑 (第17・34図)

F61-37グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸0.92m (0.8m)、短軸0.88m (0.78m)である。長軸方位はN-110°-E。底面は検出面からの深さは15~18cmである。北側壁際に小ピットがある。出土遺物は無い。

450号土坑 (第17・34図)

F61-37グリッドに位置する。平面形は凹形で、規模は0.78m (0.70m)、0.72m (0.66m)である。底面は中央部が凹んでおり、検出面からの深さは中央部で19cmである。出土遺物は無い。

451号土坑 (第17・34図)

F61-37グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-56°-Eである。規模は長軸0.8m (0.62m)、短軸0.7m (0.5m)で、底面は南西側が、径0.4m×0.36mでピット状にさらに一段深くなっている。検出面からの深さは、北東が15cm、南西側のピットが66cmである。出土遺物は無い。

453号土坑 (第17・34図)

F61-38グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-25.5°-Eである。規模は、長軸0.85m (0.62m)、短軸0.74m (0.58m)で、検出面よりの深さは17cmである。底面はほぼ平坦である。出土遺物は無い。

454号土坑 (第17・34図)

F61-48グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-26°-Eである。規模は、長軸1.0m、短軸0.8m (0.6m)である。検出面からの深さは14cm程で浅く、底面北東側に深さ約64cmのピットがある。出土遺物は無い。

456号土坑 (第17・34図)

E61-49グリッドに位置する。平面形は不整形長方形で、長軸方位はN-19°-Eである。一見すると各々規模が1.9m×1.2m、1.9m×1.15m程の長方形の上坑が左右にずれて重複し合っているような形をしているが、底面のレベルはほぼ同じで平坦である。規模は、長軸が3.2m (3.0m)、短軸が1.15~1.2m (0.96~1.4m)で、検出面からの深さは40cmである。北東側と南東側の壁際に深さ44cmと39cmの小ピットがある。また、西側中央部にも長さ1.0m、幅0.5m位の範囲にピットが3個存在しているが、これらのピットがこの上坑に伴うものかどうかは不明である。出土遺物は無い。

501号土坑 (第17・35図, 図版13)

F61-19グリッドに位置する。平面形は丸味のある不整形長方形で、長軸方位はN-113.5°-Eである。規模は、長軸が1.13m (0.92m)、短軸が0.78m (0.55m)で、検出面からの深さは21cmである。この土坑は壁面上部から底面にかけて、ほぼ全面にわたり黄白色砂質粘土が貼り付けられており、この黄白色砂質粘土は壁や底面以外にも北東側の覆土中の上部に、天井部を構成するかのようにより3~10cmの厚さで、水平にブロック状に所在が認められている。なお、この上坑の東壁南側上部のみには、長さ15cm、幅5~10cmにわたり、粘土の貼り付けがなく、あたかも炭焼室の煙穴のように意識してこの箇所が設けられた

様子を示している。上層断面からみると、底面と覆土上部の粘土ブロックとの間には、灰と炭の層や焼土粒の混在した土層が充填している。この点からみると、底面の粘土や地山のロームには焼けた痕跡は認められていないが、この遺構で火を焚いた可能性も考えられる。出土遺物は無い。

502号土坑（第17・35図、図版13）

F61-39グリッドに位置する。平面形は一見すると不整形の土坑と見えるが、調査所見で炭焼窯（A号）と土坑（B号）の2つの遺構の重複と捉えられている。

<502A号土坑（炭焼窯）>（第17・35図、図版13）

北側に位置する遺構である。平面形は長楕円形と推定され、主軸方位はN-47°-Wである。北東壁に煙道が存在し、その直下にテラス状の平場が設けられている。テラス状の平場から南側の中央部は凹んで、一段深くになっている。規模は、長さが2.9m（2.54m）で、幅は1.5m程と推定される。検出面からの深さは、テラス状の平場で0.85~0.9mであり、中央部の凹みは、1.16m程である。煙道はテラス状の平場から10~15cm程一段高くなり、そこから間口35cm、奥行30cm程の広さで作られており、垂直に立上っている。高さは検出面まで70cm程である。壁面には灰が付着し、さらに煙道上部から西側0.74m程にかけて、厚さ5~10cmの灰層が堆積していた（第35図）。また、煙道の前のテラス状の平場は、0.9m×0.55m程の広さで、そこに多量の灰と炭が少量（厚さ0.5cm程）堆積していた。

<502B号土坑>（第17・35図、図版13）

南側に位置する土坑である。平面形は長方形を呈し、長軸は炭焼窯と同じくN-47°-Wである。規模は長軸2.83mで、短軸は1.6m程と想定される。底面は中央部が1.0m×1.1m程の広さの不整形に凹んでいる。南西壁はほぼ垂直であるが、南東壁は底面中央の凹みへ向かってゆるやかに傾斜している。又、北西側は中程にゆるやかな段をもつような形状をしている。

出土遺物（第45図、第8表、図版22・24）

重複するA・B号土坑の遺物のほとんどを一括して取上げている為、その帰属は不明であるが、中世遺物として次のものがある。常滑甕1点38g、5点66g瀬戸美濃（碗形鉢1点39g、播鉢形鉢1点3g、播鉢1点、瓶子2点24g）他に土師器小破片少量と鉄製品1点、貝小破片1点がある。いずれも破片で覆土中からの出土である。なお、このうち、瓶子瀬戸美濃瓶子胴部小破片1点がB号土坑の中央部凹み南側の底辺より出土している。

505A号土坑（第17・36図、図版13）

F61-18グリッドに位置する。北東側で505B号土坑とわずかに重複している。新旧関係は不明である。平面形は方形と長方形の土坑が接合したような形の不整形長方形で、長軸方位はN-21°-Eである。規模は長軸が3.21m（2.96m）、短軸が北側で1.76m（1.56m）、南側で1.08m（0.94m）である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは47~51cmである。出土遺物は覆土中から縄文土器・土師器の細片が少量出土している。

505B号土坑（第17・36図、図版13）

F61-19グリッドに位置している。505A号土坑とわずかに重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は不整形で、規模は1.12m（0.7m）×0.98m（0.7m）程である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは約16cmである。

出土遺物（第45図、第8表、図版24）

中世遺物は古銭1枚（元祐通宝）である。他に鉄製品破片1点がある。覆土中からの出土である。

505C号土坑 (第17・36図, 図版13)

F61-28グリッドに位置する。505B号土坑の南側にあり、505A号土坑と隣接している。平面形は不整形円形で、規模は1.0m (0.6m) × 0.9m (0.64m) 程である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは29cmである。出土遺物は無い。

506号土坑 (第17・36図)

F61-17グリッドに位置する。425B号溝と重複する。新旧関係は不明である。平面形は不整形円形で、規模は1.30m (1.02m) × 1.15m (0.94m) である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは32~35cmである。出土遺物は無い。

568号土坑 (第19・36図, 図版13)

F60-62グリッドに位置する。569号溝に切られている。平面形は長方形で、長軸方位はN-44°-Eである。規模は長軸1.72m (1.55m)、短軸1.28m (1.03m) で、検出面からの深さは1.6mである。底面はほぼ平坦で、南西隅に深さ30cm程の小ピットがある。

出土遺物—中世の遺物は、常滑壺小破片1点64g。他に、近世陶器小破片2点が各々覆土中から出土。

573号土坑 (第17・36図)

F61-98グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、長軸方位はN-45.5°-Eである。規模は、長軸が0.9m (0.68m)、短軸が0.76m (0.48m) である。検出面からの深さは22cm程で、底面は平坦である。出土遺物は無い。

574号土坑 (第17・36図)

F61-99グリッドに位置する。平面形は不整形円形で、規模は1.2m (0.8m) × 1.18m (0.86m) 程である。底面は平坦で、検出面からの深さは19cm前後である。出土遺物は無い。

575号土坑 (第17・36図)

F61-88グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-25.5°-Eである。規模は長軸が1.2m (0.96m)、短軸が0.76m (0.58m) で、検出面からの深さは11cmである。底面はほぼ平坦である。出土遺物は無い。

576号土坑 (第17・36図)

F61-88グリッドに位置する。575号土坑の西側に隣接する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-24°-Eである。規模は長軸が0.86m (0.7m)、短軸が0.64m (0.55m) で、検出面からの深さは10cm程である。底面はほぼ平坦である。出土遺物は無い。

577号土坑 (第17・36図)

F61-89グリッドに位置する。東側を木の根で攪乱されている。平面形は楕円形が想定される。長軸方位はN-63°-Eである。規模は長軸が現状で0.66m、短軸が0.64m (0.28m) で、検出面からの深さは16cmである。出土遺物は無い。

578A号土坑 (第17・36図)

G61-80グリッドに位置する。578B号土坑に切られている。平面形は不整形長方形で、長軸方位はN-10.5°-Wである。規模は長軸が1.0m (0.76m)、短軸が0.8m (0.5m) で、検出面からの深さは18cmである。底面はほぼ平坦である。出土遺物は無い。

578B号土坑 (第17・36図)

G61-80グリッドに位置する。578A号土坑を切る。平面形は円形で、規模は0.79m (0.52m) × 0.74m (0.48m)

である。検出面からの深さは20cm程で、底面はゆるく凹んでいる。出土遺物は無い。

579号土坑 (第17・36図)

G61-80グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸方位はN-27°-Wである。規模は長軸が1.26m (1.04m)、短軸が0.92m (0.7m)である。底面が二段になっており、北西側は、径0.7m×0.7m程の不整形プランで、ほぼ垂直に掘られている。検出面からの深さが40cm前後、南側はそれより小さく0.2m×0.5m程の半円形のプランで20cm程と浅い。底面は両者共に平坦である。出土遺物は無い。

580号土坑 (第17・36図)

G61-80グリッドに位置する。東側の壁が木の根のビットで小さく攪乱を受けている。平面形は円形で規模は0.98m (0.7m)×0.94m (0.84m)である。底面は南側はほぼ平坦であるが、北側は南側よりもやや深く、凹凸がある。検出面からの深さは20cm程である。出土遺物は無い。

581号土坑 (第17・36図)

G61-80グリッドに位置する。西側と東側が木の根のビットによって攪乱を受けている。平面形は楕円形で、長軸方位はN-61°-Eである。規模は長軸が0.9m (推定)、短軸0.7m (0.52m)であり、底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは13cm程である。出土遺物は無い。

582A号土坑 (第17・36図)

G61-70グリッドに位置する。北側を木の根と思われる小ビットと582B号土坑に切られている。平面形は丸味のある長方形で、長軸方位はN-19°-Eである。規模は、長軸が推定で1.5m (0.94m)、短軸は1.14m (0.63m)で、検出面からの深さは36cm程である。掘り方は楕円状の掘り込みである。出土遺物は無い。

582B号土坑 (第17・36図)

G61-70グリッドに位置する。582A号土坑を切っている。平面形は長方形で、長軸方位はN-26.5°-Wである。規模は、長軸0.98m (0.72m)、短軸0.8m (推定) (0.5~0.6m)で、検出面からの深さは15cm程である。底面はほぼ平坦である。

出土遺物 (第45図、第8表、図版19)

中世遺物は鉄常滑片口鉄破片1点84gが出土。他は、土師器小破片若干。覆土中から出土。

583号土坑 (第17・36図)

F61-79グリッドに位置する。583A号・583B号・584号の3基の土坑と重複する。583A号土坑に切られるが、583B号・584号土坑との新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、長軸方位はN-54°-Eである。規模は長軸3.75m (3.6m)、短軸2.55m (2.34m)で、検出面からの深さは5~10cmとやや浅いがあるが、底面はほぼ平坦である。

出土遺物 (第45図、第8表、図版21)

覆土上層から瀬戸美濃平碗(後IV古期)が1点出土している。他は、土師器細片若干である。

583A号土坑 (第17・36図)

F61-79グリッドに位置する。583号土坑を切っている。平面形は隅丸長方形で、長軸方位はN-26°-Eである。規模は、長軸1.08m (0.68m)、短軸0.74m (0.54m)で、検出面からの深さは25cm程である。底面はほぼ平坦である。出土遺物は無い。

583B号土坑 (第17・36図)

F61-79グリッドに位置している。583号土坑と重複するが、新旧関係は不明。平面形は不整形で、

規模は0.74m (0.66m) × 0.72m (0.66m) である。底面はほぼ平坦で検出面からの深さは16cm程である。北西隅の40cm × 20cm程の範囲に焼土が検出されている。出土遺物は無い。

584号土坑 (第17・36図)

F61-79グリッドに位置している。583号土坑と重複するが、新旧関係は不明。平面形は楕円形で、長軸方位はN-36°-Eである。規模は、長軸1.04m (0.3m)、短軸0.8m (0.1m) で、検出面からの深さは38cm程である。底面は丸底風である。

出土遺物 (第45図, 第8表, 図版21)

覆土中から瀬戸美濃緑釉小皿 (後Ⅳ古期) の破片が1点出上している。他は、土器細片若干である。

585号土坑 (第17・36図)

F61-69グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は0.98m (0.61m) × 0.93m (0.62m) である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは25cm程である。出土遺物は無い。

586A号土坑 (第17・36図)

F61-69グリッドに位置する。585号土坑に隣接し、586B号土坑に切られている。平面形は、円形で、規模は0.91m (0.64m) × 0.88m (0.61m) である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは、27cm程である。出土遺物は無い。

586B号土坑 (第17・36図)

F61-69グリッドに位置している。586A号土坑と重なっている。平面形は円形で、規模は0.75m (0.58m) × 0.69m (0.5m) である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは8cm程と浅い。出土遺物は無い。

587号土坑 (第17・36図)

F61-68グリッドに位置する。586A・B号土坑に隣接する。平面形は円形で、規模は0.94m (0.6m) × 0.92m (0.6m) である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは、16cm程である。出土遺物は無い。

588号土坑 (第17・37図)

G61-71グリッドに位置する。平面形は長円形で、長軸方位はN-39°-Eである。北東部は、木の根の小ビットに切られている。規模は長軸0.95m (0.6m)、短軸0.72m (0.52m) で、検出面からの深さは35cm程である。出土遺物は無い。

589号土坑 (第17・37図)

G61-71グリッドに位置する。588号土坑の北東側に隣接する。北側及び東側が調査範囲外であった為、平面形や規模等不明である。検出された現状では、平面方形が想定され、底面の南北が1.13m、東西が0.4mで、深さは86cm (表土面からは1.6m) である。西北隅に小ビットが存在している。出土遺物は無い。

590号土坑 (第17・37図)

G61-90グリッドに位置する。西側が攪乱を受けている。この為、平面形は明確ではないが、方形を呈すると想定される。長軸方位はN-88.5°-W。規模は、長軸が現状で1.9m (1.7m)、短軸が1.84m (1.4m) である。検出面からの深さは27.5cm程で、ほぼ平坦であるが、中央部付近に円形で0.9m (0.67m) × 0.8m (0.65m)、深さ14cm程の規模のビットが存在している。

出土遺物-中世遺物は無い。他に縄文土器・土器細片数点と小石2点が出土。

591A号土坑 (第17・37図)

F61-78グリッドに位置する。西側を591B号土坑に切られている。平面形は不整長方形で、長軸方

位はN-21°-Eである。規模は長軸1.48m (1.34m)、短軸0.9m (0.84m)で、検出面からの深さは28cm程である。底面は北側半分程が南側より5~10cm程深く二段となっている。出土遺物は無い。

591B号土坑 (第17・37図)

F61-78グリッドに位置する。591A号土坑を切っている。平面形は隅丸長方形で、長軸方位はN-62.5°-Wである。規模は長軸1.89m (1.5m)、短軸1.14m (0.9m)で、検出面からの深さは30cm程である。底面はほぼ平坦である。出土遺物は無い。

593号土坑 (第17・37図)

F61-74グリッドに位置する。503号溝及び525B号溝と重複している。新旧関係は不明。平面形は検出面の上端でみると長円形であるが、底面は隅丸台形に近いプランの大型の土坑である。長軸方位はN-65°-E。規模は上端で長軸3.35m、短軸2.96m。底面では長軸2.45m、短軸1.6~2.38mである。検出面からの深さは97cm。底面には西側寄りに2.3m×1.2m程の長方形のベッド状の高まり(高さ2~5cm)が存在しており、さらに、北東隅と南西隅には深さ18cm前後の小ピットがある。

この上坑の東側には、確認された範囲で上端で長辺2.15m、短辺0.85m、深さ19cm程のコの字状を早する箇所が存在している。一見するとこの上坑に関連する遺構、例えば、地下式坑の堅穴部にみえるが、525B号溝と重複している点もあってか、土坑との直接的な接続関係は把握されていない。発掘調査時の所見では、この土坑を明確な堅穴が無いことから、地下式坑と区別して、堅穴状遺構と呼称している。ここでは、その点を踏まえつつも、堅穴状遺構の名称は適切ではないと判断し、土坑として扱った。

出土遺物 (第45図、第8表、図版16・20・21・25)

中世遺物は、覆上上部から常滑甕2点163g、瀬戸美濃平碗1点19g、在産産の播鉢2点245gの各破片が出土している他、縄文土器・土器の細片が若干出土している。また、底面より20cm程上部の覆上中から大きな礫が1点出土し、この礫とはほぼ同じレベルで北東側の覆土中から焼土が2ヶ所で検出されている。

596号土坑 (第17・37図)

F61-65グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸方位はN-28°-Eである。規模は長軸2.17m (1.74m)、短軸1.46m (1.02m)で、検出面からの深さは44cm程である。底面はほぼ平坦である。

出土遺物-小礫10数点のみの出土である。

598号土坑 (第17・37図)

F61-76グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸方位はN-67°-Wである。規模は長軸1.52m (1.25m)×1.06m (0.92m)で、検出面からの深さは31cm程である。底面はほぼ平坦である。

出土遺物-土器細片と小礫数点のみの出土である。

600号土坑 (第17・37図)

F61-76グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸方位はN-89°-Eである。規模は長軸1.72m (1.33m)×1.25m (0.75m)である。平面はほぼ平坦で、検出面からの深さは40cmである。出土遺物は無い。

601号土坑 (第17・37図)

F61-86グリッドに位置する。600号土坑の南東に隣接する。平面形は不整形で、長軸方位はN-69.5°-Wである。規模は、長軸0.6m (0.36m)、短軸0.48m (0.35m)である。底面は皿状を呈し、検出面からの深さは7cm程と浅いが、厚さ6cm程の粘土を底面に貼っている土坑である。粘土は固くしまっていた。出土遺物は無い。

602号土坑 (第17・37図)

F61-85グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸方位はN-57.5°-Wである。規模は長軸0.93m (0.6m)、短軸0.76m (0.42m)である。底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは17cm程である。出土遺物は無い。

603号土坑 (第17・37図)

F61-74グリッドに位置し、593号土坑の南側に隣接している。溝503号溝及び525 B号溝と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形で、規模は1.48m×1.40mで、検出面からの深さは18cmである。長軸方位はN-16.5°-E。出土遺物は無い。

604号土坑 (第17・37図)

F61-66グリッドに位置する。西側を径0.66m、深さ29cm程の円形のピットに切られている。平面形は長円形で、長軸方位はN-26°-Eである。規模は、長軸1.12m (0.86m)、短軸は想定で0.94m (0.74m)程である。底面はほぼ平坦で検出面からの深さは27cm程である。出土遺物は無い。

第2節 グリッド出上の中世の遺物

本遺跡からは、遺構だけでなく包含層からも中世遺物が数多く出土している。遺物の取上げに際しては、主として小グリッドごとに取上げているが、ここでは陶磁器類を中心にして大グリッドごとにとりまとめ報告する。なお、便宜的ではあるが、第6図にみられるように発掘調査区域や検出された遺構の分布状況等を踏まえて、次の1～5の区域に分けて報告する。

1 C58・59・D58・59グリッド地区

遺跡北西部の居館地区である。かわらけや貿易陶磁、瀬美、常滑の匳、瀬戸美濃製品も少量出土している。

《C58・59・D58・59グリッド》(第46図、第9表、巻頭図版5、図版15・18・22・24)

かわらけ-碗7点56g、小破片・細片の爲図示し得ないが、001号溝や120号溝出土のかわらけ類に類似しており、13C代のものと想定される。

貿易陶磁-13点27g(青磁碗5点22g、青磁皿1点1g、青磁袋物1点1g、青磁器種不明1点1g、青白磁合子蓋1点2g、白磁瓶の蓋4点)。図示した合子蓋(6)は、鳳凰の羽根と思われる文様がある天井部の破片である。白磁瓶の4点は、120号溝出土の破片と接合した(第39図21)。他の10点は13C後半～14C頃と考えられる碗の小破片である。

瀬美 - 2点75g(壺25g、甕50g)。図示した甕(C58-4)の他、壺は細かい沈線で袈裟模様が描かれていると思われる肩部～胴部にかけての小破片である。

常滑 - 25点1007g(高台付片1口鉢2点505g、甕23点502g)。甕は図示した1口鉢部破片(D59-1)の他は、すべて肩部～胴部の小破片であり、砥石と利用されているものが多い。

瀬戸美濃-19点130g(平碗9点41g、整類2点17g、端反皿1点4g、銷軸挿鉢6点62g、尊式花瓶1点6g)。いずれも小破片であり、時期の判別出来るものはすべて14C後半以降のものである。尊式花瓶1点を図示した(C58-7)。

その他 - 尾張式小皿1点(11)と砥石3点(C58-1・D58-1)、土鉢1点(D58-2)である。

2 C61・62グリッド地区

遺跡南西部の区域で、607号台地整形区画や486・490・494号溝等の検出された区域である。遺物量は中世陶磁器類の最も少ないが地域であるC62グリッドでは内耳土器の半数程が出土している。

〈C61グリッド〉(第46図、第9表、図版21・22)

常滑 - 4点228g(播鉢1点8g、甕3点220g)

瀬戸美濃 - 8点78g(平碗2点31g、緑釉小皿3点27g、盤類1点6g、卸皿1点6g、播鉢1点8g)。小破片である。瀬戸美濃製品は図示した4点(1~4)を含め、後I~IV新期頃までのものである。

〈C62グリッド〉(第46図、第47図、第9表、図版14・16・20・22・23・27)

かわらけ-皿1点9g、口縁部~体部が直線的に開く器形である(第47図C62-4)。

常滑 - 5点181g(片口鉢1点、甕4点181g)。小破片である。片口鉢はC61グリッドの494号溝出土のもの(第43図494-1)と接合。

瀬戸美濃 - 5点104g(天目茶碗1点15g、志野皿1点5g、銷軸播鉢2点61g後IV~大窯2期、徳利1点23g大窯)。いずれも小破片で、後IV期~大窯2期頃にかけてのものである。

以上の他、内耳土器27点874gがある。遺跡出土の全点55点のうち半数を占めるもので、全般的に浅い部類のものである。

これらC62グリッドの遺物は常滑甕2点を除き、607号台地整形区画の包含層中からの出土である。

3 D60・E60グリッド地区

遺跡中央部の区域である。居館跡の南側の堀と推定される003号溝の南側及び東側区域で、今回の調査では、002号・003号溝以外は中世遺構の検出されていない区域である。グリッド出土の遺物の中で、中世遺物の出土量の少ない地区である。

〈D60グリッド〉(第47図、第9表、図版15・24)

かわらけ-皿1点2g。小破片であり、003号溝付近から出土したものである。

貿易陶磁 - 4点18g(碗3点11g、皿1点7g)。小破片である。碗のうち1点は内面に劃花文をもつ12C後半~13C頃のもの。他は13C後半~14C頃のものと考えられる。グリッド中央部東側の04・27・55・56・67グリッドから各1点出土。

常滑 - 8点169g(高台付片口鉢1点27g13C前半頃、甕6点123g、壺1点19g)。小破片である。中央部を中心に8ヶ所のグリッドから各1点出土。

瀬戸美濃 - 7点76g(平碗3点24g、緑釉小皿4点52g)。古瀬戸後期のもので、小破片である。中央部を中心に7ヶ所のグリッドから各1点出土。

以上の他、砥石1点(3)と灰胎陶器(平安期)の破片利用の砥石(1)、小形管状土錐4点(4~8)がある。

〈E60グリッド〉(第47図、第9表)

貿易陶磁 - 皿1点5g(1)

常滑 - 甕2点68g(2・3)

瀬戸美濃 - 3点21g(盤類1点9g後I~III期頃、折縁深皿1点6g後I期、小壺1点6g大窯)。小破片である。

瀬戸美濃小壺がD60グリッドに隣接する40グリッドから出土した他は南東側のE61・F61グリッドに近い近辺からの出土である。

4 D61・62・E61・62グリッド地区

遺跡中央部南側の台地上から斜面にかけての地区で、東西に延びる148号溝とその北側及び南側の地区である。

＜D61グリッド＞（第47図、第9表、図版22・24）

貿易陶磁 - 3点13g（青磁碗2点10g、同皿1点3g）。小破片であり、図示した皿（6）と同じ頃（12C後半～13C）のものである。07・55・96グリッドから出土。

常滑 - 甕5点75g（底部1点、胴部4点）。小破片である。

瀬戸美濃 - 5点22g（天日茶碗1点7g、平碗1点4g後期、緑釉小皿2点6g後IV新期、志野皿1点5g大窯4期）。小破片であり、天日茶碗（7）のみ図示した。

これらのうち、多くは148号溝から北側にかけて出土している。

＜D62グリッド＞

常滑 - 甕5点253g。肩～胴部にかけての小破片であり、42・47グリッドより出土。

瀬戸美濃 - 鉄軸撞鉢2点88g。後IV期～大窯2期と大窯期のもの各1点である。42グリッドより出土。

＜E61グリッド＞（第47・48図、図版15・20・22・24）

貿易陶磁 - 7点72g（青磁2点3g、同皿1点2g13C後半、同香炉or盤1点5g、白磁四耳壺1点14g13C代、青白磁1点4g12C代、大型袋物1点44g）。いずれも小破片で、白磁四耳壺と大型袋物は292号方形周溝区画墓南側周溝付近から出土している。

瀬美 - 2点64g（刻文壺1点46g、壺1点18g12C～13C）。小破片である。2点ともに292号方形周溝区画墓南側周溝付近からの出土である。

常滑 - 甕14点310g。いずれも胴部の小破片で3点（第47図1・3、第48図5）が礫石に利用されている。グリッド西側で9点、東側の292号方形周溝区画墓南側で5点が出土している。

瀬戸美濃 - 6点99g（天日茶碗1点21g大窯、平碗1点6g後II期、緑釉小皿1点13g後Ⅲ～Ⅳ期、皿1点2g後期、瓶子〔梅瓶〕2点57g〔1点中II期〕）。小破片である。図示した瓶子〔梅瓶〕がグリッド東側の292号方形周溝区画墓南側周溝付近から出土した他は、すべて北側から西側にかけて出土している。

以上の他に、在地産広口壺1点（第47図4）、内耳上器1点40g、礫石2点（第48図7・11）がグリッド西側から出土している。

＜E62グリッド＞（第48図、第9表、図版18・21・23・24）

貿易陶磁 - 青磁（器種不明）1点1g。30グリッドより出土。

常滑 - 14点581g（高台付片口鉢1点〔第48図3〕、片口鉢1点Ⅱ6型式、甕12点425g）。片口鉢1点は494号溝出土のものと接合した（第43図1）。甕はすべて胴部小破片である。

瀬戸美濃 - 折縁皿2点7g大窯4前期（第48図5・6）。この他、内耳上器2点（第48図1・8）と礫石2点（第48図4・7）が出土している。

以上の遺物は、いずれも小破片でグリッド西側から出土している。

5 F59・60・61・62・G60・61・62グリッド地区

F61グリッドを中心とする遺跡の東側の地区である。292号方形周溝区画墓を始め、地下式坑、土坑、溝等の遺構が集中している地区である。中世遺物はF60・61・G61の3グリッド地区から出土しており、他の地区と比べ遺物の出土量が最も多い地区である。

〈F60グリッド〉（第48図、第9表、巻頭図版5、図版16・18）

貿易陶磁 - 3点41g（青磁碗2点28g12C後半～13C、同香炉1点13g）。小破片で、グリッド中央部南東側から出土している。

常滑 - 12点533g（高台付片口鉢1点11g〔第48図7〕、甕11点522g）。甕は胴部小破片で6点が砥石として再利用されている。グリッド南側から多く出土している。

以上の他、砥石として再利用の灰釉陶器・瓶の小破片1点と時期不明の壺の破片が各1点、内耳上器破片1点（第48図3・5・7）が西側から出土している。

〈F61グリッド〉（第48・49図、第9表、巻頭図版5、図版15・16・19・21・22・23）

貿易陶磁 - 8点85g（青磁碗3点28g、白磁皿1点9g13C後半、同皿or碗1点17g、同四耳壺3点31g）。小破片である。青磁碗のうち、1点は12C後半～13C頃、他の2点は13C後半～14C頃のもので、そのうち1点には体部外反に蓮運弁文がみられる。四耳壺3点は接合しないが、同一個体と考えられる小破片である。これらのうち、青磁碗2点と白磁皿、皿or碗、四耳壺2点が292号方形周溝区画墓内包含層から出土している。

瀬美 - 1刻文壺1点18g12C代。小破片である。292号方形周溝区画墓内包含層から出土している。

常滑 - 31点700g（片口鉢5点215g、甕25点475g）。小破片である。高台付片口鉢は口縁部小破片の為、図示しなかったが、灰色を呈している。I-5型式、山茶碗系。片口鉢は口縁部1点、体部1点、底部3点である。甕はI縁部1点（第48図F61-2）を除き、胴部小破片で3点が砥石に利用されている。片口鉢1点と甕6点が292号方形周溝区画墓包含層から出土した他は、グリッド内全般から出土している。

瀬戸美濃 - 22点424g（平碗4点32g、緑釉小皿3点78g、折縁皿1点14g、志野皿1点13g、盤類6点161g、折縁深皿1点7g、卸日付大皿1点10g、卸皿1点59g、鉄軸播鉢1点18g、瓶子1点8g、瓶子（梅瓶）1点19g、祖母懷茶壺1点5g）。いずれも小破片である。瓶子1点占瀬戸Ⅲ～Ⅳ期、折縁深皿Ⅳ期を除き、後期のものである。292号方形周溝区画墓上の包含層との関係では、卸皿1点が289号溝、折縁皿が290号溝上部の包含層から出土したのみで、他は、それ以外のグリッド東側の区域を中心にして出土している。

〈G61グリッド〉（第49図、巻頭図版5、図版19・21・22）

貿易陶磁 - 白磁碗1点38g。平底で外面底部と体部下端の一部が無釉。断面胎土・白色。

常滑 - 8点505g（片口鉢6点464g、甕2点41g）。片口鉢はいずれも小破片で3点が接合。いずれもⅡ-9型式のものである。甕は胴部破片で2点ともに砥石に再利用されている。

瀬戸美濃 - 22点194g（大日茶碗1点6g後Ⅰ～Ⅱ期、灰釉平碗1点7g後期、平碗6点38g後期、緑釉小皿4点19g後期、盤類3点24g後Ⅰ～Ⅲ期、播鉢型小鉢3点47g後Ⅳ期、播鉢1点14g大窯4期、鉄軸播鉢1点11g後Ⅳ～大窯2期、銷軸播鉢1点38g大窯）。いずれも小破片であり、占瀬戸後期～大窯期にかけてのものである。

これらの遺物は、すべてグリッド西側のF61グリッドに隣接する周辺から出土している。

第3節 近世の遺構と遺物

1 集石遺構と出土遺物

441号集石遺構（第50図・図版8）

遺跡南東部の台地斜面部に位置する556号台地整形区画の南西側斜面に所在しており、E62-07-08グリッドにかけて検出された。西側は斜面部の為か、削平されたような状態であった。

緩やかな傾斜面に礫（破片・小礫含む）多数と陶器片や寛永通宝の古銭等が混った形で集中して出土したことから、調査されたものである。これらの遺物は土層断面図に示されているように台地整形の斜面に位置する径3.5m程の円形状の浅い凹みの上部に存在したものである。凹みが大半埋まってから集石されたものである。

集石された範囲は東西3m、南北2.6m程の範囲で表土層下に深さ10～15cm程の中に堆積として検出されている。出土遺物の種類や出土状況からみると、埋めたというよりも一ヶ所に投棄されたような感を呈している。

出土遺物（第12表・図版27）

近世遺物としては、陶磁器類の小破片が数点と銭貨25枚（寛永通宝15枚・同鉄銭10枚）等である。その他、礫・礫片（小礫含む）多数と中世遺物11点（常滑壺9点・片1鉢1点・かわらけ1点）、縄文土器、土師器、須恵器、瓦等少量である。銭貨を除くと土器・陶磁器類は、いずれも小破片である。銭貨のうち、寛永通宝（銅銭）については第12表の通りである。

2 近世の遺物

近世の遺物（第51図、第10表、図版27）

本遺跡から出土した近世以降の陶磁器類は、破片数で1930点程、重量では15kg弱である。そのうち、遺構の覆土から出土したものが293点、317kg強。グリッド（包含層）出土のものが1802点程、11.3kg弱である。ほとんどが小破片で、器種、時期等判別不明のものが多いが、大半が瀬戸窯と美濃窯のものと思われるものである。遺構を含め各グリッドごとの出土数は次のとおりである。

〈C58・59・D58・59グリッド〉

遺跡北西部の中世居館跡の地区である。総数518点で全体の26.8%を占める。

〈D60・E60グリッド〉

002・003号溝を除き、中世遺構の検出されていない地区である。総数321点で全体の16.6%である。

〈C60・61・62グリッド〉

遺跡南西部の地区である。総数29点で、1.5%と少ない。

〈D61・62・E61・62グリッド〉

遺跡中央部南側の地区である。総数500点、25.9%であるが、大半がD61・62グリッドからの出土である。

〈F59・60・61・62・G60・61・62グリッド〉

遺跡の東側地区である。総数526点、29.1%であるが、F61グリッドでその大半が出土している。

以上が、近世（以降）陶磁器類の出土であるが、台地上の平坦部から、その大半が出土している。

これらの遺物を概観すると、中世から続いて近世初期に位置づけられる登窯1～2期のものも認められることから、この地域においては、中世から引き続いて継続的に人びとが生活していた状況がうかがえよう。遺物は、登窯1～2期のものを主体にいくつかを図示した。

第3章 まとめ

今回の発掘調査で検出された中世の遺構は、居館跡1ヶ所（掘立柱建物跡6棟、櫓列1列、ピット列2列、ピット群、堀跡2条、溝状遺構1条、土坑1基）の他、方形周溝区画墓1基、台地整形区画3ヶ所、溝状遺構27条、非戸状遺構1基、地下式坑13基、土坑59基である。また、遺物は、ほとんどが陶磁器や土器類であり、貿易陶磁、瀬戸美濃、常滑などをはじめ、かわらけ、内耳土器など多数が出土している。これらの遺物は、小破片での出土が多く、遺構から出土した遺物もほとんどが覆土中からのもので、加えて時期差の大きい遺物が同一の遺構から出土している事例が多い。この為、個別の遺構の時期の確定には難しい点もあることから、ここではまず出土した陶磁器・土器類の種類や数量、時期と出土の分布状況等遺跡全体での様相を把握した上で、遺構・遺跡の変遷等について考えてみたい。

第1節 出土遺物からみた遺跡の変遷

1 出土遺物の種類、数量と時期

中世陶磁器類・土器類のうち、産地が判明した破片は920点であり、そのうち、ある程度の範囲で時期を判別したものが497点ある。全体の内訳は、貿易陶磁器86点(9.2%)、瀬美18点(2.0%)、常滑316点(34.4%)、瀬戸美濃213点(23.2%)、かわらけ287点(31.2%)である。かわらけは小破片のものが多く、主として口縁部と底部破片を数えており、全体の1/3近くを占めている。

(1) かわらけ

287点の破片が出土している。内訳は第13表の通りであり、碗が全体の半分以上を占めている。器形の全体が判別出来るものは少ないが、底部や口縁部の形態と大きさ、調整方法等の特徴から細分すると大略以下ようになる。

<碗>

I類- 高台のような円盤状を呈す底部から体部が大きく立上げる形のものである。底径が5cm以上と大きく厚手の作りで、底部内面見込み部分にナデ（横ナデ）の無いものである。体部から口縁部を欠くため全体の器形は不明だが、口縁部が内湾気味に外反する丸味をもつ器形が想定される。(第38図001-1~7、第39図120-1~2) (12世紀後半)

II類- I類と類似する器形等のものであるが、底部内面の見込み部分にナデ（横ナデ）の有るものである。(第38図001-8~15、第39図093-1・120-3~5、第41図148-1) (13世紀中頃~後半)

III類- I類に比して、底径が5cm以下と小さく、底部も円盤状底部の痕跡を示すかのようにわずかに突出する形のもので、底部内面の見込み部分にナデ（横ナデ）の無いものである。(第38図001-16~19、第42図285C-2) (13世紀)

IV類- III類と同様の器形等を呈すものだが、底部内面の見込み部分全体をナデ消しているものである。(第38図001-20、第39図238-2) (13世紀)

V類- I・II類のように底部が突き出ず、平部で浅めの碗である。胎上がきめ細かく、淡黄褐色を呈するものがほとんどである。口縁部から底部にかけての破片であり、底部全体が遺存しているものがないため、底部内面の見込み部分を中心とするナデ（横ナデ）の有無については、ほとんどが不明である。只、次のA類にナデの有るものが2点あることから、この種の碗にも底部見込み部にナデ（横

ナデ)を有しているものがあることは確かである。ここでは、とりあえず器高によって次の2種に大別しておきたい。(13世紀前半～中頃)

- A. 器高が3cm内外のもの。(第38図001-21～24, 第39図3号掘立・120-8～9・328-1)
- B. 器高が2cm内外と皿に近いもの。(第38図001-25～27, 第39図120-10～12)

<皿>

- I類-底部が円盤状に突き出る形を呈するもので、厚手で大型のものである。口縁部は内湾気味に立上っており、浅く、口唇部が薄くなるものである。底部内面見込み部にナデ(横ナデ)は無い。(第38図001-28)(12世紀後半)
 - II類-底部がわずかに突出する形を残す。厚手で大型のものであるが、浅く口縁部は内湾気味に立上っているもので、底部内面見込み部分にナデ(横ナデ)のあるもの。(第38図001-29～31, 第39図051-1・120-13～14・238-1・328-2～3, 第41図290-1)(13世紀前半)
 - III類-底部平底で、小形の皿である。器高が1.5cm内外で全体的に浅い皿であり、底部内面(見込み部分)にナデ(横ナデ)の無いものである。器形等からみると次の3種に細分される。(第38図001-32, 第39図120-16)(13世紀前半)
 - A. 器高が1.5cm未満と浅く、肉厚で口縁部も厚手のものである。
 - B. A類と類似するが、口唇部が薄くなるもの。
 - C. 全体的に薄手のもの。
 - IV類-平底薄手で、底径大きく口縁が垂直に近く内傾気味に立上るものである。底部内面に見込み部にナデ(横ナデ)のあるものである。(第38図001-33・36, 第41図290-2)(13世紀前半)
 - V類-有段口縁の皿である。器高が高く、厚手で底部内面にナデの有るもの。(第38図001-34～35, 第40図288-11)(13世紀中頃～後半)
 - VI類-底部平底で、やや深目の皿である。体部がゆるやかに立上り、口縁部が開くように外反する器形で、底部内面にナデのあるものである。(第39図120-17)(13世紀後半)
 - VII類-内断面が三角形を呈す小形の皿である。わずかに立上りをもつ小さな底部から、口縁部がゆるやかに外反するものである。003号溝覆土中から同一個体と考えられる破片が2点ある。(第41図003-1～2)(15世紀～16世紀)
 - VIII類-VII類と類似する小形の皿である。平底の小さな底部から口縁部が直線的に開くように外反する器形のものである。1点のみの出土である。(第47図C62-4)(15世紀～16世紀)
- かわかけ類は、総て破片で、大部分が小破片の爲、成形技法や底部切り離し等については少数のものしか確認出来なかった。その中で円盤状底部及びそれに類するものは、回転系切り、無調整あるいは回転系切り後周辺のみヘラナデ等を行っているものが多く認められた。回転系切りは右回転のものが多い。その特徴から碗をI～V類に、皿をI～VIII類に細分してみた。器形や法量等の特徴と底部内面見込み部分を中心とした成形後のナデ(横ナデ)の有無等をもとに年代比定を行うと、第13表の通りである。時期が判別出来るものでは、碗類は、12世紀後半～13世紀代のもののみである。そのうち、12世紀後半のものが20%弱で、13世紀代のものが80%程を占めている。皿類は12世紀後半のもの1点と、15世紀～16世紀のものが3点以外はすべて13世紀代のものである。時期不明のものが43点あるが、これらの点からみると、かわかけ類が使用された年代の主体は12世紀後半～13世紀後半であったことが想定される。

(2) 貿易陶磁器

86点のうち、292号方形周溝区画臺主体部から出土した青磁碗・皿、白磁皿各1点を除く83点はいずれも破片であり、小破片が大半を占めている。内訳は第14表の通りであり、青磁類が全体の72%程を占めている。なかでも碗類は全体の約53%と半数以上を占めており、体部内面に劃花文をもつものと、外面に錦蓮弁文をもつものがある。多くが龍泉窯系である。白磁類は全体の21%程である。皿4点のうち3点はⅡ期の口ハゲのものである。四耳壺の小破片4点は、同一個体と考えられるものである。青白磁は3点と数少ないが、うち1点は外面天井部に鳳凰の羽根の文様のある小破片である。これらの貿易陶磁器は時代的にみると12世紀後半～13世紀にかけてのものと、13世紀後半～14世紀にかけての2時期に大きく分けられる。そして、14世紀代としたものは時期細分の特定出来ない1点のみであることからすると、遅くとも14世紀前半の早い頃までで本遺跡地への搬入が終わっているものと思われる。

(3) 瀧美

18点の破片は、大半が小破片で砥石として再利用されているものが多い。内訳は第15表の通りである。13世紀後半の片口鉢（捏鉢）以外は、12世紀～13世紀にかけての製品である。壺、瓶子類には、黄緑色の灰釉のかかった頸部から胴部にかけての小破片であるが、突帯蓮弁文が二段にめぐる優品もある。

(4) 常滑

316点の破片が出土している。砥石として再利用されているものも多く、大半が砥石用として意識的に割られたと考えられる小破片である。内訳は第16表の通りである。壺が大半を占めるが、口縁部破片はわずかに25点、底部破片は20点で、ほとんどが胴部破片である。この為、壺についての時代の判定は難しいが、時期判別の可能な口縁部破片からみると、2型式～5型式（12世紀中頃～13世紀中頃）から9型式（15世紀前半）までの製品である。そのうちの4点は6型式の13世紀代までのものである。片口鉢（捏鉢）は、2型式～11型式（12世紀前半～16世紀前半）までの長い期間にわたり通時的な出土を示すが、51点のうち、高台付の2型式～5型式（12世紀中頃～13世紀中頃）のものが16.3%を占めている。

(5) 瀬戸美濃

213点の破片が出土している。内訳は第17表の通りである。1個体分の粗母液茶壺の破片数を除くと、平碗類と皿・盤類の出土数が半数以上を占めている。時期は13世紀後半～17世紀初め頃までの製品が出土しているが、本遺跡で最も古い製品は、13世紀中頃～後半の古瀬戸Ⅲ～Ⅳ期に比定される瓶子1点のみである。次いで、中期Ⅰ～Ⅱ期（14世紀初め～前半）の瓶子（梅瓶）6点と底卸皿2点、同Ⅳ期（14世紀中頃）の折縁深皿1点がある。瀬戸美濃製品のほとんどは後期（14世紀後半～15世紀後半）から大窯期（15世紀後半～17世紀初め）にかけてのもので、なかでも後期のものが136点と全体の64%近くを占めている。

以上、陶磁器類・土器類について、その種類別に数量や時期についてみてきた。それらを遺跡全体で取りまとめると第18表の通りであり、産地の判明した920点の中世陶磁器、土器類のうち、編年や時期が判明出来た破片は497点である。12世紀中頃～17世紀初め頃までの製品が通時的に出土しているが、年代的な出土量や種類の推移をみると、次のような特徴がうかがわれる。

1. 種類別の出土量を見ると、かわらけ31.2%、貿易陶磁器9.2%、瀧美2.0%、常滑34.4%、瀬戸美濃23.2%である。常滑とかわらけが高く、瀬戸美濃製品がそれに次いでいる。常滑製品については、砥石として再利用された、あるいは、その目的で小破片となったと考えられるものが多い点を加味する

と、小破片が多いとは言え、かわらけ類の割合が高い点は特徴的である。また、貿易陶磁器も86点と全体の二割近くを占めており、出土量としては多い点がかがわれる。

2. 年代的にみて、全体として出土量が多い時期は、13世紀代～14世紀にかけての時期であり、15世紀代と12世紀代～13世紀にかけての時期がそれに次いでいる。これに対して、出土量が少ないのは、14世紀代と16世紀代であり、特に14世紀代中頃の時期のものが最も少ない。これに通時的な観点を加えてみると、増加の時期が13世紀を中心にして12世紀中頃～14世紀にかけての時期と15世紀を中心とする2時期に大きく分けられること。そして、その間の14世紀中頃が最も少なく、16世紀に入ると次第に減少しながらも17世紀へと続いていくことがうかがわれる。
3. 陶磁器類の年代的な産地構成をみると、出土量の最も多い13世紀代を中心にして12世紀中頃～14世紀にかけての時期では、かわらけ、貿易陶磁器、渥美、常滑の各製品で構成されていること。これに対して、14世紀前半～中頃以降は、瀬戸・美濃製品と常滑製品であり、14世紀前半～中頃を境として、陶磁器・土器類の種類が大きく変わっていること。特に、渥美製品はもとより、かわらけ、貿易陶磁器が前者の時代で、ほぼ終わっている点は、特徴的であり、前者と後者の時代で本遺跡の性格が大きく変化していることを示しているものと思われる。

2 出土遺物の分布

中世陶磁器類・土器類920点のうち、遺構から出土したものが622点、包含層（グリッド）出土のものが290点、表採8点であり、包含層出土のものも多く全体の3分の1近くを占めている。分布範囲は、調査区域全体に及んでいるが、種類別にその出土量を遺構と包含層出土のものを合わせて小グリッドごとに破片点数で表わすと第52～56図のとおりとなる。また、この点を踏まえ、遺構の分布区域と重ね合わせて、①調査区北西部の居館地区 ②南西部の607号台地整形区画周辺地区 ③中央部の002号・003号溝状遺構南側地区 ④東西に長く延びる148号溝状遺構周辺地区 ⑤292号方形溝状区画墓地区 ⑥調査区東側の地下式坑・土坑・溝状遺構群地区 の①～⑥の地区別・種類別に出土量をみると第19表に示したとおりである。これらを見ると、各遺構の所在する地区ごとに陶磁器・土器類の出土量・種類・年代に各々特徴がみられる。それらを大略列挙すると次のような点があげられる。

1. 全体として出土量が最も多い地区は、①居館跡の所在する調査区北西部のC58・59・D58・59大グリッド地区（以下①地区と呼ぶ）と⑥調査区東側の地下式坑・土坑・溝状遺構が集中して分布するF61大グリッドとその周辺のF59～62・G60～62大グリッド地区（以下⑥地区と呼ぶ）である。前者が374点で全体の約41%。後者が325点35.7%で、両者合わせて全体の76.7%を占めている。出土量の最も少ない地区は、②調査区南西部の607号台地整形区画周辺のC60・61・D61・62（一部）大グリッド地区（以下②地区と呼ぶ）で、わずかに35点3.8%である。種類別にも貿易陶磁器と渥美は全く出土していない。その他の区域では、③調査区中央部の002号・003号溝状遺構の南側のD60・61大グリッド地区（以下③地区と呼ぶ）は、002号・003号溝以外は中世遺構の検出されなかった地区であるが、003号溝からだけでなく包含層からの出土もあり、少量とはいえ②地区より多く53点5.8%の出土がある。また、④調査区中央南側の台地斜面近くを東西に長く走る148号溝状遺構とその周辺のD61・62・E61・62大グリッド地区（以下④地区と呼ぶ）は、75点8.2%で、分布は148号溝とその周辺の他、台地南斜面か

らも常滑・瀬戸美濃類が出土している。⑤292号方形周溝区画墓区域（以下⑤地区と呼ぶ）は、地域的には⑥地区の西側に位置するが、方形に廻る周溝によって、墓域が形成されていることから、別途⑤地区として定めて、遺物の出土分布状況を示した。出土点数は50点と少ないが、周溝と重複する溝や包含層出土を含めた出土量は16m×16m程の広さ（周溝の外側上端での計測面積256m²）の中では出土密度が特徴に高い。

2. 次に、1でみた全体的な出土量を踏まえ、種類別・出土量を加味して①～⑥の地区をみると、次のように地区ごとに様相が異なっていることがわかる。

かわらけ類—①地区では、出土数374点のうち、269点とその大半をかわらけ類が占めている。そして、このかわらけ類は遺跡全体の出土量の94%を占めており、本遺跡でのこの地区の遺構群とかわらけ類の密接なつながりを示している。この地区では包含層から7点が出土したほかは、すべて「堀」とした001号・120号溝状遺構と掘立柱建物の柱穴・ピット群等の遺構からであり、その大半が001号・120号溝状遺構からである。かわらけ類は、その他の地区では⑤地区で6点が出土したほかは、わずかに12点が8ヶ所から出土したのみである。その中には、②地区の包含層と③地区の003号溝から出土した15世紀～16世紀のかわらけ小皿3点が含まれている点を考えると、かわらけ類はほとんど①地区で使用され、その一部が⑤地区でも用いられたと理解することが出来る。

貿易陶磁器—かわらけ類程ではないが、同様に①地区が最も多く、31点と全体の3分の1以上（37.3%）を占めている。これらは、2号掘立柱建物の柱穴跡から3点が出土したほか、001号・120号溝から16点と半数以上が遺構からの出土である。そして、包含層出土の13点も、10点が001号・120号溝の上部の包含層から出土していることからすると、この①地区出土の貿易陶磁器は、かわらけ類と同様に居館で使用されていた可能性が高いものと考えられる。その他の地区では、②地区は出土が無く、③～⑥地区が各々10点（12%）から17点（20.5%）の出土であるが、その中でも、⑤地区の方形周溝区画墓地区とそれに隣接あるいは近接する区域に出土が集中する傾向がうかがわれる。特に、⑤地区では、狭い区域内で13点が出土しており、出土密度が高い点が特徴的である。そして、更にこの⑤地区に隣接・近接する区域では、③・④地区のE60-86・E61-05・06・35・88グリッドから6点、⑥地区のF60-85・87・93・F61-03・04・07・13・35・49・53・63・68・78・F62-07・G61-61グリッドから17点が出土しており、⑤地区と合わせて36点を占め、この地域での貿易陶磁器出土率の高さを示している。また、出土した貿易陶磁器の種類をみると、他の地区同様に、碗・皿類が大半であるが、その中で、白磁四耳壺の破片4点が⑤地区と、それに隣接する⑥地区のF61-63グリッドで1点が出土している。他にも、香炉の口縁部小片が⑥地区F60-80グリッドから1点、香炉又は壺の口縁部細片がE61-06グリッドから1点出土しており、白磁四耳壺、香炉、あるいは壺の出土は、この地区のみの上出であることからみると、これらの貿易陶磁器類は⑤地区の方形周溝区画墓とその周辺地域で使用されていた可能性が高いことを推測させる。なお、③・④地区のその他の地区では、溝状遺構から出土したほかは、包含層からの出土も多く、それらは各グリッド当り1点の出土率で、広い範囲の中で散在している状態であることからみると、下部の遺構との関連性は薄いものと判断される。

瀝美製品—全体で18点と数少ないが、①地区と⑤地区が各6点と3分の1づつを占めている。この他では、④地区2点、⑥地区4点であるが、④地区の1点と⑥地区の2点は⑤地区の方形周溝区画墓に隣接、あるいは近接する溝や包含層中からの出土である。これらの点からみると、瀝美製品も、主として①

地区と⑤地区で使用された可能性の高い陶器であると考えられる。

常滑製品-316点と最も出土量が多く、①～⑥地区の調査区全域で出土しているが、その中で、⑥地区が155点と全体のほぼ半数(49.5%)を占めている。次いで、④地区50点(16%)、①地区47点(15%)、③地区23点(7.1%)、⑤地区22点(7%)、②地区16点(5.1%)の順である。常滑製品は、甕の破片数が最も多く258点(81.6%)と8割以上を占めており、次いで片口鉢(捏鉢)が51点(16.1%)である。甕は胴部破片が多く、時期の判別可能な口縁部破片が5点と数少ないが、片口鉢を主体としたおおよその年代の判明する41点のものから、地区別に年代的な分布時期をみると、次のような傾向がうかがわれる。甕類・片口鉢ともに12世紀代～15世紀代そして16世紀中頃までのものが出土しており、本遺跡へは最も長い期間に渡って搬入されていた製品であるが、①地区では、13世紀前半～中頃の高台付片口鉢が8点、13世紀後半の甕が1点で、14世紀以降のもの出土が無いこと。これに対し、⑥地区は、12世紀代の高台付片口鉢1点の他は、13世紀代のものが最も多く高台付片口鉢と甕の10点を数える。そして、それ以降も14世紀代では片口鉢1点と減少するが15世紀前半8点、同後半1点、16世紀前半3点と数は少ないが、継続的に出土しており、①地区とは対照的である。その他の区域で年代の判明するものは、②地区は、溝から6点のほかは包含層からの出土であり、溝の覆土中から出土した13世紀後半の甕と片口鉢2点のみである。③地区は003号溝の8点以外は包含層中からの出土であり、包含層中の1点に13世紀後半の甕1点がある。④地区は、⑥地区以外では、出土が多い地区であるが148号溝等から16点と、410近世集石遺構中から10点が出土した他は、包含層中からの出土であり、年代が判明するものは、E62グリッド包含層中から出土した13世紀後半の片口鉢1点のみである。⑤地区は、周溝や重複する溝等から9点の他、包含層中から13点が出土しているが、ほとんど甕の胴部破片である。年代の判明出来るものとして13世紀前半の片口鉢1点と溝から出土の14世紀代の片口鉢1点がある。

このようにみえてくると常滑製品については、年代の判別可能なものが少ないとはいえ、①～⑤地区と⑥地区では対照的なあり方を示している。すなわち①～④地区では、13世紀代までのもので、それ以降の年代のものは無い。これに対して、⑥地区では、13世紀代までのものは、①地区と同様であり、14世紀代のもので1点のみであるものの、15世紀～16世紀中頃までは数は少ないが継続的に出土がみられることである。なお、⑤地区は13世紀前半と14世紀代の片口鉢各1点で、①～④地区のあり方に類似している。

瀬戸美濃製品-陶磁器では常滑製品に次いで多く、213点を数えるが、その約7割の146点が⑥地区からの出土である。その他では、①地区20点(9.5%)、②地区16点(7.6%)、③地区15点(7.2%)、④地区10点(4.8%)、⑤地区3点(1.4%)である。①地区がやや多く、⑤地区が最も少ない。出土量の最も多い⑥地区では、F61大グリッド区域における溝や地下式坑、土坑群の覆土中からの出土が103点と約7割を占め、包含層(グリッド)からの出土は約3割の43点である。これに対して、他の地区では、遺構からの出土はわずかに①地区1点(ピット群からの出土)、②地区1点、③地区2点、④地区1点であり、包含層からの出土が圧倒的に多い。年代別に出土分布をみると、最も古い前期Ⅲ～Ⅳ期(13世紀後半)から中期Ⅰ～Ⅱ・Ⅳ期(14世紀前半～中頃)のものが9点あるが、これらは③・⑤・⑥地区からの出土であり、前期・中期のもの①・②・④地区からの出土は無い。分布地域をみると、③地区と⑤地区から中期Ⅰ～Ⅱ期のものが各1点のほかは、⑥地区から前期Ⅲ～Ⅳ期、中期Ⅰ～Ⅱ期6点、Ⅳ期1点であるが、その出土地は、⑤地区の方形固溝区画墓とそれに隣接あるいは近接する地点

(F61-06・F61-04・37・45・46・77グリッド)からである。器種をみると中Ⅱ期の卸日皿2点(接合し1個体となる)と中Ⅳ期の折縁深皿1点の他6点が甌子(梅甌)であり、いずれも破片であるが、砥石としての再利用のないものである。これらの点からすると、これらの製品はあるいは⑤地区の方形周溝区画墓に関係して用いられた可能性も考えられるところである。次に後期に入ると⑥地区を中心として、遺跡全体(①～⑤地区)から出上してくるが、⑥地区以外は少量である。⑥地区では出土数146点のうち、後期(14世紀後半～15世紀後半)が127点と9割近くを占めている。そして、細別不明の51点を除くと、後Ⅰ～Ⅲ期のものが36点、Ⅲ～Ⅳ期のもの40点であり、後期を通じて継続的に搬入され使用されていたことをうかがわせている。しかし、その後は後Ⅳ期～大窯Ⅱ期(15世紀中頃～16世紀中頃)のもの4点、大窯期(15世紀後半～17世紀初め)が7点と急激に減少している。これに対して、その他の地区では、①地区では、後期13点のうち後Ⅰ～Ⅲ期が7点、後Ⅲ～Ⅳ期が3点、後Ⅳ～大窯期5点、大窯期2点である。全体に少量であるが後期Ⅰ～Ⅲ期が多く、年代を経るにつれ減少している。②～④地区は、後Ⅰ～Ⅲ期、Ⅲ～Ⅳ期、大窯期を通じて2～4の小グリッドから各1点づつが散在して出上がみられる程度である。なお、その中で②地区のC62大グリッドに位置する607号台地整形区画からは、後期Ⅲ期のもの1点のあと、後期Ⅳ～大窯Ⅱ期の段階のもの3点、次の大窯期のもの4点が出土しており、他の地区と比べると遅れて後期後半以降になってからのものとなっている。また、⑤地区では瀬戸美濃製品の出土はわずか3点と、他の製品と比べ最も出土数が少なく、後期のものは包含層から2点(後期Ⅰ～Ⅲ期1点・後期Ⅰ点)が出土しているだけであることから、遅くとも後期後半頃には山林化していた可能性もなくはない。

3 遺構の分布とその変遷

今回の調査で検出した中世遺構は、居館跡1ヶ所(掘立柱建物跡6棟・冊列1・ピット列2・ピット多数・堀跡2条溝状遺構1条、上坑1基)と方形周溝区画墓1基、台地整形区画3地点、溝状遺構27条、井戸状遺構1基、地下式坑13基、土坑59基である。

これらの遺構群は、その分布をみると調査地域の台地の中で、台地中央部付近にはほとんど検出されず、北西部の区域と台地の東側。南側に分布が集中している点に特徴がある。その分布を細かくみると、北西部の区域に所在する居館跡の遺構群の南から南東側が遺構の所在しない区域となり、その東側の居館の建物群から110m以上離れた地に方形周溝区画墓と溝状遺構、地下式坑、土坑群等の大半が所在していること。更に、台地整形区画が台地東側の北側と南側斜面部、そして台地南西部の南側斜面部に各々位置するほか、溝状遺構が台地南西部と南側の台地上から斜面部にかけて所在しており、あたかも、居館跡を意識するかのように、他の遺構群が離れて占地していることがうかがわれる。

それでは、次に遺構ごとにその変遷をみていこう。

居館跡-調査区域の面積が少なかったことから、堀跡と把握した溝2条と掘立柱建物跡6棟等が検出されたにすぎないが、掘立柱建物は、調査区域の南側に延びることが明白なことから、6棟以上の建物が存在していたことは間違いないだろう。これらのうち、2号掘立柱建物跡は検出された建物跡の中では最も大きく、扉付建物で身舎の大きさが4間×3間で、柱間間隔は2.1mを基本とし、53.8㎡の広さである。6ヶ所の柱穴に大きな根石が残されていたが、中世の掘立柱建物で根石をもつもの(あるいは礎石建物)は少なく、本県では千葉市猪鼻城跡(註1)や成田市駒井野西ノ下遺跡(註2)、長南

町岩川遺跡(註3)等数例しかない。3号・4号掘立柱建物跡は全容はわからないが、又異なった形態・規模のものであり、仮に2号建物を主屋とみると、これらの建物群は、主屋とそれに付随する建物群で構成されている様子がうかがわれる。また、建物の柱間寸法をみると、2.1mが主で、2.0mや2.4m等若干認められる。鎌倉で検出されている建物の柱間寸法は、鎌倉時代前期で2.1m、後期で礎石建物が2.1m、掘立柱建物が2.0mに集中する傾向があり、高い規格性が認められることが指摘されている。そして、その背景には建築技術や大工の系統性だけでなく、幕府の統制による規格材の流通を想定することが可能である点も指摘されている(註4)。このような指摘を踏まえて掘立柱建物群の様相をみると、そこに鎌倉へ出仕していた武士階級の存在をうかがうことが出来るのではないだろうか。

建物群の配置をみると、2号建物と建物方位が直交する形の3号・4号建物等が古代の官衙建物のように整然とした形で配置されている。更に、2号建物は6号建物や2号ピット列と重複していること等から、この建物群にも時間的な差が認められること。そして、小破片ながらも柱穴から出土した数少ないかわかけ類や貿易陶磁器類(13世紀前半頃の同安窯系の皿や13世紀前半～中頃のかわかけ碗等)からみると、掘立柱建物群は13世紀後半頃を中心とするものと理解出来るのではないだろうか。そして、このような建物群とその配置や規模・形態、更に堀跡(溝状遺構)と柱穴跡や包含層から出土したかわかけ類や貿易陶磁器類の質や量から合わせみると、この居館跡は検出された規模以上の建物群で構成された、この地域では有力な在地領主層の居館跡ではなかったかと推測されるものである。南北に走る堀跡は25m程が検出されたに過ぎないが、この調査区域の南側でこの堀跡(001号溝)と同様の規模・形態で東西に走る溝(003A号溝)が長さ30m程検出されている。南北溝の001号溝と東西溝の003A号溝を各々南と西に35m程延ばすと、ほぼ直交することから、003A号溝は001号溝と同じく居館を区画する同一の溝(堀)の可能性が高いと考えられる。この点を踏まえて、この居館の規模を想定すると、現状では、少なくとも南北に60m、東西に65m程の規模はもつ。更に、1号掘立柱建物跡が調査区域外の北側へ延びていることからみても、この居館は北側へ更に延びることは確実である。そして東側をみた場合、003A号溝の東側は未調査区域が28m程あるが、更にその東側の調査区域では、003A号と類似する溝は検出されていないことから、この居館が方形区画を呈すものと想定すると東西溝の長さは最大で93m程で、それ以内が想定出来る。一方、南北溝の長さについては、現状では全く推測の域を出ない。調査区域の中程から北側寄り、溝の底が一段高くなる場所があり、報文(第2章第1節1)で当初土橋が存在した可能性について言及しているが、その地点から東西溝(003A号溝)との直交地点までは50m程である。建物群の配置や、この溝の底の一段高くなる箇所を土橋あるいはその後の木橋の部分とみて、居館の中央部付近とした場合、南北100m程の長さが想定可能である。このような観点から、この居館の規模を推測すると最大値で南北100m、東西90m程の方形居館を想定することが出来るのではないだろうか。

居館全体の時期については、出土遺物からみると、この地区では、主体をなすかわかけ類と貿易陶磁器類そして源美・常滑製品が12世紀後半代から14世紀初頭頃までのものであること。14世紀前半～中頃のものは見当たらず、14世紀後半に入ってから瀬戸美濃製品の後期Ⅰ～Ⅲ類が少量出土してくること等からみると、この居館は、12世紀後半から末頃までの間に造営され、14世紀初頭(ないしは前半)頃までの間、存在し機能していたものと考えられる。そして、要宮の場での器であるかわかけ類が12世紀後半～13世紀前半頃と13世紀後半代のものが多いこと。貿易陶磁器も12世紀後半～13世紀に

かけてのものと、13世紀後半から14世紀にかけてのものが多いことから考えると、この居館は、造営された当初の12世紀後半～13世紀にかけての頃と、後半期の13世紀後半頃が特に盛行期であった可能性もなくはないだろう。

以上、居館跡の規模・形態・年代等についてみてきたが、類型を求めると近辺では、我孫子市羽黒前遺跡の方形居館跡がある(註5)。この居館は、約130m×100mの方形単郭の一部に二重の堀を廻らせた複郭の居館が構築されたものであることが確認されている。出土遺物等から13世紀～15世紀頃の年代のもので、この地を支配した相馬氏の居館の可能性が高いと考えられている。また、周辺地域をみると、茨城県つくば市烏名前野東遺跡(註6)では、方1町規模の方形に廻る堀と内部に掘立柱建物を配した方形居館が検出されており、時期は13世紀後半～14世紀前半頃にあてられている。この居館跡からは、上樓の北側から大量のかわらけが出土しており、居館内部で儀礼や宴宴などが行われた在地支配階級の居館跡と考えられている。方形に堀を廻らし、内部に掘立柱建物を配置する方形居館は、近年各地で検出されてきているが、羽黒前遺跡や烏名前野東遺跡の事例等からみても、本遺跡の居館跡を在地支配階級の居館とみることに異論はないのではないだろうか。

方形周溝区画墓-時期の特定可能な出土遺物として、主体部である土坑墓に副葬された貿易陶磁器3点と和鏡1点がある。このうち、貿易陶磁器は鎗蓮弁文の施された青磁碗と同皿各1点、白磁皿1点である。青磁碗・同皿は龍泉窯系製品であり、横田・森田福年のⅢ類、白磁皿はⅣ類に該当するもので、13世紀後半～14世紀初頭にかけての頃のものと考えることが出来るだろう。又、和鏡は蓬菜鏡で、その特徴からすると蓬菜鏡のなかでも、背面の文様が精緻で、全体的に丁寧な作りのものである。(註7)。発掘調査によって遺跡から出土した蓬菜鏡については、事例を余り調べることが出来なかったが、県内では市川市中山法華経寺祖師堂跡(註8)のものがある。これは14世紀後半に想定される第4面から出土している。径11.5cm、縁高9mmで、外側の圏上には球文を施し、内側の圏は8稜をなしている。報文では背面の絵文様の様相については記されていない。報告の図からみると下辺の波立つ蒼海の部分が欠けているが、その右辺には松等が繁る山岳が、上辺には対向式の双鳥が配置されている絵文様は本遺跡のものと類似するが、外区には絵文様はなく、鈕の亀が左横向きの型で配されている点など異なった点もみられる。又、栃木県河内郡上三川町北原東遺跡(註9)からは、1.08m×0.88m程の隅九方形と推定される土坑墓から鏡面を上として漆器鏡箱に納められたものが出土している。径9.6cm、重さ78gのもので、鏡背絵文様は、中央の鈕座に花卉を利用した亀を下向きに置き、下辺には蒼海を右辺には波間に浮かぶ山岳を、上辺には双鶴を描いており、報告書の写真でみると、構成は本遺跡のものに類似するが、絵文様は全体に簡素で、厚さも薄い感じがするものである。時期はその特徴から平安時代後期(12世紀頃)に比定されている。これらを参考にしながら、出土品ではないが、佐原市大戸に所在する大戸神社蔵の正中2年(1325年)の學書紀年銘のある蓬菜鏡(註10)と比較すると、本遺跡の蓬菜鏡は小型だが、背面全面に施された絵様は全体に密で、豊肉精緻な表現と各部の丁寧な作りを呈していることからみると、大戸神社の蓬菜鏡よりも古様を呈しており、少なくとも13世紀代の作品と考えて良いのではないだろうか。

そして、この方形周溝区画墓の被葬者である女性の死亡推定年齢が壮年後半から熟年あたりであること。副葬された和鏡と櫛、白磁皿、菊花形皿、料紙等は被葬者である女性の使用した化粧道具であり、青磁碗・皿は食膳具であると考えられることからすると、少なくともこれらの副葬品はこの女性

が成人してから手にし、日常的に使用していた持ち物であると判断して良いと思われる。これらの点を考え合わせると、この区画墓は副葬品と年代の大きな差のない13世紀後半～14世紀初頭頃までの間に造営された可能性が高いのではないかと考えられる。

なお、本遺跡周辺や房総地域では、この時期の墓で、このような方形に廻る周溝で墓域を区画し、その内に土坑墓を配置した形態の墓は、これまで知られていない。関東近県でみた場合でも、同様のものは無いが、神奈川県横濱市上台の山道跡(註11)で、幅1.2m～1.8m、深さ30cm～50cmの溝が、東西10.6m、南北9.8mの範囲を四角く圍繞する13世紀前半頃の方形環濠墓が1基検出されている。しかし、この墓は、西辺中央部が周溝が廻らず土橋状を呈しており、内部も中央部に2ヶ所、南東コーナーに1ヶ所の掘り込みがあり、そこに計4個の骨蔵器がほぼ正位の状態で埋設されていたことからみると、本遺跡の方形周溝区画墓とは異なったものと考えられる。又、静岡県磐田市一の谷中世墳墓群遺跡(註12)では、本遺跡の区画墓と同様に方形周溝で区画した内部の中央部付近に土坑墓を設置した墓や方形に区画した「塚墓」が多数検出されているが、小型で本遺跡事例のような規模のものではなく、出土遺物にも大きな差がある。このなかで、本遺跡例のような規模の方形周溝をもつ中世墓としては、遠く、中国地方であるが、鳥取県倉吉市不入岡遺跡等がある。不入岡遺跡(註13)からは、方形に周溝が全周する長軸11.2m、短軸7.9mの1号墳をはじめとして、同様に方形周溝が廻る墓が13基検出されている。只、上部が削平されている為か、周溝内に埋葬施設があるものや内部中央部近くの掘り込みから骨蔵器が出土したもの等のほかは、埋葬施設が不明なものが多い。又、同市船津遺跡(註14)では方形周溝を伴う一辺7mの方形墳墓があるが、小型で、内部に土坑墓は検出されていない。このように、本遺跡の方形周溝区画墓は、これまでのところ類型に乏しいが、副葬された出土品から化粧道具についてみると、中世の上流階級の女性の化粧道具として現存する三嶋大社や熊野速玉大社に奉納された資料(註15)にも類似する内容をもつことを想定させるものである。近年では、鎌倉市内の遺跡からも女性の化粧用具の出土割合が増えているが、本遺跡の事例のようなものはない。また、方形周溝等での区画をもたない単独の中世土坑墓で、和鏡等が副葬されていた事例を本遺跡周辺地域でみると、近年では出土遺跡が増加している。なかでも、本遺跡の西側に隣接する西平井根郷遺跡(註16)からは、鎌倉時代前期の和鏡(菊花双雀鏡)と短刀、和はさみを出した土坑墓が検出されている。この遺跡は正式な調査報告書が未刊のため詳細は不明であるが、本遺跡地から道路を隔てた西側の台地上に広がる遺跡であり、本遺跡と合わせて広く同一の遺跡となるものと思われる。この西平井根郷遺跡の土坑墓は1.75×0.55m程の規模のもので、検出面からの深さ15cm程と浅い土坑墓であった。和鏡は鏡面が上になり、面の上半分には植物繊維・麻紐・和紙と和はさみの一部、人骨の一部が付着し、その下には鏡を納めていたと考えられる木製の箱の一部があった。又、短刀は鏡の南側から出土している。本遺跡の居館跡からは西100m程の位置にあり、副葬品の内容は本区画墓の副葬品に類似しており、その年式からみると、居館がすでに所在していた時期にあたることから、本遺跡の方形周溝区画墓よりは早い時期の、この居館に関係した人物に係る女性の墓ではないかと推測される。また、前述した相馬氏本宗家の居館跡と考えられる遺構群が検出された我孫子市羽黒前遺跡(註17)では、火葬墓の集りする区域外の場所で、和鏡(秋草双鳥鏡)と鉄製はさみ、鞘に収めた短刀、かわらけ2点、青磁刺文花碗破片を出した12世紀頃の墓が単独で検出されており、副葬品からみて身分の高い女性の墓と考えられている。その他、船橋市印内遺跡(註18)では、12世紀～13世紀にかけて、その一帯

の支配者層と考えられる人々の土坑墓が15基以上発見されている。その中で、平安時代末期の端花双鳳五花鏡とそれを納めた鏡箱が出土している土坑墓からは屈葬で西向きの姿勢をとって埋葬されていた女性の骨が検出されており、西方浄土に向かって合掌した姿勢を示していると考えられている。更に鎌倉時代の水草双鳥鏡が副葬された20歳前後の女性の墓、後頭部に短刀一振が副葬された20～30歳代前半の女性の墓、あるいは短刀のみ副葬された墓、性格不明の老人1体と短刀一振、かわらけ4点の副葬された12世紀代の墓など多様である。このようにみえてくると、西平井根郷遺跡や我孫子市羽黒前遺跡のものが、この方形周溝区画墓の副葬品に最も類似するが、それにしても本遺跡周辺地域では、この方形周溝区画墓とその副葬品類と同等のものあるいは凌駕する中世墓はこれまでの所例がない。

以上の点からみると、この292号方形周溝区画墓に埋葬された女性は、かなりの有資産者で財力があり、在地にあっては特に高い身分の者であったものと考えられる。なお、検出された人骨の骨が西向きであったことからみると、この墓に埋葬された女性も、印内台遺跡の埋葬者と同じく、西方浄土に向かって合掌していた可能性も考えられるだろう。

台地整形区画 - 遺跡南東部の南側台地斜面部と北東部の北側台地斜面部、南西部の南側台地斜面部の3ヶ所で見出されている。このうち、遺跡南東部の556号と北東部の605号台地整形区画は、ともに調査面積が狭い範囲での確認であった為、平場等の様相が不明である。近年調査事例の多いこの種の遺構では平場において、掘立柱建物跡や地下式坑、土坑等の遺跡群が検出される事例が多いが、この点からみるとこの556号と605号は、そのような台地整形区画であったかどうかは明らかにし得ない。且、近世陶磁器類の出土も少なく、出土遺物に常滑等の中世遺物が存在し、溝状遺構や地下式坑、土坑の集中する地域に所在する点からみると、15～16世紀には台地整形がなされていたものと推測される。一方、これに対して、南西部の607号台地整形区画は、平場をもち、地下式坑、土坑が所在していることから、全容は明らかではないが、「屋敷地」などとして一般化しつつある事例の多い台地整形区画として認められるものである。出土遺物は包含層から13世紀後半の常滑片1鉢の小破片が出土したほか、15～16世紀頃のかかわらけ小皿1点と、15世紀後半以降の瀬戸美濃製品が8点出土している。そして、この他に近世初頭の瀬戸美濃志野皿1点を含む近世陶磁器小破片13点と中世末頃から近世の内耳土器が19点出土しており、特に内耳土器はこの605号台地整形区画の所在するC62グリッドとその北側のC61グリッドからしか出土していない。これらの点からみると、この607号台地整形区画は、15世紀後半～16世紀までの間に開始され、それ以降近世に至るまで使用されていたものと想定される。

溝状遺構 - 居館地区の001号・120号及び238号溝、及び居館の東西方向の堀と把握した003A号溝を除く、26条の溝状遺構については、形状や出土遺物の年代に幅があることなどから、その性格・時期等について把握が難しいものが多い。この為、他の遺構との重複関係などからある程度時期のわかるものについてみてみよう。まず、東西に大きく延びている148号溝とそれに連続する290号、及び520号溝は、148号溝・290号溝が、292号方形周溝区画墓を切っていることから、少なくとも、292号方形周溝区画墓とその周辺が山林化していたと考えられる15世紀後半以降のものと理解するのが妥当であろう。また、292号方形周溝区画墓の東側を南北方向に走る溝状遺構群も、その多くが148号溝同様、覆土中から貿易陶磁器類から瀬戸美濃製品、更に近世陶磁器類まで出土しており、時期判定を困難にしているが、逆コの字状にめぐる425B号溝や、503号溝は、いずれも地下式坑を切っていること。そして、こ

の両者に切られている448号地下式坑が、天井部崩落後の西側壁際に15世紀中頃の瀬戸美濃緑釉小皿4枚が完形品で横に重なって出土していることからすると、この緑釉小皿より後の早くとも15世紀後半以降に設けられたものと判断される。この他、同じ地区の285A・B・C号溝は互いに切り合っているが、285C号が南側で、292号方形周溝区画裏と148号溝を切る289号溝裏に556号台地整形区画を切っていることから、15世紀後半あるいは16世紀以降の可能性が高いのではないかと推測される。また、南西側の495号溝は607号台地整形区画を切って南北に走っていることから、16世紀以降の所産と考えられるものである。以上、他の遺構との重複関係から時期をみてきたが、これら溝群の所在する遺跡中央部から南側及び東側区域は、15世紀以降の16世紀代にかけて陶磁器類が主体となる地域であることを考え合わせると、そのほとんどは15世紀後半以降～16世紀代に形成されたものと考えられる。

地下式坑—台地東側のF61グリッドを中心とする区域に11基、南西部の607号台地整形区画に2基が所在している。主室等内部から出土遺物がほとんど無い為、その性格や時期の決定が困難なものが多い。これらのうち、東側台地上の11基については、その方向でみると東向きのも5基、北向きのも5基、南向きのも1基の3方向に分かれており、この点からみると、大別して3期に分かれる可能性もある。又、その形態からみると、有段のものがほとんどであるが、その形状や段の高さが異なるものが多い。これらのうち、448号地下式坑については、主室等から陶磁器類の出土はないが、天井部崩落後の左側壁中央部の覆上中から、横にして置かれたような状態で、完形の緑釉小皿が4枚出土していることから、この緑釉小皿の年代の15世紀中頃以前に、この448号地下式坑が設けられたことは間違いないだろう。そして、この地区では11基のうち5基が溝状遺構に切られていること。加えて、この地区から出土する陶磁器類の多くが14世紀後半～15世紀代を主体とする瀬戸美濃製品であることからすると、これらの地下式坑は、15世紀前半頃を中心に設置されたのではないかと想定される。

また、607号台地整形区画の2基の地下式坑については、少なくともその台地整形区画の設けられてからのものであると判断されることから、早くとも15世紀後半～16世紀代にかけてのもので推測される。

土坑—居館跡の検出されたC58・D58グリッド地区や南西部のC61・62グリッドに所在する10基を除くと、50基が台地東側の区域に所在している。そして、その中でも、特に逆コの字状にめぐる425B号溝状遺構の内側区域にほとんどの上坑が所在している。これらの土坑群は平面形が円形のものや方形のものなど多様で、その規模も大小様々である。比較的浅いものが多く、出土遺物も無いものが多いことなどから時期や性格の把握が難しいが、425B号溝との関連性からみると、この溝の年代の15世紀後半以降のものとして想定出来るのではないだろうか。

以上、各遺構ごとにその分布と年代・変遷をみてきた。中世の時代・本遺跡にまず出現するのは、12世紀後半～13世紀初頭頃にかけて建設されたと考えられる武士階級の居館である。この居館は、本遺跡の所在する広い台地の中では最も標高の高い、台地中央部に位置している。あたかも南側の坂川、西側の江戸川を見渡せるかのような場所である。出土遺物からみると、その後、この居館は14世紀初頭頃までは継続的に機能し、存在していたが、遅くとも14世紀前半頃までの間に消滅したものと考えられる。居館の存在していた時代、本遺跡地の台地上をみると、13世紀後半～14世紀初頭頃に、居館内の掘立柱建物群から南東110m程の地に、292号方形周溝区画裏が造営されているのみである。

それまでの間は、居館地区の南～東側は、遺構の検出がないことからみると、他の施設はほとんど存在

していなかったものと思われる。只、出土遺物は貿易陶磁器をはじめとして少量であるが台地一面に散在していることからみると、一時的な施設の設けや畑地利用等を含めた、生産・活動の場となっていた可能性が考えられる。なお、東側の292号方形周溝区画墓の東側一帯（F60グリッド南側からF61グリッド北側～北側にかけて）からは、出土量はそう多くはないが、12世紀代～13世紀代の貿易陶磁器と混交・常滑製品が、居館地区以外では最も多く集中して出土している点が注意される。この地域は、285A・B・C号溝や425号・503号溝、更には地下式坑等が集中しているため遺構の存在は不明であるが、前述したような遺物の出土状況からみると、292号方形周溝区画墓の造営以前にお堂などの仏教施設が存在しており、その地に292号方形周溝区画墓が造営された可能性も推測可能である。そして、このような居館の存在した時代の本遺跡地の様相からみると、292号方形周溝区画墓は、この居館に関わりの強かった女性の墓とみることが妥当であろう。

それでは次に、居館が消滅した後の時代、この遺跡地はどのような様相を呈していたのだろうか。出土遺物からみると、居館消滅後14世紀中頃までは、居住区域等としての利用はなく、人々の生活の場となるのは14世紀後半以降に入ってからと推測される。しかし、14世紀後半以降も15世紀代を中心にして日常的な瀬戸美濃製品を多く出土しているにもかかわらず、台地上においては、地下式坑や土坑、溝等は所在するものの掘立柱建物等居住施設は検出されていない。特に、遺物の出土の多い、台地東側の地区は、14世紀後半～16世紀代までの瀬戸美濃製品が約7割（146点）と最も多く出土しているが、地下式坑や土坑、溝状遺構が所在するのみである。このようにみても、14世紀後半以降は、本遺跡地は、領主層の居住する空間ではなくなり、607号台地整形区画にみられるような、台地斜面部に平坦な場を作り出して屢敷地とするような下級武士層あるいは有力農民層の生活の場となっていったものと想定される。なお、本遺跡地では17世紀以降も瀬戸美濃製品を主体とする近世陶磁器類の出土が多くみられることから、中世末～近世にかけても人々が継続的に生活していたものと思われる。

第2節 遺跡の性格と歴史的背景

1 居館跡とその歴史的背景

思井堀ノ内遺跡の所在する地域は、中世では「矢木郷」あるいは後に「矢木庄」とも呼ばれていた地域である。この「矢木郷」については、『香取文書』（註19）（以下、断りのない限り同文書による）所収「舊大禰宜家文書」の建久年間（1190～1199）の「遷宮用途注進状」に「矢木郷」とみえるのが初見であり、遷宮用途及び覆助祿料雑事のために「初10石・布5段・絹1疋4寸」を負担している。また、寛元元年（1243）11月11日の「香取神宮文書」の「造宮所役注文写」によると、香取社遷宮の社殿造営に際しては、西廊一字が当郷の所役となっている。同じく文永年間（1264～1275）の「造宮記録断簡」では、西廊一字は作料官米70石で、当郷が本役で、地頭矢木式部大夫胤家が造進と記されている。この矢木郷の地頭式部大夫胤家については、『吾妻鏡』（註20）に宝治2年（1248）1月3日の院飯で将軍供奉者の一人に「矢木式部大夫」の名があることから、同一人物とみなされている（註21）。『千葉大系図』（註22）によると、矢木式部大夫胤家は相馬六郎常家の子で、同次郎師常の孫、千葉常胤のひ孫にあたる人物である。矢木式部大夫胤家の後の系譜については『千葉大系図』や『相馬系図』（註23）には記載がなく、不明である。あるいは、後を継ぐ男子がいなかった為系譜としては断絶となったものとも考えられる。その後、『香取文書』康永4年（1345）3月日の「造宮所役注文」には「西廻廊五門 同矢木庄役所」とみえる。

それでは、このような本遺跡の所在地域における歴史的経緯をみたと、検出された居館跡はどのように位置づけられるのだろうか。

まず、矢木郷の範囲であるが『本土寺過去帳』（註24）には永享4年（1432）5月の頃に「矢木」の地名がみえ、その後、矢木を冠して記されている地名として「矢木加村」「矢木西平井」「矢木舟津」「ヤキナカタノ内」などがみられ、回過去帳では「矢木」は「八木」「ヤキ」とも表記されている。このうち「加村」「西平井」の地名は、近世に村名となり現在に至っている。また「矢木郷」は康永4年（1345）3月日の「造宮所役注文」に「矢木庄役所」とみえることから、14世紀中頃には庄園化されていたことがうかがえる。「千葉県の地名」によると、「矢木郷」の項で「愛知県豊田市猿投神社に残る人抄色断は天文4年（1535）4月16日に（下総国八木庄桐ヶ谷西内寺の法印^印）が写したもので、桐ヶ谷も当郷のうちであったと思われる」と記されている（註25）。流山市域に残る天正19年～20年（1591～92）の天正検地帳（註26）には、「下総勝鹿郡八木庄小金之内御縄打水帳野々下」「下総勝鹿郡小金八木之内野々下村」「桐ヶ谷之内谷津村御水帳（写）」等がある。これらからみるとこの頃までは、北は現在の流山市桐ヶ谷近辺、南は松戸市小金辺り、東は流山市野々下辺りまでの広い地域呼び名として「八木庄」という広域名があったことを示している。

鎌倉時代の「矢木郷」とその後の「八木庄」の領域が同じであったかどうかは明らかではないが、『香取文書』等に記された中世の郷と庄の領域を比較すると、一般的にみても庄域が広く郷域は狭いことは明らかである。この点を踏まえてみると、『香取文書』にみえる鎌倉時代の「矢木郷」の郷域は、流山市南部を中心とした地域で、広くみても南は松戸市との境をなす坂川流域から、北は三輪野山、西は江戸川、東は野々下村辺りまでと想定出来るのではないだろうか。

次にこのような「矢木郷」の想定域を踏まえて、おおよそ、その範囲に所在する中世の遺跡についてみると、第8図及び第1表に示したように、本遺跡を含め27遺跡が知られており、26遺跡が発掘調査されている。そのうち、掘立柱建物跡が検出された遺跡は本遺跡の西側に隣接する西平井根郷遺跡と北側800m程にある前平井遺跡、そして三輪野山地区に所在する三輪野山道六神遺跡の3遺跡がある。しかし、この3遺跡では、本遺跡のような、根石をもつ大形の掘立柱建物を中心とした整然と配置された建物群やそれを囲むような方形に廻る堀（溝状遺構）は認められていない。そして、これまで、発掘調査された遺跡の多くは、必ずしも全向発掘されているわけではないが、これまでのところ、本遺跡のような居館跡の検出事例はなく、出土遺物も本遺跡のようなかわかけ類や貿易陶磁器の出土量に匹敵する遺跡はない。

このようにみえると、本遺跡の居館跡として把握した遺構群は、この地域ではこれまでのところ唯一のものであること。加えて、この地域で唯一「堀ノ内」という小地名の残る場所に所在していること。そして、居館の規模や内部に所在する掘立柱建物群の規模・形態等がこの当時の在地領主層の居館と考えられている調査事例と類似すること等から考え合わせると、鎌倉期にこの地を支配していた領上の居館跡と理解することが妥当であろう。

この点については、すでにみたように、鎌倉時代後期にこの地を支配していた在地領主として「地頭矢木式部大夫胤家」がいる。「千葉大系図」では、胤家について「矢木式部大夫居領同図」と記されており、父が「相馬六郎常家」、祖父が「相馬次郎師常」、曾祖父が「千葉常胤」である。祖父の「相馬次郎師常」については、文治5年（1189）8月20日に書かれた源頼朝の書状に「さうまの次郎」とあること等から、「師常」が相馬御厨を支配し、相馬氏を称するようになった時期について寿永2年（1183）～文治5年（1189）の間頃が考えられている（註27）。なお、この祖父「師常」は『吾妻鏡』元久2年（1205）11月15日条に、

67才での死去が記録されている。

初代「師常」から始まる「相馬氏」については「千葉大系図」では、師常の子息として「義胤」（相馬五郎左衛門尉）、「常家」（相馬六郎右衛門尉）、「行常」（戸張八郎）の名があり、「義胤」が相馬氏を継いでいる。一方「吾妻鏡」承久3年（1221）6月14日条には、（承久の変の）宇治川の合戦の戦死者として「相馬三郎、同太郎、同二郎」とあり、「義胤」の「五郎」と関連づけて、「三郎」は五郎義胤の兄弟であった可能性が指摘されている（註28）。「義胤」が「五郎」、「常家」が「六郎」とあるところからみると、「師常」の子息は7人おり、長男「太郎」、次男「二郎」、三男「三郎」が戦死し、四男「四郎」は早死（？）し、五男「五郎」と六男「六郎」そして七男「行常」が系譜に記されたものとも考えられる。そして、相馬氏を継いだ「義胤」（「常家」の兄）については『吾妻鏡』安貞2年（1228）7月条を最後に、文献資料にみえなくなるが、この頃、相馬氏の継承者として活躍していたことが知られている（註29）。

このようにみえてくると「矢木式部大夫胤家」の父「常家」は「師常」の六男として、兄「義胤」に次いでおり、13世紀前半期の人であったと思われるが、「千葉大系図」に「相馬六郎」とあることからみると「八木郷」の「地頭」となっていたのかどうかはわからない。

只、「矢木郷」については前述したように「香取文書」の建久年間（1190～1199）の「遷宮用途注進状」に「畹10石・布5段・絹1疋4丈」を負担していることから、在地領主が存在していたことは間違いないだろう。そして、この頃以前にすでに隣接する相馬の地を鎌倉幕府創設に大功のあった「葉常胤」の次男「師常」が支配していることからすると、「矢木郷」も相馬氏一族の者が在地領主となっていた可能性が高いのではないかと推測される。

以上の事柄を踏まえて本遺跡の居館跡をみた場合、発掘された掘立柱建物跡は主として13世紀後半頃のものだと判断されるが、堀跡（001号・120号溝）等の出土遺物からみると、12世紀後半から本項までの間に造営され、14世紀初頭ないし前半頃までの間存続していたと考えられること。かわらけ類や貿易陶磁器類の出土量からみると、造営された当初の12世紀後半～13世紀にかけての頃と、13世紀後半頃が特に盛行情であったことが判明している。この点と文献史料からみた点を合わせてみると、13世紀後半期の掘立柱建物群は、まさに「地頭矢木式部大夫胤家」の居館であり、それ以前も父「常家」あるいは相馬氏一族の居館として機能していたものと理解するのが妥当と思われる。

2 方形周溝区画墓とその歴史的背景

本遺跡から検出された292号方形周溝区画墓は、その形態・規模や副葬された出土品から、13世紀後半から14世紀初頭頃までに造営されたもので、被葬者は財力もあり、身分的にも高い女性であると考えられた。そして、この方形周溝区画墓の造営時期に、本遺跡上に存在していた居住施設や建物施設は、主として北西地区の居館だけであることから、この墓に埋葬された女性は居館と関わりが強い女性であったものと推測された。

それでは、このような観点から、この方形周溝区画墓に埋葬された女性について考えてみると、とりも直さず13世紀中頃～13世紀後半に居館の主であったと考えられる「地頭矢木式部大夫胤家」との関係が浮かぶ。矢木式部大夫胤家は、すでに見てきたように「吾妻鏡」寛治2年（1248）1月3日条に（御家人として）坂飯の儀に將軍供奉者の一人としてみえる「矢木式部大夫」と同人物とみられること、さらに「香取文書」によれば、文永年間（1264～1275）の「造営記録断簡」に矢木郷の地頭として記されていること

から、13世紀中頃～後半に地頭として矢木郷を支配していた在地領主であった。一方、この方形周溝区画墓に埋葬された女性は死亡年齢が壮年後半から熟年であることが鑑定されている。この当時の女性の平均寿命がどの位かは明らかではないが、『我孫子市史』(註30)に掲載された文献資料や記載内容からみると、13世紀前半、この八木郷の東側に位置する相馬の地を支配していた相馬氏宗家の主、相馬左衛門尉義胤の娘「とよ御前」(矢木式部大夫胤家のいとこにあたる)が熟年での死去が推測され、更に「とよ御前」の孫にあたる「藤原十用王御前(尼妙蓮)」は50才以上の年齢での存命が認められる。これらの点を含んで、この方形周溝区画墓に埋葬された女性の死亡年代を40才代～50才代としてみると、この女性は、矢木式部大夫胤家の妻ないしは娘の可能性が高いのではないかと推測される。特に「千葉大系図」では、地頭矢木式部大夫胤家の後継の子息がみえないこと。本遺跡の居館跡が、14世紀初頭頃で終わっていることからみると、この方形周溝区画墓に埋葬された女性は、その造営年代からみても、地頭矢木式部大夫胤家と最も結びつきの強い女性とみることが妥当であろう。この当時の女性の地位について、岡田清一氏は『我孫子市史』において、「一般にいわれるように、鎌倉時代の女性の地位は、その後の時代と比べると高いものであった。例えば、御家人の娘が親から所領を相続し、それを持って他氏に嫁いだ場合、持参した所領は夫の所領とは別に子孫に譲与することが出来たことは、義胤の娘とよ御前の例からもわかる。しかも、夫が所領の譲与を行わずに死没した時、その妻が亡夫の代理として所領の相続を行えたのである」と述べられている。この点を勘案すると、この方形周溝区画墓に埋葬された女性として、まず先に地頭矢木式部大夫胤家の妻の姿が浮かんでくるが、ここでは、その点を指摘するにとどめ、今後の研究にゆだねたい。

おわりに

中世における思井堀内遺跡の内容やその時代背景等について概観してきた。その中で、遺跡地が文献史料に出てくる鎌倉時代の「郷」の所在地で、かつその郷は在地領主である地頭名のわかる郷であったこと。そして、遺跡地に残る「堀内」という小地名の場所から居館跡が検出されたこと。その居館跡が、年代的にみて、千葉常胤のひ孫であり、相馬御厨の地を支配した常胤の次男相馬次郎師常の孫の地頭「矢木式部大夫胤家」の居館に該当すると考えられること。また、同時に検出された方形周溝区画墓がこの地頭矢木式部大夫胤家の妻あるいは娘の墓と推測されること等々、その意味では本遺跡は、考古学的資料と文献史料が重ね合った稀有な遺跡である。なお、本遺跡地に居館が置かれた理由については、陸上交通や水上交通の要路に位置するという地理的な要因が大きいのではないかと考えられる(註31)。調査報告書という性格上、ここではその点を指摘するにとどめ、生座の場の問題とも含めて、今後の研究課題とした。中世を専門とする研究者等からみた場合、本報告書が調査結果について十分意を尽くしているかどうか心もとないが、今後の研究に役立つことが出来れば幸いである。

本遺跡は開発に伴う記録保存の一環として発掘調査が行われ、調査区域はすでに開発済であるが、調査結果からみると、考古資料と文献史料とを重ね合わせることの出来る重要な遺跡となったことは明らかである。特に、方形周溝区画墓から出土した副葬品類は、鎌倉時代の在地領主層(地頭)の妻などの女性の姿の一端を示す具体的資料として、更に被葬者を特定可能にする品々として重要な考古資料であり、本県のみならず全国的な視野に立っても貴重な有形文化財となるものである。報告者として、すでに長い年月を経ているとはいえ、埋葬されていた女性の魂の安らかなることを願うとともに、遺跡所在地である流山市民の皆様はもとより、広く県民の皆様方の貴重な文化財として保存・活用されることを強く希望する次第

であります。最後になりましたが、本調査報告書を取りまとめるに際して、当財団調査部整理課職員をはじめ、整理補助員の皆様、その他多くの方々から多大な御援助をいただきました。記して心より感謝申し上げます。

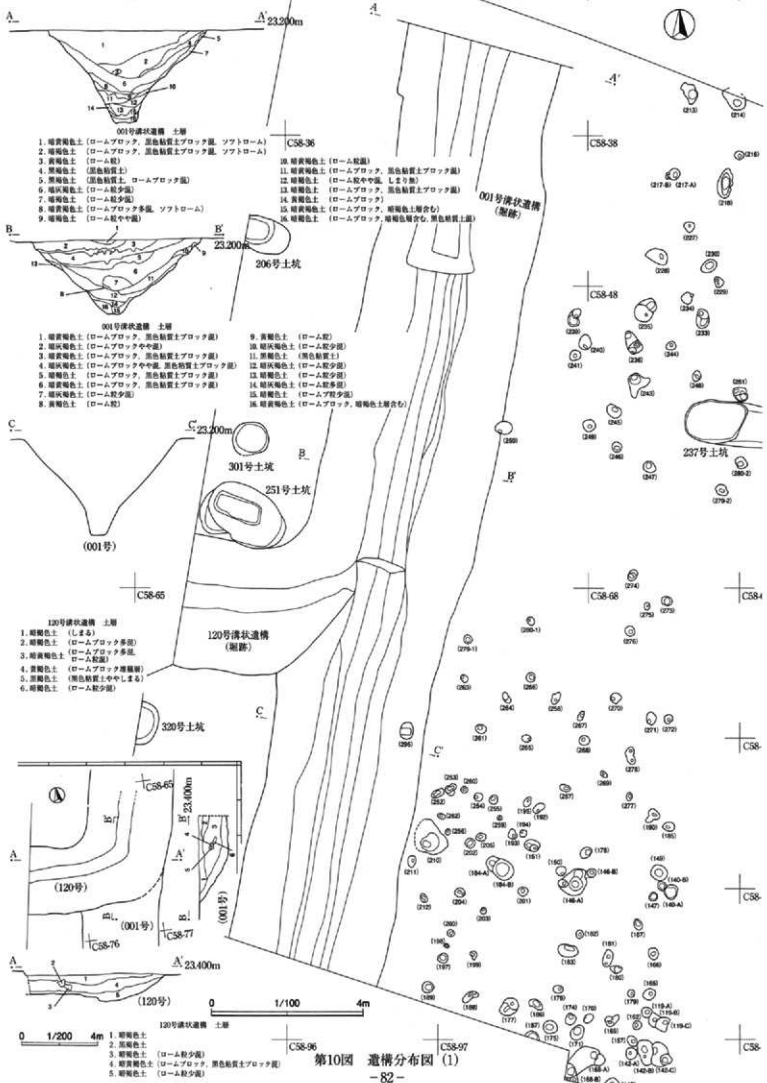
(註)

1. 倉田義広 「千葉市猪鼻城跡」千葉市教育委員会、(財)千葉市文化財調査協会 1999
2. 笹生 衛 「駒井野西ノ下遺跡・荒追遺構」『千葉県の歴史・資料編 中世1 (考古資料)』千葉県 1998
「成田市駒井西ノ下遺跡」『(財)千葉県文化財センター年報21』(財)千葉県文化財センター 1996
3. 「千葉県長生郡長南町岩川・今泉遺跡」(財)長生都市文化財センター 1990
4. 服部実喜 「南関東地域における中近世建物 遺構の変遷」『埋もれた中近世の住まい』同成社 2001
5. 岡田清一 「第2節 相馬氏と農民」『我孫子市史 原始・古代・中世編』我孫子市 2005
6. ①原康司 「尚名前野東遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告 第191集』2002
②「茨城県の中世居館」茨城中世考古学研究会 『茨城県考古学協会誌 第17号』茨城県考古学協会 2005
7. 蓬萊鏡については、次の文献資料を参照した
①広瀬都実 「和鏡の研究」角川書店 1974
②後藤守一編 「古鏡聚英 下篇」東京堂出版 1977
③「日本の古鏡 - 女装美のプロデューサー」大阪市立博物館 1985
8. 池上 悟 「中山法華経寺祖師堂跡」『千葉県の歴史・資料編 中世1 (考古資料)』千葉県 1998
9. 大川 清・三輪孝幸・栗田欣行 「栃木県上三川町北原東遺跡・町道3-326号線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」日本窯業史研究所 2000
10. 註7. の①
11. 坂上克弘 「上台の山遺跡 - 港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告30」(財)横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会 1996
12. 「一の谷中世墳墓群遺跡」磐田市教育委員会 1993
13. 「中世墓資料集成 - 中国編 - 」中世墓資料集成研究会 2005
14. 註10に同じ
15. 小松大秀 「日本の美術・NO275 化粧道具」至文社 1989
16. 北澤 滋 「埋葬されたのは鎌倉時代のお姫様? - 流山市西平井根郷遺跡の調査から - 」『貝の今昔物語』千葉県北西部地区文化財行政担当者連絡協議会 2003
17. 「企画展 中世の東葛飾 - いのり・くらし・まつりごと - 」松戸市立博物館 2001
18. 「平成13年度企画展 中世の船橋 - 掘る・たずねる - 」船橋市郷土資料館 2002
19. 「千葉県史料 中世 香取文書」千葉県 1957
20. 「新訂増補国史大系吾妻鏡第三」古川弘文館 1977
21. ①「流山市史通史編1」流山市教育委員会 2001
②前田徳弘 「流山市」『千葉県の地名』『日本歴史地名系12』平凡社 2003
22. 「改訂房総叢書 第五輯」改訂房総叢書刊行会 1959
23. 註20に同じ

24. 『千葉県史料 中世編 本土寺過去帳』千葉県 1982
25. 註21の②に同じ
26. 註21の③に同じ
27. 岡田清一 「第5編 武者の世の我孫子」『我孫子市史 原始・古代・中世篇』我孫子市 2005
28. 註27に同じ
29. 註27に同じ
30. 註27に同じ
31. この点に関しては、中山文人氏が、「中世後期の相馬御厨に関する基礎的考察」【松戸市立博物館紀要 第8号】2001 において、陸運との関わりのなかで一つのルートとして「大堀川沿いの松ヶ崎-篠籠田から西南に進み、鱒ヶ崎（流山市）で現江戸川へ出るルートが、中世において重視された可能性が高い」と列記している。この点を含め、「矢木郷」の位置づけについては、古代からの位相を踏まえて相馬御厨とセットで、交通の要路・物流という経済的側面を重視する必要があると考えている。



第9図 思井堀ノ内遺跡中世遺構配置図及び地形図 (1/1,500)



- 001号溝状遺構 土層
1. 暗黄褐色土 (ロームブロック、黒色粘質土ブロック層、ソフトローム)
 2. 暗褐色土 (ロームブロック、黒色粘質土ブロック層、ソフトローム)
 3. 黄褐色土 (ローム殻)
 4. 黄褐色土 (黒色粘質土)
 5. 黄褐色土 (黒色粘質土、ロームブロック層)
 6. 暗黄褐色土 (ローム殻少量)
 7. 暗褐色土 (ローム殻少量)
 8. 暗黄褐色土 (ロームブロック多量、ソフトローム)
 9. 暗褐色土 (ローム殻やや多)

C58-36

10. 暗黄褐色土 (ローム殻)
11. 暗黄褐色土 (ロームブロック、黒色粘質土ブロック層)
12. 暗褐色土 (ローム殻やや多、しりり物)
13. 暗褐色土 (ロームブロック、黒色粘質土ブロック層)
14. 黄褐色土 (ロームブロック)
15. 暗黄褐色土 (ロームブロック、暗褐色土層含む)
16. 暗褐色土 (ロームブロック、暗褐色土層含む、黒色粘質土層)

C58-38

001号溝状遺構 土層

1. 暗黄褐色土 (ロームブロック、黒色粘質土ブロック層)
2. 暗黄褐色土 (ロームブロックやや多)
3. 暗黄褐色土 (ロームブロック、黒色粘質土ブロック層)
4. 暗黄褐色土 (ロームブロックやや多、黒色粘質土ブロック層)
5. 暗褐色土 (ロームブロック、黒色粘質土ブロック層)
6. 暗黄褐色土 (ロームブロック、黒色粘質土ブロック層)
7. 暗黄褐色土 (ローム殻少量)
8. 黄褐色土 (ローム殻)

206号土坑

301号土坑

251号土坑

(001号)

C58-65

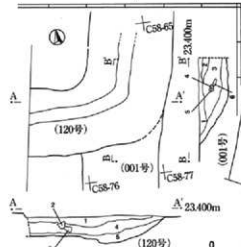
120号溝状遺構 土層

1. 暗褐色土 (しまる)
2. 暗褐色土 (ロームブロック多量)
3. 暗黄褐色土 (ロームブロック多量)
4. 黄褐色土 (ロームブロック多量)
5. 黄褐色土 (黒色粘質土ややしまる)
6. 暗褐色土 (ローム殻少量)

120号溝状遺構 (断続)

300号土坑

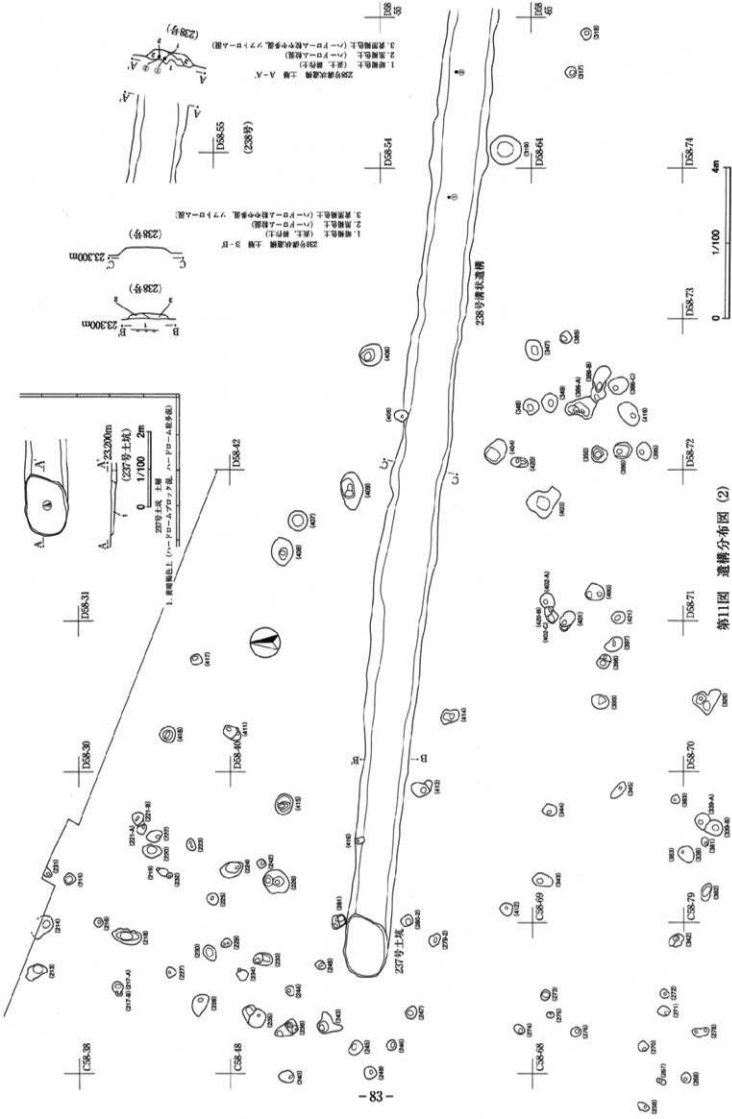
C58-68



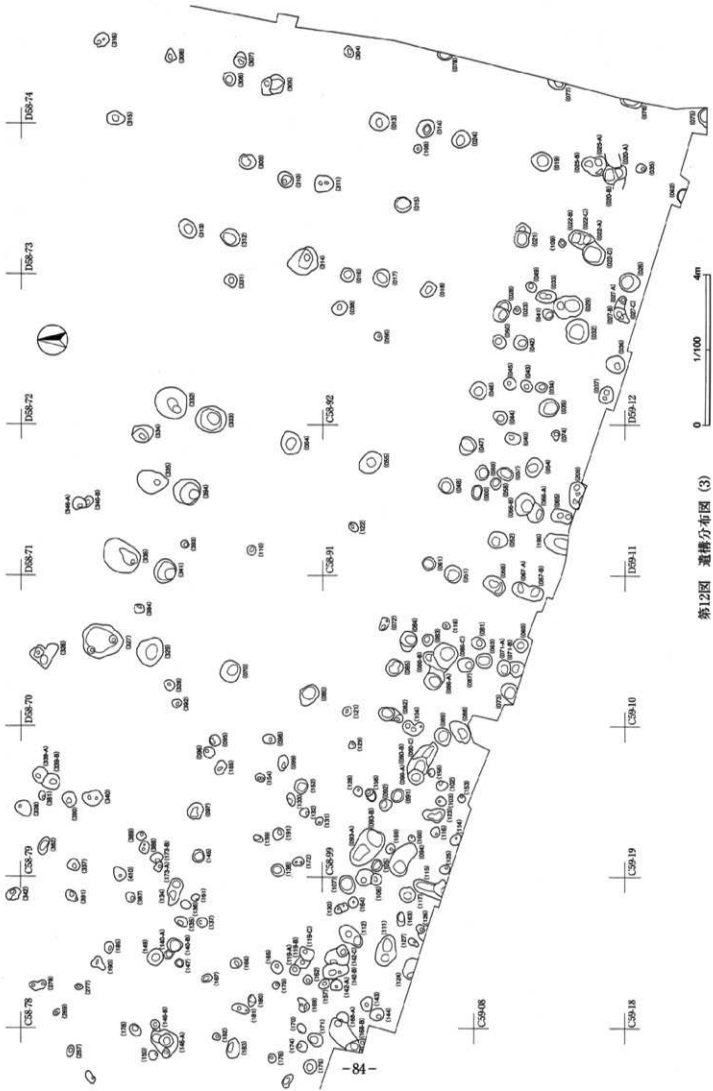
120号溝状遺構 土層

1. 暗褐色土
2. 黄褐色土
3. 暗褐色土 (ローム殻少量)
4. 暗黄褐色土 (ロームブロック、黒色粘質土ブロック層)
5. 暗褐色土 (ローム殻少量)

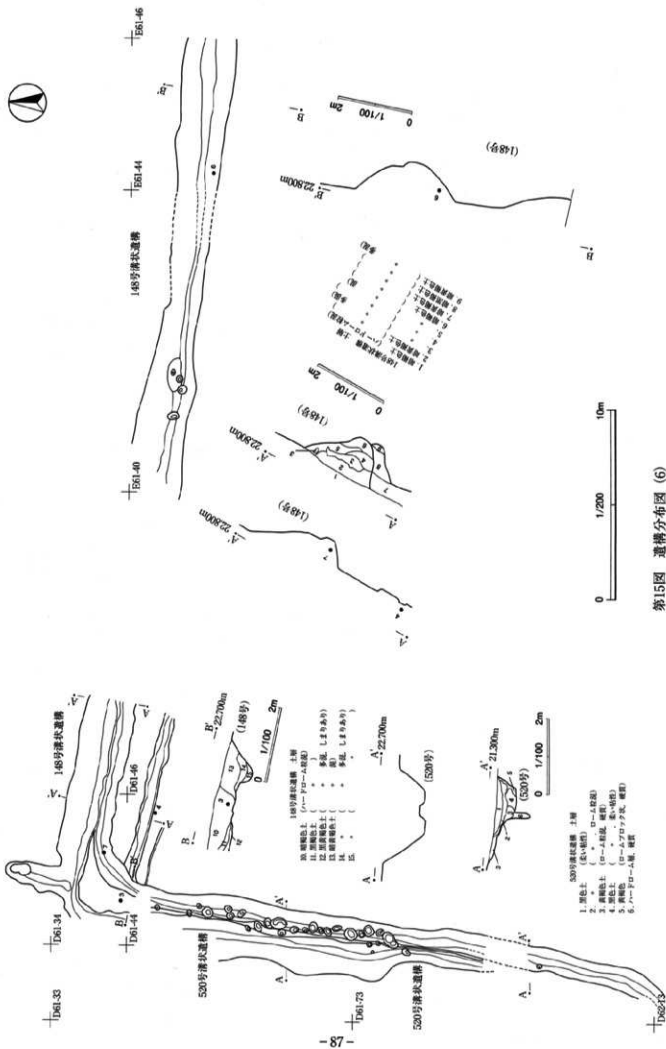
第10図 遺構分布図 (1)



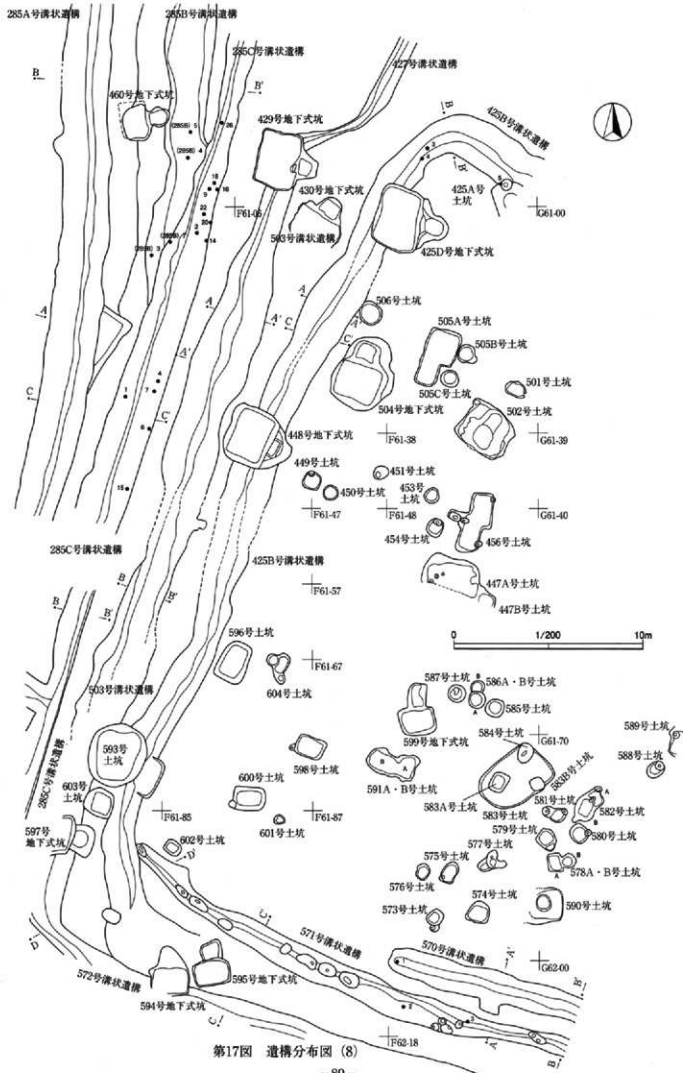
第11図 遺構分布図 (2)



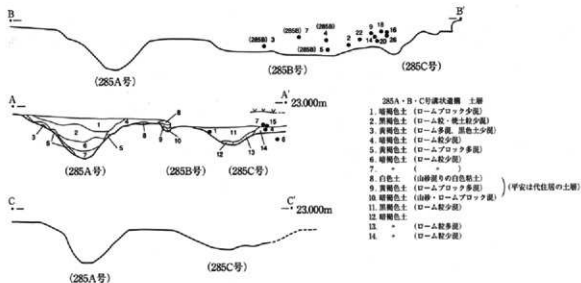
第12図 遺構分布図 (3)



第15図 遺構分布図 (6)



第17图 遺構分布图(8)



285A・B・C号溝状遺構



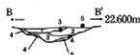
503号溝状遺構 土層

1. 灰色土
2. 暗黄褐色土 (ローム粒数、較)
3. 黄褐色土 ()
4. * (ハードローム状で粗い)
5. * (ハードローム状で粗い、較)



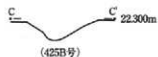
(503号)

503号溝状遺構



425B号溝状遺構 土層 (B-B')

1. 暗褐色土 (ハードローム全ブロック層)
2. * (ハードローム全ブロック・ソフトローム)
3. * ()
4. 暗褐色土 (ハードローム全ブロック、ソフトローム)
5. * (ハードローム粒、暗褐色土)



(425B号)

425B号溝状遺構 土層 (A-A')

1. 黄褐色土 (粘土粒・ローム粒少量)
2. 黄褐色土 (ハードローム粒・ロームブロック)
3. 暗黄褐色土 (ハードローム粒、較)
4. * (ローム粒少量、較)

425B号溝状遺構



(572号)

(571号)

(570号)



(571号)

(570号)



(572号)

(571号)

570・571号溝状遺構 土層

570

1. 黄褐色土 (ハードローム粒少量)
2. * ()
3. * (ハードローム少量)
4. * ()
5. 黄褐色土 (黄褐色土のブロック少量)
6. 黄褐色土

571

1. 黄褐色土 (ハードローム粒少量)
2. * ()
3. * (ローム多量)



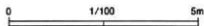
(572号)

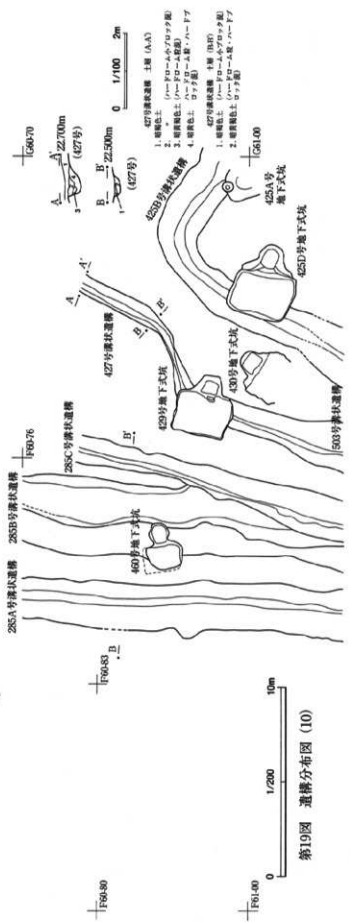
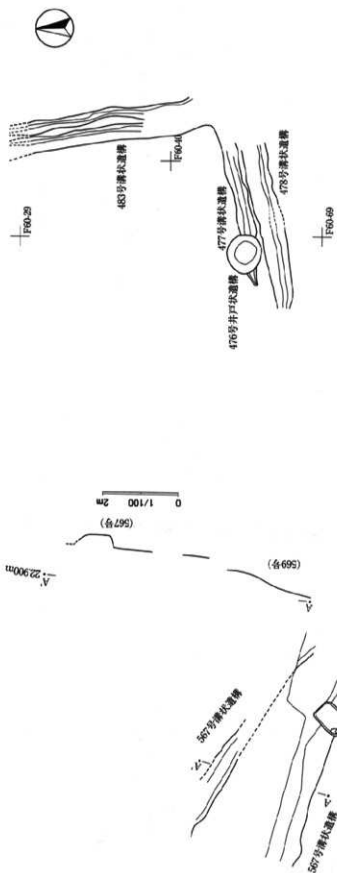
(425B号)

(571号)

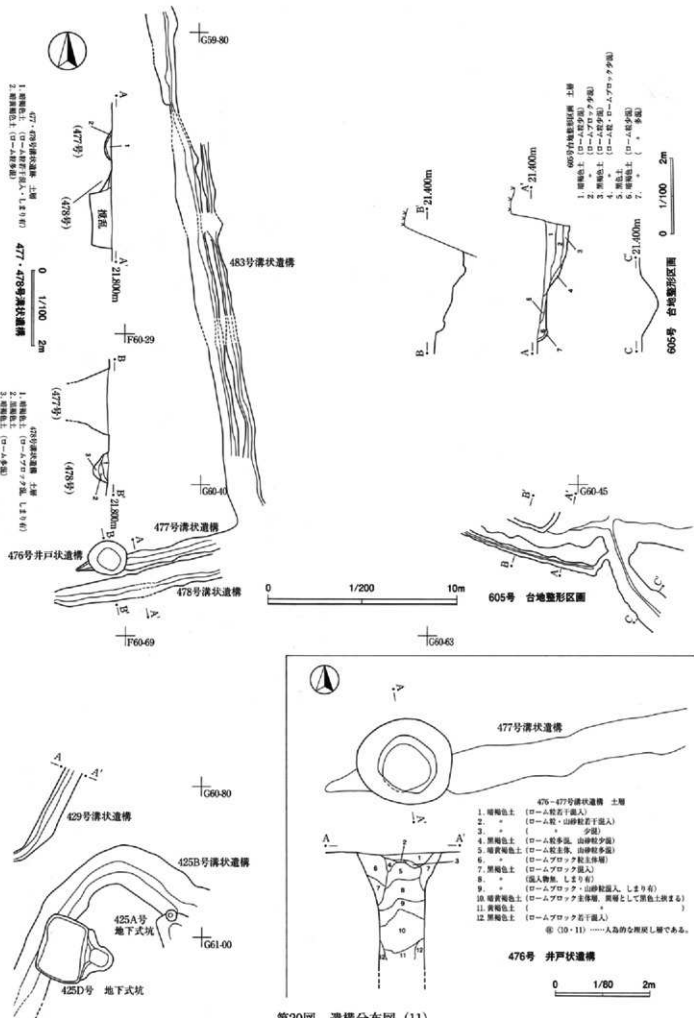
570・571・572号溝状遺構

第18図 遺構分布図 (9)

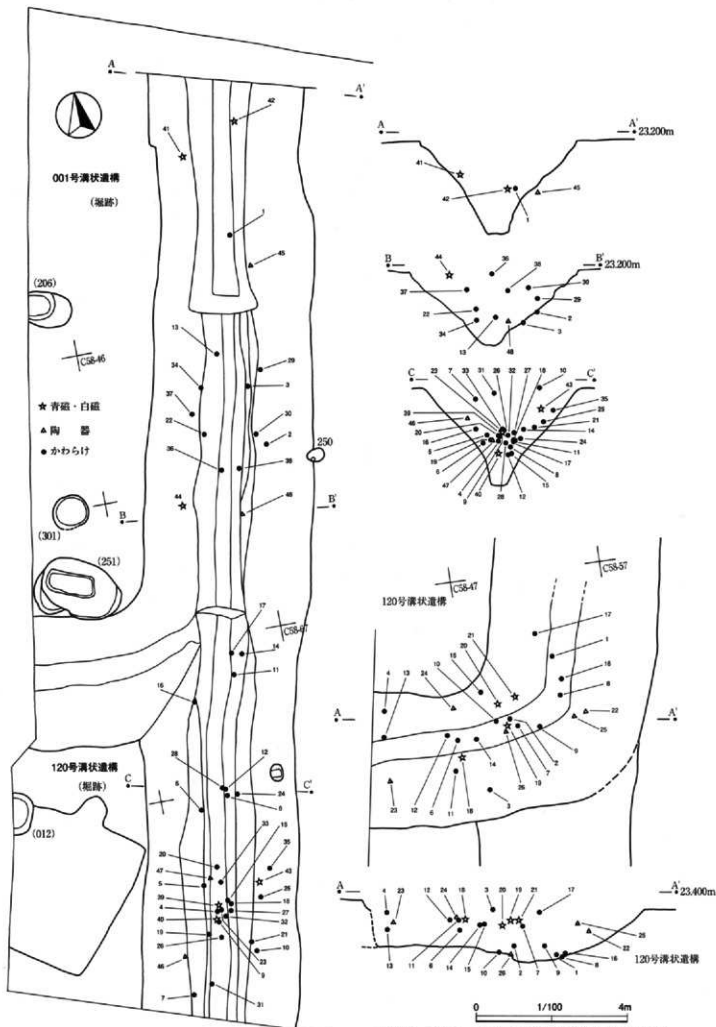




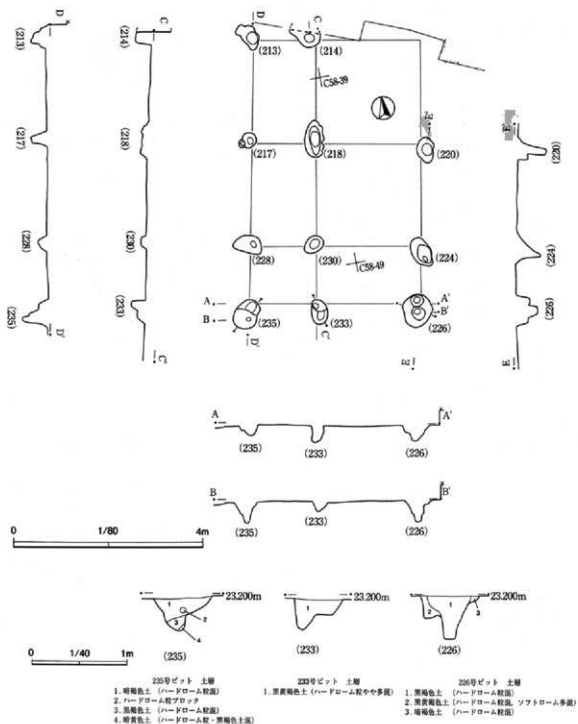
第19图 遺構分布图 (10)



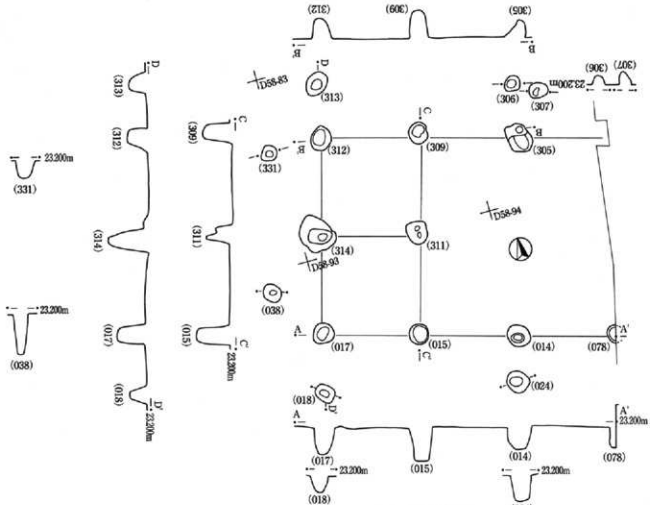
第20図 遺構分布図 (11)



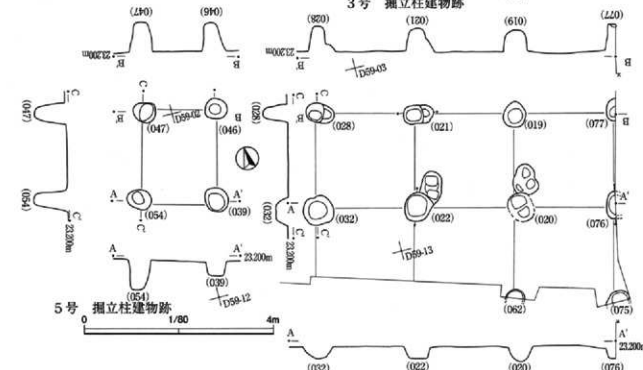
第21図 001号・120号溝状遺構及び遺物出土状況



第22図 1号掘立柱建物跡

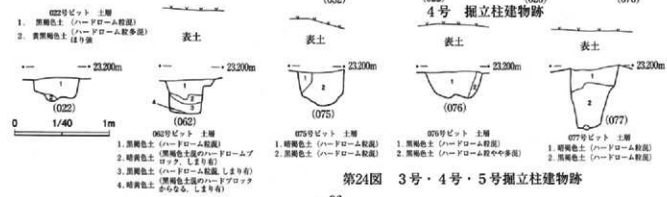


3号 掘立柱建物跡

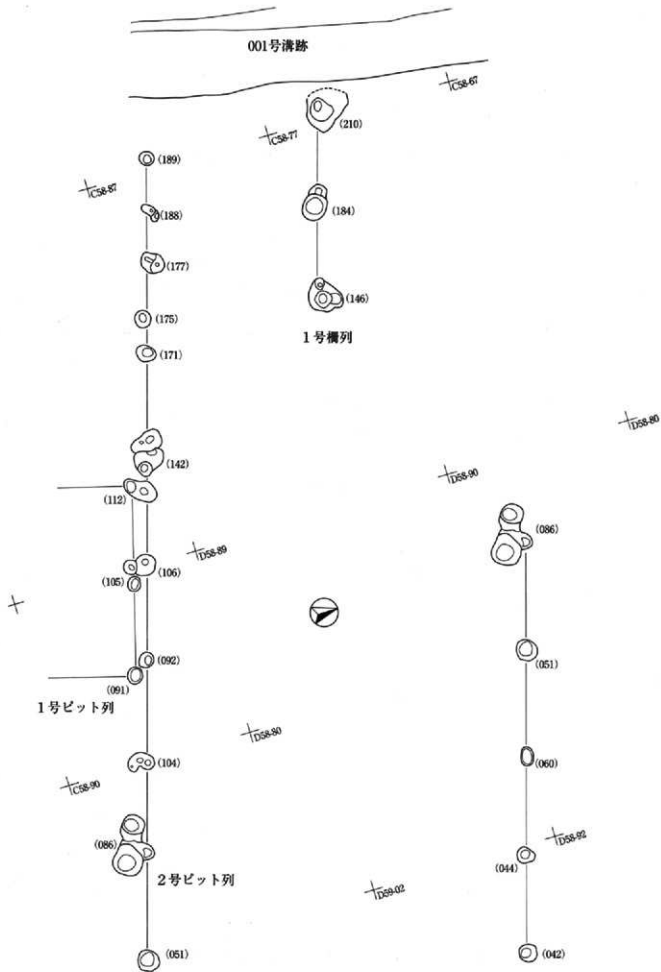


5号 掘立柱建物跡

4号 掘立柱建物跡

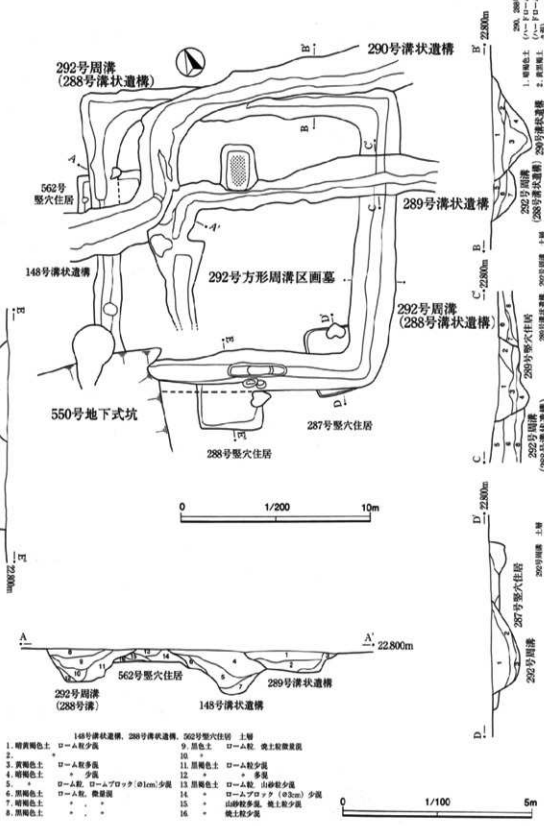


第24図 3号・4号・5号掘立柱建物跡



第26図 2号ビット列

292号周溝 (288号溝) 土質調査表
 1. 調査地 2. 調査者 3. 調査日
 4. 調査時間 5. 調査結果
 6. 調査内容
 7. 調査結果
 8. 調査結果
 9. 調査結果
 10. 調査結果
 11. 調査結果
 12. 調査結果
 13. 調査結果
 14. 調査結果
 15. 調査結果
 16. 調査結果



- 148号溝状遺構, 288号溝状遺構, 562号竪穴住居 土層
1. 暗黄褐色土 ローム粒少量
 2. 黄褐色土 ローム粒多量
 3. 黄褐色土 少量
 4. 暗褐色土 少量
 5. * ローム粒, ロームブロック (0.1cm) 少量
 6. 灰褐色土 少量
 7. 暗褐色土
 8. 灰褐色土
 9. 褐色土 ローム粒 炭土粒散見
 10. *
 11. 灰褐色土 ローム粒少量
 12. * 少量
 13. 灰褐色土 ローム粒 山砂粒少量
 14. * ロームブロック (0.3cm) 少量
 15. * 山砂粒多量, 炭土粒少量
 16. * 黄土粒少量

- 292号周溝 (288号溝) 土層
1. 暗褐色土
 2. 灰褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 灰褐色土
 5. *
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土

- 292号周溝 (288号溝) 土層
1. 暗褐色土
 2. 灰褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 灰褐色土
 5. *
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土

- 292号周溝 (288号溝) 土層
1. 暗褐色土
 2. 灰褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 灰褐色土
 5. *
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土

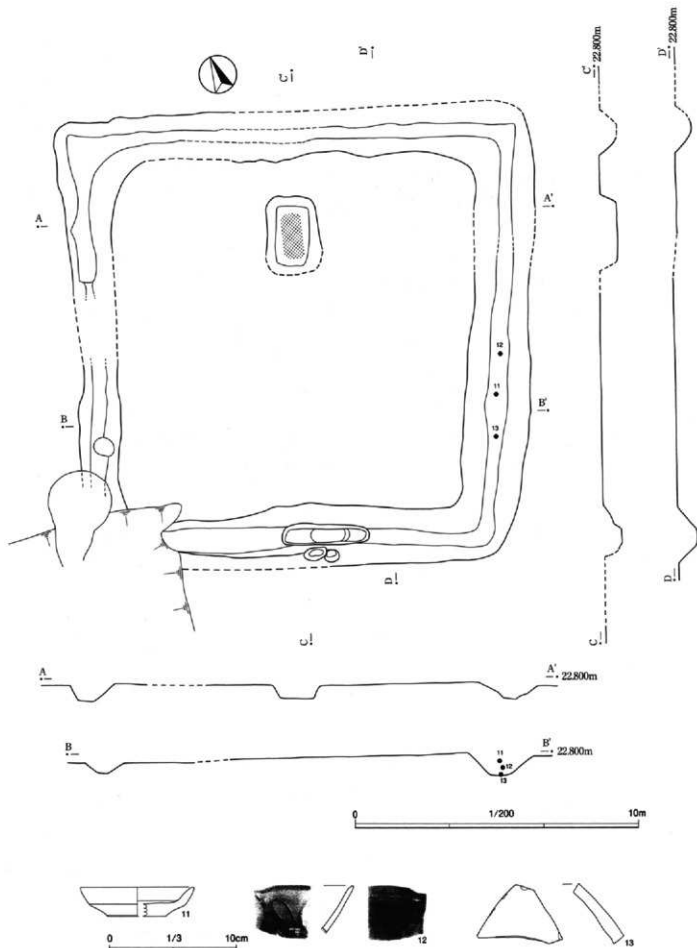
- 292号周溝 (288号溝) 土層
1. 暗褐色土
 2. 灰褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 灰褐色土
 5. *
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土

- 292号周溝 (288号溝) 土層
1. 暗褐色土
 2. 灰褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 灰褐色土
 5. *
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土

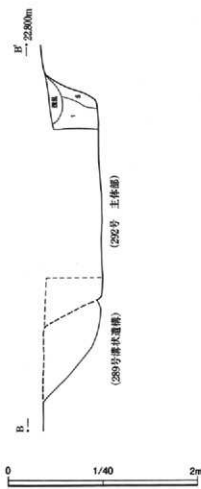
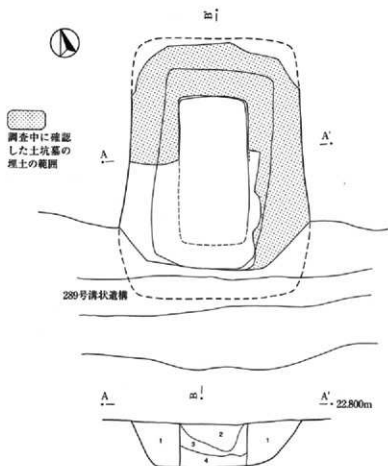
- 292号周溝 (288号溝) 土層
1. 暗褐色土
 2. 灰褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 灰褐色土
 5. *
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土

- 292号周溝 (288号溝) 土層
1. 暗褐色土
 2. 灰褐色土
 3. 暗褐色土
 4. 灰褐色土
 5. *
 6. 暗褐色土
 7. 暗褐色土
 8. 暗褐色土

第27図 292号方形周溝区画墓と重複遺構関連図

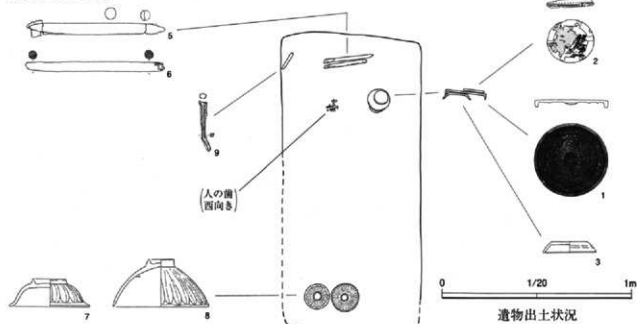


第28図 292号方形周溝区画墓及び周溝遺物出土状況

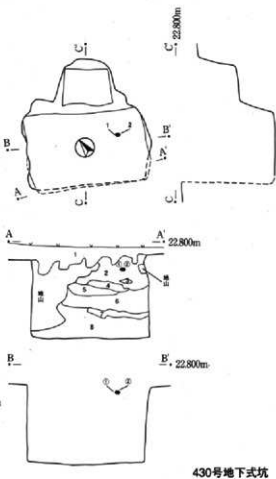
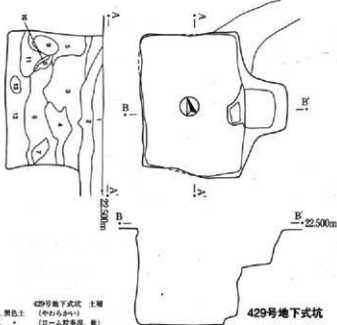
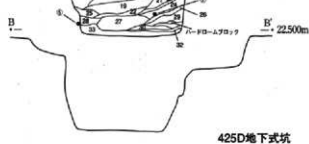
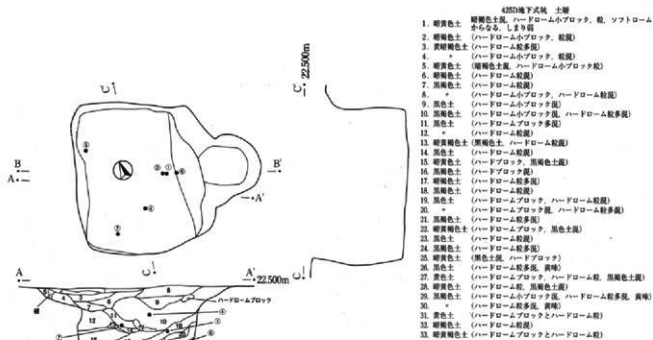


- 289号溝状遺構
- 289号溝状遺構
- 22.800m
1. 硬質褐色土 (ハードロームブロック多量, しまる)
 2. 硬質赤土 (ハードロームブロック少量, 軟)
 3. 硬質赤土 (ハードロームブロック多量, 軟)
 4. 硬質赤土 (ハードロームブロック少量, 軟)
 5. 硬質褐色土 (ソフトローム質)

〈 主体部 (土坑墓) 〉



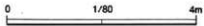
第29図 289号方形周溝区画墓主体部 (土坑墓) 及び遺物出土状況

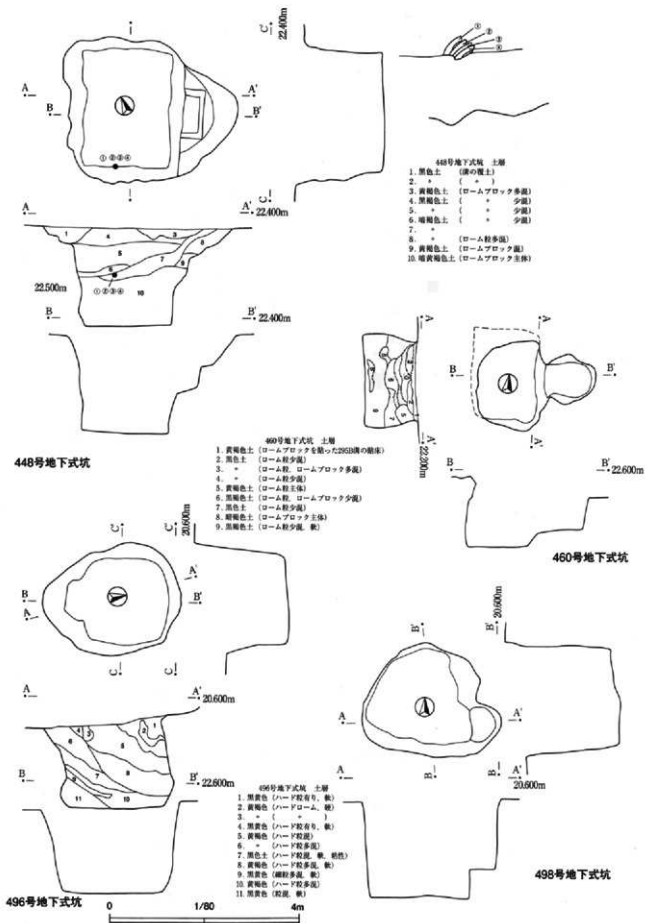


- 429号地下式坑 土層
1. 灰色土 (中からかい)
 2. * (ローム粘多量、粘)
 3. 黄褐色土 (ハード粘、粘)
 4. 灰色土 (ハード粘、粘)
 5. 暗黄色土 (ハード粘多量)
 6. 暗褐色土 (ハード粘多量、粘)
 7. 黄褐色土 (ハード粘のブロック、粘)
 8. 灰色土 (硬いブロック状)
 9. 暗黄色土 (ハード粘のブロック)
 10. 暗黄褐色土 { }
 11. * { }
 12. * (ハードフォーム、ソフトフォーム粘)
 13. * (ハード粘のブロック、硬い)

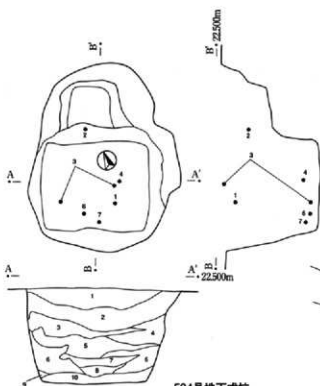
- 430号地下式坑 土層
1. 灰色土 (硬質土)
 2. * (ローム粘、ロームブロック状、粘)
 3. 暗褐色土 (ロームブロック粘質)
 4. * (3層に粘質)
 5. 灰色土 (ローム粘、ロームブロック粘質、粘)
 6. 暗黄褐色土 (ロームブロック粘)
 7. 黄褐色土 (ローム粘多量)
 8. 暗黄褐色土 (ロームブロック粘)

第30図 地下式坑 (1)

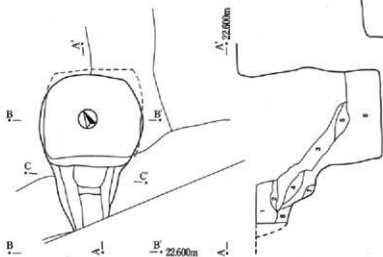
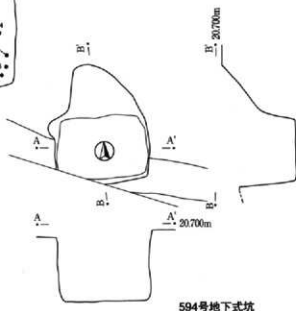




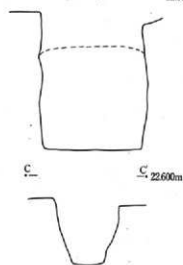
第31図 地下式坑図(2)



- 504号地下式坑 土層
1. 暗褐色土 (ローム粒多量)
 2. 暗褐色土 (ロームブロック多量)
 3. 暗褐色土 (ロームブロック少量)
 4. 暗褐色土 (ハードローム主体)
 5. 暗褐色土 (ロームブロック少量)
 6. 暗褐色土 (ローム主体)
 7. 黒色土 (ローム粒少量)
 8. 黒褐色土
 9. *
 10. 黒色土



- 550号地下式坑 土層
1. 黒色土
 2. 黒褐色土 (ローム粒多量)
 3. 暗褐色土 (ロームブロック面の粘土層)
 4. 暗褐色土 (ロームブロック多量)
 5. 暗褐色土 (ハードローム)
 6. 黒色土 (ローム粒、ハードロームブロック面)
 7. 暗褐色土 (ローム粒少量)
 8. * (ハードロームブロック面)



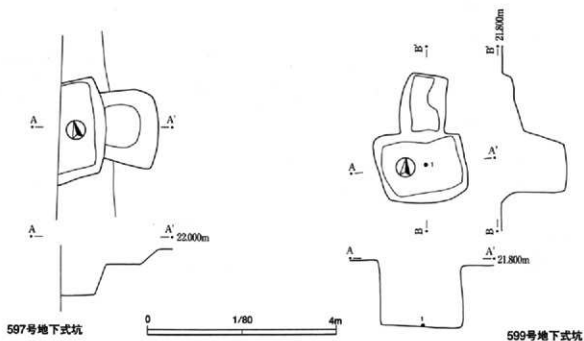
550号地下式坑

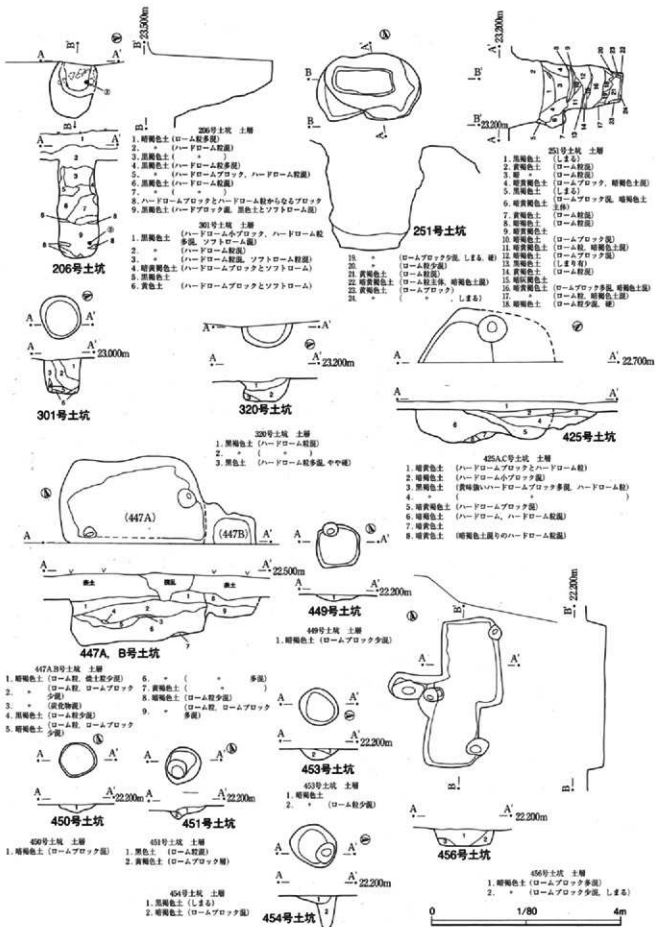


595号地下式坑

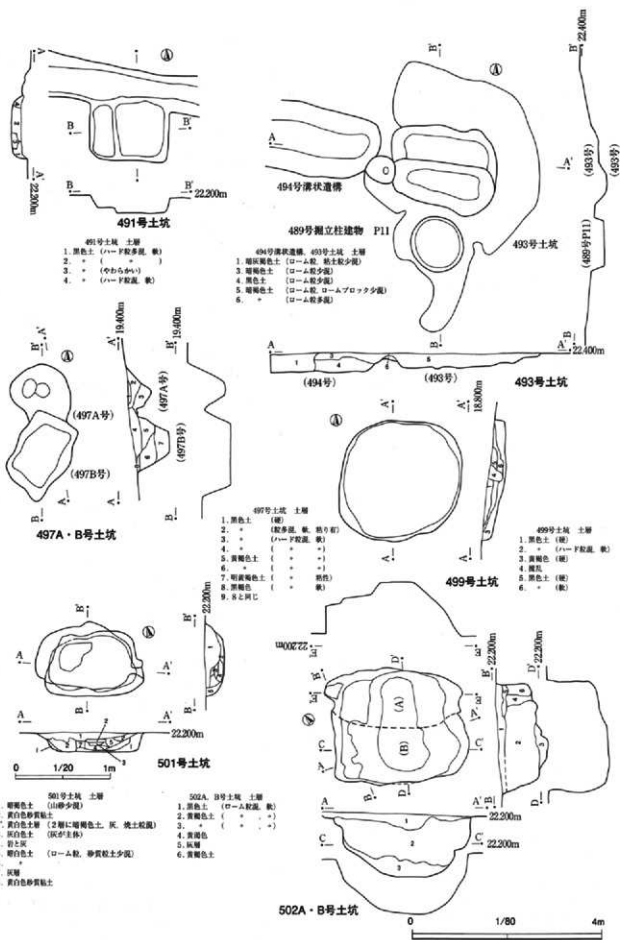
0 1/80 4m

第32図 地下式坑 (3)

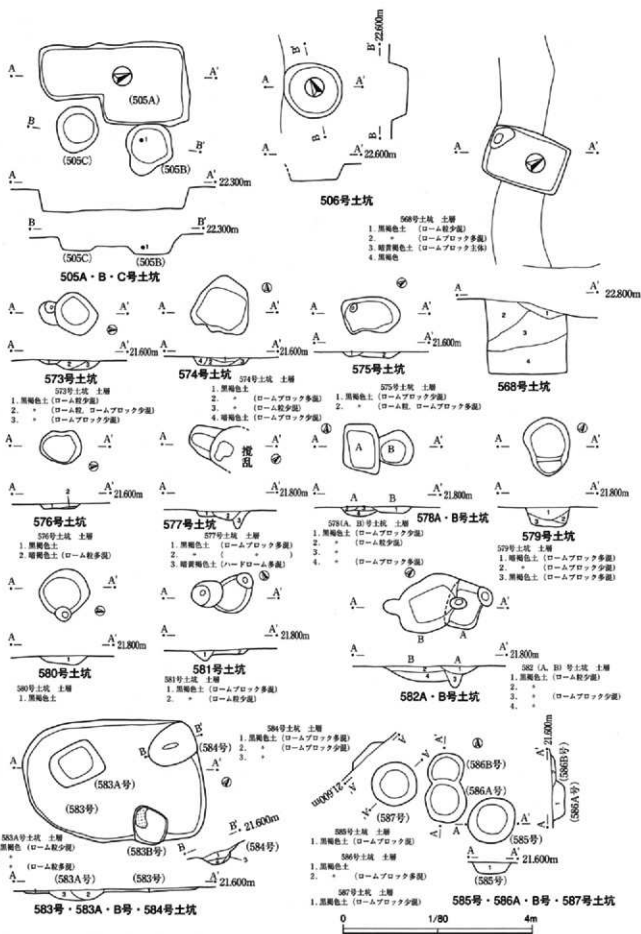




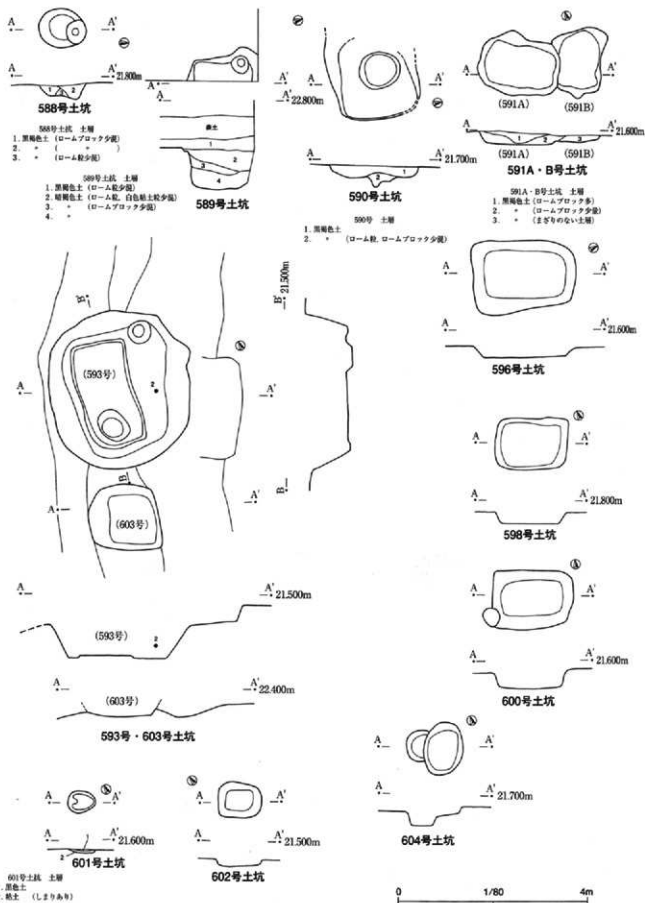
第34図 土坑 (1)



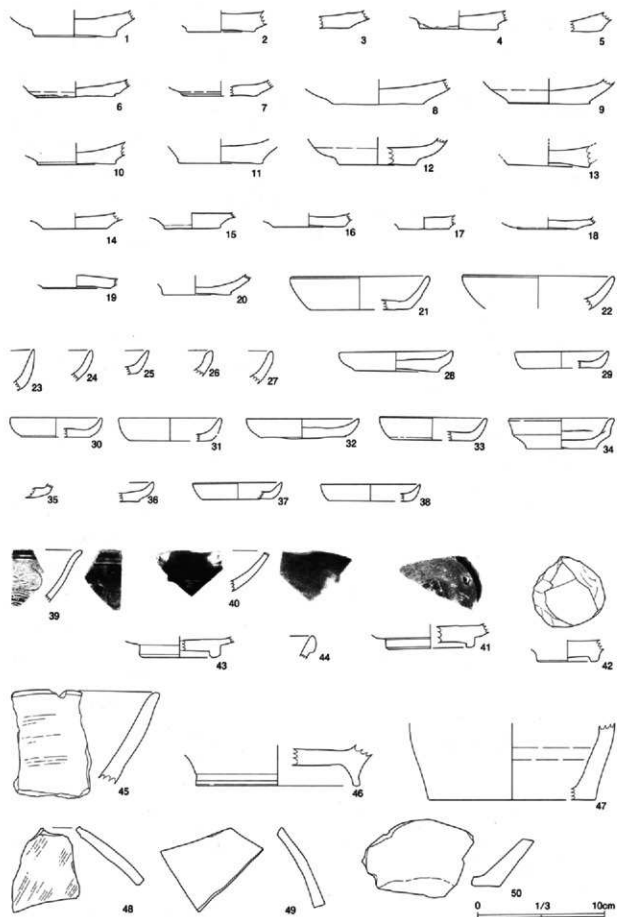
第35図 土坑 (2)



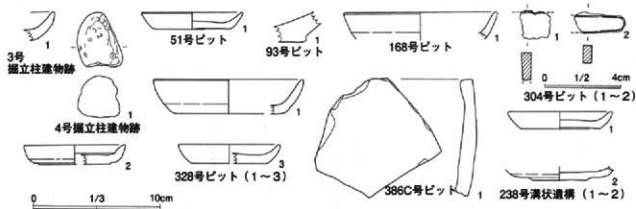
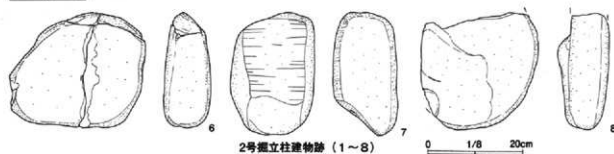
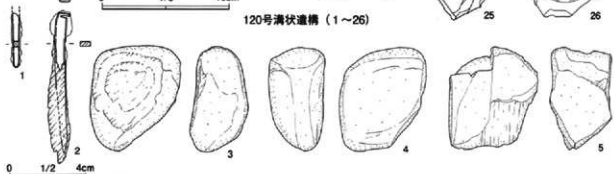
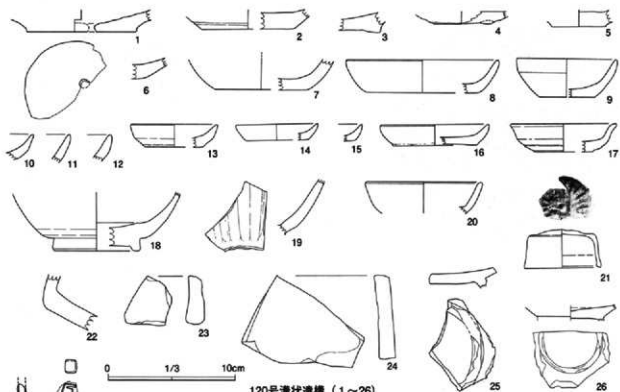
第36図 土坑 (3)



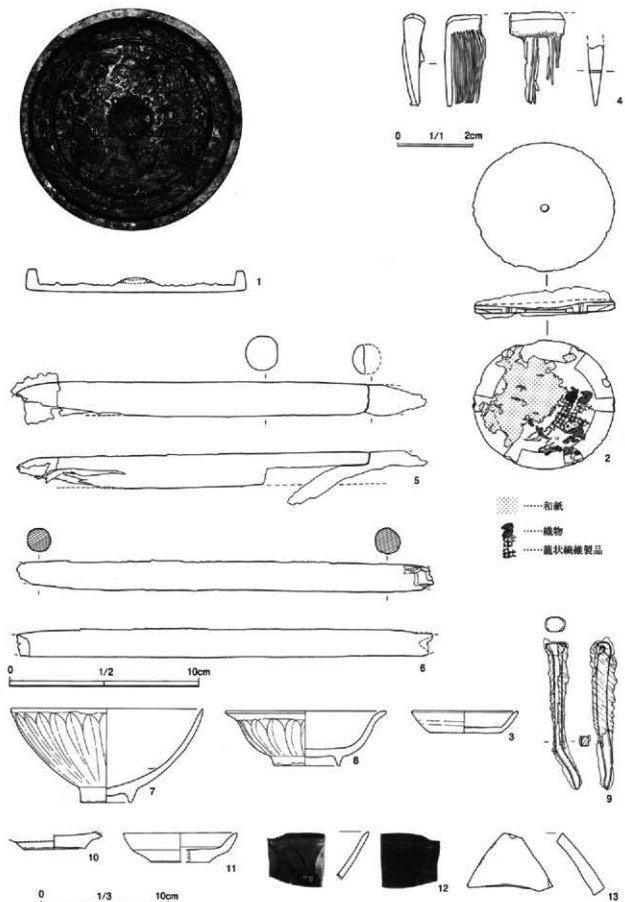
第37図 土坑 (4)



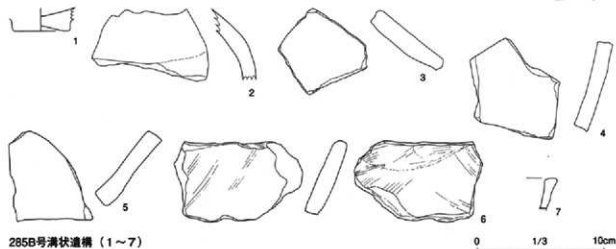
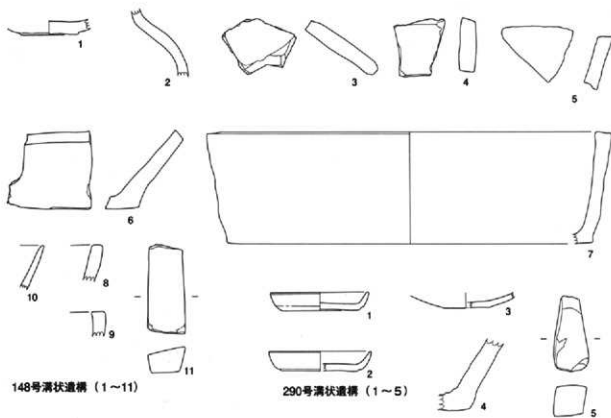
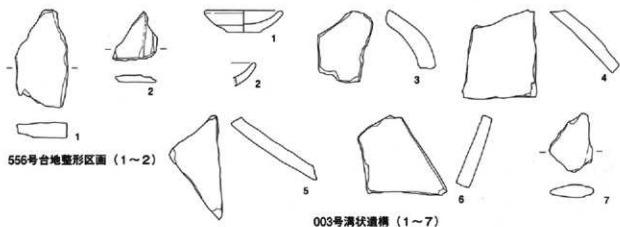
第38图 001号溝状遺構出土遺物



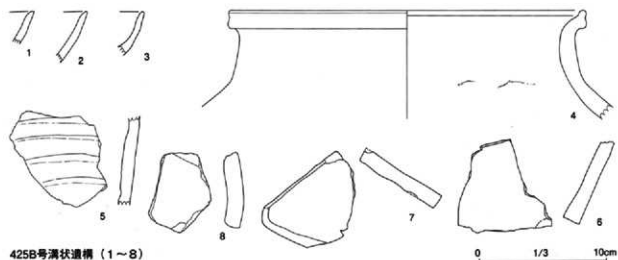
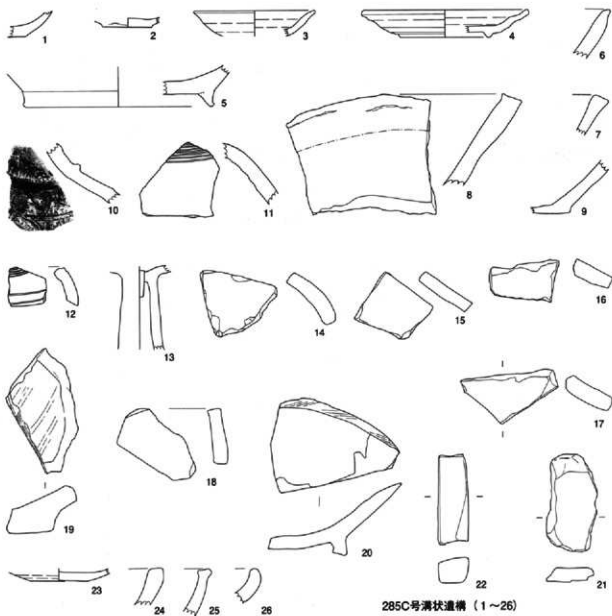
第39図 120号溝状遺構及び獨立柱建物跡出土遺物



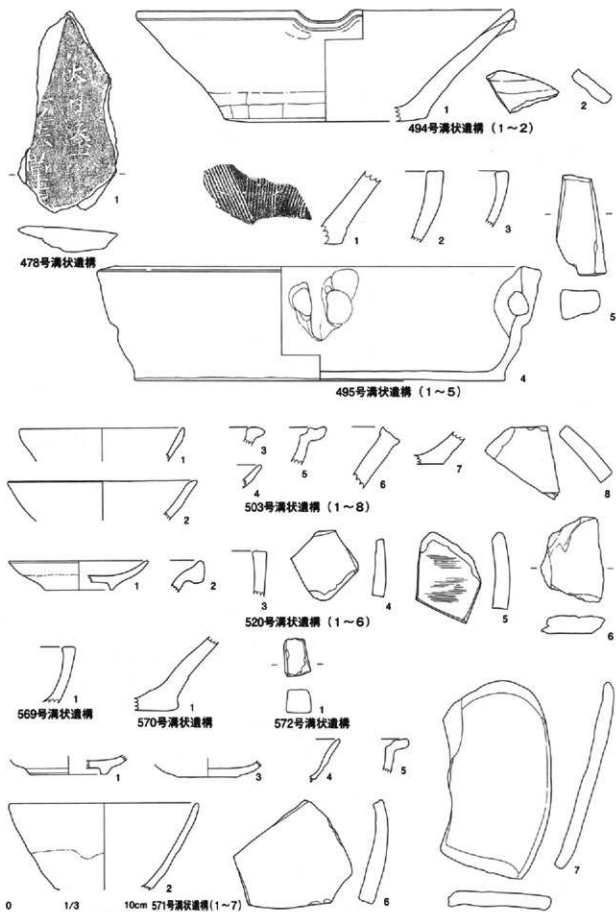
第40图 292号方形周溝区画墓主体部(土抗墓)及び周溝出土遺物



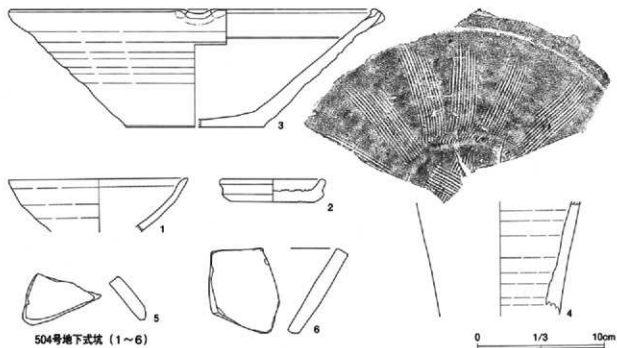
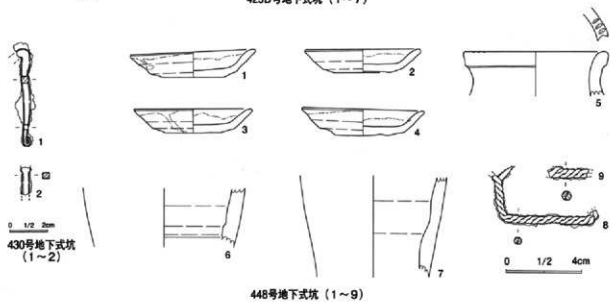
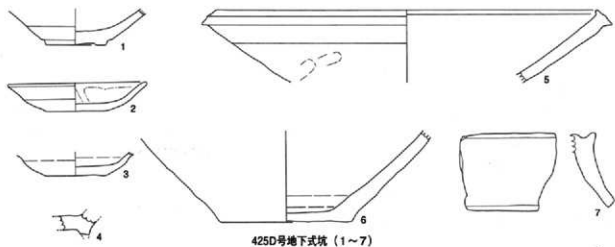
第41图 台地整形区画及び溝状遺構出土遺物 (1)

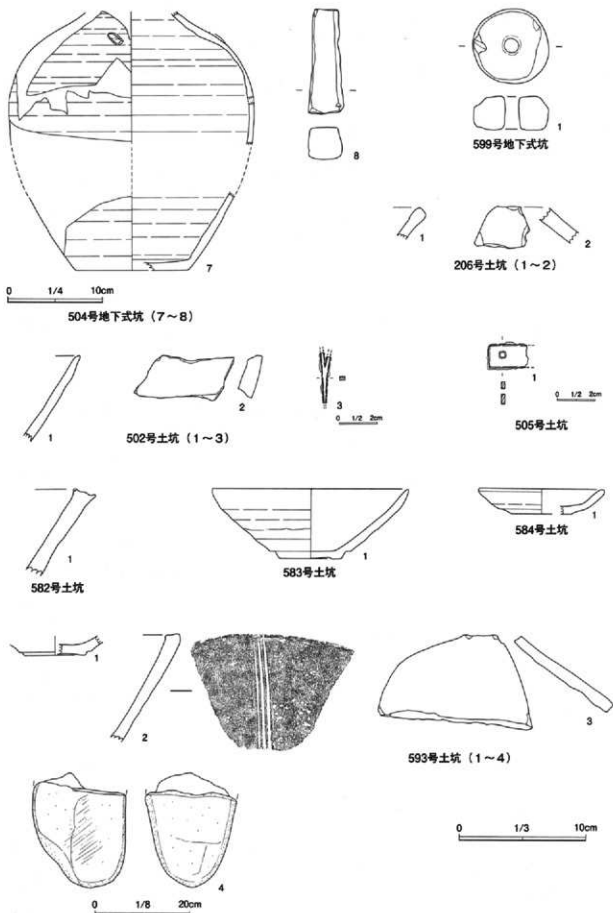


第42図 溝状遺構出土遺物 (2)

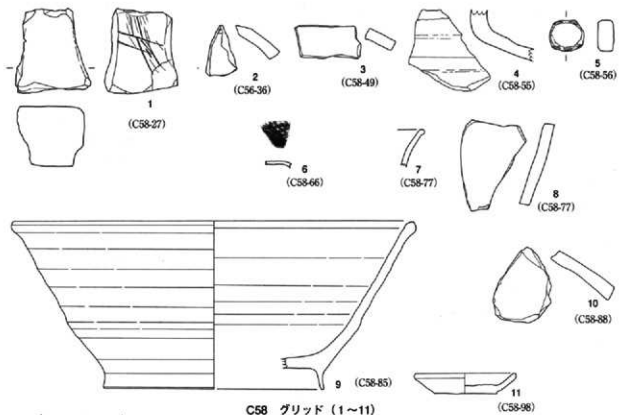


第43图 满状遺構出土遺物 (3)

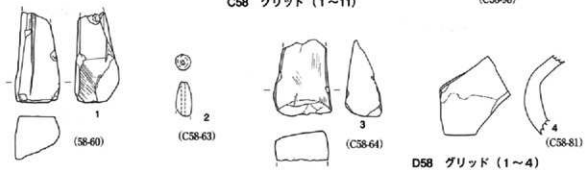




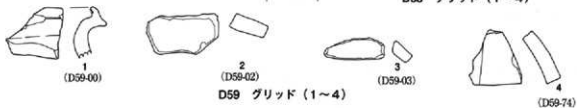
第45图 地下式坑 (2) 及び土坑出土遺物



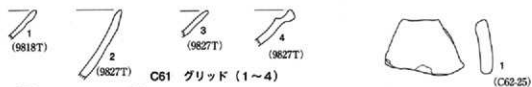
C58 グリッド (1~11)



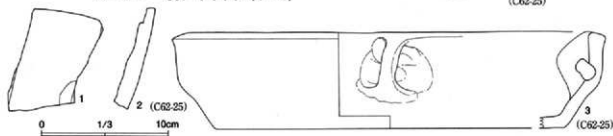
D58 グリッド (1~4)



D59 グリッド (1~4)

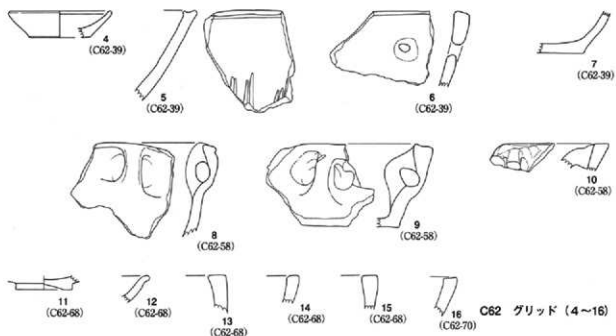


C61 グリッド (1~4)

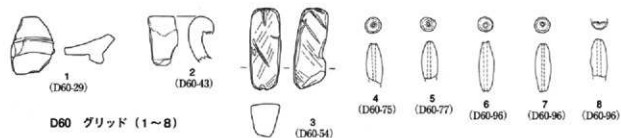


C62-25 グリッド (1~3)

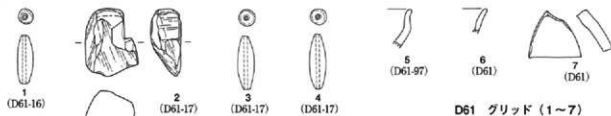
第46図 グリッド出土遺物 (1)



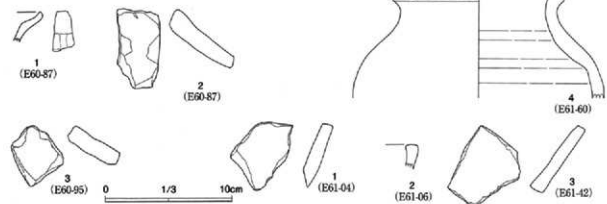
C62 グリッド (4~16)



D60 グリッド (1~8)



D61 グリッド (1~7)

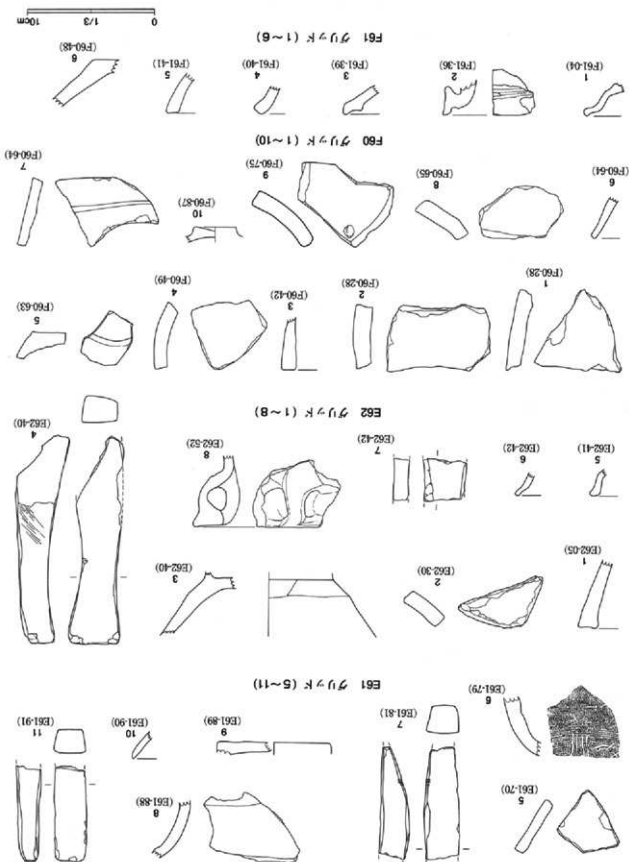


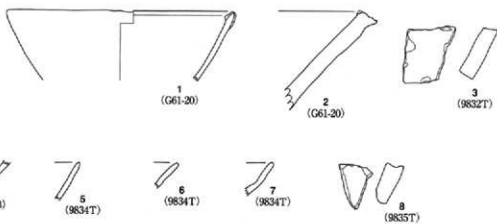
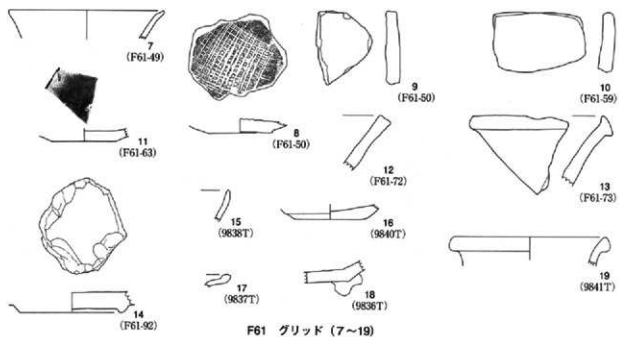
E60 グリッド (1~3)

E61 グリッド (1~4)

第47図 グリッド出土遺物 (2)

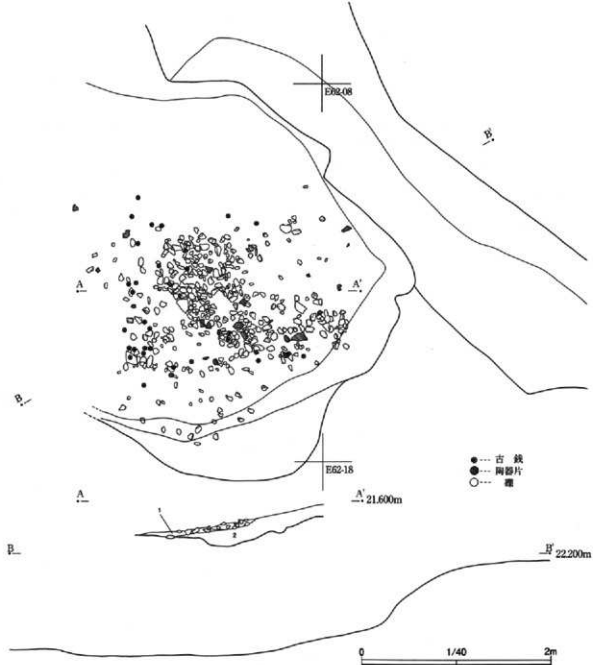
第48圖 刀の出土遺物 (3)



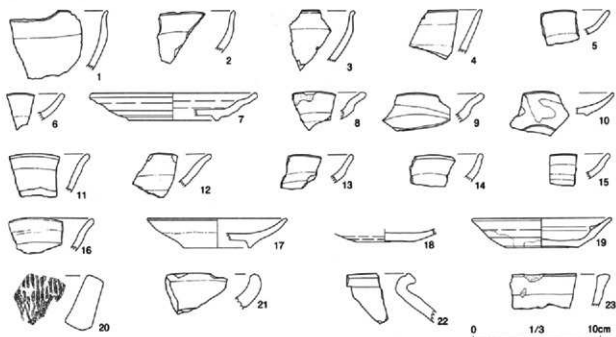


第49図 グリッド出土遺物 (4)





第50図 441号集石遺構



第51図 近世の遺物

第2表 居館地区柱穴跡・ピット一覧表(1)

遺構番号	位置	形態	規模 (長×幅) (cm)	深さ (cm)	出土遺物(土器類は全て小破片,又は破片・数字は破片数)・その他	備考
013	D58-83, D58-94	円形	52×45	28.0	小甕2	
014	D58-83, D58-94	円形	53×45	46.9	土師器高倉付瓶1, 土師器2, 小甕2, 縄文土器3	3号掘立柱建物
015	D58-93	円形	43×43	70.5	土師器2, 小甕2	3号掘立柱建物
016	D58-92, D58-93	円形	37×36	34.4	土師器1, 縄文土器1	
017	D58-92, D58-93	円形	46×40	58.4	土師器環1, 土師器2	3号掘立柱建物
018	D58-92	楕円形	44×34	35.1	土師器1	3号掘立柱建物
019	D59-03	円形	53×47	44.4	土師器3, 須恵器葉1, 小甕3, 縄文土器4	4号掘立柱建物
020-A	D59-03, D59-13	円形	48×45	29.0	土師器内黒環1, 土師器4, 小甕2, 縄文土器1	4号掘立柱建物
020-B	D59-03, D59-13	円形	65×55	34.7		
021	D59-03	楕円形	64×57	48.2	かわらけ皿1(2g), 土師器葉3, 甕2	4号掘立柱建物
022-A	D59-03	円形	35×34	38.0		
022-B	D59-03	円形	40×38	41.2		
022-C	D59-03	円形	45×40	36.2	土師器内黒環1, 土師器葉3, 小甕5, 縄文土器3	4号掘立柱建物
022-D	D59-03	円形	65×55	22.0		
023	D59-02	円形	21×19	32.5		
024	D58-83	円形	50×43	58.8	かわらけ瓶1(10g), 土師器環2, 土師器葉2, 須恵器葉1, 小甕1, 縄文土器4	3号掘立柱建物
025-A	D59-03	円形	56×50	48.6		
025-B	D59-03	円形	40×32	45.9		
026	D59-02, D59-03, D59-12, D59-13	円形	56×50	29.1		
027-A	D59-02, D59-12	円形	21×19	33.6		
027-B	D59-02	円形	35×31	50.7	土師器1, 縄文土器1	
027-C	D59-02, D59-12	円形	27×23	44.7		
028	D59-02	楕円形	62×42	53.2	かわらけ3(縄2点5g・皿1点2g), 土師器環2, 土師器葉2, 小甕2	4号掘立柱建物
029	D59-02	楕円形	78×55	36.8	土師器土器柄1, 土師器葉1, 甕3	
032	D59-02	円形	65×60	25.5	かわらけ餅1(餅1点10g・皿2点4g), 土師器葉2, 土師器3, 小甕4, 縄文土器2	4号掘立柱建物
033	D59-02	楕円形	51×46	49.7	土師器葉1, 縄文土器2	
034	D59-02	円形	34×26	32.1	土師器環1, 土師器葉1	
035	D59-13	円形	28×24	48.6	破片1, 縄文土器1	
036	D59-02	円形	51×46	42.5	土師器環2, 甕3	
037	D59-02	円形	49×46	64.9	小甕2, 縄文土器3	
038	D58-92	円形	42×34	79.1	土師器環1, 土師器葉2, 小甕1, 縄文土器1	3号掘立柱建物
039	D58-92	円形	55×46	30.0	土師器環2, 土師器葉2, 甕4	5号掘立柱建物
040	D59-01	楕円形	42×31	71.7	土師器環2, 土師器葉2, 小甕4, 縄文土器1	
041	D59-02	円形	31×28	27.5	土師器1	
042	D59-02	円形	40×38	23.0	小甕4	
043	D59-02	円形	33×29	53.6	小甕1	
044	D59-02	円形	40×36	34.4	破片3, 縄文土器2	
045	D59-02	円形	35×32	60.7	土師器環5, 土師器葉2, 小甕1, 縄文土器3	
046	D58-92, D59-02	円形	47×42	62.3	土師器環3, 土師器葉3, 小甕3, 縄文土器3	5号掘立柱建物
047	D58-91	円形	50×44	63.9	小甕4	5号掘立柱建物
048	D58-91	円形	41×40	34.0	土師器環2, 土師器葉2	2号掘立柱建物
049	D59-02	円形	30×26	22.6		
050	D59-02	円形	37×32	38.6	土師器5	
051	D58-90, D58-91	円形	48×45	44.5	かわらけ2(餅1点20g・碗or皿1点3g), 土師器土器1, 土師器葉4, 小甕3	
052	D59-01	円形	51×44	49.5	土師器葉2, 破片6, 縄文土器2	
054	D59-01	楕円形	55×41	64.3	土師器環2, 小甕片5	5号掘立柱建物
055	D58-91	楕円形	65×50	65.0	かわらけ皿2(6g), 土師器環3, 土師器葉5, 須恵器葉1, 甕4, 縄文土器5	2号掘立柱建物
056	D58-92	円形	24×22	42.6		
057	D59-01	円形	44×34	55.2	土師器環1, 土師器葉1, 小甕4, 縄文土器1	
058	D59-01	円形	34×29	23.7	小甕2, 縄文土器1	
059	D59-01	円形	41×35	21.0	小甕1, 縄文土器1	
060	D58-91, D59-01	楕円形	40×28	28.0	土師器内黒環1	
061	D58-91	円形	35×35	40.7	土師器内黒環1, 須恵器葉1, 板石1	2号掘立柱建物
062	D59-13	円形	42×19	37.4		4号掘立柱建物
063	D59-00	円形	42×39	50.4	須恵器葉1, 板石1, 縄文土器3	2号掘立柱建物
064	D58-81	円形	62×35	60.0	かわらけ3(縄2点5g・皿1点1g), 土師器内黒環1, 土師器環2, 土師器葉5, 土器1, 破片1, 縄文土器1	2号掘立柱建物
065	D59-01	楕円形	59×36	55.3	かわらけ2(8g), 土師器土器柄3, 土師器環2, 破片6, 縄文土器3	2号掘立柱建物
066-A	D59-01	楕円形	49×40	60.8	青磁皿(阿安楽)1, 柱穴333-1と重合, 土師器環3, 須恵器環1, 小甕3, 板石1	2号掘立柱建物
067-A	D59-00	楕円形	45×40	32.1		
067-B	D59-00	楕円形	45×40	34.7	かわらけ1(2g), 土師器環2, 土師器葉1, 小甕6, 縄文土器3	2号掘立柱建物
068	D59-00	楕円形	62×42	74.6	土師器高倉付瓶1, 甕1	2号掘立柱建物
069	D59-00	円形	40×38	25.0	土師器環1, 小甕1, 縄文土器1	
070	D58-80	円形	57×50	64.5	須恵器葉1, 甕1	2号掘立柱建物
071-A	D59-00	円形	42×33	44.5		
071-B	D59-00	円形	44×35	31.0	土師器土器1, 縄文土器2	2号掘立柱建物
072	D58-90	楕円形	38×20	37.3		
073	D59-00	円形	48×45	64.2	土師器環1, 甕2	6号掘立柱建物
074	D59-01	円形	30×22	44.5	土師器葉1, 須恵器葉1, 縄文土器2	
075	D59-13, D59-14	円形	35×24	31.0		4号掘立柱建物
076	D59-04, D59-14	楕円形	40×21	23.3	破片3, 縄文土器1	4号掘立柱建物
077	D59-04	円形	49×21	60.5	甕1	4号掘立柱建物
078	D58-94	円形	40×17	44.1		3号掘立柱建物
079	D58-94	円形	27×13	34.0		
080	D58-80	楕円形	60×45	51.7	かわらけ1(2g), 須恵器1, 縄文土器2	2号掘立柱建物
081	D58-90, D59-00	円形	37×36	14.5	土師器環1	
082	D58-90	楕円形	66×33	55.7	赤漆葉1(6g), 土師器環1, 甕3, 破片破片3, 板石1, 縄文土器1	2号掘立柱建物

第2表 居館地区柱穴跡・ピット一覧表(2)

遺跡番号	位 置	形 態	規模 (長×短) (cm)	深さ (cm)	出土遺物(土器類は全て小破片。又は破片・数字は破片数)・その他	備 考
083	D58-90	円形	31×27	49.0		
084	D58-90	円形	32×45	35.2	板石1	
085	D58-90	円形	45×43	24.5	小礫1	2号獨立柱建物
086-A	D58-90	円形	56×50	33.9		
086-B	D58-90	円形	35×35	18.8	土師質土器2, 土師器器2, 小礫6, 縄文土器3	6号獨立柱建物
086-C	D58-90	円形	70×61	27.5		
087	D58-90	円形	42×36	66.8	土師質土器1, 土師器器3, 礫2	
088	C58-99, D58-90	楕円形	69×45	64.8	かわらけ1(10g), 小礫1	2号獨立柱建物
089	C58-99	円形	46×42	19.2	土師器器1, 土師質土器環1, 小礫1	
090-A	C58-99	円形	43×37	39.1		
090-B	C58-99	円形	60×54	30.1	小礫3, 縄文土器2	6号獨立柱建物
090-C	C58-99	楕円形	70×46	20.4		
091	C58-99	円形	36×33	20.5		
092	C58-99	円形	34×30	20.3		
093-A	C58-99	楕円形	68×64	53.7		
093-B	C58-99	円形	57×42	49.7	かわらけ網1(42g), 土師器器3, 小礫3, 縄文土器1	
094	C58-99	楕円形	95×50	60.1	土師器器2, 小礫8	6号獨立柱建物
095	C58-89	円形	32×29	30.2		
096	C58-89	円形	32×28	47.5		
097	C58-89	円形	47×40	40.9	小礫3	
098	C58-89	楕円形	35×25	47.5	土師器器環1	
099	C58-89	楕円形	43×28	42.3		
102	C58-99	円形	28×26	43.7		
103	C58-99	円形	29×25	63.9	小礫1	
104	C58-99, D68-90	不定形	60×30	43.1	須恵器器1, 小礫1	
105	C58-99	円形	33×28	26.1		
106	C58-98, C58-99	楕円形	68×41	45.5	土師器器1, 小礫1	
107	C58-98, C58-99	円形	52×42	35.6		
108	D58-90	円形	22×22	43.8		
109	D69-03	円形	20×20	38.0		
110	D68-81	円形	27×23	44.1		
111	C58-98	楕円形	85×54	69.4	青磁瓶1, 石1, 小礫9, 縄文土器3	
112	C58-98	楕円形	73×43	47.9	土師器器1, 須恵器器環1, 板石7	
114	C58-99	円形	31×25	37.6		
115	C58-98	不定形	84×53	68.0	かわらけ1(10g), 土師器器1, 小礫4	
116	C58-99	円形	26×23	24.9		
117	C58-98	円形	42×36	49.1	小礫1	
118	D68-90	円形	22×18	41.8		
119-A	C58-88	円形	29×29	57.2		
119-B	C58-88	円形	32×29	64.0		
119-C	C58-88	円形	34×30	77.5		
121	D68-90	円形	25×22	43.8		
122	D68-91	円形	28×22	28.3		
123	C58-99	不定形	60×37	15.6		
124	C58-98	円形	57×28	39.8		
125	C58-99	円形	27×23	44.3	縄文土器1	
126	C58-98	不定形	44×28	44.6		
127	C58-98	楕円形	30×19	29.7	小礫2	
128	C58-99	円形	25×23	53.0	小礫1	
129	C58-99	円形	20×17	38.0		
130	C58-98	楕円形	39×22	40.5		
131	C58-89, C58-99	円形	21×19	28.0		
132	C58-89	円形	25×23	51.0		
133	C58-89	楕円形	37×22	41.0		
134	C58-78, C58-88	不定形	78×35	43.5		
135	C58-88	楕円形	38×29	73.3		
136	C58-88	円形	29×20	71.8		
137	C58-88	円形	29×28	36.3		
138	C58-88	円形	35×22	17.2		
139	C58-89	楕円形	27×15	39.2	小礫1	
140-A	C58-78, C58-88	円形	29×36	46.1	土師質土器環1, 小礫2	
140-B	C58-78, C58-88	円形	25×23	42.4		
142-A	C58-98	円形	32×29	70.0		
142-B	C58-98	楕円形	70×44	71.2	土師質土器環1, 小礫2	
142-C	C58-98	不定形	67×52	45.3		
143	C58-98	円形	40×32	40.0		
144	C58-98	円形	38×32	41.0		
145	C58-89	円形	36×34	17.5	土師器器器1	
146-A	C58-77, C58-87	不定形	75×60	55.2		
146-B	C58-77, C58-78	円形	25×22	47.6	かわらけ4(11g), 縄文土器1	1号欄別
147	C58-88	円形	22×22	21.0		
149	C58-78	円形	45×40	42.4		
150	C58-77	円形	28×27	61.0		
151	C58-77	楕円形	49×30	45.0		
152	C58-89	円形	38×37	28.0		
153	C58-99	円形	20×20	58.3	小礫1, 縄文土器1	
154	C58-89	円形	27×20	31.0	小礫1	

第2表 居館地区柱穴跡・ピット一覧表(3)

遺構番号	位 置	形 態	規模 (長×短 cm)	深さ (cm)	出土遺物(土器類は全て小破片,又は細片・数字は破片数)・その他	備 考
155	C58-89	楕円形	41×27	27.2		
156	C58-99	円形	22×19	40.5		
157	C58-88, C58-98	円形	30×24	43.8	土師質土器1, 小破片11	
158	C58-99	楕円形	35×25	49.6	縄文土器3	
159	C58-99	円形	27×24	22.5		
160	C58-99	円形	18×16	30.8		
161	C58-88	円形	21×19	53.5		
162	C58-88	円形	24×23	36.8		
163	C58-98	楕円形	36×20	73.5		
164	C58-98	円形	28×25	69.5	小器3	
165	C58-88	円形	35×28	34.0	小器4	
166	C58-88	円形	32×26	52.2		
167	C58-88	楕円形	30×17	20.4		
168-A	C58-97, C58-98	不定形	44×33	28.0		
168-B	C58-97	不定形	100×54	67.0	かわらけ1(Bg), 木炭1, 小器4, 縄文土器1	
169	C58-88	不定形	40×27	37.9		
170	C58-87, C58-88	円形	28×20	63.8	小器1	
171	C58-87, C58-97	円形	43×33	50.3	土器1	
172	C58-89	楕円形	31×20	34.0		
173-A	C58-79	円形	27×20	47.8		
173-B	C58-79	円形	30×26	36.0	瀬戸美濃焼小皿16g, 小器3	
174	C58-87	円形	28×27	39.0		
175	C58-87	円形	36×35	32.8	かわらけ3(Bg), 土師器葉1, 小器1	
176	C58-87	円形	25×20	50.4	小器1	
177	C58-87	円形	50×42	33.3		
178	C58-77, C58-78	楕円形	33×25	40.0		
179	C58-88	円形	19×17	27.8	土師器葉1	
180	C58-88	楕円形	34×21	47.1		
181	C58-88	楕円形	46×22	44.5		
182	C58-87	円形	23×19	42.0		
183	C58-87	楕円形	55×30	28.7	小器1, 縄文土器1	
184-A	C58-77	円形	40×25	18.6		1号横列
184-B	C58-77	円形	59×50	57.3	土師器内黒釉1, 縄文土器2	
185	C58-78	楕円形	35×25	44.7		
186	C58-87	楕円形	40×20	48.9		
187	C58-87, C58-97	円形	41×18	28.5		
188	C58-87	楕円形	45×20	38.9		
189	C58-86	円形	32×30	37.0	小器2, 縄文土器1	
190	C58-78	不定形	40×33	35.0		
191	C58-89	円形	33×28	65.1	縄文土器1	
192	C58-77	楕円形	35×17	77.5		
193	C58-77	楕円形	29×20	21.8		
194	C58-77	円形	18×17	35.6		
195	C58-77	楕円形	27×20	38.0		
196	D59-01	不定形	65×53	48.2	土師器高台付鉢1, 土師器葉1, 小器3, 縄文土器2	
197	C58-87	円形	26×25	25.0	かわらけ1(Bg)	
198	C58-87	円形	15×10	11.8		
199	C58-87	楕円形	25×19	27.5		
200	C58-87	円形	20×19	18.0		
201	C58-77, C58-87	円形	27×23	17.6		
202	C58-77	円形	26×25	45.9	土師器環1, 小器	
203	C58-87	円形	17×16	19.9		
204	C58-77, C58-87	円形	28×26	28.2		
205	C58-77	円形	26×20	37.4		
209	D59-01	不定形	68×40	73.3	土師質土器環1, 小器8, 縄文土器2	
210	C58-76, C58-77	不定形	58×77	59.3	土師質土器環2, 小器1, 縄文土器2	1号横列
211	C58-78	円形	31×24	49.2		
212	C58-86	楕円形	25×17	30.1		
213	C58-28	不定形	55×34	30.3		
214	C58-28, C58-29	楕円形	69×31	32.8	縄文土器1	
215	C58-29	円形	34×30	15.6		
216	C58-38, C58-39	円形	25×25	46.8		
217-A	C58-38	円形	33×30	53.5		
217-B	C58-38	円形	17×13	19.0		
218	C58-38	楕円形	30×43	15.1		
219	C58-39	楕円形	34×21	52.5		
220	C58-39	楕円形	54×39	59.8		
221-A	C58-39	円形	31×21	52.2	縄文土器1	
221-B	C58-39	円形	34×31	61.0		
222	C58-39	楕円形	45×31	66.9	縄文土器2	
223	C58-39	楕円形	33×25	27.7		
224	C58-39, C58-49	楕円形	62×42	58.0	小器1	
225	C58-39	円形	33×32	61.9		
226	C58-49	円形	70×62	47.3	土師器環1, 縄文土器1	
227	C58-38	円形	28×26	27.5		
228	C58-38	楕円形	60×37	21.9		
229	C58-38	楕円形	29×23	47.5	土師器環2, 土器1	

第2表 居館地区柱穴跡・ピット一覧表(4)

遺構番号	位置	形態	範囲 (長×幅) (cm)	深さ (cm)	出土遺物(土器類は全て小破片,又は破片・数字は破片数)・その他	備考
230	C58-38	円形	45×32	11.2		
231	C58-29	楕円形	24×21	26.6		
232	C58-39	円形	19×14	17.0	土師器環1	
233	C58-48	楕円形	54×32	36.5		
234	C58-48	円形	30×30	45.0		
235	C58-48	楕円形	61×59	51.1	小槌1, 縄文土器1	
236	C58-48	楕円形	64×37	31.8		
239	C58-47	楕円形	51×30	32.5	槌1	
240	C58-47, C58-48	楕円形	43×32	34.8		
241	C58-47	円形	31×29	55.5	土師器環1, 槌1	
242	C58-49	円形	24×24	66.0		
243	C58-48	不定形	71×57	51.7	縄文土器1	
244	C58-48	円形	26×21	27.6		
245	C58-48	楕円形	42×30	51.7		
246	C58-58	円形	26×26	22.5		
247	C58-58	円形	35×29	27.2	土師器環1	
248	C58-48	円形	28×24	26.9		
249	C58-47, C58-48	円形	36×32	30.3		
250	C58-47	円形	45×35	40.0	土師器環1	
252	C58-76, C58-77	楕円形	36×20	42.0	須恵器環1	
253	C58-77	不定形	33×30	36.3		
254	C58-77	円形	24×22	30.2		
255	C58-77	円形	25×20	15.4		
256	C58-77	円形	18×15	22.0		
257	C58-77	楕円形	30×17	48.0		
258	C58-67	楕円形	35×20	44.8		
259	C58-77	円形	13×13	10.6		
260	C58-77	円形	30×19	23.9		
261	C58-67	円形	30×21	36.0		
262	C58-77	楕円形	24×16	18.6		
263	C58-67	楕円形	23×16	10.0		
264	C58-67	楕円形	35×19	31.0		
265	C58-67, C58-77	円形	24×22	47.0	縄文土器1	
266	C58-67	円形	26×24	19.9		
267	C58-67	楕円形	29×15	27.8		
268	C58-67, C58-77	円形	27×26	55.6		
269	C58-78	楕円形	23×14	16.4		
270	C58-68	円形	27×27	33.2		
271	C58-68	楕円形	37×29	63.3		
272	C58-68	円形	27×21	56.7		
273	C58-68	円形	31×26	45.9		
274	C58-58	楕円形	30×22	22.4		
275	C58-68	円形	20×16	56.3		
276	C58-68	円形	27×27	49.2		
277	C58-78	楕円形	25×16	13.4		
278	C58-78	楕円形	48×25	28.5		
279-1	C58-67	円形	24×25	29.7		
279-2	C58-58	楕円形	38×29	42.8		
280-1	C58-67	円形	25×20	43.8		
280-2	C58-58, C58-59	円形	33×28	34.3		
281	D58-48, D58-49	楕円形	45×34	47.2	かわらけ1(Dg)	
295	C58-66, C58-76	円形	45×35	32.1		
304	D58-94	円形	34×25	29.6		
305	D58-84	楕円形	63×48	37.3	土師器土器2, 土師器環4, 小槌1	3号獨立柱建物
306	D58-84	円形	36×35	19.1		3号獨立柱建物
307	D58-84	円形	42×32	33.8	須恵器環2, 縄文土器1	3号獨立柱建物
308	D58-74, D58-84	楕円形	37×29	32.0		
309	D58-83	円形	45×40	58.0	かわらけ1(Dg), 土師器土器2, 土師器環5, 土師器環1, 小槌1, 縄文土器1	3号獨立柱建物
310	D58-83	円形	44×40	17.2	かわらけ1(Dg), 土師器土器環2, 土師器環2	
311	D58-83, D58-93	円形	51×43	55.9	土師器環1	3号獨立柱建物
312	D58-83	円形	50×46	40.7	土師器環4, 小槌1, 縄文土器1	3号獨立柱建物
313	D58-83	楕円形	54×40	30.5	土師器環2	3号獨立柱建物
314	D58-82, D58-83	円形	83×66	86.1	菅笠環1, 土師器環4, 土師器環2, 土師器高台付環1, 縄文土器3	3号獨立柱建物
315	D58-73, D58-74	楕円形	47×38	19.0		
316	D58-74	楕円形	43×34	44.3		
317	D58-64	円形	31×29	20.6		
318	D58-64	円形	35×28	41.8		
319	D58-54	円形	82×75	22.7	土師器土器土器4, 小槌2, 縄文土器1	
326	D58-70	不定形	74×61	54.8	かわらけ1(Dg), 土師器環2, 小槌2, 縄文土器5	
327	D58-70	円形	106×88	41.5	かわらけ1(Gg), 土師器1, 須恵器環1, 須恵器品1, 小槌4, 縄文土器2	2号獨立柱建物
328	D58-70, D58-80	円形	30×25	56.2	かわらけ4(Bg), 土師器高台付環1, 土師器環5, 須恵器環2	
329	D58-70	円形	80×66	56.5	土師器高台付環2, 小槌1, 縄文土器1	2号獨立柱建物
331	D58-82	円形	37×35	22.9		3号獨立柱建物
332	D58-72, D58-82	円形	91×84	26.2	土師器環2, 須恵器品1	2号獨立柱建物
333	D58-81, D58-82	楕円形	90×73	71.6	かわらけ3(Gg), 青磁皿(阿波瀬)1(Dg)柱穴066-1と接合, 土師器環5, 縄文土器5	2号獨立柱建物
334	D58-71	楕円形	57×46	96.6	土師器環1, 槌1, 縄文土器3	

第2表 居館地区柱穴跡・ピット一覧表(5)

遺構番号	位置	形態	規模 (長×幅) (cm)	深さ (cm)	出土遺物(土器類は全て小破片、又は細片・数字は破片数)・その他	備考
355	D58-71	楕円形	84×62	29.4	かわらけ2(破),小礫3,縄文土器1	2号掘立柱建物
356	D58-71	楕円形	105×78	42.6		2号掘立柱建物
357	C58-79	円形	35×30	55.5		
358	C58-69, C58-79	円形	47×41	64.7		
359-A	C58-79	円形	42×35	63.0		
359-B	C58-79	楕円形	48×40	61.4	土器器环1, 礫1, 縄文土器1	
340	C58-79	楕円形	54×38	84.9		
341	D58-70, D58-71, D58-80, D58-81	円形	65×56	79.5	土器器环1, 土師器葉1, 須恵器葉1, 礫1, 縄文土器1	2号掘立柱建物
342	C58-68	円形	44×33	55.3	土師質土器破片1, 縄文土器1	
343	C58-69	楕円形	55×37	61.2	土師質土器破片1	
344	C58-69	円形	35×31	45.6	須恵器葉1	
345	C58-69	楕円形	55×23	30.4	土器器环1	
346-A	D58-71	楕円形	35×29	80.4	土師器葉1	
346-B	D58-71	円形	28×25	42.4		
347	D58-52, D58-62	円形	55×46	41.5	土師器葉4	
348	D58-52, D58-62	円形	44×40	56.9	土師器内裏破片1	
349	D58-52	円形	52×42	93.7	土器器环1, 土師器葉2, 縄文土器1	
350	D58-62	円形	43×42	50.1		
351	C58-79	円形	25×19	46.3		
352	C58-79	楕円形	52×25	25.2		
353	C58-69	円形	24×23	36.1		
354	D58-70	円形	27×25	31.5		
355	D58-62	円形	33×33	75.0		
386-A	D58-62	不定形	81×60	92.4	土師器葉2, 縄文土器2	
386-B	D58-62	不定形	100×35	101.8	須恵器葉1	
386-C	D58-62	円形	53×41	81.9	常滑葉1(14破)	
387	C58-78	円形	28×27	67.2		
388	C58-79	円形	52×36	37.9		
389	C58-79	円形	25×23	60.9		
390	C58-79	円形	41×37	40.9		
391	C58-78	楕円形	39×25	51.8		
392	D58-80	円形	25×21	54.3		
393	D58-81	円形	20×19	53.4		
394	D58-81	円形	72×69	82.2	土師器内裏破片1, 土師質土器1, 須恵器葉1, 小礫3, 縄文土器2	2号掘立柱建物
395	D58-62	円形	50×40	67.1		
396	D58-62	円形	52×41	56.4		
397	D58-60	楕円形	51×32	43.4		
398	D58-60, D58-70	楕円形	41×31	57.6	土師器内裏高台付破片1	
399	D58-60	円形	49×39	36.9		
400	D58-61	円形	50×42	34.3		
401	D58-60, D58-61	楕円形	56×30	76.0	土師器内裏高台付破片1, 小礫1	
402-A	D58-61	円形	45×38	69.0		
402-B	D58-61	円形	29×21	53.8		
402-C	D58-60, D58-61	円形	31×21	35.5		
403	D58-51, D58-61	不定形	85×65	47.7	縄文土器1	
404	D58-52	楕円形	68×59	106.3		
405	D58-52	円形	40×33	72.6	須恵器葉1	
406	D58-42, D58-52	円形	57×54	34.8		
407	D58-41	円形	53×53	28.7		
408	D58-41	楕円形	75×56	22.0		
409	D58-41	楕円形	101×59	53.3	土器器环1, 土師器葉2, 縄文土器1	
410	C58-78, C58-79	円形	37×30	52.3		
411	D58-30, D58-40	楕円形	54×36	50.6		
412	C58-59	円形	35×30	71.4		
413	C58-59	不定形	58×55	49.8		
414	D58-30	不定形	54×40	54.0		
415	C58-49	円形	56×46	61.1		
416	C58-49	楕円形	28×17	32.7		
417	D58-30	円形	32×30	50.8		
418	D58-30	円形	43×40	40.0		
419	D58-62	楕円形	68×47	95.3		
420	D58-52	楕円形	46×26	40.1		
421	D58-60, D58-61	円形	38×33	53.9		

第3表 地下式坑一覧表

通称番号	位置(グリッド)	形態	全長 (m)	地下家の平面形・規模等			主軸方位	坪面	図面	備考
				平面形	規模 (m)	深さ (m)				
496	C82-28	無設	265	隅丸方形	1.8×1.8	1.20	N-13°E-E	31	11	
498	C82-28	有設	27 (2.0)	やや幅広の不整 型な平面プラン	215×200 (概大)	1.8-2.15	N-7°E-E	31		
425D	F61-08	有設	3.8 (3.44)	隅丸方形	1.9×2.2×3.15	2.04	N-7°W-W	30	10	425号溝と重複
429	F61-06	有設	3.02	隅丸方形	2.1×3.0	2.00	N-74°E-W	30	10	503号溝と重複
430	F61-09	有設	2.70	隅丸方形	1.6×2.5	1.66	N-14°E-E	30		
448	F61-27	有設	3.25	隅丸方形	1.8×2.47	2.10	N-6°E-E	31	10	425号溝と503号溝に切り取られる
460	F61-84	有設	2.65	隅丸方形	1.8×1.9	1.85	N-7°E-E	31	10	503号溝と重複
504	F61-27	有設	3.50	隅丸方形	1.84×2.3	2.05	N-157°E-E	32	11	
550	F61-68	有設	3.30	隅丸方形	1.8×2.05	人口277 敷厚3.15	N-30°E-E	32	11	292号方形副溝区画と重複
594	F62-05	有設	2.84	隅丸方形	1.3×1.95	1.50	N-176°E-E	32	11	572号溝と重複
595	F62-05	有設	2.1 (2.0)	隅丸方形	1.26×1.8	1.14	N-173°E-E	32	11	
596	F61-82	有設	2.1 (1.7)	隅丸方形	0.74×1.3	1.00	N-86°W-W	33		503号溝と重複
599	F61-68	有設	2.53 (2.48)	隅丸方形	1.14×1.6	1.38	N-177°E-E	33	11	

第4表 土坑一覧表

通称番号	土坑方式	位置(グリッド)	形態	規模 (m)	深さ (cm)	坪面	図面	備考
256	N-109°-E	C58-48	東西に長い楕円形	(南北20.960×東西11.150)38	210	34	12	
257	N-87°-W	C58-48	楕円形	1.8×1.6	145	11		原箇内の土坑
251	N-72°-W	C58-55	上端 不整形円形 底面 長方形	201.10×140.50	235	34	12	120号溝を切る
301	C58-45	円形	0.950825×0.840726	75	34	12		
320	C58-68	円形プラン埋没	0.96×0.25	68	34	12		平安台跡 (旧2号) を切る
425A	F60-99	円形プラン	1.44×1.2	68	34			軸脚跡を埋没。重複は図面通りに埋める
447A	N-109°-E	F61-48	隅丸長方形プラン	3.0524-2.6521×1.808-1.5	96	34	12	147号土坑と重複
447B	F61-49	隅丸長方形と埋没	1.4080×0.640550	50	34	12	147号土坑と重複。西側を切られる	
449	N-110°-E	F61-37	隅丸方形	0.9208×0.888078	15-18	34		
450	F61-37	円形	0.7807×0.720860	19	34			
451	N-56°-E	F61-37	楕円形	0.80652×0.7039	15-66	34		
453	N-25°-E	F61-38	楕円形	0.830652×0.49336	17	34		
454	N-29°-E	F61-48	楕円形	1.0×0.8080	14	34		
456	N-19°-E	F61-49	不整形長方形	3.3030×1.15-1.2036-1.4	40	34		
491	N-95°-E	C61-99	隅丸長方形	1.68146×1.34131	31	35	13	490号溝と重複。新旧関係不明
493	N-95°-E	C61-85	隅丸長方形	2.64183×1.7118	62-62	35	12	474号溝及び平安住宅付 (689号) 副立柱 建物上と重複。474号溝に切られる
497A	C82-26	不整形円形	1.1080×1.2	75-64	35			697号溝に切られている
497B	N-31°-E	C82-29	隅丸長方形	1.68138×1.05083	65	35		697号土坑を切っている
499	C82-28	不整形円形	2.6246	35-20	35			
501	N-113°-E	F61-19	丸味のある不整形長方形	1.13092×0.78035	21	35	13	
502A	N-47°-W	F61-39 北側	長楕円形	2.9254×1.5	平場 85-90 中央凹み 116	35	13	戻境線。北側溝溝 (A号)
502B	N-47°-W	F61-39 南側	長方形	2.83×1.5	不整形円形の凹み	35	13	南側土坑 (B号)
505A	N-21°-E	F61-18	不整形長方形	3.21236×北側1.76155 南側1.08094	47-51	36	13	505号土坑と重複
505B	F61-19	不整形円形	1.12071×0.9867	16	36	13	505号土坑と重複。新旧関係は不明	
506	F61-28	不整形円形	1.0061×0.9054	29	36	13	503号土坑の南側。505号土坑と重複	
506	F61-17	不整形円形	1.11621×1.54094	32-35	36	13	425号溝と重複	
508	F60-62	長方形	1.73153×1.28110	160	36	13	569号溝に切られる	
513	N-45°-E	F61-58	隅丸方形	0.8068×0.78048	22	36		
514	F61-99	不整形円形	1.2048×1.18046	19	36			
515	N-25°-E	F61-88	楕円形	1.2096×0.76036	11	36		
516	N-24°-E	F61-88	楕円形	0.88071×0.64053	10	36		
517	N-62°-E	F61-89	楕円形	0.69×0.64029	18	36		
518A	N-103°-W	G61-80	不整形長方形	1.10079×0.8053	18	36		578号土坑に切られる
518B	G61-80	円形	0.79052×0.74648	20	36			578号土坑を切る
519	N-27°-W	G61-80	楕円形	1.26119×0.92677	43	36		
580	G61-80	円形	0.88071×0.94084	20	36			木の根のビッドで小さな覆土
581	G61-80	楕円形	0.9×0.76052	13	36			木の根のビッドで覆土を受ける
582A	N-19°-E	G61-70	丸味のある長方形	1.89541×1.14663	36	36		木の根のビッドで覆土を受ける
582B	206°-W	G61-70	長方形	0.86172×0.86172 (1.0)	13	36		583号土坑を切る
583	N-54°-E	F61-79	隅丸長方形	3.75369×2.59234	5-10	36		583A、583B、584号の3坑と重複
583A	N-20°-E	F61-79	隅丸長方形	1.08068×0.74650	25	36		583号土坑を切る
583B	F61-79	不整形長方形	0.740669×0.72669	16	36			583号土坑と重複
584	N-30°-E	F61-79	楕円形	1.04038×0.8011	38	36		583号土坑と重複
585	F61-69	円形	0.880611×0.93062	25	36			585号土坑に埋没し、589号土坑に埋められる
586A	F61-69	円形	0.81651×0.88651	27	36			589号土坑と重なっている
586B	F61-69	円形	0.760528×0.69653	8	36			
587	F61-68	円形	0.94069×0.92669	16	36			586A、B号に隣接する
588	N-39°-E	G61-71	楕円形	0.95069×0.72052	35	36		
589	N-88°-E	G61-71	不明	埋没 1.13×0.4	86	37		588号土坑の北側に隣接
590	N-88°-E	G61-70	方角を定むず不明	1.5171×1.2411	27.5	37		西側に埋没。埋没土坑に埋められる
591A	N-21°-E	F61-78	不整形長方形	1.88131×1.08081	28	37		西側に埋没。埋没土坑に埋められる
591B	N-62°-W	F61-78	隅丸長方形	1.28131×1.4809	30	37		591号土坑を切っている
593	N-65°-E	F61-74	上端 長方形 底面 隅丸台形	3.35×2.96 2.45×1.6238	97	37		503号溝及び525号溝と重複している
596	N-28°-E	F61-65	隅丸長方形	2.7174×1.46109	44	37		
598	N-67°-W	F61-70	隅丸長方形	1.261428×1.060429	31	37		
600	N-89°-E	F61-70	不整形長方形	0.61532×1.22673	70	37		
601	N-69°-W	F61-86	不整形円形	0.66036×0.48633	47	37		
602	N-57°-W	F61-85	隅丸長方形	0.93069×0.76042	17	37		
603	N-70°-E	F61-74	隅丸方形	1.46098×1.42310	27	37		425号溝及び503号溝と重複している
604	N-26°-E	F61-66	長円形	1.12088×0.94670	27	37		西側を1.6056m、深さ28cmの円形ビッドに埋められる

第5表 居館跡地区遺構出土の遺物観察表 (第38～39図)

注: 数量の欄の数字は調査品
口徑: 口径・器高の()の数字は調査品

種別	検出番号 遺物番号	遺物番号	類別	器種	生産地	時期	法量 (cm)			遺存率 (%)	重量 (g)	胎土	色調	備考	図版	番号
							口径	底径	器高							
38	001号	1	001-282	かわらけ	甎	12C後半	6.5	[2.1]	底部100	108	密	赤褐色～ 黄褐色	底部回転糸切り 手持ヘラナデ	14	1	
38	001号	2	001-411	かわらけ	甎	12C後半	5.3	[1.7]	底部100	62	密	赤褐色～ 黄褐色	底部回転糸切り不明 外周子持ヘラナデ	14	2	
38	001号	3	001-506	かわらけ	甎	12C後半			底部10	17	密	緑褐色	底部回転糸切り 無調整	14	3	
38	001号	4	001-647 649	かわらけ	甎	12C後半	6.3	[1.5]	底部100	66	密	淡褐色	底部回転糸切り 無調整 見出しすり消し	14	3	
38	001号	5	001-645	かわらけ	甎	12C後半			底部20	20	密	淡褐色	底部小片 回転糸切り 外周回転ヘラ削り 内面一部分にナデ			
38	001号	6	001-694	かわらけ	甎	12C後半	6.7	[1.3]	底部100	62	密	暗褐色	底部回転糸切り 外周ヘラ削り 抄取多量			
38	001号	7	001-049	かわらけ	甎	12C後半	6.2	[1.2]	底部20	23	密	淡褐色	底部回転糸切り 外周ヘラ削り 内面一部分にナデ			
38	001号	8	001-827	かわらけ	甎	13C中頃～後半	7.1	[2.0]	底部90	96	密	赤褐色	底部回転糸切り 全面ヘラ削り 内面全面に黄いナデ	14	5	
38	001号	9	001-672	かわらけ	甎	13C中頃～後半	6.2	[2.0]	底部40	46	密	赤褐色	底部全面ヘラ削り・ナデ 内面ナデ	14	6	
38	001号	10	001-028	かわらけ	甎	13C中頃～後半	6.0	[1.7]	底部60	33	密	淡赤褐色	底部回転糸切り 全面ヘラ削り 内面見込みナデ			
38	001号	11	001-831	かわらけ	甎	13C中頃～後半	6.3	[2.0]	底部80	59	密	暗褐色	底部回転糸切り 外周ヘラ ナデ 内面ナデ	14	7	
38	001号	12	001-833	かわらけ	甎	13C中頃～後半	6.3	[2.2]	底部40	50	密	淡黄褐色	底部回転糸切り 外周ナデ 内面ナデ	14	8	
38	001号	13	001-380	かわらけ	甎	13C中頃～後半	6.4	[1.8]	底部80	66	密	淡黄褐色	底部 回転糸切り ヘラナデ 内面ナデ			
38	001号	14	001-752	かわらけ	甎	13C中頃～後半	5.0	[1.3]	底部50	23	密	赤褐色	底部回転糸切り無調整 内周見込ナデ			
38	001号	15	001-684	かわらけ	甎	13C中頃～後半	4.6	[1.2]	底部60	24	密	淡黄褐色	底部回転糸切り・ナデ 内面ナデ 0 0 1 - 6 6 3 と接合	14	11	
38	001号	16	001-807	かわらけ	甎	13C	5.7	[1.1]	底部100	47	密	淡灰褐色	底部回転糸切り無調整 内面見込み中心にナデ消し	14	13	
38	001号	17	001-788	かわらけ	甎	13C	4.1	[1.1]	底部100	31	密	暗淡褐色	底部回転糸切り無調整 内面見込み中心にナデ消し	14	12	
38	001号	18	001-663	かわらけ	甎	13C	4.7	[1.0]	底部100	35	密	暗淡褐色	底部回転糸切り無調整 内面見込み中心にナデ消し			
38	001号	19	001-642	かわらけ	甎	13C	5.3	[1.0]	底部100	40	密	暗赤褐色	底部回転糸切り無調整 内面見込み中心にナデ消し			
38	001号	20	001-700	かわらけ	甎	13C	5.3	[1.6]	底部100	48	密	暗褐色	底部回転糸切り無調整 内面見込みナデ	14	14	
38	001号	21	001-493	かわらけ	甎	13C前半～中頃	11.0	8.0	2.7	20	22	密	淡黄褐色	底部回転糸切り 全面ヘラ削り・ナデ 内面ナデ	14	16
38	001号	22	001-390	かわらけ	甎	13C前半～中頃	12.1	12.6		20	17	密	淡黄褐色	内面ナデ		
38	001号	23	001-489	かわらけ	甎	13C前半～中頃				口縁小片	11	密	淡褐色			
38	001号	24	001-821	かわらけ	甎	13C				口縁小片	10	密	淡褐色			
38	001号	25	001-618	かわらけ	甎	13C前半～中頃				口縁小片	7	密	淡褐色	底部回転糸切り 周面ナデ		
38	001号	26	001-487	かわらけ	甎	13C前半～中頃				口縁小片	6	密	淡褐色			
38	001号	27	001-488	かわらけ	甎	13C前半～中頃				口縁小片	7	密	淡褐色			
38	001号	28	001-741	かわらけ	甎	12C後半	8.7	6.7	1.8	80	68	密	黄赤褐色	底部回転糸切り無調整	14	20
38	001号	29	001-311	かわらけ	甎	13C前半	7.4	6.2	1.3	25	10	密	暗赤褐色	底部回転糸切り 全面子持ヘラ削り		
38	001号	30	001-251	かわらけ	甎	13C前半	7.2	5.6	1.5	60	22	密	淡赤褐色	底部(外) 回転糸切り無調整 001-255と接合	14	21
38	001号	31	001-032	かわらけ	甎	13C前半	8.0	6.3	1.8	25	11	密	暗赤褐色	底部外周回転糸切り・ナデ 底部外周回転糸切り無調整		
38	001号	32	001-610	かわらけ	甎	13C前半	8.9	6.8	1.6	85	68	密	淡黄褐色	内面ナデ 001-611, 646と接合	14	27
38	001号	33	001-533	かわらけ	甎	13C前半	8.5	6.4	1.9	25	21	密	暗赤褐色	底部外周回転糸切り 内面ナデ	14	29
38	001号	34	001-426	かわらけ	甎	13C中頃～後半	8.4	5.6	2.5	50	34	密	暗赤褐色	有段口縁 底部外周回転糸 切り ヘラナデ 内面ヘラナデ	14	31
38	001号	35	001-731	かわらけ	甎	13C中頃～後半				底部小片	5	密	淡褐色	有段口縁		
38	001号	36	001-125	かわらけ	甎	13C前半				口縁小片	13	密	淡褐色	底部回転糸切り無調整		
38	001号	37	001-264	かわらけ	甎	13C前半	7.0	5.3	1.4	10	6	密	淡褐色	底部回転糸切り 全面ヘラ削り・ナデ		
38	001号	38	001-208	かわらけ	甎	13C前半	7.9	6.6	1.3	15	6	密	淡褐色	底部回転糸切り 見込ヘラナデ		
38	001号	39	001-499	青磁	甎	12C後半～13C		[4.7]	口縁小片	9	々々相	暗黄緑色	口縁部小片 口縁外面直下 に一条線状が繋がる 内面彫文	85	16	
38	001号	40	001-691	青磁	甎	12C後半～13C		[4.0]	体部小片	20	密	青黄緑色	体部小片 内面に彫文	85	15	
38	001号	41	001-619	青磁	甎	13C後半～14C	6.6	[1.9]	底部40	62	密	暗黄緑色	底部 内面中央に印文	85	21	
38	001号	42	001-532	青磁	甎	13C後半～14C	4.8	[1.7]	底部10	62	密	淡黄緑色	底部	85	20	
38	001号	43	001-506	青磁	甎	13C後半～14C	6.3	[1.7]	底部50	44	密	灰褐色	底部	85	19	
38	001号	44	001-540	白磁	甎	12C後半～13C		[1.4]	口縁小片	4	密	灰白色	口縁部口縁小片			

種別	探洞番号 遺跡番号	遺物番号	種別	器種	生産地	時期	法量 (cm)			遺存率 (%)	重量 (g)	胎土	色調	備考	図版番号						
							口径	底径	器高												
38	001号	45	001-397	陶器	和歌山	瀬美	13C後半			18.4	103	粗 砂状	青灰色	口縁部 厚5.0×13cm	15	9					
38	001号	46	001-398	陶器	和歌山	常滑	1150~1250			13.0	132	底部20	粗 砂状多	暗灰色	底部内面磨減	18	4				
38	001号	47	001-678	陶器	愛	常滑	時期不明			14.4	151	粗 長石 砂状多	暗褐色			15	12				
38	001号	48	001-747	陶器	愛	瀬美	12C~13C	6.5	6.5	0.9	39	細部小片	(胎) 暗 赤灰色	磁石に利用							
38	001号	49	001-242	灰磁器	愛	平安		7.0	6.5	0.8	40	細部小片	黒灰色	磁石に利用							
38	001号	50	001-C58-17	灰磁器	愛	平安		3.8	0.9	1.2	75	やや粗 砂状	黒褐色	磁石に利用							
39	120号	1	120-323	かわらけ	織		12C後半			8.6	11.8	底部40	52	密	暗赤褐色	底部細点赤きり 外周へラナゲナ	14	4			
39	120号	2	120-262	かわらけ	織		12C後半			7.2	11.5	底部80	63	やや粗 砂多	淡赤褐色	底部細点赤きり 外周へラナゲナ 120-C58-66と結合					
39	120号	3	120-016	かわらけ	織		13C中頃~後半				11.5	底部30	29	密	暗赤褐色	底部細点赤きり 外周へラナゲナ 底部内面ナゲ					
39	120号	4	120-207	かわらけ	織		13C中頃~後半			4.9	11.0	底部30	16	密	淡赤褐色	切り離し不明 底部内面ナゲ					
39	120号	5	120-C58-56	かわらけ	織		13C中頃~後半			4.4	11.4	底部100	35	密	淡赤褐色	底部細点赤きり 全部へラナゲナ 内面ナゲ	14	10			
39	120号	6	120-82	かわらけ	織		13C中頃~後半					底部10	15	密	淡黄褐色	底部切り離し不明 内面へラナゲナ					
39	120号	7	120-75	かわらけ	織		13C中頃~後半			7.2	12.5	底部30	34	密	淡黄褐色	同転赤きり 周辺へラナゲ 内面ナゲナ					
39	120号	8	120-325	かわらけ	織		13C前半~中頃	12.0	8.8	2.6	10	16	密	淡黄褐色	同転赤きり へラナゲ 内面ナゲナ	14	18				
39	120号	9	120-206	かわらけ	織		13C前半~中頃	8.0	4.4	3.0		10	16	密	明黄褐色	同転赤きり 周辺へラナゲ 内面ナゲナ	14	19			
39	120号	10	120-172	かわらけ	織		13C前半~中頃					口縁小片	5	密	淡褐色						
39	120号	11	120-047	かわらけ	織		13C前半~中頃					口縁小片	5	密	淡黄褐色						
39	120号	12	120-037	かわらけ	織		13C前半~中頃					口縁小片	6	密	赤褐色						
39	120号	13	120-188	かわらけ	織		13C前半	6.8	4.6	1.8	10	9	密	淡褐色	同転赤きり						
39	120号	14	120-053	かわらけ	織		13C前半	6.4	4.9	1.2	10	6	密	明黄褐色	同転赤きり						
39	120号	15	120-178	かわらけ	織		13C後半						4	密	赤褐色	器面磨減切り離し不明					
39	120号	16	120-322	かわらけ	織		13C前半	8.7	6.6	1.7	25	18	密	淡黄褐色	同転赤きり 周辺手持ちへ ラナゲナ	14	26				
39	120号	17	120-330	かわらけ	織		13C後半	8.4	4.5	2.2	5	10	密	淡黄褐色	同転赤きり 周辺手持ちへ ラナゲナ	14	32				
39	120号	18	120-056	青磁	織		12C後半~13C	6.6	4.7		89	密	暗灰緑色	底部厚3.15cm前後 無紋外周	85	13					
39	120号	19	120-086	青磁	織		13C後半~14C			3.9	26	密	キヨロフ 体下外周	85	18						
39	120号	20	120-238	白磁	織		13C後半	9.2	12.5		12	密	口縁30	12	密	灰白色	口へラ 内外面	85	25		
39	120号	21	120-220	白磁	織			6.0	3.0	3.0	13	密	小片	13	密	外面一青 灰色 内 面一暗赤 褐色	裏の裏 口縁 内面口ハナゲ C58-56ナゲ 4点と結合 他に同一器保1点あり	85	28		
39	120号	22	120-209	陶器	愛	瀬美	12C~13C	5.9	6.9	1.3	99	密	小石若干含 み	99	密	外周一こ げ茶青 内面一青 灰色		15	6		
39	120号	23	120-168	陶器	愛	常滑		5.5	5.5	1.4	18	密	細部小片	18	密	砂状多	緑褐色	磁石に利用	16	22	
39	120号	24	120-224	陶器	愛	瀬美	12C~13C	7.3	6.9	1.2	97	密	細部小片	97	密	砂状多	暗褐色	磁石に利用	16	16	
39	120号	25	120-191	灰磁器	愛	平安		5.9	7.2	0.8	40	30	密	底部40	30	密	暗灰色	磁石に利用			
39	120号	26	120-270	灰磁器	愛	平安		41.4	65.8	0.8	36	密	底径70	36	密	底径70	磁石に利用				
39	2号探立	1	327-002	灰磁器	不明			0.9	0.7									24	1		
39	2号探立	2	322-002	灰磁器	釘			7.2	0.6	0.2	100								24	2	
39	2号探立	3	061-002	磁石				22.3	18.8	12.2		800							25	1	
39	2号探立	4	063-002	磁石				22.0	18.3	12.1		500							25	2	
39	2号探立	5	066-002	磁石				21.6	18.9	13.0		300							25	3	
39	2号探立	6	082-002	磁石				24.4	28.6	16.0		1000							25	4	
39	2号探立	7	084-002	磁石				25.8	17.7	13.5		1200							25	5	
39	2号探立	8	088-002	磁石				24.8	24.8	11.8		900							25	6	
39	4号探立	1	051-001	かわらけ	織		13C前半~中頃					口縁20	10	密	淡褐色	口沿のよう口縁磨減が著しい			25	7	
39	4号探立	1	051-001	かわらけ	織		13C前半	8.0	6.0	1.3	40	20	密	淡赤褐色	内外磨減	内外磨減			14	25	
39	083号	1	083-001	かわらけ	織		13C中頃~後半				22.2	底部30	42	密	暗黄褐色	底部細点赤きり 周辺へ ラナゲナ	14	9			
39	188号	1	188-001	かわらけ	織		12C後半	12.0		22.2	口縁20	8	密	淡赤褐色					24	3	
39	304号	1	304-001	灰磁器	不明			11.9	11.9	0.5		破片							24	3	
39	304号	2	304-001	灰磁器	不明			12.7	0.9	0.4		破片							24	4	
39	328号	1	328-001	かわらけ	織		13C前半~中頃	11.9	8.6	2.7	20	16	密	淡黄褐色	同転赤きり ナゲ			14	17		
39	328号	2	328-001	かわらけ	織		13C前半	8.0	5.6	1.5	40	23	密	淡褐色	同転赤きり 手持ちへラナゲ 内面磨減ナゲ 328-12結合	14	22				
39	328号	3	328-002	かわらけ	織		13C前半	8.0	6.0	1.5	40	22	密	淡褐色	同転赤きり 内面磨減ナゲ	14	23				
39	386C号	1	386C-001	陶器	愛	常滑		0.9	0.3	1.1	114	密	長石若干含 み	114	密	淡赤褐色	磁石に利用			16	3
39	238号	1	238-003	かわらけ	織		13C前半	8.3	6.2	1.4	70	27	密	淡褐色	同転赤きり 内面ナゲ	14	24				
39	238号	2	238-01	かわらけ	織		13C前半	4.2	11.1		底部50	28	密	淡褐色	同転赤きり 無調整 内面ナゲ	14	15				

第6表 方形周溝区画墓出土の遺物観察表(第40図)

群図	群図番号 遺物番号	遺物番号	種別	器種	生産地	時期	法量 (cm)			遺存率 (%)	重量 (g)	胎土	色調	備考	区画番号	
							口縁	底径	器高							
40	292号 1	292-029a	瀬織	漆塗織			11.7	1.1	11	100	400				巻2	
40	292号 2	292-029b	木製品	円形木製品			7.5	6.8	0.7	100					巻3	
40	292号 3	292-030	白磁	小皿		13C後半	8.2	5.5	1.8	100	61				巻3	
40	292号 4	292-029c	木製品	梳篦			0.25	2.4	0.5						巻3	
40	292号 5	292-034	木製品	棒状木製品			0.17	1.9	1.8						巻4	
40	292号 6	292-035	木製品	棒状木製品			0.21	1.5	1.5						巻4	
40	292号 7	292-002	青磁	碗	龍泉窯	13C後半~14C	14.8	4.0	7.4	100	302	密	灰味黄褐色	底部外面露齧弁文	巻1	
40	292号 8	292-001	青磁	皿	龍泉窯	13C後半~14C	12.6	5.0	4.3	100	160	密	灰味黄褐色	底部外面露齧弁文	巻1	
40	292号 9	292-031	鉄製品	釘												
40	292号 10	292-040	かわらけ	碗		13C中頃~後半	5.0	[1.2]		底部90	44	密	暗黄褐色	木質付着 底部外面切り離し不明 全面手持ちへラ削り・ナデ 内面横ナデ		
40	288号 11	288-035	かわらけ	皿		13C中頃~後半	8.9	4.6	2.3	25	30	密	赤褐色	切り離し不明 全面へラ削りナデ 内面横ナデ	14 34	
40	288号 12	288-016	青磁	碗		12C後半~13C				[4.0]	口縁15	17	密	淡灰緑色	底部内面露花文	巻5 14
40	288号 13	288-074	陶器	瓶子	深美	12C~13C	6.5	6.6	1.0		胴部小片	30		暗灰色	磁石に利用	16 17

第7表 台地整形区画及び溝状遺構出土の遺物観察表(第41~43図)

群図	群図番号 遺物番号	遺物番号	種別	器種	生産地	時期	法量 (cm)			遺存率 (%)	重量 (g)	胎土	色調	備考	区画番号	
							口縁	底径	器高							
41	556号 1	556-002	磁器	飯碗			7.7	4.1	1.1		小破片	52				
41	556号 2	556-002	磁器	飯碗			6.9	3.4	0.8		小破片	10				
41	003号 1	003-110	かわらけ	皿		15C~16C	6.2	2.6	1.8	15	8	やや粗 砂粒	暗淡褐色	回転素きり 内面不明		
41	003号 2	003-113	かわらけ	皿		15C~16C				[1.8]	口縁小片	5	やや粗 砂粒	暗淡褐色		
41	003号 3	003-123	陶器	甕	常滑		6.3	4.0	1.2		胴部小片	37	粗 砂粒多	黄緑色灰釉	磁石に利用	
41	003号 4	003-153	陶器	甕	常滑		6.3	4.5	1.0		胴部小片	63		暗黄緑色灰釉	磁石に利用	
41	003号 5	003-038	陶器	甕	常滑		6.5	4.1	1.0		胴部小片	34		暗黄緑色灰釉	磁石に利用	
41	003号 6	003-015	陶器	甕	常滑		6.8	4.0	1.2		胴部小片	56		暗黄緑色灰釉	磁石に利用	
41	003号 7	003-153	磁器	飯碗			4.7	3.4	1.0		小破片	20		緑泥片着		
41	148号 1	148-424	かわらけ	碗		13C中頃~後半	4.6	1.2			底部90	37	密	暗赤褐色	底部全面手持ちへラ削りナデ 内面ナデ	
41	148号 2	148-385	陶器	甕	常滑	12C~13C	6.8	4.3	0.7		胴部小片	41		暗赤褐色	磁石に利用	
41	148号 3	148-306	陶器	甕	常滑		6.0	4.6	1.2		胴部小片	58		暗赤褐色	磁石に利用	
41	148号 4	148-258	陶器	甕	常滑		4.2	3.5	1.3		胴部小片	30		暗赤褐色	磁石に利用	
41	148号 5	148-386	陶器	甕	常滑		4.4	3.6	1.1		胴部小片	27		暗赤褐色	磁石に利用	
41	148号 6	148-364	陶器	甕	常滑	時期不明	6.9	4.7	1.4		底部小片	127		黄緑色灰釉	磁石に利用	
41	148号 7	148-203	内耳土器				3.2	2.8	8.8	10	148	粗 金雲母 長石 石英粒	外-黒褐色 内-褐色	磁石が特徴的	23 4	
41	148号 8	148-454	内耳土器			近世				[3.0]	口縁小片	18	密 微砂粒	外-暗黄褐色 内-淡黄褐色	口縁部	
41	148号 9	148-453	内耳土器							[2.1]	口縁小片	12	粗 金雲母 長石 石英粒	外-黒褐色 内-褐色		
41	148号 10	148-001	陶器	碗類	志戸呂	近世 17C	41.0	44.0	13.8		口縁小片	10	密	黒褐色		
41	148号 11	148-001	石	磁石			7.0	6.0	6.0		両端欠損	66				
41	290号 1	290-010	かわらけ	皿		13C前半	7.8	5.9	1.5		50	22	密 微砂粒多	淡黄褐色	底面回転素きり 周辺手持ちへラ削り ナデ 内外面露齧 底部回転素きり	14 28
41	290号 2	290-057	かわらけ	皿		13C前半	8.1	6.0	1.6		20	13	微砂粒多	淡黄褐色	周辺手持ちへラ削り ナデ 内底面ナデ	14 30
41	290号 3	290-091	青白磁	皿		12C	4.0	[1.2]			底部50	15	密	青白色	底部回転へラ削り 調整 薄手の皿	巻5 23
41	290号 4	290-082	陶器	甕	常滑	時期不明	9.0	4.0	6.0		底部小片	85	密	外-淡黄褐色 内-黄緑色灰釉	底部が1cm程立ち上がる	15 19
41	290号 5	290-087	石	磁石			6.9	6.7	6.5		50	48			副灰質砂岩 4面使用	
41	285B号 1	285C-228	陶器	天目茶碗	瀬戸窯	1425前後	4.4	[1.8]			底部100	37	密	底部外面鈍い 灰色	285B号清出土遺物	22 12
41	285B号 2	285B-232	陶器	瓶子 (梅瓶)	古瀬戸	1300~1325	6.5	6.1	1.2		胴部小片	85	長石若干	外-茶緑色灰釉		20 6
41	285B号 3	285-204	陶器	甕	常滑		6.5	6.0	1.3		胴部小片	68		外-暗茶緑色 灰釉	磁石に利用	
41	285B号 4	285-156	陶器	甕	常滑		6.8	6.0	1.2		胴部小片	86		砂粒多	暗褐色	磁石に利用

採出番号 遺構番号	採出番号 遺構番号	種別	器種	生産地	時期	法量 (cm)			遺存率 (%)	重量 (g)	胎土	色調	備考	国取番号			
						口径	底径	高さ									
41	285-188	陶器	鉢	常滑		7.0	6.0	1.3	割部小片	89	砂粒多	暗茶褐色	砥石に利用	16	6		
41	285-189	陶器	葉	瀬美	12C-13C	6.0	6.0	1.4	割部小片	123	砂粒多	暗褐色	砥石に利用	16	15		
41	285-121	陶器	煎茶碗	瀬美	近世	2.5	6.1	0.7	口縁小片	17	密	暗こげ茶					
42	285号	1	285-078	わらひ	碗			13C			密 微砂粒多	外一黒褐色 内一暗褐色	底部粘結部無調整 内面ナデ 内外縁で黒く黄色 底部粘結部無調整 内面ナデ 内外縁で黒く黄色				
42	285号	2	285-172	わらひ	碗			13C	3.9	10.8	底縁部	17	密 微砂粒多	内外黒褐色			
42	285号	3	285-059	陶器	燗火皿	瀬美	1480-1530	9.6	2.0	口縁部	25	20	微砂粒	黄褐色～ 暗黄褐色	内外面に細かな凹入 285-81と接合	22	3
42	285号	4	285-082	陶器	折縁 (灰輪) 鉄胎皿	瀬美	1610-1650	12.8	7.0	2.2	20	27	微砂粒	鈍い黄灰色	口縁緑色灰輪 内底面鉄胎	27	21
42	285号	5	285-222	陶器	高台付 片口鉢	常滑			15.0	3.2	底縁部	105	砂粒	鈍い灰色	底面付高台 内面縁部 一部磨滅しており、 砥石として利用	18	3
42	285号	6	285-077	陶器	片口鉢	常滑	1250-1275	4.3	3.6	1.0	口縁小片	21	密	外一こげ茶 内一黄褐色	内面磨滅	19	3
42	285号	7	285-081	陶器	片口鉢	常滑	1300-1400	3.9	4.5	0.8	口縁小片	22	砂粒多	鈍い灰色	内面磨滅	19	6
42	285号	8	285-062	陶器	片口鉢	常滑	1350-1400	9.0	10.0	0.8	口縁10	233	口縁部 大石	茶褐色	内面磨滅	19	5
42	285号	9	285-176	陶器	片口鉢	常滑	14C後半?	7.0	6.0	1.1	底部小片	80	砂粒多	外一茶褐色 内一暗こげ茶	内面磨滅 さら さらしており 285-149と接合	20	3
42	285号	10	285-031	陶器	凸帯蓮 弁文皿	瀬美	12C	6.5	4.5	1.1	肩部小片	52	密	暗灰緑色 (灰輪)	灰輪 蓮弁文二 段あり	15	1
42	285号	11	285-024	陶器	葉	瀬美	12C-13C	5.6	5.6	1.2	肩部小片	55	密	暗灰色	肩部に3本の細か い沈線と文様	15	3
42	285号	12	285-760-8	陶器	飯子 (梅瓶)	古瀬戸	1375-1475	3.0	3.5	0.8	肩部小片	12	密	暗黄緑色 (灰輪)	肩部上方磨かへ成 雑、三条、下方に二 条帯かかれている	20	11
42	285号	13	285-047	陶器	燗台	瀬美	1375-1400		16.5		肩部小片	72	密	鈍い黄緑色 (灰輪)	蓋部 ローソク立 ての金具(鉄)残存 全面に磨滅 細か な凹みがある	22	11
42	285号	14	285-126	陶器	葉	常滑		5.0	5.8	1.0	肩部小片	42	砂粒	暗茶褐色	砥石に利用	16	24
42	285号	15	285-090	陶器	葉	常滑		4.5	4.0	0.9	肩部小片	27	砂粒	灰緑色	砥石に利用		
42	285号	16	285-147	陶器	葉	常滑		3.0	3.0	1.1	肩部小片	25	砂粒	黄褐色	砥石に利用		
42	285号	17	285-222	陶器	葉	常滑		3.7	3.7	1.2	肩部小片	50	砂粒	暗灰色	砥石に利用		
42	285号	18	285-150	陶器	葉	常滑		0.7	3.1	0.9	肩部小片	36	砂粒	暗灰緑色	砥石に利用	16	29
42	285号	19	285-220	陶器	葉	瀬美		6.0	9.8	1.7	底部小片	123		暗青灰色	内底面磨滅 砥石に利用		
42	285号	20	285-143	灰輪燗 台	石	平安		11.3	7.0	1.2	底縁部	139			高台底面 砥石に利用		
42	285号	21	285-214	石	燗台			7.8	4.0	1.1	小破片	56			緑泥片質		
42	285号	22	285-183	石	砥石			7.1	2.9	2.0		56			両面欠損 燗灰質砂岩		
42	285号	23	285-057	陶器	灯明皿	美濃	近世後期	4.5	11.0		底縁部	35	密	内一茶色			
42	285号	24	285-222	内耳土器				4.0	3.7	1.4	口縁小片	19	石 長石多 金雲 母微量	黒褐色			
42	285号	25	285-222	内耳土器				4.0	4.2	1.0	口縁小片	20	砂粒	暗褐色 黒褐色 茶色まじら	鉄胎	27	33
42	285号	26	285-163	陶器	摺鉢	瀬美		3.0	4.9	0.9	口縁小片	16					
42	428号	1	428-113	陶器	平碗	瀬美	1425前後	3.2	3.7	0.6	口縁小片	10		鈍い黄緑色 (灰輪)	口径15cm前後か	21	5
42	428号	2	428-113	陶器	平碗	瀬美	1425前後	4.9	4.9	0.6	口縁小片	18		淡黄緑色(灰輪)	口径16cm前後か	21	6
42	428号	3	428-010	陶器	縁部小皿	瀬美	1425前後	3.8	4.2	0.5	口縁小片	13		淡茶灰色	口縁内部に灰輪 断面一部砥石に 利用	21	17
42	428号	4	428-011	陶器	葉	常滑	1220-1275	28.3		18.5	口縁15	211	砂粒大 長石粒	青灰色		15	13
42	428号	5	428-004	陶器	飯子 (梅瓶)	古瀬戸	1375-1425	6.7	7.0	0.8	割部小片	68		淡黄緑色	胴部にへらによるや やゆの痕跡4条 砥石に利用		
42	428号	6	428-001	陶器	片口鉢	常滑		7.5	7.4	1.4	体部小片	70	砂粒大 長石粒大	紫褐色	砥石に利用		
42	428号	7	428-001	陶器	葉	常滑		6.0	6.5	1.0	肩部小片	63	砂粒大 長石粒大	紫褐色	砥石に利用 2点 接合	16	4
42	428号	8	428-113	陶器	葉	常滑		6.0	4.5	1.0	割部小片	48	砂粒大	紫褐色	砥石に利用		
43	428号	1	428-001	石	燗台			15.0	7.9	2.0		290					
43	494号	1	494-008	陶器	片口鉢	常滑	1250-1300	29.0	15.6	8.8		15	435	淡黄茶褐色	C62-39-1とB62 -32-1と接合	19	1
43	494号	2	494-013	灰輪燗 台	石	平安		6.5	4.3	1.0	割部小片	19			砥石に利用		
43	495号	1	495-001	陶器	摺鉢	瀬美	1490-1510	6.5	10.2	1.4	体部小片	105			下底一部	22	17
43	495号	2	495-001	内耳土器				5.6	6.3	1.2	口縁小片	44		黒褐色			
43	495号	3	495-001	内耳土器				6.4	6.7	0.8	口縁小片	44		黒褐色			
43	495号	4	495-001	内耳土器				31.1	29.0	9.0		15	475	黒褐色	9点接合	22	19
43	495号	5	495-001	石	砥石			7.9	3.3	2.5		83					

探区	採掘番号 遺構(番号)	遺物番号	種別	器種	生産地	時期	法量 (cm)			遺存率 (%)	重量 (g)	胎土	色調	備考	図版	番号	
							口径	底径	器高								
43	503号	1	503-002	陶器	平碗	郡山産	1400前後	12.8		12.7	0.7	口縁小片	13	浅黄緑色	2点接合	21	3
43	503号	2	503-002	陶器	平碗	郡山産	1400前後	14.8		13.2	0.7	口縁小片	14	鈍い黄褐色		21	2
43	503号	3	503-002	陶器	深皿	郡山産	後期	(1.9)	(2.1)	(0.7)	0.7	口縁小片	5	浅黄緑色		22	6
43	503号	4	503-005	陶器	縁飾小皿	郡山産	1400前後	(2.2)	(3.1)	(0.4)	0.4	口縁小片	5	浅緑色		21	23
43	503号	5	503-002	陶器	折縁深皿	郡山産	1400前後	(4.0)	(5.9)	(0.8)	0.8	口縁小片	21	鈍い黄褐色		21	30
43	503号	6	503-005	陶器	片口鉢	常滑	1490~1500	(5.2)	(4.2)	(1.3)	1.3	口縁小片	42	褐色		19	9
43	503号	7	503-002	陶器	片口鉢	常滑		(4.4)	(6.5)	(1.2)	1.2	底部小片	48	外-明褐色 内-暗褐色			
43	503号	8	503-002	陶器	壺	常滑		(5.8)	(5.3)	(1.2)	1.2	胴部小片	42		磁石に利用	16	23
43	520号	1	520-001	陶器	壺	志戸川	17C	10.9	5.3	2.3	40	47	茶褐色	5点接合	27	28	
43	520号	2	520-001	陶器	掻鉢	郡山産	17C後半					口縁小片	35			27	32
43	520号	3	520-001	陶器	内耳土器			(3.5)	(5.3)	(0.8)	0.8	口縁小片	44		2点接合	23	10
43	520号	4	520-001	須恵器	壺	平安		(5.4)	(5.5)	(1.0)	1.0	胴部小片	32		磁石に利用	16	14
43	520号	5	520-001	須恵器	壺	平安		(7.2)	(5.1)	(1.2)	1.2	胴部小片	53		磁石に利用	16	13
43	520号	6	520-001	石	板碑			(6.8)	(5.0)	(1.4)	1.4		65				
43	569号	1	569-001	陶器	内耳土器			(4.5)	(5.2)	(0.7)	0.7	口縁小片	42	黒褐色		23	7
43	570号	1	570-003	陶器	片口鉢	常滑		(5.0)	(10.2)	(1.2)	1.2	底部小片	153	茶褐色		20	4
43	571号	1	571-001	青磁	皿	14C代		5.9	(1.5)		底底30	20	濃青緑色灰色		5	26	
43	571号	2	571-005	陶器	平碗	郡山産	1425前後	14.8		(6.8)	6.8	口縁小片	42	濃黄緑色		21	4
43	571号	3	571-002	陶器	縁飾小皿	郡山産	1425~1475	4.6	(1.5)		1.5	底部60	28	外-乳灰色 内-黄灰色		21	28
43	571号	4	571-001	陶器	縁飾小皿	郡山産	1425前後	(4.1)	(4.2)	(0.4)	0.4	口縁小片	10	浅緑色		21	19
43	571号	5	571-001	陶器	縁飾小皿	郡山産	1425前後	(3.3)	(4.4)	(0.8)	0.8	口縁小片	18	黄緑色		21	31
43	571号	6	571-001	陶器	壺	常滑		(8.5)	(9.2)	(1.2)	1.2	胴部小片	115	外-茶褐色 内-茶褐色	磁石に利用	16	7
43	571号	7	571-001	陶器	壺	常滑		(15.7)	(8.9)	(1.1)	1.1	胴部小片	209		磁石に利用 595-1と接合	16	2
43	572号	1	572-001	石	礎石			(3.1)	(2.0)	(1.8)	1.8		17				

第8表 地下式及び土坑出土の遺物観察表(第44~45図)

探区	採掘番号 遺構(番号)	遺物番号	種別	器種	生産地	時期	法量 (cm)			遺存率 (%)	重量 (g)	胎土	色調	備考	図版	番号	
							口径	底径	器高								
44	452号	1	452-082	陶器	平碗	郡山産	1450前後	4.7	(2.9)		底部90	63	外-暗灰色 内-淡黄褐色		21	11	
44	452号	2	452-089	陶器	縁飾小皿	郡山産	1425前後	11.0	4.6	2.3	60	64	乳白色		21	18	
44	452号	3	452-082	陶器	縁飾小皿	郡山産	1425~1475	4.6	(1.9)		1.9	底部30	31	灰白色		21	27
44	452号	4	452-059	陶器	高台付片口鉢	常滑	1150~1250					底部小片	25	灰色		18	5
44	452号	5	452-098	陶器	片口鉢	常滑	1500~1550	30.0		(5.8)	5.8	口縁30	270	鈍い褐色	503-1 504-1と接合	19	10
44	452号	6	452-082	陶器	片口鉢	常滑			10.4	(7.2)	7.2	口縁70	335	紫褐色	425-100と接合	20	1
44	452号	7	452-082	陶器	片口鉢	常滑	1400~1450	(5.1)	(7.5)	(1.3)	1.3	口縁	88			15	16
44	430号	1	430-002	鉄製品	鉄製品			(4.9)	(3.8)					24	5		
44	430号	2	430-002	鉄製品	鉄製品			(5.1)						24	6		
44	448号	1	448-002	陶器	縁飾小皿	郡山産	1440~1465	10.0	5.1	2.2	100	93		灰白色		21	12
44	448号	2	448-003	陶器	縁飾小皿	郡山産	1440~1465	9.2	4.5	1.9	100	73		鈍い黄灰色		21	13
44	448号	3	448-004	陶器	縁飾小皿	郡山産	1440~1465	9.5	4.4	1.9	100	79		鈍い黄灰色		21	14
44	448号	4	448-005	陶器	縁飾小皿	郡山産	1440~1465	9.7	4.4	2.2	100	86		鈍い黄灰色		21	15
44	448号	5	448-001	陶器	壺	常滑	時期不明	11.4		(3.5)	3.5	口縁20	33	黒褐色		15	11
44	448号	6	448-001	陶器	瓶子(樽)	古瀬戸	1375~1475			(4.7)	4.7	胴部小片	110	外-淡緑色 内-灰色		20	9
44	448号	7	448-001	陶器	瓶子(樽)	古瀬戸	1300~1325			(7.9)	7.9	胴部小片	130	外-鈍い緑 内-灰色		20	7
44	448号	8	448-001	鉄製品	鉄製品			31.0	(56.0)	(3.5)				24	7		
44	448号	9	448-001	鉄製品	鉄製品			(22.0)		(4.5)				24	8		
44	504号	1	504-006	陶器	平碗	郡山産	1450前後	14.1		(4.2)	4.2	口縁15	23			21	9
44	504号	2	504-012	陶器	底折皿	郡山産	1315前後	8.4	6.6	1.8	30	33		茶褐色	503-1と接合	22	9
44	504号	3	504-065	陶器	掻鉢	郡山産	1475前後	29.0	10.8	9.3	30	134			504-24 425-535 1 24 385-2 1 6 503-2 448-1 302-1と接合	22	15
44	504号	4	504-032	陶器	瓶子(樽)	古瀬戸	1375~1475			(9.0)	9.0	胴部小片	130	外-鈍い黄緑色 内-鈍い褐色		20	8
44	504号	5	504-061	陶器	常滑			(4.0)	(5.1)	(1.0)	1.0	胴部小片	24		磁石に利用	16	19
44	504号	6	504-025	陶器	常滑			(5.8)	(5.5)	(1.2)	1.2	胴部小片	69		磁石に利用	16	5
45	504号	7	504-027	陶器	祖母橋茶碗	瀬戸	16C			(12.0)	(27.2)		816	外-茶色 内-茶灰色	504-3 1. 17と接合	23	11
45	504号	8	504-061	石	礎石			(5.2)	(2.9)	(2.9)	2.9		84				
45	599号	1	599-003	石	姥鎌車			(5.9)	(5.9)	(2.7)	2.7		127				
45	206号	1	206-001	陶器	高台付片口鉢	常滑	1220~1250	(3.2)	(1.3)	(0.7)	0.7	口縁小片	6	外-淡茶褐色 内-暗灰色		18	7
45	206号	2	206-009	陶器	壺	常滑		(3.4)	(4.4)	(1.1)	1.1	胴部小片	23	淡黄褐色	磁石に利用	16	21
45	502号	1	502-001	陶器	碗形鉢	郡山産	1375~1400					口縁小片	39	浅黄緑色	磁石に利用	22	1
45	502号	2	502-001	陶器	常滑			(3.6)	(7.9)	(1.3)	1.3	胴部小片	38		磁石に利用	24	9
45	502号	3	502-001	鉄製品	鉄製品			(12.0)	(21.0)	(3.0)	3.0						

順	探図番号 遺構番号	遺物番号	種別	器種	生産地	時期	法量 (cm)			遺存率 (%)	重量 (g)	胎土	色調	備考	図版	番号
							口径	底径	器高							
45	505号	1 505-002	鉄製品	常滑	1400~1450	1400	1450	21.5	0.0	0.0					24	10
45	502号	1 502-002	陶器	片口鉢	常滑	1400	1450	0.7	0.7	1.9	口縁小片	84	赤褐色		19	8
45	503号	1 503-001	陶器	平碗	瀬戸焼	1450前後	155	5.0	5.5			76	外-淡黄褐色 内-黄緑色		21	1
45	504号	1 504-001	陶器	縁部小皿	瀬戸焼	1450前後	9.9	4.8	2.0	口縁10	10	淡黄褐色		21	22	
45	503号	2 503-001	陶器	平碗	瀬戸焼	1425前後		4.8	11.9	底径20	19	淡黄褐色		21	8	
45	503号	2 503-001	鉄鉢	在胎器				0.5	14.5	11.1	口縁20	210	淡灰褐色		20	2
45	503号	3 503-001	陶器	壺	常滑			10.1	12.3	0.9	肩厚破片	140			16	1
45	503号	4 503-002	磁石					24.2	19.8	19.3		1300			25	8

第9表 グリッド出土の遺物観察表 (第46~49図)

順	探図番号 遺構番号	遺物番号	種別	器種	生産地	時期	法量 (cm)			遺存率 (%)	重量 (g)	胎土	色調	備考	図版	番号	
							口径	底径	器高								
46	C58G	1 C58-2-01	石	硯石				6.7	6.3	4.7			6.7×5.3×4.7		24	12	
46	C58G	2 C58-2-01	陶器	壺	常滑			0.9	0.5	0.9	肩厚小片	9					
46	C58G	3 C58-0-01	陶器	壺	常滑			0.5	0.8	0.8	肩厚小片	20					
46	C58G	4 C58-2-01	陶器	壺	海美	12C~13C		6.5	6.5	1.2	肩厚小片	50	赤灰色		15	7	
46	C58G	5 C58-2-01	陶器	壺	常滑			0.7	0.4	1.3	肩厚小片	10					
46	C58G	6 C58-6-02	青白磁	合子蓋		12C					蓋上部分	2	淡青白色	蓋外面に鼠風の文様・平魚・博多に類似品	巻5	29	
46	C58G	7 C58-7-01	陶器	湯呑茶碗	瀬戸焼	1425~1450	0.4	0.8	0.6	口縁小片	6		淡黄褐色		22	5	
46	C58G	8 C58-7-02	陶器	壺	常滑			0.3	0.1	0.9	肩厚小片	45					
46	C58G	9 C58-6-02	陶器	蓋付口鉢	常滑	1200~1250	31.8	17.4	13.3		25	505	明茶褐色		18	2	
46	C58G	10 C58-8-01	陶器	壺	常滑			0.7	0.6	1.1	肩厚小片	35					
46	C58G	11 C58-8-01	陶器	足張型小皿	山陽焼	13C中頃	8.1	4.9	1.6		80	56	外-暗灰色 内-黄褐色		22	2	
46	D58G	1 D58-6-01	石	硯石				0.7	0.5	0.4		100			24	14	
46	D58G	2 D58-6-01	土師					0.8	1.2	0.3		3	褐色-暗褐色		24	29	
46	D58G	3 D58-6-01	石	硯石				6.0	3.4	2.4		74			24	13	
46	D58G	4 D58-8-05	陶器	壺	常滑			0.1	0.6	1.0	肩厚小片	56			15	17	
46	D59G	1 D59-0-01	陶器	壺	常滑	1200~1275		4.0	4.5	1.1	口縁小片	24	鈍茶褐色		15	14	
46	D59G	2 D59-0-01	陶器	壺	常滑			0.3	0.5	1.2	肩厚小片	32					
46	D59G	3 D59-0-01	陶器	壺	常滑			1.6	0.8	0.9	肩厚小片	10					
46	D59G	4 D59-7-01	須恵器		平安			4.3	4.1	1.2	肩厚小片	22					
46	C61G	1 9027-01	陶器	縁部小皿	瀬戸焼	1425前後	0.3	0.1	0.1	口縁小片	6		暗黄褐色		21	18	
46	C61G	2 9027-01	陶器	平碗	瀬戸焼	1450前後	0.6	0.5	0.7	口縁小片	28		茶褐色暗		21	10	
46	C61G	3 9027-01	陶器	縁部小皿	瀬戸焼	1425前後	0.3	0.1	0.5	口縁小片	5		暗黄褐色		鉄蝕	21	20
46	C61G	4 9027-01	陶器	平鉢	瀬戸焼	1475前後	0.9	0.2	0.7	口縁小片	8		黄褐色		鉄蝕	22	16
46	C62G	1 C62-2-01	陶器	壺	常滑			4.4	6.5	1.0	肩厚小片	36				16	30
46	C62G	2 C62-2-01	陶器	壺	常滑			0.0	0.5	1.3	肩厚小片	100				16	8
46	C62G	3 C62-2-01	内耳土器					31.6	27.4	7.6		20	283	黒褐色	3点接合	23	5
47	C62G	4 C62-2-01	かわかけ	瓦		15C~16C	8.2	5.0	2.1		10	9	暗黄褐色		14	33	
47	C62G	5 C62-2-01	瓦	瓦	在胎器			0.7	0.8	0.8	口縁小片	57		暗黄褐色		20	3
47	C62G	6 C62-2-01	内耳土器					0.9	0.1	1.0	口縁小片	62		黄褐色			
47	C62G	7 C62-2-01	内耳土器					0.5	0.3	0.8	底面小片	64		黒褐色			
47	C62G	8 C62-2-01	内耳土器					0.6	0.0	0.8	口縁小片	74		黒褐色		23	1
47	C62G	9 C62-2-01	内耳土器					0.6	0.6	1.1	口縁小片	92		黒褐色		23	2
47	C62G	10 C62-2-01	内耳土器					0.2	0.1	0.7	口縁小片	19		黒褐色			
47	C62G	11 C62-0-01	陶器	天目茶碗	瀬戸焼	1450前後		4.4	11.1	底径50	15		淡黒褐色		22	13	
47	C62G	12 C62-0-01	陶器	志野	瀬戸焼	1600前後		0.7	0.6	0.6	口縁小片	5				27	26
47	C62G	13 C62-0-01	内耳土器					0.0	0.0	1.0	口縁小片	28		黒褐色			
47	C62G	14 C62-0-01	内耳土器					0.1	0.1	0.9	口縁小片	12		黒褐色			
47	C62G	15 C62-0-01	内耳土器					0.7	0.5	1.0	口縁小片	13		黒褐色			
47	C62G	16 C62-7-01	内耳土器					0.9	0.5	1.0	口縁小片	15		黒褐色			
47	D60G	1 D60-2-01	須恵器	壺	平安			4.5	0.5	1.0	肩厚小片	23					
47	D60G	2 D60-0-01	陶器	壺	常滑	1200~1275		0.9	0.2	1.1	口縁小片	19		内-茶褐色		15	10
47	D60G	3 D60-3-02	石	硯石				6.3	0.6	0.5		54				24	18
47	D60G	4 D60-5-01	土師					0.2	1.2	0.3		60	4	淡黒灰~黄褐色		24	24
47	D60G	5 D60-7-01	土師					0.9	1.1	0.3		50	3	暗灰黄褐色		24	28
47	D60G	6 D60-8-01	土師					4.0	1.2	0.3		90	5	黒灰色		24	26
47	D60G	7 D60-8-01	土師					0.7	1.2	0.3		90	5	暗灰色		24	25
47	D60G	8 D60-8-01	土師					0.9	0.6	0.3		25	2	淡黄褐色		24	27
47	D61G	1 D61-0-01	土師					0.9	1.2	0.3		100	5	淡黄褐色		24	23
47	D61G	2 D61-7-01	石	硯石				0.4	4.2	2.5		53				24	15
47	D61G	3 D61-7-01	土師					4.3	1.3	0.3		100	6	淡黄褐色		24	22
47	D61G	4 D61-7-01	土師					4.3	1.2	0.3		100	6	淡黄褐色		24	21
47	D61G	5 D61-0-01	陶器	天目茶碗	瀬戸焼	1600~1610		0.4	0.5	0.5	口縁小片	7		鉄蝕		22	14
47	D61G	6 D61-0-01	青磁			12C~13C		0.2	1.0	0.3	口縁小片	3		青灰色			
47	D61G	7 D61-0-01	須恵器		平安			0.7	4.2	0.9	肩厚小片	16					
47	E90G	1 E90-0-01	青磁	皿		13C後半		0.3	1.0	0.6	口縁小片	5		濃青白色			
47	E90G	2 E90-0-01	陶器	壺	常滑			6.3	0.4	1.0	肩厚小片	42					

期別	採掘番号 遺物番号	遺物番号	種別	器種	生産地	法量 (Cm)	遺存率 (%)	重量 (g)	胎土	色調	備考	国取番号
47	E60G 3	E0-96-04	陶器	甕	常滑	(4.7) (4.1) (1.3)	12.8	297			底石に利用	
47	E61G 1	E0-96-01	陶器	甕	常滑	(5.4) (4.9) (1.1)	14.9	26			底石に利用	
47	E61G 2	E0-96-02	青磁	香炉 <small>or</small> 甕	中津	(2.1) (1.9) (0.9)	1.9	5		暗青灰色	香炉または甕の 口縁部小片	
47	E61G 3	E0-96-03	陶器	甕	常滑	(6.3) (6.6) (0.9)	19.8	34			底石に利用	
47	E61G 4	E0-96-08	陶器	広口甕	北尾道	疑跡?	12.8	19.0		鈍い青褐色		22 18
48	E61G 5	E0-96-09	陶器	甕	常滑	(4.8) (4.9) (0.9)	14.9	19			底石に利用	
48	E61G 6	E0-96-10	陶器	短文甕	瀬波	13C ~ 13C	(5.7) (6.6) (1.2)	19.0			薄弁文 <small>or</small> 表裏模文	15 2
48	E61G 7	E0-96-11	石	砥石	中国 北尾道	(6.9) (7.0) (2.4)	16.3	67				24 16
48	E61G 8	E0-96-12	陶器	大型甕物	中国 北尾道	中世前期	(5.7) (7.3) (0.9)	19.0		暗茶褐色		
48	E61G 9	E0-96-13	陶器	瓶子 (甕瓶)	古瀬戸	1300 ~ 1325	9.0	11.0		底部40	54	20 10
48	E61G 10	E0-96-14	陶器	平瓶	北尾道	1400前後	(2.5) (4.0) (0.5)	1.9			口縁小片	6
48	E61G 11	E0-96-15	石	砥石		(7.6) (6.0) (1.9)	15.5	54				24 17
48	E62G 1	E0-96-16	陶器	内耳土甕		(5.4) (5.7) (1.0)	11.7	61		黒褐色		23 6
48	E62G 2	E0-96-17	陶器	甕	常滑	(4.1) (6.7) (1.1)	11.9	30			底石に利用	
48	E62G 3	E0-96-18	陶器	高合付 片口鉢	常滑	~ 1250	10.0	15.0		底部25	156	18 9
48	E62G 4	E0-96-19	石	砥石		(16.5) (14) (4.3)	30.8	200				24 11
48	E62G 5	E0-96-20	陶器	折縁皿	瀬戸	100 ~ 150	(2.4) (2.7) (0.6)	4.4			口縁小片	4
48	E62G 6	E0-96-21	陶器	折縁皿	瀬戸	100 ~ 150	(2.4) (2.7) (0.6)	4.4			口縁小片	3
48	E62G 7	E0-96-22	石	砥石		(3.4) (3.5) (1.2)	4.1	20				24 20
48	E62G 8	E0-96-23	陶器	内耳土甕		(5.9) (6.8) (0.7)	16.7	65		黒褐色		23 3
48	E62G 9	E0-96-24	陶器	甕	常滑	(4.0) (4.6) (1.2)	13.8	65			底石に利用	16 27
48	E62G 10	E0-96-25	陶器	甕	常滑	(5.3) (6.1) (1.3)	16.4	87			底石に利用	
48	E62G 11	E0-96-26	陶器	内耳土甕		(1.9) (6.9) (0.6)	1.9	33		鈍い淡黒褐色		
48	E62G 12	E0-96-27	陶器	甕	常滑	(5.9) (6.9) (1.0)	16.8	46			底石に利用	16 25
48	E62G 13	E0-96-28	陶器	瓶	平安	(4.3) (4.0) (0.8)	11.1	25			底石に利用	
48	E62G 14	E0-96-29	陶器	高合付 片口鉢	常滑	1150 ~ 1175	(3.7) (3.5) (0.6)	11.1		灰色		18 6
48	E62G 15	E0-96-30	陶器	甕	時期不明	(5.9) (6.2) (0.9)	16.9	40			底石に利用	
48	E62G 16	E0-96-31	陶器	甕	常滑	(4.1) (6.7) (1.2)	11.9	45			底石に利用	16 28
48	E62G 17	E0-96-32	陶器	甕	常滑	(6.6) (7.6) (1.3)	19.5	70		明茶褐色		16 26
48	E62G 18	E0-96-33	青磁	香炉	中世	3.4	[1.2]	7.0		青灰色	千島の香炉の底部	巻5 30
48	E61G 1	E0-96-01	陶器	折縁皿	瀬戸	100 ~ 150	(4.0) (4.6) (0.6)	14.6		緑色		21 34
48	E61G 2	E0-96-02	陶器	甕	常滑	1275 ~ 1300	(3.9) (3.1) (1.1)	11.1		黄褐色		15 15
48	E61G 3	E0-96-03	陶器	御目付 大皿	瀬戸	1475	(3.3) (2.9) (0.8)	10.1		鈍い黄緑色		22 10
48	E61G 4	E0-96-04	陶器	片口鉢	常滑	1300 ~ 1400	(2.8) (2.9) (0.9)	9.6		淡青灰色		19 4
48	E61G 5	E0-96-05	陶器	内耳土甕		(3.1) (6.4) (1.0)	10.5	26		黒褐色		23 9
48	E61G 6	E0-96-06	陶器	片口鉢	常滑	(6.7) (8.9) (1.9)	17.6	72		鈍い茶褐色		
48	E61G 7	E0-96-07	白磁	口鉢	13C後半	14.2	7.8	[2.5]		青灰白色	口ハゲ	巻5 24
48	E61G 8	E0-96-08	陶器	湖皿	瀬戸	1375 ~ 1475	5.0	[1.1]		鈍い灰白色		22 8
48	E61G 9	E0-96-09	陶器	甕	常滑	(5.8) (4.4) (1.0)	11.2	31			底石に利用	16 11
48	E61G 10	E0-96-10	陶器	甕	常滑	(4.7) (7.2) (1.0)	11.9	51			底石に利用	16 31
48	E61G 11	E0-96-11	白磁	碗 <small>or</small> 皿?	13C前半	5.0	[1.0]	17.0			内面花文	巻5 17
48	E61G 12	E0-96-12	陶器	片口鉢	常滑	1220 ~ 1250	(5.2) (4.6) (0.9)	10.7		鈍い淡茶褐色		19 2
48	E61G 13	E0-96-13	白磁	平安	6.2	(7.8) (1.0)	10.8	37			底石に利用	
48	E61G 14	E0-96-14	陶器	盤	古瀬戸	1375 ~ 1475	8.2	[1.0]			底石に利用	
48	E61G 15	9837-001	陶器	平瓶	瀬戸	1425	(2.8) (3.5) (0.9)	10.2		浅黄緑色		21 7
48	E61G 16	9847-001	陶器	縁部小皿	瀬戸	1425 ~ 1475	5.2	[1.2]			底部100	60
48	E61G 17	9837-001	陶器	折縁皿	瀬戸	1350前後	(2.3) (3.0) (0.9)	10.2			口縁小片	7
48	E61G 18	9837-001	陶器	盤	瀬戸	1375 ~ 1425	(2.9) (5.9) (1.9)	14.7			底部小片	22
48	E61G 19	9841-001	白磁	西耳甕	13C	12.6	[2.3]	12.0			口縁小片	12
48	G61G 1	E0-96-34	陶器	縁部小皿	瀬戸	1450前後	17.8	[5.5]			口縁10	28
48	G61G 2	E0-96-35	陶器	片口鉢	常滑	1400 ~ 1450	(6.7) (14.0) (1.0)	24.7		茶褐色~黒褐色	3点検合	19 7
48	G61G 3	9837-001	陶器	甕	常滑	(4.4) (4.3) (1.3)	10.0	31			底石に利用	
48	G61G 4	4598-001	白磁	皿	14C前半	5.2	[1.1]	6.0		明緑灰色	口ハゲ 内面底部 と底部の縁に浅溝	巻5 22
48	G61G 5	9847-001	陶器	平瓶	瀬戸	1375 ~ 1400	(3.6) (3.1) (0.9)	10.6		淡黄緑色		21 6
48	G61G 6	9847-001	陶器	縁部小皿	瀬戸	1425前後	(2.7) (2.8) (0.9)	10.4		茶褐色		21 21
48	G61G 7	9847-001	陶器	縁部小皿	瀬戸	1450前後	(3.5) (2.7) (0.9)	10.1		黄褐色	縁部	21 25
48	G61G 8	9837-001	陶器	甕	常滑	(3.6) (2.1) (1.1)	10.8	10			底石に利用	

第10表 近世の出土遺物観察表(陶器類) (第51図)

探出番号	遺物番号	種別	器種	生成地	時期	法量 (cm.)			残存率 (%)	重量 (g)	胎土	色調	備考	図版番号		
						口径	底径	器高								
51	1	E62-35	陶器	天目茶碗	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620	6(3)	6(6)	0(5)	底部小片	24	暗黄灰色	鉄軸	27 28	
51	2	E62-40	陶器	天目茶碗	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620	4(4)	4(4)	0(5)	口縁小片	8	暗黄灰色	神軸	27 29	
51	3	F61-36	陶器	天目茶碗	那珂陸	豊原5~6期	1700~1750	4(7)	4(3)	0(4)	口縁小片	10	黒褐色	鉄軸	27 30	
51	4	148-001	陶器	碗	志戸呂		近世 17C	4(4)	4(4)	3(8)	口縁小片	10	密 黒褐色			
51	5	9835T	陶器	丸皿	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620	2(7)	2(2)	0(5)	口縁小片	6	淡黄緑色		27 20	
51	6	E61-44	陶器	丸皿	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620	2(8)	2(1)	0(5)	口縁小片	4	暗淡黄緑色		27 19	
51	7	285-082	陶器	折縁 (灰軸) 鉄給皿	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620	12.8	7.0	2.2	30	27	隠砂 粒	鈍い黄灰色	口縁緑色灰軸 内底面鉄絵	27 21
51	8	D61-97	陶器	折縁 (灰軸) 鉄給皿	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620	3(3)	3(3)	0(6)	口縁小片	7	暗黄灰色		27 23	
51	9	D61-98	陶器	折縁 (灰軸) 鉄給皿	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620	2(8)	2(4)	0(5)	口縁小片	14	暗黄灰色		27 22	
51	10	F61-51	陶器	灰盤小皿	那珂陸		近世	4(4)	4(4)	3(8)	口縁小片	10	密 黒褐色			
51	11	D61-46	陶器	輪ハゲ皿	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620	3(3)	3(3)	0(5)	口縁小片	9	暗黄灰色		27 16	
51	12	C62-25	陶器	輪ハゲ皿	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620	3(3)	3(3)	0(5)	口縁小片	8	暗黄灰色		27 18	
51	13	E61-22	陶器	志野鉄給皿	那珂陸	豊原1期	17C初	2(6)	2(1)	0(5)	口縁小片	5	暗黄灰色		27 24	
51	14	E62-40	陶器	志野丸皿	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620	2(5)	2(7)	0(5)	口縁小片	7	暗黄灰色		27 25	
51	15	C62-58	陶器	志野丸皿	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620	2(6)	2(2)	0(5)	口縁小片	4	暗黄灰色		27 26	
51	16	E61-70	陶器	輪ハゲ皿	那珂陸	豊原1~2期	1610~1620				口縁小片	8			27 17	
51	17	S601E	陶器	皿	志戸呂		近世 17C	10.9	5.3	2.3	40	47	密 黒茶褐色	5点接合	27 27	
51	18	285-037	陶器	灯明籠	美濃		近世 後期	4.5	11.0		底面80	35	密 内一茶色			
51	19	E62-40	陶器	灯明籠	志戸呂		近世 18C	11.5	5.7	2.3	30	33		E62-40-1と同一		
51	20	F61-48	陶器	播鉢			近世				底部小片	46		礫石に利用		
51	21	285-163	陶器	播鉢	那珂陸	豊原6期	1725~1750	3(3)	4(9)	0(9)	口縁小片	16	密 黒褐色 茶色まだら	鉄軸	27 31	
51	22	D60-18	陶器	鉄軸壺			近世				口縁小片	15	密 黒褐色			
51	23	285-121	陶器	鉄軸壺	那珂陸		近世	2(5)	5(1)	0(7)	口縁小片	17	密 暗こげ茶			

第11表 遺構及びグリッド出土の中近世銭貨観察表 (図版26)

図版 番号	位 置 (グリッド)	遺構 番号	銭貨名	重量 (g)	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	内縁外径 (mm)	内縁内径 (mm)	外縁厚 (mm)	内縁厚 (mm)	備 考	
26	1	148	445	寛永通寶	2.97	24.6	20.0	6.8	6.0	1.5	1.0	
26	2	425B	108	寛永通寶	2.10	20.5	21.0	-	-	1.1	1.0	
26	3	448	1	元祐通寶	1.61	23.0	19.0	7.0	6.0	1.0	0.5	約3/4
26	4	505	2	元祐通寶	2.80	24.4	20.0	9.0	7.0	1.0	0.5	
26	5	520	1	寛永通寶	5.13	28.0	21.0	8.0	6.0	1.3	1.0	
26	6	520	1	寛永通寶	2.66	24.5	20.0	7.0	6.0	0.7	0.5	
26	7	520	1	寛永通寶	1.48	22.6	18.0	6.0	4.0	0.5	0.4	
26	8	D60-28	8	寛永通寶	2.29	22.4	19.0	8.0	6.0	0.8	0.4	
26	9	D60-43	1	寛永通寶	2.48	23.0	19.0	8.0	6.0	1.0	?	
26	10	D60-54	1	寛永通寶	2.64	24.1	19.6	7.0	6.0	0.7	0.5	
26	11	D61	1	寛永通寶	2.62	25.1	20.0	7.0	6.0	1.1	0.5	
26	12	D61-56	2	永樂通寶	2.99	24.3	21.0	8.0	6.0	1.0	0.5	
26	13	D61-56	2	淳化元寶	2.09	22.0	18.0	8.0	6.0	0.9	0.5	
26	14	D61-56	2	-	13.13	25.0	20.0	8.0	6.0	-	-	4枚結合 (両面ともに裏面)
26	15	E61-54	1	不明	3.54	24.8	20.0	6.0	5.0	1.0	0.5	
26	16	E61-97	1	寛永通寶	3.56	24.0	19.0	7.0	6.0	0.9	0.5	
26	17	F62-35	9	寛永通寶	2.29	22.7	18.0	8.0	6.0	0.9	0.5	
26	18	F60-63	1	寛永通寶	2.12	23.0	18.0	8.0	6.0	0.7	0.4	
26	19	F60-74	4	寛永通寶	2.18	21.7	16.0	7.0	6.0	0.7	0.4	
26	20	F60-92	6	不明	3.65	23.4	18.0	8.0	6.0	1.45	0.7	
26	21	F61-41	1	寛永通寶	2.23	24.2	20.0	8.0	6.0	0.8	0.5	
26	22	F61-81	1	寛永通寶	1.34	23.5	18.0	8.0	6.0	1.2	0.6	約1/2割
26	23	F60-94	1	寛永通寶	1.57	22.5	18.0	8.0	6.0	0.7	0.4	
26	24-1	9819T	3	熙寧元寶	5.95	24.5	22.0	8.0	6.0	-	-	2枚結合 (写真表)
26	24-2	9819T	3	開元通寶	24.0	20.0	8.0	6.0	-	-	-	3枚結合 (写真裏)
26	25	9819T	3	元祐通寶	2.64	24.0	20.0	9.0	7.0	1.0	0.5	
26	26	9844T	1	寛永通寶	2.41	22.4	18.0	8.0	6.0	0.8	0.4	

第12表 441号集石遺構出土の近世銭貨観察表 (図版27)

図版 番号	位 置 (グリッド)	遺構 番号	銭貨名	重量 (g)	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	内縁外径 (mm)	内縁内径 (mm)	外縁厚 (mm)	内縁厚 (mm)	備 考	
27	1	441	35	寛永通寶	2.39	23.0	19.0	8.0	6.0	0.8	0.4	
27	2	441	49	寛永通寶	2.89	23.0	18.0	8.0	6.0	0.9	0.5	
27	3	441	50	寛永通寶	3.04	24.0	20.0	8	6	1.0	0.5	
27	4	441	58	寛永通寶	2.48	23.8	19.0	8.0	6.0	0.8	0.4	
27	5	441	63	寛永通寶	2.24	22.5	18.0	8.0	6.0	0.7	0.4	
27	6	441	62	寛永通寶	3.27	24.1	19.0	8.0	6.0	1.0	0.5	
27	7	441	70	寛永通寶	1.32	23.4	19.0	8.0	6.0	0.5	0.3	
27	8	441	83	寛永通寶	2.34	24.0	19.0	8.0	6.0	0.5	0.3	
27	9	441	86	寛永通寶	3.22	23.7	19.0	8.0	6.0	0.8	0.4	
27	10	441	91	寛永通寶	1.84	22.5	19.0	9.0	7.0	0.8	0.4	
27	11	441	92	寛永通寶	2.76	23.0	19.0	8.0	6.0	0.8	0.4	
27	12	441	94	寛永通寶	2.56	24.5	19.0	8.0	6.0	0.8	0.4	
27	13	441	96	寛永通寶	2.69	24.0	19.0	8.0	6.0	0.8	0.4	
27	14	441	99	寛永通寶	2.38	23.8	19.0	8.0	6.0	0.7	0.4	
27	15	441	97	文久永寶	3.43	26.4	20.0	9.0	7.0	1.0	0.5	

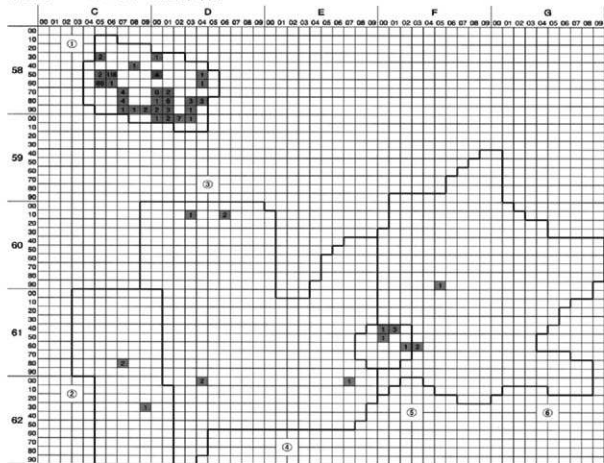
第13表 かわらけ集計表

	12C 後半	12C 前半	13C前 半~ 中半	13C前 半~ 後半	13C中 半~ 後半	13C 後半	13C	19C ~ 16C	時期 不明	合計	割合 (%)
焼	17	25	25	6	25	19	92	52	144	502	50.2
煮	1	62			5	2	3	73	27	100	34.8
不明							0	43	43	15.0	
計	18	62	25	6	30	2	3	165	122	287	100.0
割合1 (%)	10.9	37.6	15.2	3.6	18.2	1.2	11.5	1.8	100.0		

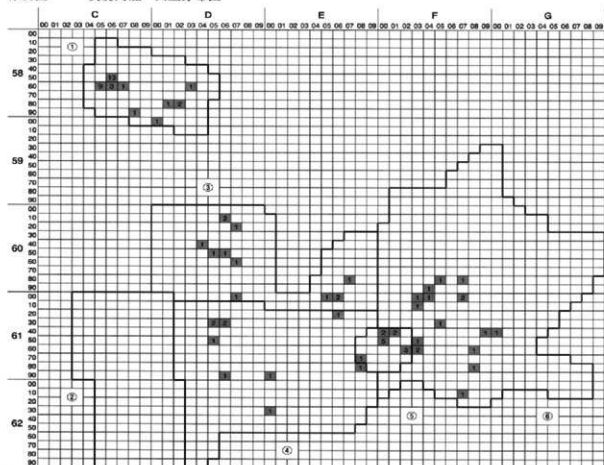
第14表 貿易陶磁器集計表

	12C 後半	12C 前半	13C前 半~ 中半	13C前 半~ 後半	13C中 半~ 後半	13C 後半	19C ~ 16C	時期 不明	合計	割合 (%)	貿易	
											輸出	輸入
焼	2	17	2	1	11	30	12	45	82.5			
煮						1	12	13	13.9			
不明								0	1	1.2		
計	2	17	2	1	11	31	12	62	79.1			
焼	1					1	1	1	1.2			
煮								1	1.2			
不明								0	1	1.2		
計								2	2.5			
焼	2	17	2	1	15	1	45	17	62	79.1		
煮									1	1.2		
不明									1	1.2		
計									2	2.5		
焼	1								1	1.2		
煮									1	1.2		
不明									0	1	1.2	
計									2	2.5		
焼	1								1	1.2		
煮									1	1.2		
不明									0	1	1.2	
計									2	2.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2								2	2.5		
煮	1								1	1.2		
不明									3	3.5		
計									3	3.5		
焼	2	</										

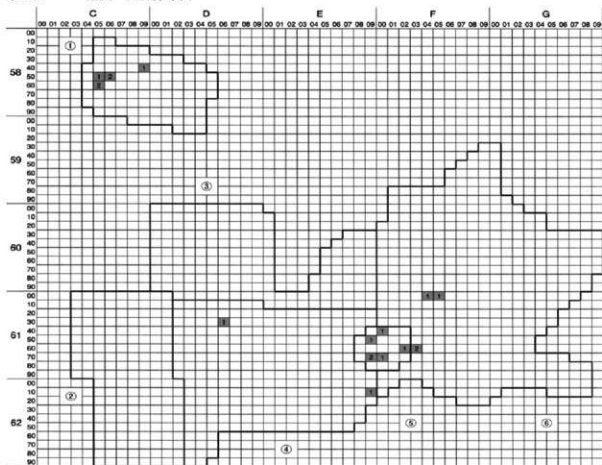
第52図 かわらけ 出土分布図



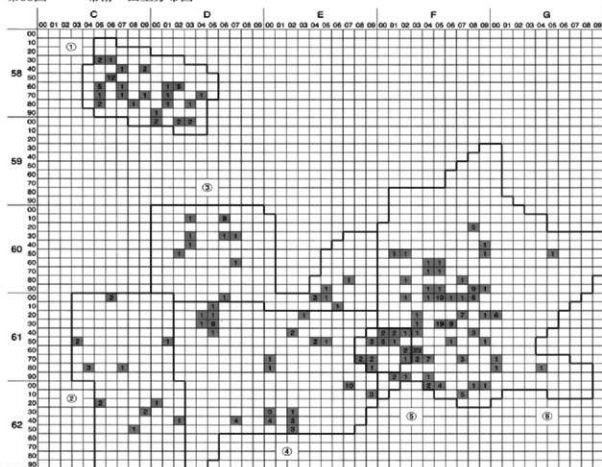
第53図 貿易陶磁 出土分布図



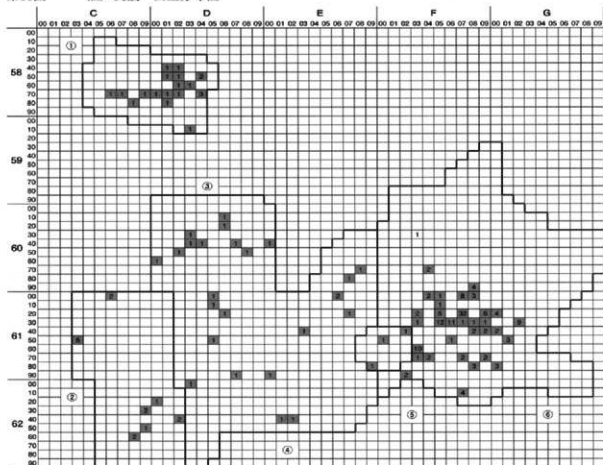
第54图 渥美 出土分布图



第55图 常滑 出土分布图



第56図 瀬戸美濃 出土分布図



第19表 陶磁器・かわらけ類 地区別・種類別出土表

		1 居館地区 (C58・59・D58・59 大グリッド地区)	2 607号台地整形区画 周辺地区 (C61・62 大グリッド地区)	3 003号溝状遺構 南側地区 (D60・E60 大グリッド地区)	4 148号溝状遺構 周辺地区 (D61・62・E61・62 大グリッド地区)	5 292号方形周溝区画南 地区 (D61-69～F61-80 グリッド地区)	6 地下式坑・土坑・ 溝状遺構群地区 (F59～62・G60～62 大グリッド地区)	合計
かわらけ	出土数	269	3	3	3	6	3	287
	割合	94%	1%	1%	1%	3%	1%	100%
貿易陶磁	出土数	32	0	12	10	13	17	84
	割合	38.1%	0%	14.3%	11.9%	15.5%	20.2%	100%
凝灰	出土数	6	0	0	2	6	4	18
	割合	33.3%	0%	0%	11.1%	33.3%	22.3%	100%
常滑	出土数	47	16	23	50	22	155	313
	割合	15%	5.1%	7.4%	16%	7%	49.5%	100%
瀬戸美濃	出土数	20	16	15	10	3	146	210
	割合	9.5%	7.6%	7.2%	4.8%	1.4%	69.5%	100%
合計	出土数	374	35	53	75	50	325	912
	割合	41%	3.8%	5.8%	8.2%	5.5%	35.7%	100%

写 真 图 版



調査前風景



居館跡 北西地区
001号溝状遺構
1号掘立柱建物跡



居館跡 南西地区
001号・120号溝状遺構、
ピット群



居館跡
001号・120号溝状遺構、
ピット群



001号溝状遺構



120号溝状遺構



001号溝状遺構



居館跡南東地区
2号～6号
掘立柱建物跡、ビット群



居館跡北東地区
238号溝状遺構、ビット群



292号方形周溝区画墓(南西から)



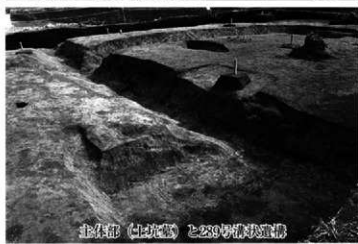
北西面 (192-6)



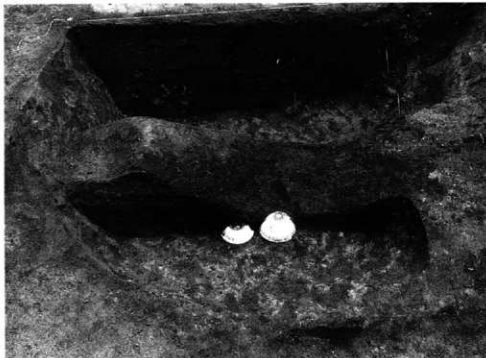
北西面 (192-6)



北西面 (192-6)



北西面 (192-6) 292号周溝区画墓



南側遺物出土状況



図版5



主体部（土坑墓）
検出状況

（土坑埋土・木棺跡）
出土遺物



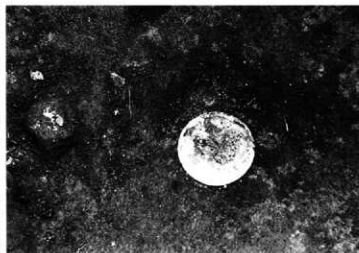
292号方形周溝区画墓
主体部（土坑墓）遺物出土状況



北側
遺物出土状況
(鏡を取上げた後)



(白磁碗を取上げた後)



(鏡の下の白磁碗)



292号方形周溝区画墓
主体部(土坑墓)遺物出土状況

主体部
完掘状況



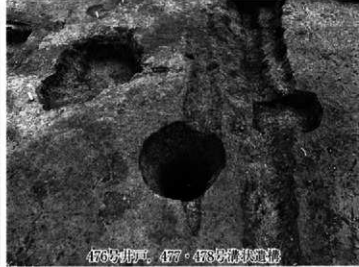
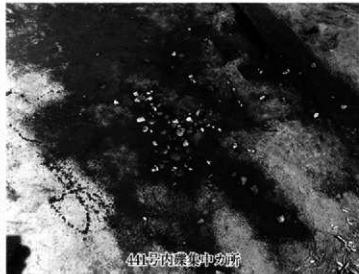
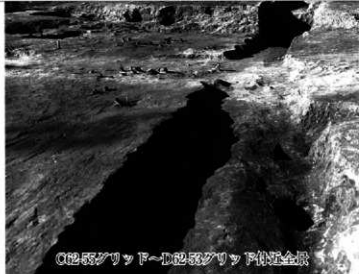
002号・003号溝状遺構全景



002号・003号溝状遺構断面



003号溝状遺構完掘状況





148号溝状遺構全景（南から）



図版9

148号溝状遺構全景



285号溝状遺構全景（北から）



285号溝状遺構全景（南から）



125B号溝状遺構全景（北から）



508号溝状遺構西面（北から）



567号溝状遺構全景（北から）



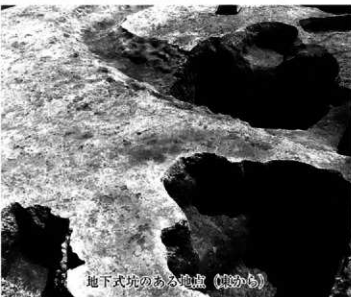
570号・571号・572号溝状遺構全景（西から）



425D号地下式坑



429号地下式坑(東から)



地下式坑のある地点(東から)



448号地下式坑(北東から)



448号地下式坑遺物出土状況



448号地下式坑遺物出土状況



460号地下式坑全景



460号地下式坑内土層断面



496号地下式坑(南から)



504号地下式坑(北から)



594号地下式坑(北から)



550号地下式坑(南から)



595号地下式坑(東から)



599号地下式坑(東から)



206号土坑 (東から)



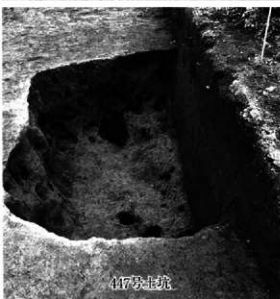
251号土坑



301号土坑



320号土坑 (南東から)



417号土坑



土坑群



493号土坑



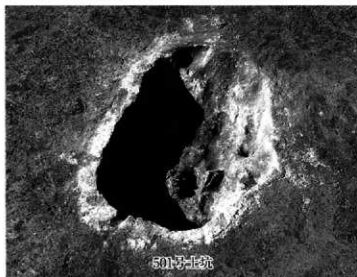
497号土坑馬の骨・歯・土坑群



491号土坑



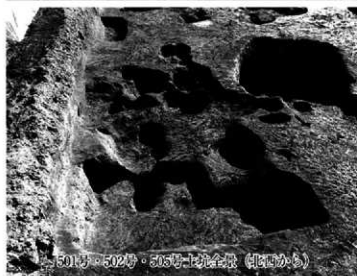
G62557/9・F-16253/9・F全景 (北から)



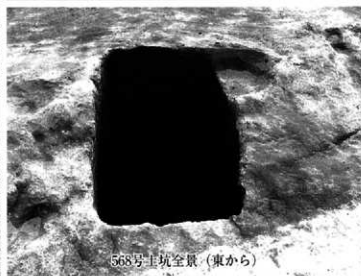
501号土坑



502号土坑



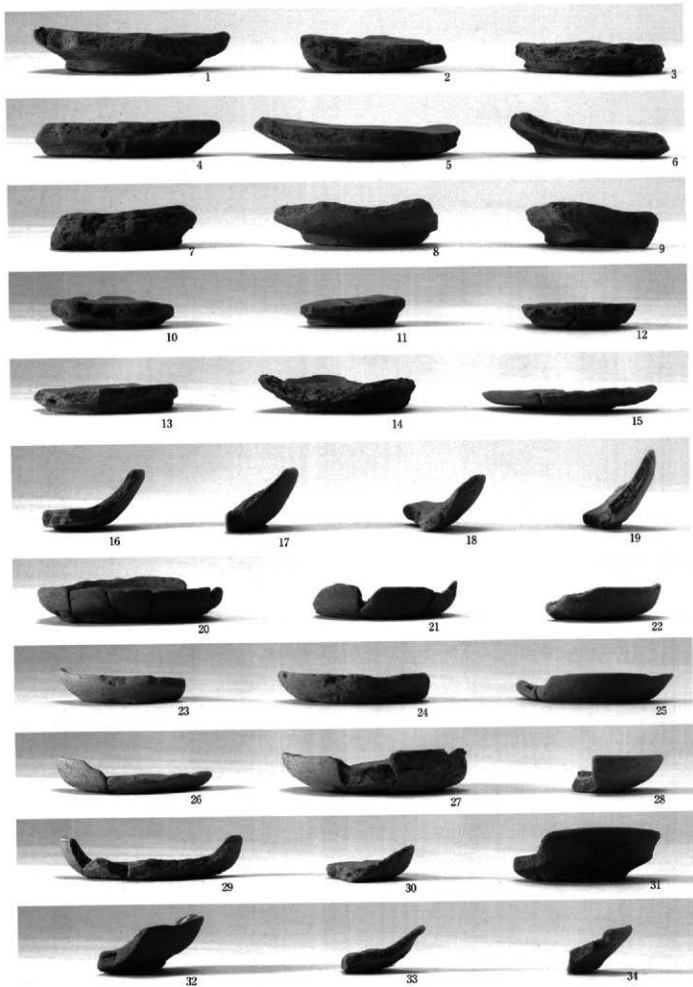
501号・502号・505号土坑全景 (北から)



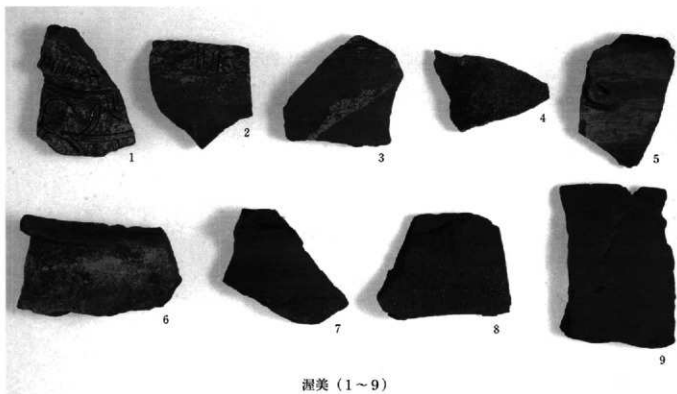
568号土坑全景 (東から)



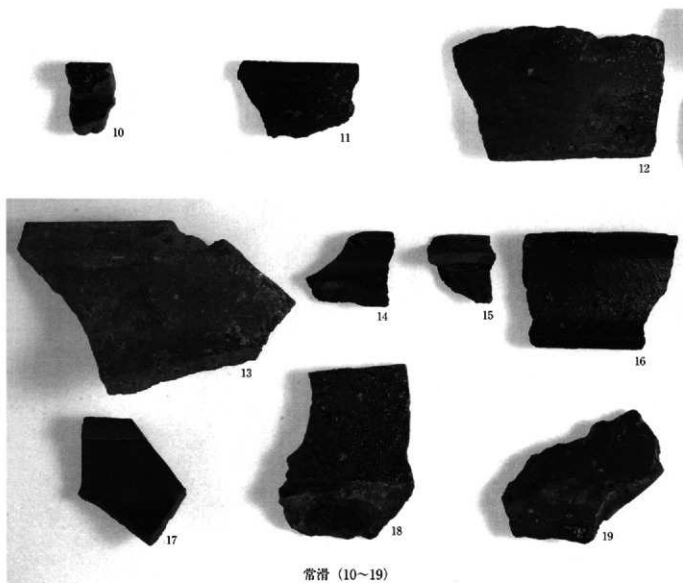
476-481・483号全景 (西から)



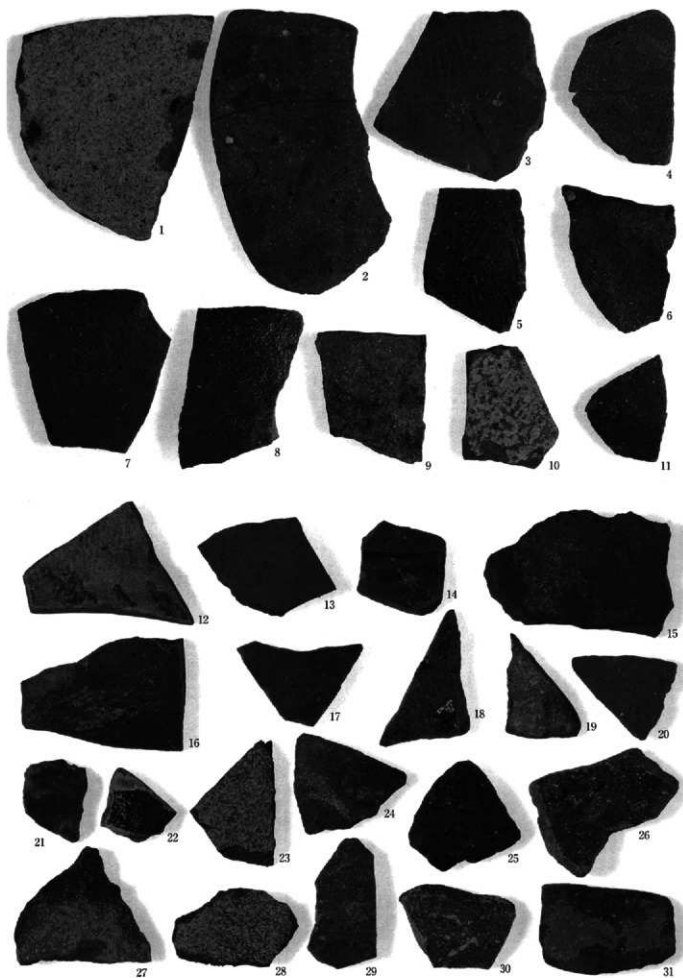
中世遺物 (1) <かわらけ>



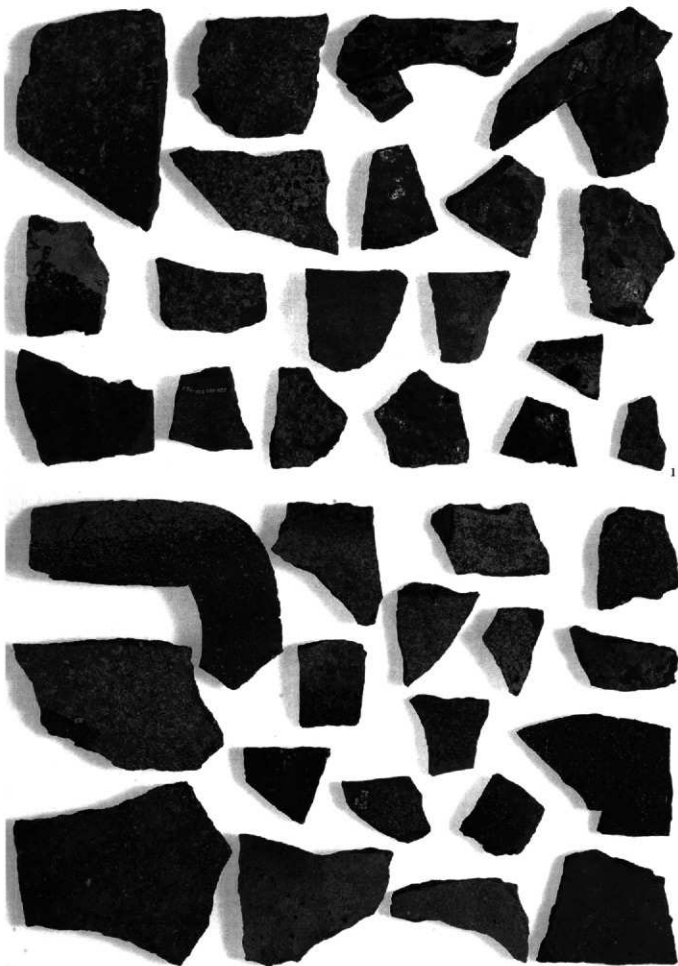
渥美 (1~9)



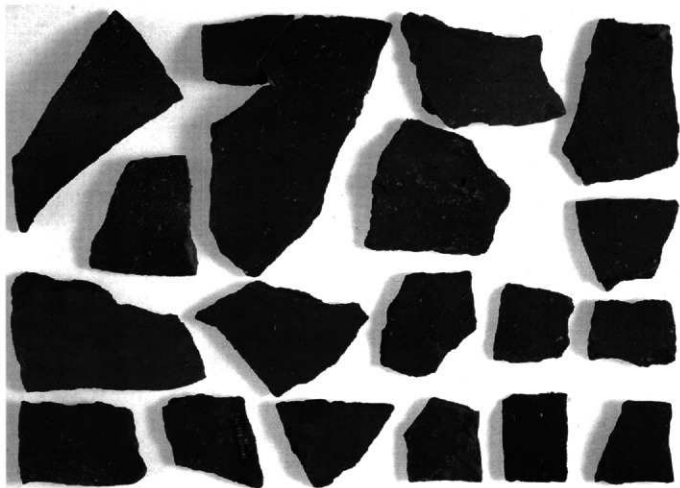
常滑 (10~19)



中世遺物 (3) <砥石として再利用の須恵器・渥美・常滑>



(甕 胴部上半 破片) 2



(亮 胴部上半 破片) 1



(外) 2



(内)



3



4



5



6



7



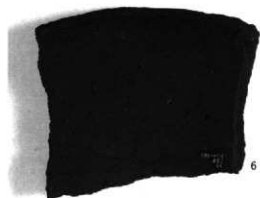
8



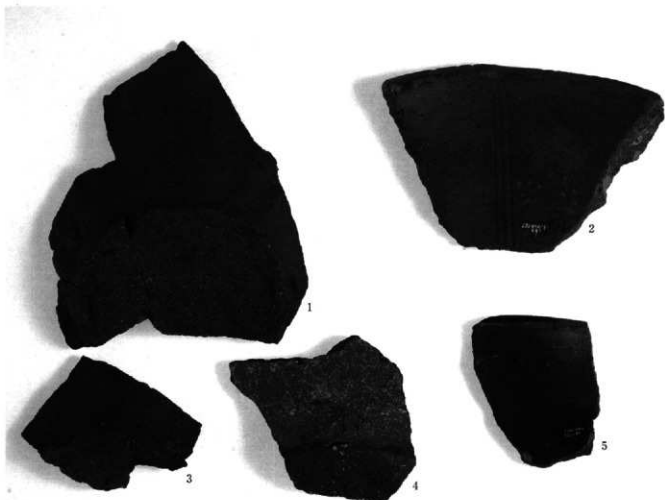
9

(片口鉢)

中世遺物 (5) <常滑>



(片口鉢)

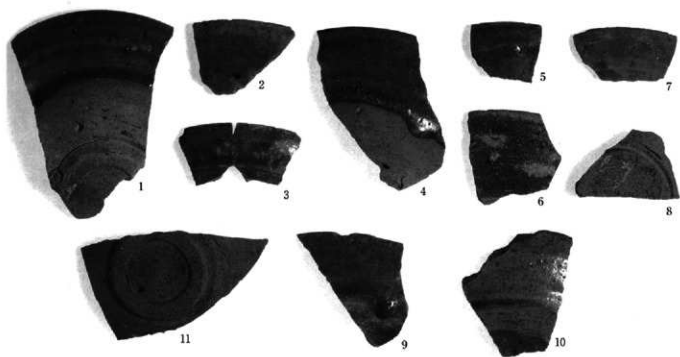


常滑片口鉢 (1~5)

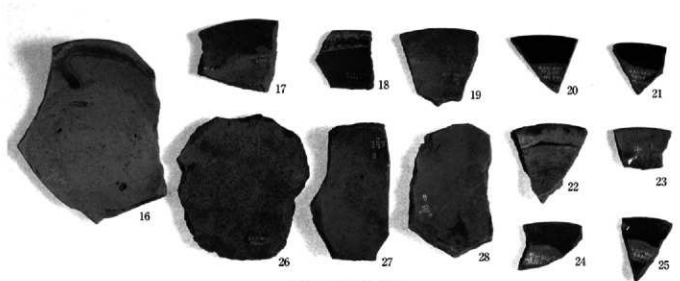


古瀬戸 瓶子 (6~11)

中世遺物 (7) <常滑・古瀬戸>



平碗 (1~11)

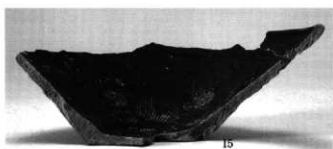
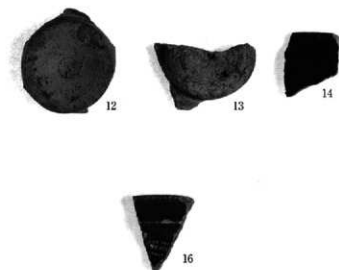
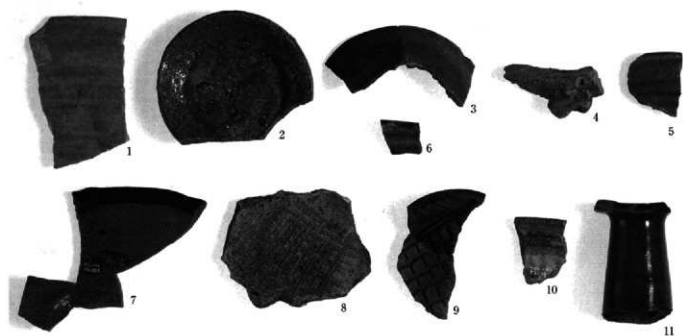


縁袖小皿 (12~28)



折縁深皿 (29~31)

折縁皿 (32~34)



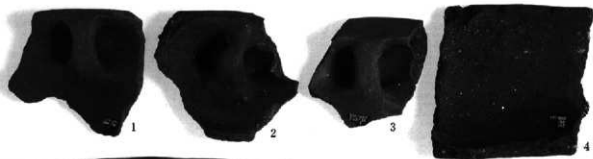
尾張型小皿 (2), 瀬戸・美濃 (1・3~17)



壺 18



内耳土器 19

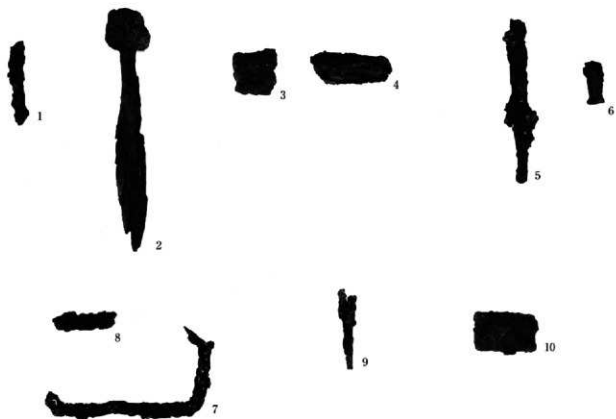


内耳土器 (1~10)

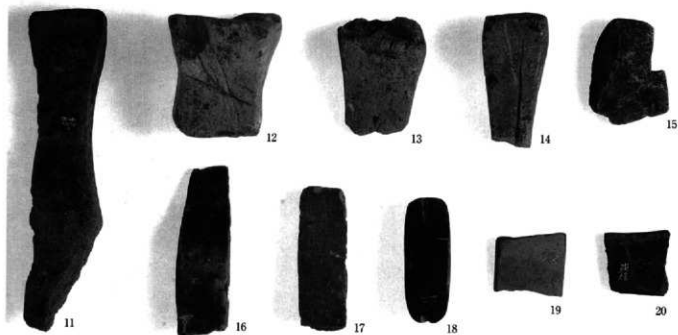


祖母懷茶壺

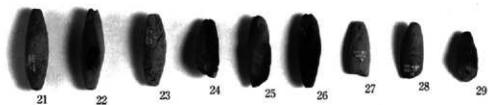
11



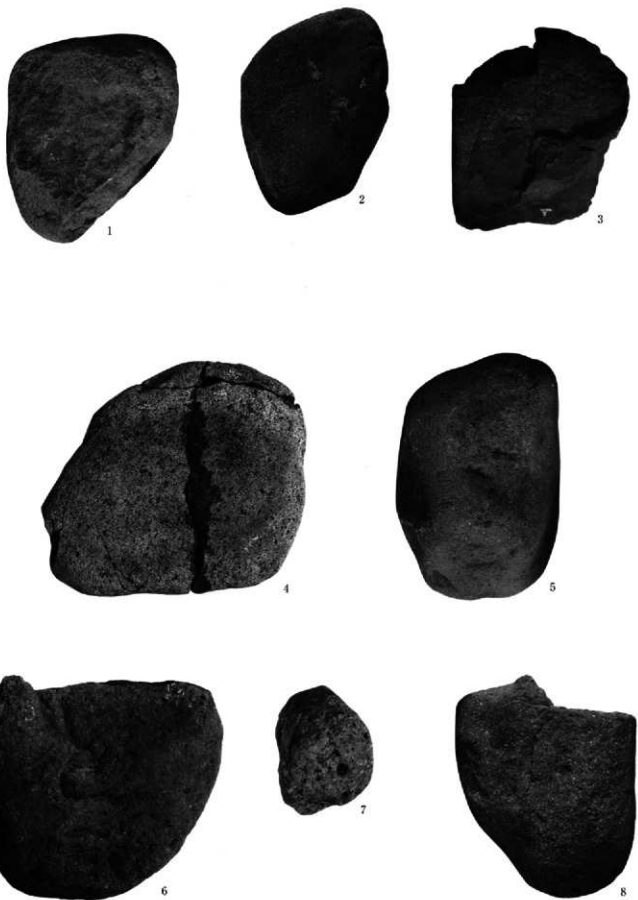
鉄製品 (1~10)



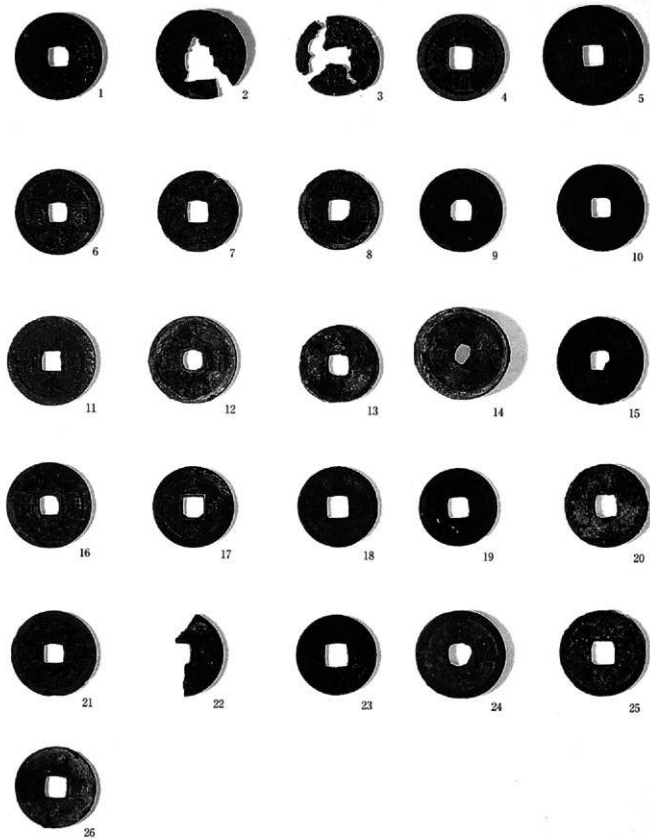
砥石 (11~20)

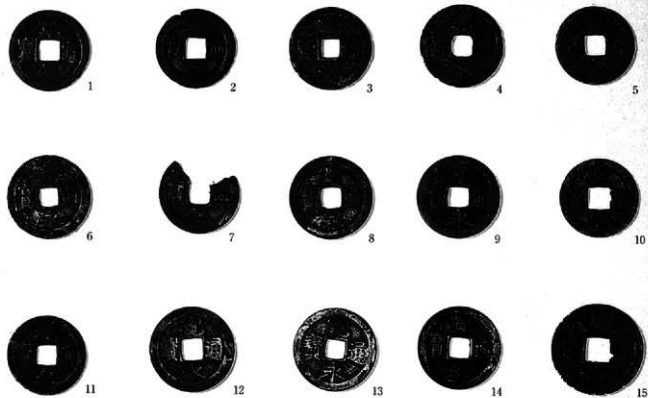


土錘 (21~29)

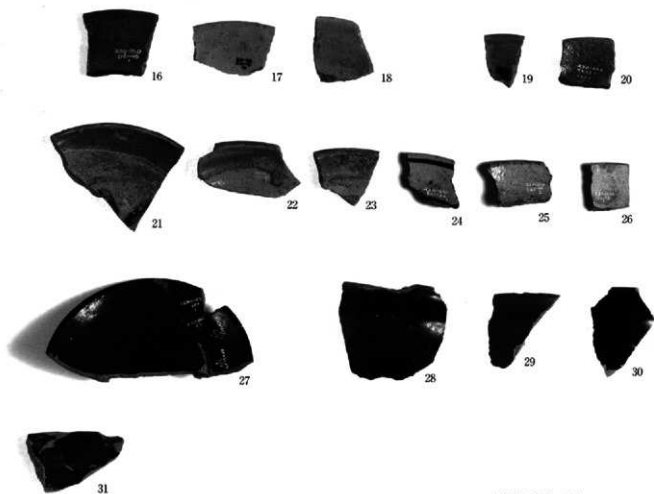


堀立柱建物 柱穴 根石 他 (1~8)





錢貨 (1~15)



陶器 (16~31)

報告書抄録

ふりがな	ながれやまうんどうこうえんしゅうへんちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ		
書名	流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1		
副書名	流山市思井堀ノ内遺跡 (中世編)		
巻次	1		
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告		
シリーズ番号	第549集		
編著者名	天野 努		
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団		
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL. 043 (422) 8811		
発行年月日	西暦2006年3月17日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
思井堀ノ内遺跡	千葉県流山市 思井字堀ノ内 523-1 ほか	220	40	35度 50分 43秒	139度 54分 53秒	H11. 2. 1 ~ 3.26 H12. 2.10 ~ 2.18 H12. 5. 1 ~ H13. 3.29 H12. 9.20 ~ H13. 3.29 H13. 1. 9 ~ 3.29 H13. 4. 5 ~ 8.31 H13. 4. 5 ~ 8.31 H13. 5. 1 ~ 8.31 H13. 9. 1 ~ 12.25 H14. 6. 3 ~ 8.23 H14.12. 2 ~ H15. 1.31 H16. 2. 9 ~ 2.27	7.731 ㎡ 396 ㎡ 1.816 ㎡ 575 ㎡ 2.145 ㎡ 1.918 ㎡ 441 ㎡ 1.804 ㎡ 2.9711 ㎡ 1.038 ㎡ 709 ㎡ 292 ㎡	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
思井堀ノ内	居館 墓域	中世	居館跡1 掘立柱建物跡 構列 ピット列 ピット 堀跡 溝状遺構 土坑 方形周溝区画墓 台地整形区画 溝状遺構 井戸状遺構 地下式坑 土坑	6 1 2 多数 2条 1条 1基 1基 3地点 27条 1基 13基 59基	かわらけ碗・皿、 青磁碗・皿、 白磁・四耳壺・皿、 渾美壺・甕、常滑甕・ 片口鉢、瀬戸美濃平碗・ 天目茶碗・壺皿類・ 銅皿・漆鉢・版子など、 内耳土器、 和鏡(蓬鏡)、木櫛、 円形木製品、 棒状木製品、 人骨(歯)	鎌倉時代(13世紀中頃～後半)に矢木郡を支配した地頭 矢木式部大夫胤家の居館跡と考えられる遺構群と、その妻または娘の墓と考えられる方形周溝区画墓が検出された。

千葉県教育振興財団調査報告第549集

流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書 1

— 流山市思井堀ノ内遺跡（中世編） —

平成18年3月17日発行

編 集 財団法人千葉県教育振興財団

発 行 千 葉 県 企 業 庁
千葉県美浜区中瀬1丁目3番地

財団法人千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地2

印 刷 株 式 会 社 弘 文 社
市川市市川南2丁目7番2号
